

---

# Full Cast Even

ともみつ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

F u l l   C a s t   E v e n

### 【Nコード】

N 2 2 3 3 E

### 【作者名】

ともみつ

### 【あらすじ】

俺は確か、動物を連れて帰ったんだと思うんだけど、君は誰？「主、名を何と申す？」凜とした顔に金髪、豊満で妖艶な裸体が俺に問いかけた。鼻血が出そうだった。彼女は、俺の運命の……だったのかもしれない。

## プロローグ

道行く人間が蟻のように蠢く。遙か眼下に見下ろしている一人の男が超高層の風を受け、星空煌めく夜闇に一人宣下をした。

「時はいよいよ満ちた。この醜き世界を作り直す、創世なる神の子たちよ。その翼を広げ、その足で地を蹴り、新たな創生神話を、この地より解き放て。名付けて、世界を変革するフルキャストイーブンの史書をここより解き放たん！」

吹き抜ける強風に揺らめく男の衣類とは裏腹に、男の表情はそんなものをまるで気にしていなかった。

「一人で何を誰に仰っているのです？」

一人満足げにポーズを決める男の背後で、呆れた面持ちの女が口を開く。

「この世界にだよ。欺瞞と怠慢に満ちたこの世界を彩る、神の使者たちの遊戯がこの世界を改めるのだ」

「左様ですか」

抑揚のない、興味関心の欠片も見せない女を他所に、男が高らかと笑っていた。

「お疲れ様です」

今日二つ目のバイトである、牛丼チェーン店のバイトを終えると、既に辺りは夜闇に包まれ、星が街明かりに掻き消されながらも、一等星の明かりは歪んだ大気の下でもその存在を確認させた。バイトを終え、帰路に就く。専門学校を卒業して早二年。就活する気も無く、巷に溢れている何も保障もされていないフリーターと肩書きを背負って、朝から夜までバイトで精を出す。彼女もいなければ、都会に出て、学校を卒業した今、友人付き合いも少ない。バイトの無い日は惰眠かネットサーフィンに溺れる。そんな人生を送ることに

関して、不満も無ければ、夢も無い。あるのは無機質な日常の繰り返し。

「明日は休みだったな。何しよう」

別にそれで良い。二十二になった今、ファンタジーやSFのような世界が憧れで、クリエイターを志して卒業したことに対して、すっかり興ざめた。モニターを通してみる現実離れた世界を見るのは興奮するが、それを制作する側に立って分かった。

「やっぱ現実は、冷めてるよな」

小説や漫画、ゲーム、映画のような空想世界が現実<sup>マッスル</sup>に在るはずがない。在ったら様々な問題も出てくるし、法律も改正することになる。だが、その興奮を人は求め、結果として現実逃避するがごとく、小説や漫画、ゲーム、映画の世界に夢を見る。

「ま、今の俺には関係ないけどな」

朝から夕方まで引越しの荷物運搬のバイト。筋力補助スーツのおかげで梱包以外の搬入作業は重たいものも軽々と運べるから、それほど苦にもならない。その後は牛井屋でバイト。座席前の電子メニュー表をタッチすれば、奥でその注文を作り、運ぶ。片付けは全自動食洗機が箸や丼などを分別、乾燥までしてくれるから、調理とゴミだし、店内清掃くらいで、これまた難しいことは何一つない。何が楽しくてバイトの繰り返しをしているのか考えたこともなければ、考える気もしない。筋力や体力が付き、それに伴う空腹をまかないの牛丼で埋める。金をもらえる上に空腹を満たせることが、唯一楽しいことなのかもしれない。

「やべ、金入れてなかったな」

駅の券売機の所で公共機関共通乗車カードにとりあえず財布に入っていた万札を一枚入金する。どうせ交通費は出るんだ。痛くも何ともない出費。

「うるさいな……」

阪神がどうだのこうだの、飲んだくれのサラリーマンが一人語りのように喋っている。百五十年ほどの歴史を持つ、野球チームが勝

とうが負けようがどうでも良い。他にも今まで何をしてたんだかと思わせる金髪ピアスの女子高生に、塾帰りの子供、他様な人間が七両編成の電車で揺られている。メール、音楽で時間を潰す者や、寝る者。この時間は酔っ払いか寝ている人間が多い。いくら時代が流れようが、変わらぬ性のようなもの。

「真っ暗か。日が沈むのも早いな」

朝バイトに出る時には満員電車で揺られ、身動きすることも出来ず、日によってはおやじのポマードの臭いに耐えながら、また日によつては、可愛い子の香水と周囲に押されて感じる感触に頬が緩むのを堪えながら、明るい景色を見ていたが、帰りはマンションの規則正しく並ぶネオンライトが見えるだけで、別の世界が広がって見える。それだけ人間の目は光に頼りきりのものなのだと認識するが、興味はない。

「・・・・・・ねむ」

欠伸が出る。別に我慢することなく、大口を開く。地元にいる時は人目と言うものを気にすることもあったが、都会に出ると、思った以上に人は人を見ていないことを知り、特にこの時間帯の人間は己のことしか気にならず、他人なんて人形も同じだ。揺れる電車内じゃ酔っ払いが騒いでいようが、やたら口うるさい女が電話をしていようが、誰も何も言わず、ただ降りる駅を待つ。だから俺の欠伸を見る人間なんて、窓に映る自分以外にいない。

「相変わらず、どデカイビルだよなあ」

車窓に浮かぶ周囲よりも特出したビル明かりが、ゆっくりと流れる。鉛筆のような先端の尖っているビル。日本国の首都が平安の都京都から東京に変遷されたのが、一八六九年の大政奉還による遷都。未だに京都の人間は首都を京都だと主張し、京都から東にある都を副都である東京だと思う人間がいる。都を東京に貸しているだけとか。そう歴史の授業で習った覚えがある。そして、今俺がいる大阪。かつては東日本の中心であった東京と西日本の中心だった大阪と分かれていたらしいが、二〇八九年の今、日本の首都は大府大阪に遷

都し、中央官省庁から国会議事堂などの政治経済の中心も、ネットワークも金融機関の本拠地も大阪に集い、四〇年近くを迎えようとしている。

その中で一際目立ち、圧倒的な存在感を見せているのが、国際生体科学技術研究所日本。通称NBSL。風の噂ではNBSLが大阪に本社ビルを構えたことで遷都が起きたとも言われているが、詳しいことは俺も授業じゃ習ってない。いや、習ったかもしれないが、覚えてない。ただ、世界中にあるNBSLは国家にまで影響を与える大財閥機関であるということだけは、誰もが知っている。抗体科学で成功し、科学技術から金融機関、果ては世界経済にも大きな影響を与え、元々は民間企業だったらしいが、本社ビル建設完了と同時に国際機関へアメリカで承認され、勢いは衰えるところを知らない。五十代以上の人間には、未だに首都東京のイメージが強いらしく、大府大阪が納得出来ていない者もいるらしいが、俺にとっちゃ、生れた時から日本の首都は大阪だ。東京なんて今じゃ田舎の一つになっている。首都だったなんて信じられない。ほとんどのビルも建て壊され、成田空港や横浜港も閉鎖されて、公園やウォーターフロント開発による高層マンション群になっている。そこに首都が在った証は今はない。東京の中心地のほとんどが学術研究都市として、主にNBSLや他の研究施設などの地方機関が集まっている。

小さく息を吐き、下車する。中心街から電車で二十分ほど離れた所に俺の家がある。

「静かだなあ」

昔は珍しかったらしいが、今じゃ当たり前の無人運転の電車を下りる。総合司<sup>マスターオペレーション</sup>令統括室とか言う所で、全国区の交通公共機関の乗り物の業務を行っているため、都会じゃ車を持っていても、生活に困ることはない。持っていたとしても駐車場などが狭く、逆に不便になる。大型自動二輪の免許もバイクもあるが、バイト先には電車のほうが早く、休日の買い物程度に乘るくらいだった。

「さっさと風呂は入って寝るか」

駅を出るとコンビニの明かり以外大した明かりの無いくらい中を自宅へ歩く。駅から徒歩二分の近場だから、そこからそこ。卒業後、バイトしかせずそれなりに貯蓄もあり、念願だった風呂トイレセパレート部屋の借りた。築二十年ほどだが、俺にしては随分と奮発した気分のする綺麗なマンション。ベランダもあるし、キッチンもそれなりに使える上に部屋数もリビング、ダイニングキッチン、寝室の三部屋。一人暮らしには勿体ないくらい。それでも今流行の全自動制御装置のついた、リビングで横になり、考えるだけで家事の大抵のことが出来るシステムのBMIブレインマシンインターフェイスの家に比べると、まだまだアナログな生活。でも昔に比べると便利になっているらしいから、満足している。

「ん？」

郵便受けを確認し三階に上がり、角部屋の俺の部屋に向かおうとしたらドアのところに何かがあった。ライトに照らされた物体。

「猫？ 犬か？」

近付くと、蹲っているのが動物だと何となく分かるけど、顔が見えない。全身が金髪のような毛で覆われて、尻尾が犬や猫にしては太い。寝ているのか？

「おーい、お前、ちょっと退いてくれるか？」

俺が声を掛けてもピクリともしない。屈んで顔を見ると、猫のよきな顔立ち。なかなかスツとした顔立ちで可愛らしいというよりも綺麗って感じか。毛並みは汚れて、すっかり固くなってる。触ると手のひらに汚れの肌触りが残った。

「お前、怪我でもしてるのか？」

口端に涎のような、液体が垂れついてる。手先も傷んでるようにケバケバしている。

「動けないみたいだな」

腹部に手を入れ抱き上げる。華奢なのか随分軽い。動物なんて飼ったこともないし、抱いたこともなく、撫でたことがある程度だから、重いのか軽いのかいまいちよく分からない。

「ま、ペット禁止じゃないからいつか」

電子キーで鍵を開け、家に入る。

「ライトオン」

猫を抱き上げ、家の中に入ると、一声かける。声に反応して廊下とリビングの電気がつく。声紋認証は少々今じゃ古臭い。家賃が安い分アナログだが仕方ない。

「ちょっとそこでじっとしててくれよ」

寝室のベッドにバスタオルを敷き、そこにそっと寝かせ、風呂の支度をする。セットオンの一言で浴槽洗浄から湯張りから炊き上げまで自動でしてくれた実家が懐かしいが、今は自分でやらないといけない分、帰りが遅くなると面倒臭い。

「お前は一体何であんな所にいたんだ？」

一階とかなら分かるが、俺の部屋は三階。そんな所にぐったりされてると不思議に思われても仕方ないんじゃないかな。

「喋る元氣も無いか」

随分と疲れているのか、牛乳がなかったから水を置いてても飲む氣配もなく、身動きもしない。見た目は大きな怪我も無さそうに見えるから、それほど重症には見えない。この時間は何処の動物病院もとっくに閉まっているから、連れて行くわけにもいかない。

「明日は病院だな」

バイトが休みで良かった。そう思って掛けた声に、微かに体が動いた気がしたが、氣のせいのように相変わらず蹲っている。

「とりあえず、その汚れを落とすか」

浴室からピーピーと炊き上げが終わった音が鳴り、猫と共に風呂に向かう。先に俺が頭と体を洗い、猫は風呂ふたの上に置いた。弱っているものを風呂に入れるのどうかとも思ったが、汚れもひどく、誇り臭さも否めないため、入れることにした。

「猫って風呂嫌いなんじゃないのか？」

確か水が嫌いだとか言う話を聞いた覚えがあるが、こいつは違うらしい。



「って、動けないか」

嫌いでも、動く気力も無いのかもしれない。抱き寄せると、桶でそっと湯をかける。毛が逆立ったように見えたが、すぐに湯の流れに毛が流れた。流した湯が灰色に染まって流れる。シャンプーをしてやると泡が灰色になる。

「一体何してたらこんなに汚れるんだ？」

声を掛けても鳴きもしない。大人しい分洗い易くて助かるが、よく見るとあちこちに血のような汚れがある。見ていて痛々しい。沁みて痛いはずだが、我慢しているようで早めに風呂から上げた。

「よし、綺麗になったぞ」

体を拭いてドライヤーで乾かしてやると、さっきまでケバケバしていた毛並みもすっかり艶を取り戻して金色に輝き、柔らかくなった。土臭かった体臭もコンディショナーまでした甲斐があって良い匂いだ。猫の性別は分からないが、きっと雌なのかもしれない。

俺がコンディショナーをしても、女性のように良い匂いはしないし。「今日はこのまま寝るか」

既に時計の針は新しい日付を刻んでいる。いつもよりは一時間ほど早い、猫を見ていると風呂上りの体がちょうど冷えてきて眠気が襲ってきた。

「これで暖かいだろ？」

毛布を猫に少しかけてやる。疲れているのか、俺の言葉なんか聞いていないようですぐに目を閉じた。

「可愛い奴」

隣に猫の体温を感じながら、俺も今日の、いや、昨日の疲れを癒すために目を閉じた。

## 一神嘶 おはよう、なのり

今日は何するんだったけな？ バイト。いや、バイトは今日は休みだったな。何だっけ？ 何かしようとしてたんだよな。

「ん．．．．．」

あー、そうだ。確か昨日、猫拾ったんだったな。猫らしく甘えることも無く、そっけない素振りの可愛げのない猫だったな。でも綺麗な毛並みだった。ふさふさして、サラサラ流れるような、そう、こんな感じだ。

寝返りを打った男の手が、サラサラとしたものを撫でるように動く。

「んん．．．．．」

猫って、動きが俊敏な分、体は筋肉質なんだろうか。昨日の猫は妙に柔らかかった気もするな。そうそう、こうぷよぷよにもゆしてたっけ。

男の腕が、今度は何かの感触を楽しむかのように驚掴むように動く。

「ん、んう」

「ん．．．．．？」

自分ひとりしかない部屋。カーテン越しに微かな朝陽が部屋に差し込んでいる。夢見心地で感じていた感触が妙にリアルでうつすらと男が目を開く。

「あれ．．．．．？」

「んう．．．．．」

昨夜は肩辺りに感じていた温もり。今、ぼおとする中で感じる温もりは足元まで全身に感じられるほど大きい。鼻を押し付けると感じられるほどだった猫のコンディショナーの香が、呼吸をするたびに鼻腔に香る。今まで感じたことのないような柔らかい感触が掌越しに伝わり、毛布では感じられない人肌のような温もりが妙に温か

い。首筋に掛かる寝息の吐息が猫のものよりも遙かに大きく感じられる。

「ふああああ．．．．．」

あまりの心地良さに再び睡魔が襲い、欠伸が漏れる。

「．．．．．」

「ん、んう．．．．．」

「．．．．．」

それでも感じる普段とは何かが違う妙な違和感に、睡魔が後退する。目の前に何かがあつて、その距離が近すぎて焦点が上手く定まらない。

「猫．．．．．？」

確か昨日は隣に寝かせていた。だから目の前に見える薄暗い中でも分かる金に近い肌色は猫なのだろうか。にしても、色の面積が随分と広くないだろうか？

「あれ．．．．．？」

体を壁に這わせるように起き上がると、何かが変だという現実に気づいた。昨夜寝るまでは、全身に撫で心地のよい金色の毛をした猫がいた。そこまでは覚め行く意識の中で思い出した。

「っ！ な、何、で．．．．．？」

上手く口が回らない、と言うか、頭が回らない。いや、別に頭は回らないが、脳の言語運動思考の脳内神経が動かないって意味だ。「って、何言ってるんだ、俺は」

口には出していないが、どうやら脳の回転はすっかり覚めたようだ。

「おいおいおいおい、何が起きた？」

猫がいたと思われる場所には、猫の毛並みと同じ色をした長い髪が広がっている。それをそつと掻き分けると、髪の下に見慣れない女性の顔がある。肩ほどこまでしかなかった毛布の膨らみが、男の足元には及ばないが、それくらいの背丈にまで毛布が人の形に膨らんでいた。

「え・・・・・・・・？」

もしかして、昨日は酔ってたか？ 猫を連れ込んだ夢を見ていたつもりが、実際は見知らぬ女性を連れ込んだか？

「いやいやいや」

男が勢い良く頭を左右に振る。

経験が無いわけじゃないが、見知らぬ女性と同衾するようなことは、今まで酔った勢いでもなかった。大体昨日の記憶ははっきりしている。それが夢とは思えない。

「むしろ、これが夢？」

意識ははっきりしていても、思考は完全に停止しているようで、どうすることも出来ず、隣で眠っている謎の女性をただ見つめるしかなかった。

「んう、ん・・・・・・・・？」

男の独り言に目が覚めたのか、髪に隠れていた瞳がゆっくりと開いていく。西洋人形のような青い瞳が数回の瞬きの後に、男の姿をその瞳に映す。同時に男の目にも艶美のある姿が映し出される。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

互いに静かに見つめ合う。男は状況が理解できず、ただ呆然と。女は、寝惚けて思考が働かないようで、ただ呆然と。

「あ、えと・・・・・・・・」

少々照れの入った表情で、この状況を打破しようと言葉を口にしようとするが、何も浮かばない。

「主、名を何と申す？」

「は・・・・・・・・？」

抑揚の無い、静かな声で女が横になったまま男に問いかける。突然話しかけられ、男が困惑の表情を浮かべる。

「名を何と申すか、と聞いておるのじゃ」

寝惚け眼だが、一度で聞き取れなかったことを再び聞き返され、女の表情がむっとする。

「あ、えっと、風祭隼斗……」

「そうか、やはり隼斗か。ふむ、悪くはない」

寝転んで毛布を被ったまま、女が男を吟味するように見つめ白い手を男の頬に当ててくる。スツとした顔立ちに、青い瞳、柔らかそうな淡桃色な唇、白い肌の日本人とは明らかに異なる容姿。可憐なほどではない、華麗なる美人。思わずその瞳に吸い込まれるような感覚が男を襲った。

もそつとゆっくり女が体を起こす。

「つて、ちよつ、ちよつとっ！」

隼斗が慌てて、視線が女から横を向く。起き上がった女の体を、撫でるように毛布がサラツと流れ落ちる。そして露になる白い肌の上半身。ふくよかに丸みのある柔らかな乳房が隼斗の目の前に露になり、流れ落ちた毛布のおかげで下半身は上手く隠れていたが、それでも見知らぬ女性の裸体に表情は微かに緩みながらも直視することは出来なかった。

「なんじゃ？ 急にそつぽを向きおって」

少々前かがみになった女が、隼斗を不思議そうに見る。サラツと流れた髪から仄かな芳香が鼻孔をくすぐる。

「服ってか、隠してくれっ！」

「んぷっ」

隼斗が毛布を掴んで女に投げる。がばつと毛布を被った女が毛布を胸元に退ける。もとい、胸に引っかけかり、上手い具合に隠れたというほうが賢明のようだ。

「つたく、なんじゃいきなり」

突然のことに不満げな女だが、隼斗はホッと肩を撫で下ろした。

「あの、それで、貴女は……どちら様？」

しばらくして、ベッドの上ではぼ密着に近い形で向き合う二人。

「よくぞ聞いた。我は白狐びやくこの稲浪いなみじゃ。幾久しく頼もう、隼斗」

「は……」

名前を聞いたんじゃないで、何でここにいいのかを聞いたつもり

なんだけどな。しかも幾久しくって、これから宜しくって意味じゃなかったか？　ってか、白狐って何だよ。苗字か？　随分神話とんだ名前だな。喋り方も変だし。

「何を呆けておる。汝はこれより我の主となる者ぞ。その、我を・・・愛でた・・・責任は、取ってもらうの、でな・・・」

途中から気恥ずかしくなったのか、稲浪がモジモジと隼斗を見る。不意になよなよしくなり、隼斗も思わずその新たに見る表情に、戸惑うばかりだった。

「は？」

目覚めた時に隣で寝ていた、謎の女性、稲浪。ブドウ糖が不足しているのか、上手く頭が働かず、何を言っているのか丸つきり理解出来ないが、美人だ。

「隼斗、空腹じゃ、朝餉あさげを用意してたもれ」

クウっと可愛く稲浪の腹の虫になる。俺も腹が減ったし、とりあえず細かい事はその時で良いか。

「って何こうも落ち着いてられんだ、俺っ」

「？」

隼斗がうなだれるように、頭を横に振る。稲浪がどうしたのじゃ？　と声を掛けるが、なんでもないと手をかざす。隼斗が妙な緊張感とドキドキ感を感じながら、腰を上げる。

「では、我也顔を洗うでしょう」

それに続くように稲浪が立ち上がると、肌を隠していた毛布が流れ落ち、振り返った隼斗の前に一衣纏わぬ裸体が露になる。均等の取れた足に、少々バランスの悪さを感じさせる程の大きな乳房、腰丈近くまで伸びる金髪。小顔に映える青い瞳。全てが一つになった時、真の美しさを隼斗の目に映し出した。

「頼むから、隠してくれっ！」

慌てて隼斗が近くにあった自分の服を稲浪に投げ、部屋のドアを閉めた。

「なんじゃ？　昨夜は私の身体を隅々まで愛でたというに、おかしな奴じゃ」

稲浪が隼斗の様子を不思議そうに見つめていた。

「何が起きた？　何をした？　どうなってんだ？　ってか、あれ、誰だよ？」

洗面所で水の流れる音を聞きながら、隼斗がキッチンで味噌汁を作りながら苦悩していた。それでも、振り返ると顔を洗いバスタオルで顔を拭いている稲浪の後姿が見え、その後姿からでも分かる、色気に富む美人ぶりに言葉を失うばかりだった。

「ふむ、隼斗は飯食か」

しばらくして、二人がようやく、とりあえず落ち着くとリビングの四人掛けの小さなコタツテーブルの上には白飯、玉ねぎとジャガイモの味噌汁、卵焼き、焼き鮭のごく普通の和食の朝食が並んでいた。

「パンのほうが良かったとか？」

「いや、我も和食が好みじゃ。此れで良い」

「普段は朝から引越しのバイトしてるから、朝のうちに腹に溜めないと力が出ないんだ」

二人見つめあう形で腰を下ろし、稲浪が手を合わせる。

「これ、隼斗。挨拶は基本ぞ。食物を食する感謝の念を言葉にすることは誠の理と言うものじゃ」

腰を下ろして箸を持った隼斗を、稲浪が咎める。

「いや、俺が作ったんだし、別に良いだろ？」

「何を言う。頂きますと言うのは、調理人に対する感謝ではない。いや、それも含むが、本来は我らの礎となす動植物の命を戴くことに対する感謝と祈りじゃ」

ほれ、手を合わせぬか。と稲浪に言われ、隼斗も押される形で稲浪と同じように手を合わせると、稲浪も満足げに、いただきますと口にした。それに続いて隼斗も言う、ようやく朝食と相成った。

「ふむ、腕は立つのじゃな。我の口に良く合うぞ」

「それは良かった」

隼斗は一人暮らしも長く、それなりに生活スキルを身につけたよう  
うで、稲浪の口にも隼斗の料理は問題ないようだ。若干静けさに包  
まれる食卓の場。それが自然のように。

「つて、何でこんなに和んでんだよっ！」

ふと、状況を客観的に捉えた隼斗が一人で苦悩する。

「食事中に大声を出すでない。行儀が悪い」

「あつ、ご、ごめん」

突然の大声に稲浪が味噌汁を啜りながら、隼斗を咎める。

「いや、そうじゃなくて！」

「なんじゃ？」

すぐに隼斗が箸を置き、稲浪を見る。稲浪は特に気にした素振り  
を見せることなく、卵焼きを口に運んでいた。

「えっと、稲浪さん、でしたよね？」

「稲浪で良い。汝は我の主ぞ。我への遠慮は無用じゃ」

少々取り乱している隼斗に比べ、落ち着いた面持ちで箸を進める  
稲浪。シャツとズボンを隼斗が渡したが、ズボンはサイズが合わず、  
シャツ一枚で隼斗の正面に座っている。下着もなく、一枚の布で体  
を覆う稲浪に、隼斗は少々目を背けながら、ようやく本題を持ち出  
すことが出来た。

「それじゃ、い、稲浪」

「ふむ、何じゃ？」

「あーその、昨日、俺と何かあった？」

訊きたい事がありすぎて、どれから聞いたら良いのか隼斗は上手  
く整理が出来なかった。

「何かとは失礼な。汝は我を愛でたではないか」

「……それ、マジ？」

自分の記憶とまるで異なる現実に、隼斗は困惑するばかりだった。  
「俺、昨日、猫を拾って風呂に入れて、寝た記憶しかないんだけど・



・・・」

そこに今日の前にいる稲浪は何処にもいなかった。居たのは、稲浪の髪の色に似た毛並みの猫だった。

「我を猫ごときなどと同視するでない。我は崇高なる白狐なり。地ベタを這うような下衆ではない」

猫と言われた事がひどく心外の様子で、稲浪が隼斗を睨む。その形相に思わず慄いた。

「えっと、それで、稲浪とは、昨日何処で会ったつけ？」

稲浪の良く分からない言葉を受け流し、本筋に戻る。

「玄関前で倒れていた我を、<sup>なんじ</sup>汝が助けたのではないか。そんなことも覚えておらぬのか」

何を言っているんだ？ と稲浪の視線に、隼斗は自分の記憶との相違に嫌な予感のようなものを感じ始めた。

「その後は、どうしたつけ？」

「どうしたも何も、汝が我を風呂へ連れて、我の・・・その、全身を・・・ま、<sup>まへ</sup>弄ったではないか」

思い出して恥ずかしくなったのか、稲浪の頬が紅潮する。凛々しさのある風貌に垣間見せるあどけない少女のような恥じらいに、隼斗も目のやり場に困り、視線を背ける。それと同時に、記憶の出来事との相違の歯車が、とある対象物を除いて重なるように回り始める。

「その後は、一緒に寝たりとか？」

「覚えてるではないか」

その通りじゃ、と稲浪の言葉に、隼斗の背筋に冷や汗にも似た嫌なものが走る。

「つかぬ事を伺いたいのですが・・・」

「何じゃ？ 主の頼みとあらば、出来る範囲で答えてみせよう」

聞いてはいけないような気がして、思わず言葉を飲み込みたくなるが、ここはビシッと聞いておかなければ、話が進まない。でも、聞きたくない気もあるんだよね。

お茶を啜り、隼斗が気持ちを静めるように一息つく。その正面で稲浪が白飯に鮭を乗せ、口に運ぶ。この塩加減が絶妙じゃと呑気に食事を楽しんでいる姿は、華麗さと気品を纏う稲浪の姿ではなく、彼氏の料理を美味しそうに食べる無邪気な彼女のようでもあった。

「稲浪って、何者？」

口を動かしていた稲浪が、おかしなことを聞いたような表情を浮かべ、飲み込む。

「何度も言っておろう。我は白狐の稲浪。それ以上でも以下でもない」

隼斗の聞きたいことを理解してくれない稲浪なのか、聞きたいことを素直に応えた稲浪の言葉を理解出来ない隼斗なのか、両者の思う所は上手く噛み合っていなかった。

「そういうことじゃなくて、あー、その……稲浪って人間……」

隼斗がざつくばらんに言葉を崩して、聞きなおす。

「……だよ、な？」

自分で言っておいて何だが、妙なことを口走っているよな。第一どう見ても稲浪は人間じゃん。何考えてるんだろうな、俺。

自分で聞いておきながら、隼斗は馬鹿なことを言った、と苦笑していた。

「何度言えば、分かるのじゃ。我は人間ではない。白狐じゃ」

「えっ……」

今、稲浪、人間じゃないって言った？ どういうことだ？ どう見ても、人間だよな。冗談か？

「仕方あるまい。これを見れば、隼斗も納得するか？」

「は？」

稲浪が箸を置くと、隼斗の目の前からその姿を消した。突然のことで隼斗が混乱する。ほんの一瞬前まで目の前にいた稲浪が姿を消した。瞬間移動とでも言うべきなのか、現実起こった摩訶不思議な出来事に、隼斗の瞬きの回数が増える。

「………稲浪？」

「なんじゃ？　これで満足したか？」

姿は見えないが、隼斗の呼びかけに答える稲浪の声は部屋の中から聞こえた。

「何処にいるんだ？」

「ここじゃ、ここに居るではないか」

「ん………？」

クイクイ、とズボンが引っ張られ、隼斗がテーブルの下を覗き込むと、そこには、記憶の中にいた猫の姿があり、その置くには先ほどまで稲浪が着ていた隼斗のシャツがあった。

「あれ、お前。いつの間に。ってか、稲浪はどこだ？」

テーブルの下に居た猫を隼斗が抱き上げ、稲浪を呼ぶ。

「何を言っておるか。我はここじゃ」

「猫が、しゃ、喋った………？」

抱き上げた猫から、聞き慣れた声が返ってくる。ペットを買えない人や医療現場などでセラピーとして用いられる人工知能を搭載したペットロボなどは、ごく普通に世間にはありふれている。だが、やはり生身の動物ではない、毛並みの向こうには人工的な固さを感じられる。しかし、今隼斗が抱いている猫は、そんな不自然な機械の固さのない、柔らかい生き物の感触と、仄かに覚えのある香りがした。昨日風呂に入れた猫と、今朝目覚めたら目の前にいた稲浪の香り。

「猫ではない。白狐だと言っておろう」

「うおっ！」

呆れた声と共に、抱いていた猫がポンと姿を変え、隼斗の上に稲浪がのしかかるように姿を現した。

「え、あ、な、む、むうう——！」

目の前で姿を戻した稲浪の胸が、ちょうど隼斗の眼前に晒され、ものにゅっと隼斗の顔を挟み覆い隠す仄かにいい香のする柔らかい物体。全身に感じる温もりと、それほど重くはないが、柔らかい感触

と程よい重みに、隼斗の思考が停止した。

「ちよっ、ちよっほっ、ふい、ふいはふい。ふあ、ふあはへぺっ」

「こ、こら、喋るでない、隼斗っ。く、くすぐったいっ、ぞ」

隼斗が息苦しさにもがくと、胸元から感じる隼斗の吐息に稲浪が身を振じらせる。すると必然的に、隼斗の顔には、柔らかいものがさらに押し付けられる。

「っ！　ぷはあっ！」

「きゃっ」

隼斗が息苦しさと、目の前にあるものが何かを感覚的に把握し、顔が紅潮し、稲浪の肩を掴み、引き剥がすように横に投げる。

「あっ……」

「きゅ、急に何をする。痛いではないか」

横に飛ばされた稲浪が体を起こすと、隼斗と視線が交差し隼斗の視線が稲浪の顔から下へと移動する。

「ぶっ……」

「隼斗？」

一糸纏わぬ、あられもない姿の稲浪。生物ならば生まれた時の姿で、隼斗が勢い良く押し退けたせい、開脚された日焼けを知らぬ足肌の奥に見える、男にとっての永遠の神秘の花園が隼斗の眼前に晒され、隼斗の鼻孔が鮮血を吹いた。

「経験と言うものがないのか、隼斗は。あれくらいで鼻血を吹くとは情けないの」

「いや、そういうわけじゃない。いきなりあんなの見せられて驚いただけだって」

「あんなのとはなんじゃ。昨夜は我の体を弄ったではないか」

「ぶっ！　妙な事を言うな。思い出したじゃないか」

稲浪の言葉に隼斗の鼻に詰めていたティッシュが白から赤へと染まっていた。

「じゃ、じゃあ、やっぱり、稲浪があ猫だって言うのか」

「猫ではない。白狐じゃ。猫などと一緒にするなど言っておろうが」

確か狐はイヌ科だったな。だから猫って言われるのが嫌なのか。

「どうした、隼斗。食指が動いておらぬぞ」

「い、いや、もう一杯なんだ」

色々と主に目からの栄養が強すぎて、満腹になってしまった。

「そうか、では、これは貰うぞ」

「あ、ああ」

稲浪が隼斗の分まで朝食を食した。自分よりも若干小さい稲浪だが、その見た目からは分らない、旺盛な食欲に隼斗は呆気に取られていた。稲浪が食べ終わると二人して再び手を合わせ、ごちそうさま、と感謝の念を唱え、隼斗が後片付けに入る。

「稲浪」

「なんじゃ？」

洗い物をしながら休んでいる稲浪を呼ぶ。

「お前って、人間じゃないんだよな？」

「白狐だと何度言えば良いのだ。見たであろう。私の姿を」

隼斗が先ほどのことを思い出す。目の前に現れた猫、もとい、狐。だが、それが稲浪へと化けた。疑いたくとも目の当たりにした現実、に、当惑するばかりで、稲浪の言葉も理解に苦しんでいた。

「稲浪はどこから来たんだ？　ってか、何なんだ？」

隼斗は上手く訊きたい事が言葉に出来ず、曖昧な訊ね方しか出来ない。上手く言葉に出来ず、気持ちが悪くなるが、現実ではありえない事態に巻き込まれ、他に言葉が思い当たらなかった。

「我はNBSLで生まれ、闘い抜くことを定められた創生の神子じゃ」

「NBSL？」

なんであんな所から？　闘い抜くってどういう意味だ？　言っている意味がまるで分からない。

「おお、そうじゃ。忘れておった。隼斗よ。我と共にNBSLに参るのじゃ」

「はあ？　何で？」

「御霊を享有する我らは、NBSLによって新たな力を授けられた、創生の神子。我は隼斗を我が主を見なし、赫職きやくしきの申し出をするのじゃ」

「力？ 赫職？」

いまいち稲浪の言っている言葉が理解出来ていない隼斗を見て、稲浪が立ち上がる。

「これが我の力じゃ」

「えっ……」

隼斗が稲浪に振り返ると、稲浪が翳かざした掌に火柱が轟々と焚き上げられていた。

「ちよっ、ちよっと、危ないっての」

勢い良く燃え上がる青い火柱に、天井に備え付けられている消火システムが危うく作動するところで、隼斗が稲浪を止める。

「な、何だよ、今の……」

「今のが我が力、狐焰きつねびじゃ」

「きつねび？」

確か、鬼火のことじゃなかったか？ 確かに炎は青かったけど、そんなものを稲浪は使えるって言うのか。

突然のことに、隼斗は驚きもあるが、現実離れたことを経験しすぎたのか、頭がショートし、妙に現実を達観したかのように受け入れていた。そんな隼斗の前に、

「我は青き炎を司る白狐、稲浪。風祭隼斗、汝を我が御霊の赫職として、契りをここに申し渡す」

サラリと流れる金髪。華奢な体つきに映える胸。引き締まった手足。隼斗の目を捉えて離さない青い瞳。稲浪が隼斗の前に立ち、プロポーズのような宣言を口にする。

「……は？」

そんな稲浪の告白を、隼斗は啞然とした情けない表情で、首を傾げた。一世一代の申し出を貶されたと思ったのか、稲浪の表情が陰しくなる。

「……何じゃ隼斗、我では不満があると言うのか」

稲浪が隼斗に詰め寄り、その気迫に隼斗が後にたじろぐ。

「いや、ちょっ、違、そうじゃなくて」

「では、申し受けると?」

さらに鋭くなる瞳に、息を呑むしかなかった。

「え? ……ああ。わ、分かったよ。受ける」

「受ける?」

「う、受けます。受けさせていただきます」

思わぬ形相と気迫を漂わせる稲浪に、隼斗は断ることが出来なかった。

「うむ。では………ん」

「は? え? ……ん!」

不意に稲浪が隼斗の胸に手を添え体を密着させてきた。未だ何一つまともに理解出来ず、硬直していた隼斗に稲浪の顔が迫り、唇が重なった。すると、隼斗の手の甲に一筋の刺青のような模様が浮かび上がった。

「隼斗、改めて幾久しく頼もうぞ」

ほんの一瞬にも、時が止まったように長い時間のようでもあった、唇に残る感触。ここ最近はバイトに明け暮れていた隼斗には久しい、柔らかな感触と鼻腔に香る香り。離れた稲浪は微かに頬を紅潮させながら、隼斗を優しい笑みを浮かべて微笑んだ。その凜々しさをも感じさせる笑みに、隼斗は呆然と立ち尽くしたまま、稲浪を見つめ水道からは洗い物をしていたままの水が流れ続けていた。

「こ、これは………?」

突如自分の腕に浮かび上がった妙な模様に隼斗が驚く。

「きやくしきもん 赫職紋じゃ」

そう言うと、稲浪が自分のシャツをはだけさせる。一瞬隼斗が視線を外そうとしたが、稲浪が、見よ、と胸上だけをはだけさせて隼斗に見せる。同じように稲浪にも刺青のような模様が淡く青い光を放っていた。

「これが我が赫職紋じゃ。契りを結んだ神子と赫職には、その記が刻まれるのじゃ」

「じゃ、じゃあ、これとそれが、俺と稲浪の契りってやつ、なのかな？」

隼斗の言葉に、稲浪がうむ、と満足げに頷いた。可愛らしさではなく、可憐な笑みを浮かべる稲浪に、隼斗は見とれるばかりだった。「それで、その赫職ってのは、一体何なんだ？」

しばらく呆然としていた隼斗がやっと現実に戻り、残りの家事を一通り終えると、稲浪に問いかけた。相変わらずシャツ一枚で下着も身につけていない稲浪は、隼斗に言われ下半身には毛布を被りベツドに腰を下ろしていた。

「先も言うたであろう。我らは闘い抜くために生れた、創生の神子。その我を御し、時に我の御霊の源となれし者が赫職じゃ」

「はぁ……」

言ってることが難しすぎて理解出来ん。闘いって何なんだ。創生の神子ってものそうだし。

「つまり、赫職ってのは、その、創生の神子の主ってことか？」

稲浪が大まかにはの、と頷く。

「それで、稲浪は白狐って狐なんだろう？」

「ようやく理解したか」

やっと信じてくれたのか、と稲浪が満足げに隼斗を見る。

「で、その狐が何で人間の姿をしてるんだ？」

いくら技術が進んでいるとは言え、動物が人間に化けるなんて、聞いたことも見たこともない。いや、見てはいるけど。

「我ら創生の神子は、NBSLによって生み出された命。その命を匿う身体は状況に応じて自在に変えられる」

「う、うん……」

理解しようにも、理解出来る常識と言うものを凌駕しすぎて、そうなるのだから仕方ない、と諦めの境地で理解するしかない。

「なんじゃ、いまいち不服そうじゃな？」



「いや、そういうわけじゃないんだ」

稲浪が首を傾げる。隼斗にしてみれば、かつて専門学校で学んだ映画の世界に自分が迷い込んだ感覚もあり、稲浪の言っていることを信じ始めている。無機質な日常の繰り返しに、突如現われた現実離れの存在である稲浪。いくら娯楽が溢れている今宵の情勢でも、物足りなさを感じていた中に現われた常識を超えるかもしれない日常の到来に、困惑していた。

「なんて言うか、実感が無いって言うか、夢を見てるみたいだ」

隼斗の言葉を稲浪が鼻で笑う。

「夢なものか。我はここに居るではないか」

「いや、まあ、そうなんだけどさ」

稲浪が狐に化けたことも、手から炎を出したことも見た。実感が無いわけじゃない、適応出来ていないだけなのかもしれない。

「我と隼斗は契ったのだ。その事実を早々に受け止めよ」

諭すような物言いに、隼斗は頷くしかなかった。

「では、参るかの」

「どこに？」

「NBSLじゃ。赫職の申請とやらをすることが、我らの掟なのじゃ」

「って、だから、隠してくれって！」

稲浪が行くぞ、と隼斗を急かしながらベッドから立ち上がると、毛布がずり落ち秘部が目の前に晒され、隼斗が顔を背ける。

「お主はおかしな奴じゃ。我は気にせぬと言うに」

「俺が気にするんだよっ！」

隼斗がタンスから稲浪が着れそうで、既に自分には小さくなった服を投げる。

「着るものがないから、今はそれで我慢してくれ」

あまり服に対する興味が無いのか、稲浪は隼斗の出したシャツとジーンズを暑苦しいぞ、と不満を言いながらも言われた通りに着こなした。

「稲浪の服と下着も買わないといけないよなあ」  
ドアの向こうで隼斗が、とんだ出費にため息を漏らしていた。

## 二神噺・NBSL

「改めて見ると、やっぱでかいよなあ」

「何を呆けておる。往くぞ、隼斗」

電車で自宅マンションから二十分ほど。かつての天下の台所のシンボルであった、大阪城も通天閣も今や国際生体科学技術研究所（NBSL）日本の超高層ビルの前にその歴史のシンボルの座を明け渡している。

「そんな何の躊躇いなく、よく行けるな・・・」

Tシャツにジーンズ姿の稲浪が、周囲にはビシッとスーツ姿を決めた人間や、白衣を羽織っている研究員らしき人間の中を、そんなもの視界に入るだけ無駄とでも言うような堂々たる歩みで巨大なビルの入り口のガラス門を潜っていく。見たことは何度とあっても、実際に建物内に入ることが始めての隼斗は、すっかり稲浪の態度にも押され、萎縮していた。

「うわ、すげえ・・・」

幾重もの嚴重な警備なのか、受付まで入り口からそれほど距離は離れていないというのに、門扉が数枚その横には必ず警備員が立ち、出入りする人間を鋭い鷹の目のようにチェックし、ここが日本なのかと疑わせるような面持ちに隼斗は咄然としていた。

「隼斗、そんな所に突っ立ておるな」

「あ、ああ・・・」

全く物怖じしない稲浪が受付前で、グラウンドフロアの光景に吞まれている隼斗を呼ぶ。

「赫職を連れてきた。会長への謁見を頼もう」  
マスター

稲浪が受付対応ロボットに声を掛ける。未だ多くが受付には人間を配置している会社が多い。受付対応ロボットは何気に費用が高く、余程の財力のある会社でしか使われることはごく小数で、隼斗は初めて見た。

「識別ナンバーをお申し下さいます。もしくは赫職様の赫職紋をこちらの光に呈示して下さいませ」

見た目は受付嬢と差して変わりないが、やはりそれが人間ではないのだと、その声が証明する。抑揚のない棒読みの台詞のような口調。淡々と仕事をこなす分には問題はないのだろう。ここで働く職員や訪問する他会社の社員なども慣れたように受付で用件を伝え、それぞれ仕事へ向かっている。

「隼斗、ここへ手を乗せるのじゃ」

「へ？ あ、ああ」

稲浪に腕を掴まれ、そのまま受付台の端にあるスタンドライトのような光が出ている機械の上に隼斗が手の甲を上に向けて乗せる。

「何、これ？」

「赫職紋を判別しておるのだ。隼斗の紋には我の情報<sup>こと</sup>が刻まれている。それを読み込んでおるのじゃ」

「はあ、そうなのか」

すると、隼斗の手の甲を赤い線光が指先から腕へと照射された。

「JPコードNo. 13、創生神子、白狐稲浪。認証確認が取れました。どうぞ、左のエレベーター8より、百三十階創生応接室へお向かい下さいませ」

「ふむ。往くぞ、隼斗」

稲浪に呼ばれ隼斗がその後を追う。律儀に受付ロボットが一礼するが、既にそこには誰もいなかった。

「なあ、稲浪」

「ん？ 何じゃ？」

超速エレベーターに乗り込み、言われた通り百三十階のボタンを押すと、ほとんど浮遊感を感じることなくドアの横に記された階が次々と上層階を示していく。

「稲浪って、やけに詳しいよな？ ここのこと」

隼斗の問いかけに稲浪がキョトンと隼斗を見つめ返す。

「我の話を聞いておらぬのか、隼斗は」

「え？」

稲浪が何度目かの呆れた表情を浮かべる。

「言うたであろう。我はここで生れた神子である」と

それほど遠い昔じゃない時間に、稲浪の口からそんなことを聞いた記憶もないが、あれって本当だったのか。

「ああ、じゃあ、ここは自分の庭も同然？」

ここで生れたのなら、稲浪には実家も同然なのだろう。隼斗もそんな感覚で訊ねたようだ。

「いや、我らは正確にはこのビルではない、NBSLの所有する通称、高天原<sup>たかまがはらとう</sup>で、能力を開花させるまで観察下に置かれ、その後、赫職を求めて放たれた。その間の拠点を我はここに置いておったのじゃ」

「高天原<sup>たかまがはら</sup>？」

聞くには島の名前らしいけど、そんな島なんてあったか？ 通称なだけで、本来は違う島名なのか。にしても、なんと言うか……

「現実離れし過ぎてるって言うか、生き方がまるで違うよな……」

「だが、我と隼斗はこうして契りを結んだ。生き方の相違など、人間も同じであろう」

下町で生まれたマナーなど全く教わらないようなやんちゃな生き方をする人間もいれば、生れた時から英才教育を受け、将来のために幾つもの習事をさせられる人間もいる。そうした中で、ごく普通に生きていた隼斗と、定められし使命のために生きてきた稲浪。それは大まかに言えば、人間の個々の生き方の相違と指して変わりはないと、受け取れた。

稲浪の言葉と同時にエレベーターが目的の階へ到着し、ドアが開く。往くぞ、と稲浪が先導しエレベーターを降りる姿に、隼斗は苦笑にも似た微笑を浮かべた。

「稲浪って何か格好良いな」

「ほれ、早ようせぬか」

「はいはい。今行くよ」

現実に圧倒されっ放しの隼斗。人や獣の姿に化け、人並み外れた妙は能力を使役する創生の神子と呼ばれる存在。それを管轄しているのが国際機関であるNBSL。それだけでも常識を逸脱した現実で、未だに受け入れがたいと言うのに、その中の白狐と言う狐に化ける稲浪と言う女性と強引ではあった契りを交わし、赫職というものになった。語るは容易だが、その物語を一旦を突然担うことになり、隼斗はかつて専門学校で学んでいた、現実ではありえない世界を生み出す映画を思い出していた。

そこには登場人物がいて、過去から未来まで自由な世界を創生し、その中で生れるストーリーを観客はひとときの憩いにする。それを作ることが楽しくて仕方がなかったあの頃。それが、夢を諦めてバイトに明け暮れている時に、空想世界が現実世界に現われた。その中心かはともかく、巻き込まれたことに対する戸惑いと己の前に現れた美女と彼女の口から語られることの解釈方法を見出せず、困惑するばかりだった。

「やあ、良く来たねえ。稲浪」

「久しぶりじゃの、会長」  
マスター

「神と呼んでくれていつも言ってるだろお」

エレベーターを降りると、絵画や骨董彫刻品の展示されている長い廊下が続き、その奥に創生応接室と金色に輝くプレートの取り付けられた、高級感溢れる扉が一つだけあった。その扉を開けると、稲浪が懐かしそうに目の前に現れた男に声を掛けた。

「貴様が神とは笑止。誰も神だと思ってはおらぬわ」

「君たちの産みの親なんだけどなあ」

どこか残念そうだが、それは声色だけで表情は穏やかにしている、頭頂部で黒髪と白髪で分かれた妙な髪色をしている男。

「あ、あの……」

「彼が稲浪の赫職かい？」

「そうじゃ」

見た目は主に頭が変だが、それほど歳を食っているとは思えない顔立ち。白衣を羽織っている辺り、研究員か何かなのだろうと隼斗は思った。

「ふーん、君がねえ、そうかそうか。ふーん……」

「うっ……」

稲浪と向き合っていた男が隼斗の目の前に来ると、隼斗をしげしげと全身をチェックするようにジロジロと見たり、体を触ってくる。唐突なことに隼斗は表情を濁し困惑していた。

「予想としては、稲浪がこうも早く赫職を見つけるとは思ってたよ。なかなかやるようだね、風祭隼斗君？」

「え？ な、なんで俺の名前を……」

稲浪からこの人物が誰なのかは聞いていない。稲浪がマスターと呼び、男が稲浪の産みの親だと言った。親子とは思えないが、それなりの関係があることは違いないと言うことくらいは判断がついた。「NBSLの情報網を甘く見られては困るな。私は何でも知っているのだよ」

不敵な笑みを浮かべる男が窓際へと移動し、閉じられているカーテンをシャッと一気に開ける。室内には照明が点いているため、少々明るくなった程度しか変化がない。そこから見える景色は大阪市内を一望出来るほどの絶景が広がっていた。

「稲浪、この私が誰なのか、説明してあげなさい」

「自分でせい。己のことを他人に任せるでない」

格好つけたように男が稲浪に向かってか隼斗に向かってなのか微妙な位置でポーズを取るが、稲浪がその申し出を特に意識して決めているが、男以上に格好良く、一蹴した。

「んっんっ。ま、まあいい。稲浪はそういう子だからね」

しばしの沈黙の後に、男が居心地悪そうに咳払いで雰囲気や元に戻す。

「……………」

どこか間の抜けたような男に、隼斗は呆然としていた。

「では、改めて。ようこそNB S L日本へ。私はここで会長をしている、かみくらんしょう神坐天照だ」

「は、はあ………」

隼斗がいまいち理解していないようで、曖昧に頷く。

「何を言うておるか、たわけが」

だが、稲浪が鼻で天照の自己紹介を笑い捨てる。

「隼斗、こやつはNB S Lの所長で、神坐天照などの名ではなく、

山田大郎じゃ」

「ああっ！ 稲浪っ、それを言っちゃだめだあっ！」

「えっ………」

格好良く隼斗に第一印象を植えつけようとした天照が、呆れたように吐き捨てた稲浪の暴露で真実が暴かれる。慌てて大郎が稲浪を止めるが、隼斗は驚いた表情を浮かべていた。

「や、山田さんって、NB S Lの所長なんですかつ！？」

「あ、いや、だから、神坐天照なんだけど………」

いや、だってこんなちゃらんぼらん人間が、あのNB S L日本を取り仕切る所長？ 信じられない。ってかあり得ない。もつとこう、スーツをビシッと着こなして、眼鏡でも光らせているのかと思つてたのにこんなだなんて………。

「こんなだが、そうじゃ」

「いや、こんなって。君の産みの親だよ、私は」

驚愕の事実を目の当たりにして、呆然とする隼斗を他所に、さつさと用件を済ませたいような稲浪と、当初は格好良く、いかにも私が天下のNB S Lの所長だとアピールしようとしていた計画が玉碎し、うろたえている大郎が応接室の中にいた。

「ふむ。先ほどは失態を見せてしまつて申し訳なかった」

「あ、いえ、お構いなく」

意を正した大郎が二人を座らせると、ようやく本題に入るようだった。



「さて、稲浪から大体は聞いていると思うが、君には彼女の赫職として、この新神話の創生<sup>ゲーム</sup>への参加をしてもらう」

「はい？」

何だそれ？ そんなこと稲浪からは、何一つ聞いていない。新神話のゲームって何だ？

「……稲浪、きちんと説明はしたのかい？」

自分の言っていることを、まるで理解していないような顔をしている隼斗に、太郎が稲浪を見る。

「我ら創生の神子が闘うとは伝えた」

「またそれは、随分と大雑把だね……」

太郎が苦笑する。一人蚊帳の外の隼斗は、既に二人の話題についていておらず、ポカンと阿呆な顔をしていた。

「隼斗君、君は選ばれた人間なのだよ」

口元で両手を組み、真剣な眼差しを隼斗に向ける太郎。先ほどまでのおちゃらけた雰囲気はなかった。

「NBSLは世界各国に研究施設を置いている。日本の中心はこの大府大阪。私は日本のNBSLを取り纏めているのだよ」

「は、はあ」

太郎が自慢げに話すが、隼斗は実感が感じられないようで、微かな表情を浮かべていた。

「そして、NBSLは新たなる研究に着手した。それが、新神話の創生」

「創生……?」

首を傾げる隼斗を他所に、太郎がテーブルの脇にあるボタンを押す。すると、双方の間に空間映像<sup>スペーシブルチャイ</sup>が浮かび上がる。立体映像とは異なる、平面に映し出される画面。最近は浮かび上がった映像にタッチパネル操作が出来るようになったとか言うニュースがあったが、まだ実用化には時間が掛かることも言っていた。

「君は物の怪と言うものを知っているかい？」

「妖怪とか、そういう類のもの、ですか？」

「そう。そして、赫職となった君の神子である、稲浪。彼女もその一種だと考えてくれれば良い。我々は神話を創生するのための神子と呼んでいる。ちなみに神社の巫女さんとは違うから、あまり変な想像はしないでおくれよ」

「しませんよっ。そんな趣味はないです」

二人の視線が稲浪に集まる。

「なんじゃ、二人して。私の顔に何かついておるか？」

稲浪が太郎と隼斗を見る。太郎が綺麗なものだよ、と褒めるが、それもまた、やかましいと一蹴されてしまう。

「まあそれはさておき。君は稲浪に選ばれ、このゲームの資格を有したわけだ。もちろん、今更拒否は受け付けないがね」

隼斗が尋ねようと思っていたことに釘を刺された。

「じゃ、じゃあ、俺はどうするんですか？」

稲浪に選ばれたと言われたが、隼斗が偶々稲浪を拾っただけで、もしあのまま放置しておいたら、こういう事態に巻き込まれることはなかった。運命なのだよ、と太郎は言うが、隼斗にしてみればとてもそうは思えなかった。稲浪が何かしらの事態に巻き込まれ、逃れて休んでいたところを隼斗が拾っただけ。そう隼斗は思っているが、太郎にしてみればそれすらも隼斗と稲浪が会おう運命の相手だということらしい。

「なあに。簡単なことだ。君はこれから稲浪と共に、まずは日本中に散らばっている神子たちを倒すか、稲浪同様に神子たちの赫職となれば良い」

説明は本当に簡単だった。だが、隼斗にはその真意がさっぱり理解出来ていなかった。

「隼斗の神子是我一人で十分じゃ。他の者など必要ない」

黙っていた稲浪が会話に混ざってくる。その力強い言葉に、隼斗の中で何かがドキッと疼いたが、稲浪を見つめるだけで、言葉にはなかった。

「稲浪、君のその独占欲も良いが、神子は一人よりも多いに越した

ことはないのだよ」

大郎の言葉に不服そうに頬を膨らませる稲浪だが、大郎はそれを宥めながら話を続ける。

「赫職と言うものが何なのか、君は知りたいのではないかい？」

「何なんですか、その赫職って」

稲浪のことと、創生の神話作りであるゲーム、それに参加することになってしまい、拒否出来ないことは何となく状況は掴んだ。で、問題がその赫職とか言うもの。稲浪は自分を御する人間のことだと言うが、いまいち意味が分からない。

「赫職と言うのは君の場合、稲浪のご主人様と言ったところだ。稲浪の白狐の姿は見たことがあるかな？」

「我を拾うた時、見ておる」

稲浪の言葉に、隼斗があ狐の姿か、と思い出して頷く。

「拾った、と来たか。随分変わった出会いをしたんだな、君たちは」

神子は己の波長と共鳴する人間を赫職に選ぶものだ定義していた大郎には、隼斗が稲浪を拾って契ったことに失笑していた。

「見たのであれば、話は早い。稲浪に限らず、神子は元来各々が持ち合わせている能力がある。その能力を引き出し、時には新たな力を生み出すことが出来るのが、赫職と呼んでいる人間の存在だ。創生は神子だけでは神話にはならない。そこに干渉する人間がいて初めて成立する。その能力を引き出す方法は各々次第。喧嘩するも善し、愛し合うも善し、何をして二人の問題。我々はそこに干渉はしない。つまり赫職とは、神子を神話とさせるべく導き手なのだ。強いて言えば、僕は創造神で、君はそこから生まれた役目を持った神だ」

大郎の言葉に隼斗と稲浪が顔を見合わせ、両者微かに頬が紅潮していた。それをどこかしてやったり感な顔をしている大郎が不敵に笑みを浮かべながら話を続ける。

「それ以外にも赫職には役割があるが、それは今は関係ないだろうから、良いでしょう。つまり、だ」

大郎が勢い良く、空間映像に向かって手をかざすが、そこはただの空間で、黒板でもバンツと叩いて、威厳を見せようとしたのだから、スカツと空振りして、バランスを崩して体がよろける。

「何をしたいのじゃ？」

「だ、大丈夫ですか？」

「気にしないでくれ。少々羞恥心と言うものを味わってみたかったのだ」

視線をずらし、気持ち悪く頬を赤らめている大郎。

「つまり、だ。君たちはこれから、この世界中にいる神子たちと闘って、闘って、闘いまくってその頂点を競ってもらおう。それが新神話の創生だ」

空間映像には世界中のNBSLの所在地が地図上に示され、緑の大地に点在している赤い点。大郎の話を聞く辺り、その赤い点は稲浪同様の神子を指しているようで、見ただけでは数え切れないほどだ。日本を見る限りでも、百近くの赤い点があった。

「だが、世界中と競ったところで時間はいくらあっても足りない。

そこで、国ごとに最強の赫職と神子を見出し、最終的には代表者が世界と闘うトーナメント方式を取ることにしたのだよ」

「・・・・・・・・・・」

「ふむ、なかなか興味をそそるの」

突然話がぶっ飛び、隼斗が啞然としているが、稲浪はほお、とどこか楽しい表情を浮かべていた。

「無論、勝者には世界の運命を左右させられるだけの褒美が授けられる。それが何なのかは、勝ってからのお楽しみだ」

「つまりは、俺は稲浪と共に他の神子と闘えってこと、ですよね？」  
「そう。まだ多くの神子が赫職を見つけていない。稲浪は早いほうだ。契りを結んでいない神子を仲間にするも善し、二人で頂点を目指すも善し。このゲームで君たちが目指すのは、まずは日本における勝者になることだ」

「我と隼斗の二人で十分じゃ。そんなものすぐに終わらせてくれる

わ」

稲浪の自信に満ちた言葉に大郎が不敵に微笑む。

「ちなみに、これは超が付くほどの極秘事項だから、万が一部外者に漏れた場合は……」

「ば、場合は……」

含み笑みを浮かべる大郎に、隼斗が息を呑む。

「まあ、頑張ってくれたまえ」

「ちょ、ちょっと、そこではぐらかさないで下さいよっ！」

たつぷり溜めた大郎が肝心なことをはぐらかし、腑に落ちない隼斗がこけた。

「そうだなあ、じゃ、その時はNBSLが総力を持って苛めるってことで」

「じゃあって何なんですかつ？ 今決めたんですかつ？」

隼斗の言葉に判断がつかない微妙な笑みを浮かべる大郎。今思いついたのか、隠しているのか隼斗には読み取れなかった。

「さあ、時は満ちた。この醜き世界を理想郷へと導く、神の神子と赫職よ。今、ここから飛び立つのだ！」

大郎が窓辺に立ち、両手を大きく広げ大声で叫ぶ。

「……あ、あの」

「会長よ。頭は大丈夫か？」

突然のことに、少々引いている隼斗と、冷静に冷めた視線を送る稲浪。二人の言葉など届いていないかのように太郎が高らかと宣言し、笑っていた。

「あ、そうそう。はい、これ」

「はい？」

高らかに笑っていた大郎が、何事もなかったかのように隼斗に振り返り、一冊の通帳を適当に胸ポケットから取り出し渡す。

受け取った隼斗が、今日一番の驚愕の表情になる。心なしか、通帳を持つ手も震えていた。

「仮にも、NBSLの子が世話になるんだ。闘いが始まれば、おい

おいバイトも手につかないだろ？ 稲浪を預かってもらう謝礼だと思っ  
て生活の足しにでもしてくれたまえ。それと、稲浪の衣類なども送っ  
ておいたから、確認しておいてくれたまえよ」

「あ、あの・・・え・・・ええっ！」

その通帳にはありえないほどの、隼斗が見たこともない金額が入  
金されていた。

「戦車だろうが戦艦だろうが買うのは自由だが、そんなもの買うな  
ら神子を増やした方が戦力にはなると思うよ」

隼斗は完全にたった一つの通帳に吞まれていた。人生で目にした  
大金は、バイト先で集計を担当した時に見た数百万が限度。だが、  
今、大郎が名刺でも取り出したように普通に普通に隼斗に渡した通帳は、  
そんな金額は道端に落ちていそうな安い金額だった。

「それじゃ、頑張ってくれたまえ。僕を失望させないでくれよ」  
そんな気楽な言葉に送り出された隼斗は、気楽ではなかった。

### 三神嘶・二人目の赫職

「何をそわそわしておる。もっと堂々とせぬか」

面談を終え、NB S Lを後にした隼斗はビルを出た瞬間から、もとい、創生応接室を出た後から、周囲を警戒するように仕舞った通帳を庇うようによそよそしい歩き方で、傍から見れば挙動不審だった。

「そ、そんなこと言われてもな……」

生れてこのかた手にしたことのない大金を詰め込まれた一冊の通帳。隼斗にとっては、それは大金を抱えて歩くことよりも重たいものだった。

「その歩き方のほうが、かえって不審ぞ」

呆れたように稲浪が後方を歩いていた隼斗の腕に自分の腕を組ませる。腰の引けた歩き方だった隼斗の背筋が伸びた。それでも隼斗の方が頭一つ分ほど身長が高いため、腕を組んで歩く恋人と言うよりも、病人を抱えている看護人のような構図だった。

「それにしても、稲浪」

「なんじゃ？」

稲浪の温もりに落ち着きを取り戻した隼斗が腕を組んだまま駅へと歩く。

「あの人って、何者なんだ？ NB S Lの所長だったり、稲浪はマスターって呼んでたよな？」

「先に、あやつが言うておった通りじゃ。NB S Lの所長であり、我ら神子の産みの親じゃ。本人は神だとか抜かしておるが、誰も信じてはおらぬ。新神話の創生については、我らもその全貌を聞かされてはおらぬ故知らぬ。じゃが、役割は把握した」

稲浪が満足げに、凜々しく微笑む。赫職の申請だと言うことで二人で出向いたが、それらしいことは何一つすることなく、所長である大郎の話を聞かされたただけでお開きになったが、それでも稲浪は

改めて自分の役割を把握し、隼斗もまた空想世界が現実起こったことを受け入れようとなかなかしていなかったが、大郎や稲浪の話を受ける他なくこの件から逃れることも出来なくなり、徐々に現実を受け入れていた。もとい、今はそんなことよりも、一刻も早く家に帰りたいようでもあった。

「俺、何をすれば良いんだろうな・・・」

「何を言うか。隼斗には我を御する役割があるではないか。我を使役することが汝の務ぞ」

青い瞳が隼斗を捉える。そこには全幅の信頼を寄せる稲浪の思いが込められているようだった。

「先のことを案ずる必要はない。我は最強なる青き炎の神子。我を使役することを誇りに思うて良い」

隼斗には、稲浪の何事も恐れない不屈の自信が一体何処から来るのかは分からないが、それでも、その勇ましいほどの凛々しさが、これから先何が起こるか分からない事態に遭遇しても、稲浪がいてくれればと思う安堵感と、改めて見る稲浪の美しさに胸が高鳴るのを感じていた。

「ま、まあ、そんな対したことじゃないだろうし、とりあえずは飯のことを考えるか」

大郎から受け取った、ある意味赫職としての契りを正式に認可させられたとも言える、通帳。大金を要するものへの使用は気が引けるが、食事程度のものなら、と隼斗が稲浪を見る。

「我は隼斗の作る夕餉が良い。汝の味は気に入った」

二言ほど前にドキッとさせられたにも拘らず、隼斗は再び言葉を失いかけた。外食よりも自分の料理のほうが良いと言われて、嫌になる人間はいないだろう。ましてや、好きかどうかはまだはっきりしてはいないが、気になっている人に言われたのであっては、それが男であろうと、嬉しくて笑いが漏れるのは至極全うなことなのだろう。

「何を笑ろうておるのじゃ？」



「いいや、何でも。じゃ、買い物して帰るか」

「うむ。楽しみにしておるぞ」

「少しは手伝ってくれても良いと思うんだけどな……」  
腕を組んだまま、二人は駅へと歩き、そのまま自宅へと帰路に就いていった。

「結構買い込んだな」

「これだけあれば十分じゃ」

買い物に立ち寄ったスーパーで、稲浪が隼斗にリクエストをしたため、その材料と買い置きがなかったシャンプーや洗剤に加え、稲浪がこれから同居するとなり、それに必要なものを稲浪が籠にいれ、普段なら籠一つで十分に足りる買い物が、結局籠二個分で納まり、隼斗の手には二つ、稲浪が一つを手にしてスーパーを後にした。

「？ 隼斗、そこで待っておれ。すぐ戻る」

「は？ あ、おい、稲浪？」

突然稲浪が隼斗に買い物袋を預けて、帰路とは違う方へ歩いていく。突然のことに啞然と隼斗がその場に立ち尽くしていた。

「お主、どうしたのじゃ？」

稲浪が路上でオロオロと右往左往している女性の下へ歩み寄る。

「ひゃあっ！」

不意に目の前に現れた金髪美人の稲浪に、ビクッと全身に緊張が走ったように硬直する女性。その驚きように、稲浪も思わず一歩後に反れた。

「落ち着け。我は怪しい者ではない」

「ふえ？ あ、は、はい。す、すみません……」

それほど離れていないため、隼斗が重たそうに買い物袋を提げながら、稲浪の所に歩いていく。

「それでどうしたのじゃ？ 挙動不審な真似などしおって」

「あ、そ、その……」

稲浪の気迫にでも押されたのか、それとも人付き合いが苦手なの

か、おどおどと言いよどむ女性。

「稲浪の奴、何してんだ？」

遠くから見ている隼斗には、稲浪が女性にカツアゲでもしているように見えていた。

「そのでは分からん。ハッキリと物申さぬか」

「は、はいっ。ツーちゃんとはぐれちゃったんですっ」

稲浪の少々高圧とも思える口調にすっかり怯えている女性が、上官に叱咤され勢い良く謝罪する新兵のように、体を固くしながら言った。

「逸れ人か。良からう、我が手伝<sup>はぐ</sup>おうではないか」

「へ？ い、良いん、です、か？」

恐る恐る上目遣いで女性が稲浪を見る。背丈は互いにそれほど大差はないため、上目遣いには見えないが。

「良いと言っておる。何度も聞くでない」

「ご、ごめんなさいっ」

すっかり稲浪に萎縮している女性。それでも、その目は救いの蜘蛛の糸でも見つけたような輝きを見せていた。

「我は稲浪。汝、名は何と申すのじゃ？」

「あ、は、はい。ふ、藤川、こ、琴音です」

噛み噛みではあったが、素直に応える琴音。

「琴音か。それで、ツーちゃんとは誰ぞ？」

「稲浪、どうしたんだ？ 急に先に行ったりして」

するとそこに、隼斗もやってくる。琴音が少しだけ緩めた緊張を再び全身に走らせる。

「逸れ人だそうじゃ。隼斗は先に戻って良い。我はツーちゃんとやらを探して帰る」

隼斗に先に帰って夕餉の支度を頼むぞ、と稲浪が言うが、

「逸れたのか。なら俺も手伝うよ」

隼斗が一人より二人のほうが早いしなと琴音を見るが、琴音は見知らぬ二人が目の前に現われたことにすっかり萎縮してしまい、恥

ずかしそうに頬を紅潮させていた。

「この辺なら、俺のほうが詳しいし」

この辺りで逸れたってことは、どっかから来たってことだろう。琴音って言ってたっけ？ この辺りは詳しく無さそうだしな。

「逸れ人なら、我一人でも問題ない。我は鼻が利くのじゃ」

「鼻？・・・ああ、なるほどね」

そう言えば、狐ってことはイヌ科だったな。それで稲浪も鼻が利くのか。

隼斗が首を傾げるが、すぐに何度か頷いていた。琴音が不思議そうに見てくるが、隼斗も稲浪も何も言わなかった。稲浪は掟を守っているようで、隼斗も先ほど聞かされた守秘義務を思い出したように、なんでもないと琴音に言うだけだった。

「えっと、それで琴音さん、でしたよね？」

「あ、は、はい」

「そのツーちゃん？ って言うのは、どんな人ですか？」

どこか威圧感のある稲浪とは異なり、下出な物言いをする隼斗に、琴音が肩の力を抜く。

「ツーちゃんは、あの、その・・・」

言い難そうに琴音が二人を見る。正直に話すべきかどうか、心の葛藤をしているようだ。

「なら、どの辺で逸れたんですか？」

隼斗が言い難そうにしている琴音を見て質問を変えると、小さく首を縦に振った。

「私、今日この町に来たので、道が分からなくて、ツーちゃんが探しに行ってくれたんですけど、戻って来なくて・・・」

俺はどこで逸れたかを聞いたんだけど、こういう聞き間違いをしたんだ？ まあ、この町に今日来たってことなら、この辺りで迷ってそのままなんだろうな。そのツーちゃんやらやも、琴音さんを探しているだろうから、探すのはそれほど難しくはないだろうし。

「琴音」

「は、はいっ!？」

不意に横から稲浪に呼ばれ、琴音がようやく落ち着いてきたのに、またガチガチになる。

「ツーちゃんとやらの匂いの残るものは持っておるか？」

「えっと、これで宜しければ……」

可愛らしいハンカチを琴音が稲浪に手渡す。稲浪は受け取るとクンクンと匂いを嗅ぐように鼻を近づける。

「分かるのか？」

何となく予想はしたが、実際に稲浪が本当に鼻が利くのかどうか疑っている隼斗に稲浪が、うむ。と声を上げ、ハンカチを返す。

「こっちじゃ。ついて参れ」

稲浪が何かを感じ取ったように歩いていく。当惑している琴音と隼斗が一瞬顔を見合わせたが、稲浪に呼ばれ、その後をいついていった。

「じゃあ、この辺りに、ですか？」

「は、はい。ここ、なんですけど、突然のことで、下見にも来る暇がなかったもので……」

申し訳無さそうに琴音が隼斗に、引越し先の書かれた紙を見せる。二人の前で稲浪が軒先から漂う食欲をそそる香りを嗅ぐように、時折鼻を引くつかせ歩いていく。

「ああ、ここですか。ここならすぐですよ」

「そうなんですか？」

隼斗に対しては、初めて来た町で初めて優しくしてくれた人。この人は親切で良い人。の定理でもあるように思い込んでいるのか、琴音は心を許したように力を抜いていた。

「俺もこの住人ですから」

「え、そうなんですか？」

「はい。ほら、あそこに見える左端のマンションですよ」

稲浪が歩いていく先には公園があり、その先に見える二棟の七階建てマンション。その一番左を隼斗が指差す。

「あそこ、ですか」

自分では長時間探しても見つからなかったのに、隼斗にほらあれ、と、自分がいた場所からそれほど離れていない所に簡単にあった目的地。あっさりと見つけれられ、琴音は少々呆然とした表情を浮かべていた。

「ってか、隣ですよね？」

渡された紙に書かれている部屋番号。それは隼斗の部屋の隣の番号だった。

「えっ………？」

何、この運命的なものは？ 的な表情で隼斗を見る琴音。初めて来た町で、初めて優しくしてくれた人が自分の借りたマンションの部屋の隣人だった。そんな嘘みたいな状況に琴音は驚きと、助かったな安堵の表情を浮かべていた。

「地図でも、すぐに分かると思いますけど？」

スーパーからその公園を通ってすぐそこ。言葉の説明ならそれで事足りるほど特に迷うようなところも何もない、平坦な道のり。地図を見ても分からないとなると、隼斗には思い当たることが一つだけあった。

「す、すみません。私、地図とかは苦手なもので………」

申し訳無さそうに顔を伏せる琴音。隼斗が、やっぱりな、と苦笑した。

「でも、良かったですね。後は稲浪がツーちゃんを見つけてくれますよ」

「あ、はい。そうですね、わざわざどうもすみません」

こっちじゃ、と先に行く稲浪の様子を見る限り、適当に歩いている様子もないため、目的地も見つかり、後は時間の問題とでも思ったのか、琴音が嬉しそうに微笑んだ。

「袖摺りあうも多生の縁ってやつですよ、きっと」

元々は稲浪が勝手に動いたことだが、琴音も一安心といった具合で、尚且つ隼斗は稲浪が案外お節介のようなお人好しなのだと言う、

出会いから少々キツイタイプかと思っていたが、そうではない新たな発見も出来て、悪い気はしなかった。

『あっ、いたっ!』

「この匂いは……」

急に匂いが近くなったのか、公園内を歩いていた稲浪が立ち止まった。

『琴音から離れろおっ——!』

「ん? ……」

どこからともなく聞こえた声に隼斗が振り返ると、背後から衝撃が襲い、隼斗が十歩程先に立ち止った稲浪の所に吹き飛び、何かが空に舞い上がっていった。

「きゃっ!」

「隼斗っ!」

琴音が身を縮め、稲浪が足元に買い物袋の中身を散乱させ倒れた隼斗に駆け寄る。

「……いっつゝ。な、何だ?」

「隼斗、大丈夫かっ」

稲浪が周囲に警戒するように険しい表情をしながらも、隼斗が起き上がるのを補助する。

「あ、ああ。何とか。な、何が起きたんだ?」

「分からぬ。じゃが、神子の仕業じゃ」

背中を押さえながら立ち上がる隼斗に手を貸しながら稲浪が周囲を見回す。その目はとたんに鋭利さを増していた。だが、公園内には人気はなかった。

「隼斗さん、大丈夫ですか!」

我を取り戻した琴音も隼斗に駆け寄り、支えるのを手助けする。

『ああっ!?! 琴音っ!』

「上かっ」

叫ぶような琴音を呼ぶ声に、稲浪が空を見あげ、それに続くように痛みを堪えながら隼斗とそれを支える琴音が顔を上げる。

『お前、琴音から離れろっ!』

「う、浮いてる……」

視界に入ったものに隼斗が絶句するように大きく目を見開いていた。

「ツーちゃん!？」

空に少年が浮いていた。それを見た琴音が、稲浪も隼斗も手伝っていた探し人の名前を空にいる少年に向かって口にした。

「なるほど。やはり神子であったか」

隼斗を襲ったのが、神子だと予想した稲浪の予感的中したように、稲浪が微かに口の端を吊り上げた。まるで自分の赫職に手を出したことへの報復でもしうとしているようだ。

「お前、琴音から離れろっ!」

先ほどと同じことを隼斗に向かって言うツーちゃんと呼ばれている少年。隼斗が琴音に支えられているだけで、隼斗が琴音にはくっついていないわけではないが、少年にはそう見えるのだろう。離れようとしないうちに隼斗に向かって勢いをつけて飛んでくる。どうやら先ほど隼斗を突き飛ばした時と同じようだ。それを見て稲浪が、不敵な笑みを浮かべながら両手に青い焰を宿す。

「ツーちゃん! 止めなさいっ!」

先ほどまでオドオドしていた琴音が、少年に向かって大声で叱咤する。突然の琴音の大声に隼斗と稲浪が不意を突かれたように驚き、稲浪の手から焰が消える。そして、少年も宙空で止まる。先ほどまでの威勢は消え失せ、母親に叱られた子供のように怯えた目をしていた。

「ツーちゃん、降りてきなさい」

琴音の力強さを感じさせる、怒りを含んだ声に少年がゆっくりと地に降りる。

「琴音、さん……?」

第一印象が強く焼きついた隼斗にしてみれば、場を一瞬で凍らせるような琴音の態度に

上手く言葉が出ず、ただ名前を呼ぶしかなかった。

「これをやったのは、ツーちゃんね？」

周囲に散乱してしまった、夕飯の食材や日常生活用品の数々。卵はほとんどが潰れ、黄身と白身がケースから漏れ、野菜や果物、肉や魚などのラップや袋も破れ、公園の土がべったりと付着していた。

「だ、だって、琴音が……」

「言い訳はしないの。隼斗さんに謝りなさい」

「で、でもっ……」

琴音が絡まれているのか襲われているかとも思ったのだろう。隼斗と稲浪が琴音と出会った時の琴音の態度を見ていれば、少年が琴音の身を案じることも理解出来る。そして、今は琴音から隼斗を引き離そうと必死になった。それだけなのだろうが、琴音にしてみれば右も左も分からない中で声を掛けてくれた少々古風な物言いと容姿にギャップのある稲浪と、優しく声を掛けてくれた隼斗に対して酷いことをしたと言う認識しかないのだろう。

「謝りなさい。下手をしたら大怪我をさせていたのよ」

強い口調の琴音に、稲浪も隼斗も呆氣に取られていた。

「……ごめん、なさい」

縮こまった少年が隼斗に呟くように、そう言った。今にも泣き出しそうな表情だった。

「あ、いや、俺は大したことないから、良いよ」

「本当に申し訳ありません」

少年が謝ると、琴音が隼斗から一步離れ、深々と頭を下げる。

「あ、いえ、そんな。頭を上げて下さい。俺はほんとに大丈夫ですから」

何度も少年の変わりに謝罪する琴音に、隼斗がかえって恐縮する。「まるで悪戯小僧と、その母君のようじゃな」

ペコペコと頭を下げる琴音と、叱責され落ち込む少年を見て、稲浪が失笑を浮かべていた。

「これはお詫びいたしますから」



「いや、いいですよ。そんなことまでしてもらわなくても大丈夫なんです」

しばらくは琴音と隼斗の頭を下げる、上げてくださいの攻防が繰り広げられ、ようやく頭を上げた琴音が、隼斗たちと共に散乱した商品を片付ける。

「この子に悪気があったわけじゃないんですから、これくらいは何てことありませんよ」

それに、俺には大金のある通帳があるから買い直したところで負担にはならない。

きつと隼斗は稲浪と出会わずに、この状態を迎えていれば、琴音の申し出を受けていただろう。だが、今の隼斗にはその必要がなかった。一生働いても稼ぐことなどで気やしない金額を持ち合わせていたのだから。

「しかし勿体ないのお。洗えば食せるものも多いぞ、隼斗？」

「そうだな。卵とかは後でまた買いに行けば良いだろ」

稲浪も隼斗も、洗って火を通せば問題なさそうなものは近くの水道で土を落とし、袋に入れていた。

「本当にご迷惑をおかけしました。折角親切にいただいたのに……」

先ほどのまでの威厳はどこへ行ったのか、琴音は再び出会った当初の女々しさに戻っていた。その隣で、ツーちゃんと呼ばれている少年がふてくされたような表情で隼斗に、「ん」と落ちていた物を渡していた。

「にしても、ツーちゃんだったっけか？　なかなか凄いことしてたな」

「ツーちゃんって呼ぶなっ！」

隼斗が先ほどの少年が中に浮いていたことを話題に出すと、少年がツーちゃんと呼ばれることが嫌なようで、琴音には従順に従っているが隼斗には睨みかかっていた。その横で、思い出したように琴音がハツとする。

「あ、あの、あ、あれは、で、です……」

どうごまかしたら良いのか、全く思いつかないようで琴音があたふたと視線を彷徨わせる。

「隠すことはない。私も神子なり。知りゆる同士に掟は不要じゃ」「え?」

稲浪の言葉に琴音が驚いたように稲浪を見る。

「ああ、実は俺、赫職って奴なんですよ。稲浪は俺の神子です」「ええ!？」

「お前、赫職なのか!？」

琴音が大げさにも思える驚きの声を上げる。それに合わせるように少年も隼斗に驚いた顔を向ける。

「って言っても、昨日稲浪と出会って、さっき所長さんに話を聞いて来た帰りだったんですけど」

「我を見て気づかぬとは、汝らも日が浅いようじゃの」

稲浪は感覚的に早々と少年が神子だと察し、琴音が赫職だと思っていたようだが、琴音も少年も隼斗が赫職で稲浪がその神子だとは気づいてはいなかった。

「そうだったんですか。実は私とツーちゃんも四日前に出会って、NBSL本社ビルに赫職申請に行くためと、東京よりも大府の方が安心かと思って出て来たばかりなんです」

なるほど。どうりであれだけ驚くわけだ。初めて自分以外の赫職と神子に出会えば、そりゃ驚くよな。俺も驚いたし。

「じゃあ、これから申請に、ですか?」

「いえ、今朝リニアで来てそのまま行って、帰りだったんです」

「入れ違いだったのか」

「そのようじゃの」

今朝、隼斗は稲浪とまともに出会って、話を聞いていたため申請に出るまでが少々遅かった。その間に琴音がビルを訪れていたのだろう。

「話を聞かされたその日に、他の赫職さんと神子さんに遇うなんて思いもしませんでした」

あはは、と戸惑いを含んだ笑いを見せる琴音。

「隼斗、どうするのじゃ？ 我は別に構わむぞ」

話がひと段落したところで稲浪が隼斗を見る。

「どうって？」

だが、隼斗は稲浪の言っていることがさっぱりのもよう、その視線から何も感じ取っていなかった。

「会長の話<sup>マスター</sup>を聞いておらなかったのか。我ら神子は闘うことを運命<sup>さだめ</sup>められし者ぞ」

「あつ……」

その一言で稲浪の言いたいことが隼斗にも理解出来た。

『契りを結んでいない神子を仲間にするも善し。二人で頂点を目指すも善し。このゲームで君たちが目指すのは、まずは日本における勝者になることだ』

NBSLの所長の大郎は言った。そして、その話を聞いたその日に隼斗と稲浪は自分たち以外の赫職と神子に出会った。この創生<sup>ゲーム</sup>の内容は至ってシンプル。神子を倒し、まずはこの国の勝者になること。そう聞かされた。つまり、稲浪が言いたいこと。それは……

「まずは手始めにこやつをやるかの？」

準備は出来ている。稲浪が目で隼斗に言う。

「え？ あ、あの、その……」

「良いよ、琴音。やろうぜ。こんなオバサン、俺がちゃっちゃとやっつけるって」

隼斗と稲浪の横で少年が琴音に闘うと言うが、琴音はどうしたら良いのか分からないように、隼斗を見る。隼斗としては自分が巻き込まれた現実<sup>ゲーム</sup>は把握したが、神子が闘うことに対しては、まだ若干の抵抗があり、自分を見てくる琴音もツーちゃんと呼んでいる少年が闘うことに対して、納得出来ていないように、困惑している表情を見るとあまり乗り気ではなかった。

「オ・バ・サ・ンじゃとお？」

だが、一方の稲浪は、困惑している隼斗と琴音とは打って変わったの、怒りを堪えている顔だった。眉間に皺が寄りヒクヒクとこめかみが痙攣していた。それでも綺麗だと認識出来るのは、元の造形がちよつとやそつとでは崩れないと言う事の表れなのだろう。

「いい度胸じゃのお、小童。この我を知っての失言か」

「オバサンのことなんか知らねーようだ」

さっきまでのしおらしさはどこへやら。少年が精一杯の睨みを利かせながら稲浪に、ベーと舌を出す。

——ぶちっ

何かが切れた、そんな音がした。そんな空気が辺り一面を瞬間的に駆け巡った。冷酷な冷たさではない、その真逆の劫火のような熱が辺りを包む。

「貴様には目上に対する礼儀と言うものを叩き込む必要があるようじゃな」

稲浪の声は酷く低かった。それだけ少年の言う、オバサンの一言が稲浪の堪忍袋の緒を切ったのだろう。稲浪の形相に隼斗と琴音は殺気を超えた何かを感じ身を竦めていた。

「お、おいっ、稲浪。落ち着けっ」

「ツーちゃん、だ、だめよっ。止めなさい」

二人がそれぞれの神子に呼びかけるが、一度火のついた稲浪には隼斗の言葉は届いていないようだ。

「征くぞっ、小童！」

「後悔しても知らないぜ、オバサン」

その瞬間、少年が大地を蹴り大空へと舞い上がる。

「へへーん、ここまで来てみるよ、オバサン」

空を飛べる神子は多くはない。少年もその限られた類なのだろう。琴音さん、あの子ってどんな神子なんですか？

ただならぬ雰囲気えんしの稲浪を遠めに二人で見つめる。

「ツーちゃんは、燕子えんしのつばさなんです。でも、私わたしが知る限り、ツーちゃんは飛ぶことが能力みたいで……」

そこで心配そうに琴音がつばさを見上げる。稲浪のことを知らない琴音は、つばさが怪我をしないかという不安があるようだ。本当に子を思う母親そのものの表情だった。

「そうなんですか」

攻撃する術はその体か。飛行能力だけだと言うなら、稲浪の敵じゃないかもしれない。俺も良くは知らないが、稲浪は狐焰きつねびを使っていた。それが本気になればどれほどのものかは知らないが、このままだとつばさが危ない気がするのは気のせいかな？ 創生のことを考えれば倒すに越したことはないんだろうが、琴音さんのことを思うと……

「無知で生意気な小童よ。我が焰の前に平伏すがよい」

稲浪が両手に狐焰を滾らせる。狙いを定めるようにつばさを見つめ、つばさはここまでは来れまいと得意げに何度も稲浪のことをオバサンと連呼して馬鹿にしている。それを先ほどまで憤怒の表情を浮かべていた稲浪が冷めた笑みを浮かべていた。

「我に楯突かなければ永らえたものを」

両手に宿した狐焰を稲浪が大空に向かって振るう。その勢いでTシャツ越しからでもハッキリ分かるほど胸が揺れているが、誰もそれに目を留めてはいなかった。

「うわっ！」

「ツーちゃん！」

次の瞬間、二本の青く轟々と燃える火柱が火炎放射のように空に向かって燃え上がった。つばさが予想もしていなかったように、慌ててさらに上空へと舞い上がるが、稲浪は薄ら笑みを浮かべ空に手をかざした。

「こ、これが、稲浪の力、なのか」

家で目にした灯程度ともしびとはまるで別格の稲浪の焰。稲浪が常に鼻高々に最強を謳う自信。何処から来るものなのか不思議に思っていた隼斗だったが、つばさを何処までも追いかける龍のような巨大な二本の火柱を前にして、稲浪が自分に自信を持つ意味を初めて理解出

来ていた。

「うわっ、な、なんだよっ、これっ」

つばさは燕子なだけに、宙空での動きは機敏で稲浪の青い焰を何とかかわしているが、それでも稲浪はまだまだ序の口程度にしか力を使っていないような余裕の表情で焰を操り、つばさで遊んでいるようにも見えた。

「どうした？ 避けてばかりでは我を倒せぬぞ」

稲浪の言葉を聞く余裕もなく、上下左右を飛び回るつばさ。直接焰を被っていないとも、焰は熱を発するため、つばさが焰をかわしている、熱風の渦が焰と共に襲い掛かってくることまではかわしきれないようで、時間が経つと共につばさの表情が苦渋に歪む。

「隼斗さん……」

徐々に不安がつばさを襲う恐怖に変わったようで、琴音が縋るように隼斗を見ってくる。その瞳は子を思う母のような瞳で、隼斗の心を突き刺す。

「そう言えば……」

所長が言ってたよな。嚇職のいない神子を自分の神子にするのも、倒していくのも、そして、仲間を作って闘うことも善し、と。

「稲浪、もう止めるんだ」

稲浪が怒る理由も分からないでもないけど、これは俺たちが望んで決めた闘いじゃない。俺も琴音さんも対立するつもりはないんだから、これ以上の戦闘はつばさが危ない。

「何を言う。神子は闘うことが義務じゃ」

「うわっ、あつっ、く、くそっ！」

つばさは本当に飛行能力しかないようで、稲浪の焰をかわすだけで、一向に攻撃する気配がなかった。その様子を見て、隼斗が目を閉じて少しだけ熱を持った空気を吸い込んだ。

「稲浪っ、俺はお前の赫職だっ」

「っ！」

本当はいまいちに赫職と言うものがどういうものか理解している

ようではないが、嚇職を得ていない神子とは違うものだと言うことは何となく把握しているようで、隼斗の呼びかけに稲浪が焰を切り捨て、空に立ち昇っていた焰が霧散して消えた。

「はあはあはあ………」

「ツーちゃん！」

稲浪の攻撃が止まると、疲れきったように肩で大きく息をしながら下りてくる。琴音がつばさに駆け寄りつばさを抱きとめると、力尽きたようにつばさは琴音に抱きかかえられた。

「ギリギリだったんだな」

「能力開花から時が経たぬうちに、高天原寫を出たのじゃ。力を磨かぬ早とちりは少くない。こやつもその一人なのじゃろう。我でなければとうにやられておったわ」

どこか不満そうな顔をした稲浪が隼斗の元へ戻ってくる。

「ありがとな、稲浪」

「何がじゃ？」

稲浪にしてみれば神子を倒してもいないのに、隼斗に感謝されることの意味が分かっていないようだった。

「琴音さんのことを考えて、初めからそのつもりなかったんだろ？」  
それに俺の言うこともすぐに聞いてくれたしな。と言う隼斗に、稲浪が言葉を詰まらせた。

「わ、私の赫職は汝じゃ。赫職の言うことは我らには絶対なのじゃ」  
プイツと頬を赤らめて明後日の方向を向く稲浪。どうやら隼斗の言う事が凶星だったようで、オバサンと言われたことに対する怒りは焰と共に発散されたようで、途中からは隼斗から見てもただ遊んでいるように見えていた。

「そうか。やっぱり、稲浪は最強だな」

「無論じゃ。今更なこと言うでない」

今更も何も、隼斗は初めて稲浪の狐焰と言うものの力を見た。それだけを見て稲浪が最強と自負するのであれば稲浪に対する不信感もあったのかもしれないが、道に迷い、翼と逸れた琴音を自主的に

手助けに行き、挑発的なつばさの一言から闘いをしてでも隼斗自身が能力を上手く使いこなせず、不安定になり余分な力の消費で琴音の胸に抱かれているだけで、外傷らしいものは見受けられなかった。気恥ずかしさでそっぽを向いている稲浪に隼斗は微笑んでいた。

「稲浪」

「ん？」

名を呼ばれ稲浪が頭だけを隼斗に振り返る。傾き始めた陽に輝く金髪がフアサッと流れた。

「これから、よろしくな。まだ良く分からないことばっかだけど、稲浪の力になれるよう、俺、やるよ、赫職」

稲浪を見てると久しぶりに感じる胸の温かさど、稲浪の仕草にドキッとする感覚。昨日出会ってまだそれほど時間は経っていない。でも、この気持ちは何なのか、俺だって子供じゃない。それが何なのかくらいは分かっている。今日知った、稲浪の少々過剰にも思える態度の中に見せる優しさに俺は――・・・。

「うむ。我こそ、久しく頼もうぞ」

一瞬、稲浪がポカンとしたような表情を浮かべていたが、すぐにいつもの凜々しさのある表情で、少しだけ声のトーンを落として隼斗の言葉に応えた。

「・・・何故、隼斗がそやつを背負うのじゃ」

「仕方ないだろ。疲れて寝ちゃったんだから」

「本当、迷惑ばかりかけてしまって申し訳ありません・・・」  
「良いですよ。おかげで実感が湧きましたから」

戦闘後、疲労でつばさはそのまま琴音の胸の中で眠りに落ちた。家に戻らないといけないため、結局隼斗がおぶることになったが、それが気に食わないようで散乱した中で調理に問題ないようなものと生活用品を入れた買い物袋を持っている稲浪が、恨めしそうな視線を眠っているつばさに送っていた。

「もう荷物は届いてるんですか？」

「いえ、明日の予定です。今晚必要な分と、布団だけは先に送って



いたんです」

「宿屋にでも泊まれば早いではないか」

「急な引越でしたから、費用のこともあったので……」  
でも、そうしても良かったかもしれないです、と琴音が苦笑する。  
ここまで来るのに、引越し費用から交通費など諸々急な出費があり、  
ホテルなどで一泊することが出来なかったのだろうが、NBSLで  
赫職申請で、所長にもらったクリスタルカードのことを先に知って  
いれば、手間が省けたのだろう。隼斗とそれほど変わらない状況の  
琴音に隼斗も共感していた。

「わざわざすみませんでした」

「いえ、これくらいは何てことないですから」

角部屋の隼斗の部屋の隣室が琴音の部屋。眠っているつばさを琴  
音が布団を敷き、その上に寝かせた。

「では、我らも戻るぞ」

「そうだな。隣なんで何かあったら気軽に声、掛けてください」

「はい、ありがとうございます」

琴音に見送られ、隼斗と稲浪も短いようで長かった一日を終える  
ように、家に戻った。

## 四神噺 女優、稲浪？

「うおっ！ な、なんだこれ？」

部屋に入ると、真っ黒な梱包BOXが置かれていた。

「我のであろう。会長からじゃ」  
マスター

送り主に神坐天照と書かれていた。

「ああ、稲浪の着替えとかか。って、何で部屋の中にあるんだよ」  
家の住所なども聞かれてないし教えてもない。ましてや部屋の鍵はきちんと施錠していたにも拘らず、荷物は部屋の中に置かれていた。

「相手はNBSLじゃ。かようなことをするのは容易いと言うものじゃ」

「そう言われると、そんな気がするのが恐いな」

呆れたような稲浪の言葉。だが今日面談した所長を思い返すと、どこか妙に信憑性を感じていた。

「さて、じゃあ夕飯の支度をしますか」

「うむ。我も空腹じゃ」

闘いの後で空腹もさらに増したのだろう。荷物を確認している稲浪を見ながら、隼斗は夕餉の支度に精を出していた。

「よし、こんなもんで良いだろ」

ダイニングキッチンテーブルに二人分の料理を並べると、夕餉となった。朝食のこともあり、今度は隼斗も稲浪と揃って手を合わせ、箸を持った。

「うむ、やはり隼斗の腕は確かなようじゃな。美味いぞ」

「それは良かった」

お世辞ではないようで、稲浪の箸は次々と進んでいた。

「なるようになるんだなあ、現実って」

「ん？」

不意に隼斗が呟き、味噌汁を啜っていた稲浪が視線を隼斗に向ける。その目はどういことじゃ？ と尋ねているようだ。

「いや、ただ、今でも本当は夢を見てるみたいだなんて思ってたさ」  
稲浪以外の神子を見て、鬨いに近いものも見た。今更稲浪に何を言うておる、と呆れられても、笑って過ぐすくらいだが、それでも新鮮さと同時に懐かしさのようなものも感じる。

「我もすんなりと赫職と出会うとは思ってはおらなかった。その気持ちは分からんでもないが、これは誠であり、我と隼斗はここにいるのじゃ」

てっきり自分の言葉を一蹴する言葉が返ってくると思っていた隼斗には、意外な答えが返ってきた。

「会長<sup>マスター</sup>には、人間社会と言うものを我らは調整を受けながら教えられてきた」

「そうなんだ？」

「うむ。我らは人間の生活環境とは異なる生形を営んでおる故、人間社会に溶け込むには時間が掛かるのじゃ」

「異なる生形？」

人間ではないということは理解していたが、どのような生き方をしているのか、隼斗は興味を引かれた。

「我らは、会長<sup>マスター</sup>が言うておった通り、物の怪と言うものの所以となる者じゃ」

「妖怪の仲間とかじゃなくて？」

稲浪が隼斗の言葉に笑う。

「では隼斗は妖怪を見たことがあるのか？」

「いや、ないけど」

そう言うのは物語や伝承などの話で生まれた想像上の生き物で、自然災害や信仰宗教などでの話だ。聖書などもどこか教えを強要するような教科書のようなものだと思っている人間もいるが、あれは世界で一番出版数の多い物語だ。道徳本のようなもので、中身はぶっちゃければ、小説などと指して変わらない。そこに空想のものと

して登場するものが妖怪などだ。誰も見たことがあるはずがない。

注目を集めようと愉快犯のように、空想を現実に見る人間がホウを吹くこともある。だがそこに存在はしない。生物学者にしてみれば、未だ発見されない新種程度にしか思われない。だが、人は夢を見、求める生き物。真っ向から否定する人間ほど悲しいものはない。

「我らの祖先は、このような力を有していたがため、人間とは隔離した社会を築き、独自に生き抜いてきた」

稲浪が箸を置くと、片手に狐焰を宿す。人魂のような青い焰。

「我は白狐。青き焰を司る者。故に我の祖先が人里に降りた際に、何かしら能力を使役し、それが人間の目に留まり、俗に言う人魂などと呼ばれ、恐れられるものになったのじゃ」

「そうなのか？」

確か人魂は、かつては土葬をしていたため、腐乱した死体には多くの微生物が有機物を無機物に分解する際に発生するガスが地中から湧き出て、地上の空気との化学反応によって一瞬発火する現象だと、科学的に言われていた気がする。

「無論、今隼斗が思うておることも真の理の一つなのじゃろう。じやが、我らの言うこともまた真なのじゃ」

嘘をついているような表情ではない。伝えられてきたことを話しているだけのようだ。

「じゃあ、他の神子ってのも、稲浪みたいなのなのか？」

「うむ。じやが、我もほとんどの神子とは面識がない。どう言う輩がおるのやは計り知れぬ」

そう言って稲浪が肉じゃがのジャガイモを頬張る。見た目は陶磁器<sup>ス</sup>の西洋人形<sup>ドル</sup>なのだが、和食を美味しそうに頬張る姿は、気品もあるが、少々滑稽にも見えた。

「我らは人間とは環境が異なっておった。そこにNBSLが現れ、各地におった生き残りを高天原<sup>タマカハ</sup>へ集め、人として姿を維持出来るよう研究し、神子と呼ぶようになったのじゃ」

今日まで色々と種族間での問題もあり大変じゃったが、と言う稲浪の言葉は、隼斗には理解を超える話ではあったが、聞き入っていた。

「我も能力開花させ、しばし同種族と共に力を学び、ここへ来た。早々と人間社会に出ていったものも多いが、未熟な輩がほとんどなのじゃろう」

隼斗が頷く。つばさも稲浪がそう言っていた通りなのか、闘う術がない状態だった。他にもそういう状態の神子がいる可能性があるということがあるのだろう。

「そういう輩は人間社会に対しての調整が曖昧でおることも多く、馴染めぬ者もおろう。我は調整に手間がかかり、相成ってある程度の常識と言う知識は身につけたのじゃ」

「色々あるんだな、神子っていうのも」

「うむ。それを知ることにも赫職の役じゃ」

いまいち曖昧だった神子と言うものの存在が、徐々に見えてきた。それでもまだまだ知らないことの方が多そうだけどな。

「そう言えば、稲浪。何で俺の家の前に蹲ってたんだ？」

所長さんの言う事が本場で、引き寄せられた運命の出会いであるとしても、あれは稲浪が俺を選んだと言うには、どう考えても微妙だ。

「あれか。あれはじゃな、演技と言うものじゃ」

「は？ 演技い？」

稲浪の妙な発言に、隼斗が小さく驚く。

「隼斗は我が傷ついており、情より我をここへ招いたのであろう？」

「あ、ああ」

稲浪の言う通り、隼斗はほとんど仕方ない、と言う情で稲浪を助けた。そして、そのまま赫職となった。そう思っていた。だが、稲浪はそれを演技だと言った。言ってる意味が分からないようにで食指が止まっていた。

「我には姉がおる。紅き炎を司る妖狐<sup>ようこ</sup>、九稻<sup>くいな</sup>と言う姉上じゃ」

「姉さんがいたのか？」

「うむ。我と共に高天原寫で暮らしておった。そこで我は姉上に教わったのじゃ」

『良い？ 稲浪』

『なんじゃ、姉上』

高天原寫は島と呼ぶには随分と広く、多くの神子が新神話の創生のため、人間社会に溶け込む調整を受けていた。

『稲浪、あなたはね、ちよっとおかしな常識と高圧的って言うか、気が強いから人間社会に溶け込むには難しいんじゃないかって、お姉ちゃんと思うの』

『何を言うか、姉上。我は会長マスターの教えを全うしておる。何も案ずることはない』

神子たちには、NBSLの用意した居住空間を与えられ、一人や兄弟姉妹などとそこで調整を受けるために生活をしていた。初めはそれぞれ元来の、自然の中で静かに暮らす生き方をしていたが、その生活を徐々に人間社会に適応させるために、時間を掛けて生活環境を変えようとしていた。

『うん、そうは言ってもね。やっぱりお姉ちゃんは稲浪のことが心配なのよ』

自分は大丈夫だといくら言っても、姉である九稲はなかなか納得はしてくれない。

『あのね、もし稲浪のお目に適う赫職に相應しい人がいたら、稲浪はどうやってその人に赫職になってもらうの？』

人間の見た目での年齢にすれば、稲浪は十九、九稲は二十一ほどに見える。だが、九稲の稲浪に対する言い方は、小学生の妹に中高生の姉がこれからのことを経験者として語っているように見える。

『無論、そやつを捕まえて申し渡す』

稲浪の返答に、九稲が頭を押さえる。

『稲浪、そんなやり方じゃ、赫職のことを話すどころか、逃げられ

て、下手をしたら警察に捕まっちゃうよ?』

『なぜじゃ? 我は教えの通りを果たしておるだけじゃ』

何がいけないのかさっぱり稲浪は分からなかった。その様子に九稲が稲浪のこれからを思い悩むようにため息を漏らした。

『良い? 人間社会には、私たちのように色々な性格をした人がいるの。優しい人もいれば、酷いことを平気でする人もいるの』

『それくらいは分かっておる』

『そんな時に、稲浪の言うように赫職の申しをしても、それは相手の人にとっては、脅迫にしか思えないのよ? 赫職を選ぶのは、私たち。ただのえり好みで選ぶものじゃないんだよ? その人のことを守る強い思いが必要なの』

諭すような物言いの九稲。なかなか譲歩しない稲浪は頑固なのだろうか、それとも変識に左右されているのか、腕を組んで九稲の話を考えていた。

『稲浪、絶対に赫職になってくれる人を捕まえられる方法を教えてあげる。お姉ちゃんと一緒に人間社会に行こう?』

『そのような術すべがあるのか?』

『うん、稲浪ならきつと大丈夫。だから、ね?』

『姉上が言うのであれば間違いはないのじゃろう。ならば従うまでじゃ』

『うん、お姉ちゃんがきつと良い赫職さんを見つけさせてあげるからね』

『うむ。分かった』

何だかんだで、稲浪は姉が好きなのだろう。何も疑うことなく九稲の言葉に頷き、九稲も自分の言うことを素直に聞いてくれる稲浪が好きなのだろう。稲浪に微笑んでいた。

「それで、姉上と共に赫職探しをしておった時に、隼斗を見つけたのじゃ」

「で、でも、稲浪、怪我してたよな?」

人情からであったものだと思っていた隼斗が、稲浪の語りに微妙な表情で自分の記憶を正当化しようと、思い当たることを稲浪に問う。

「あれは、姉上に言われて、故意につけた傷じゃ。翌朝には何ともなかったであろう？」

「……そういやそうだな」

傷や血が滲んでいたが、翌朝目覚め、人の姿をしていた稲浪の肌はどこにも傷一つなく綺麗な肌をしていて、証拠に変化した狐の姿の時も、傷一つなかった。

「じゃ、じゃあ、あの傷は稲浪のお姉さんがつけた傷、なのか？」

「うむ。ここへ来た時に、数日掛けて隼斗のこの家と、赫職として姉上が見極めて、昨夜姉上に少々手ほどきを受けてついた傷じゃ」  
「……」

じゃ、じゃあ何だ？ 俺の善意は作られたものの中のことだったのか？ 所長さんが言っていた通り、あの出会いは偶然なんかじゃない、運命と言う言葉をつけた意図的なものだったってことかよ。何だ？ 俺ってピエロだったのか？

稲浪の真実の語りに、隼斗は呆然としていた。

「我は反対したのじゃ。そのような姑息な手を使うてまで、赫職を求めぬと。じゃが、姉上が人間の本質を見極めるためじゃと、そうしたのじゃ」

稲浪の口からは謝罪は出てこない。悪いとは思っても、隼斗がそれで滅滅するとは思っていないような視線。その視線に少々騙された感に苛まれながらも、隼斗は嫌いではない、むしろその逆の容姿と性格を持つ稲浪が自分を選んでくれたことに対する嬉しさの方が勝っているようで、苦笑するだけだった。

「まあ、じゃあ、結果オーライってことなのかな？」

「我は良い赫職と出会えたと誇れるぞ」

性的なことに対しては恥じらいを見せる稲浪だが、こういうことに対してはサラリと、思わず隼斗が言葉を良い意味で詰まらせる一



言を口に出来るようだ。

「そ、そうか。それは光栄だな」

「うむ。だからもっと胸を張っておれ。我を神子にしたことを」  
今までに付き合ったことのないタイプの女性に、隼斗は今までに感じたことのない新鮮味を堪能するように、夕餉を稲浪と共に楽しんでた。

「そう言えば、稲浪はお姉さんとこっちに來たんだろ？」

「そうじゃが？」

ただ食欲を満たすために食事ではなく、稲浪はきちんとその一口を噛み締めるように食していた。

「それじゃあ、今はどうしてるんだ？」

「知らぬ。我を見届けると、姉上は自身の赫職探しに旅立ったのやもしれぬ」

「そっか。妖狐なんだっけか？ 稲浪のお姉さんって」

「うむ。九尾と言う物の怪を知っておるか？」

隼斗の言葉に、どこか自慢げな表情を浮かべる稲浪。

「九つの尾を持つ強暴な狐ってやつか？」

「そうじゃ。伝承じゃ、悪者のように云われておるが、姉上は優しいのじゃ。仲間を守るためには力を厭わぬところもあるが、それは祖先の血を引いておる証なのじゃろう」

九尾の狐が悪く言われていたのかは、俺は知らない。それほどそういうことに詳しいわけじゃないから、稲浪の言うことの方を信じるけど。

「姉妹でも赫職の好みは違うんだな」

「どうなんじゃろうな。我は隼斗を選んだが、姉上は何も赫職に関しては応えてくれはなかった」

稲浪も姉がどういう赫職を求めているのか知らないようで、小首を傾げていた。

「ま、良い赫職を見つかけられると良いな」

「姉上のことだ。我らが案ずる必要はない」

稲浪の言葉を受けて、隼斗は頷いた。自分のことをきちんと確立している稲浪の言うことなれば、問題はないのだろう。隼斗もそれを理解しているからか、それ以上は何も言わなかった。

「ご馳走様じゃ」

「お粗末様」

満足げに稲浪の表情が穏やかだった。きちんと手を合わせ、感謝の挨拶を言葉にし、隼斗に満足げな笑みを見せた。

「片付けは我も手伝うぞ」

「それは助かるな」

二人はそれぞれの食器を片付け、稲浪がテーブルを拭き、食器の片づけを手伝っていた。

「何か、すっかり馴染んでるよな、俺たち」

そこに在る二人の姿は、昨日出会ったばかりとは思えぬほどの近い距離感があり、付き合いたての二人と言うよりも、一年以上の期間のある恋人のような空気があった。

「それだけ我と隼斗の相性が良いという表れじゃ」

「そうだと良いな」

隼斗の答えに稲浪が少々不満げな顔をする。

「なんじゃ、我を認めてはおらぬと言うのか？」

「そういうわけじゃない。まだ何日も経ってないんだ。知ってることよりも知らないことの方が多いだろ？」

何日どころか、まだ一日だ。さすがにそれで稲浪のことを全部理解したとは言えないし、稲浪も俺のことを何もかも分かってはいないだろ。

「そうじゃな。我のことも汝のこともおいおい知りゆけば良い」

「そういう事だな」

稲浪も納得したようで、二人はそのまま片づけを済ませていた。

「日本国に舞い降りし神子は、私たちを除いて九十四。うち、北海道・東北地方に一人。関東・中部地方に一人。中国・四国地方に一

人。九州・沖縄に一人。そして、近畿地方に私。そして、行方不明の神子が一人。高天原より解き放たれた神子は百。あのお方は何を思っ、私たちをこの世界へ解き放ったのかしら」

はあ――、とため息を吐きながら、日本一の高さを誇るNBSLのビルの最上層にある電波塔の先端に立ち、強風の中で紅い長髪を大きく靡かせる女。大府大阪に遷都され、東京は衰退の一途を辿り、かつては反映に満ちた都会の風景も徐々に東日本の中心地と言う地位を失いつつあった。東京タワーとして名高かった赤い電波塔も、後に高層ビル群の増加に伴う電波障害を低減することを目的に新たに出来た、シルバーブルーの新東京タワーも今では赤字経営に陥り、赤い東京タワーは解体され、その跡地にはNBSLの東日本研究所が置かれ、新東京タワーだけがデジタル放送用の電波を送るタワーとして機能していたが、今では大府大阪にあるNBSLビルの方が日本一の構造建築物として、観光客を集めていた。

「あの方のデータによれば、全国に散った神子は、北海道・東北地方に十八人。関東・中部地方に二十四人。中国・四国地方に十四人。九州・沖縄地方に十二人。そして、近畿地方には二十六人」

多いようで少なくとも感じる日本中に散開して行った高天原から能力開花をさせた神子の数。

「この近畿での未だ婚いでいない神子は十六人。まずはこの子達の創生を見守ること、ね」

誰を思ったのか、女が微笑む。

「問題は残り一人の神子。所在は未だ不明。どの地域からも連絡がないとすると、隠匿しているか、ここにいる。そういうことになるのね」

不意に女の表情が険しくなる。

「しばらくは様子を見てみましょう」

そう言い残すと、塔の先端に立っていた女が姿を風と共に姿を消した。

## 五神嘶・稲浪と夜

「隼斗、風呂が沸いたぞ」

「さんきゅ。先に入って良いぞ」

浴室のほうから聞こえる稲浪の声に、隼斗がベランダから応える。取り忘れていた洗濯物を取り込んでいるようで、男物だけが風に揺れていた。

「何を言う。汝も入るのじゃ」

洗濯物を取り込み、室内に戻ると、稲浪が来い、と堂々と呼ぶ。

「いや、俺、洗濯物たたむから先に入って良いって」

隼斗はそう言うが、稲浪も譲らない。

「赫職である隼斗より先に入るわけにはいかぬ。それにこの我が背を流してやると申しておるのじゃ。早うせぬか」

稲浪の申し出に隼斗がカーペットに足を滑らせ、取り込んだ洗濯物を撒き散らす。

「な、何言ってるんだよ」

背中を流すから早く来い。稲浪のその言葉に隼斗が紅潮して焦る。「今更なことを言うでない」

「いやいや今更じゃないだろ」

昨日今日で知り合ったばかりなのに、今更も何もない。確かに隼斗は稲浪の糸纏わぬ裸体を目の当たりにした。だが、それは故意ではなく事故のようなものだった。目を逸らすことで回避出来たことでも、風呂となると、そうもいかない。ましてや背中を流すと言うことは、ただでさえそれほどの広さのない浴室で、さらに距離が近くなる。そんな考えると、今朝の稲浪の姿を思い出してしまったのか、隼斗は必死に稲浪の申し出を断っていた。

「我に遠慮は要らぬと申したのであろう。早うせい。我は体が冷えてきたぞ」

稲浪はどうやら隼斗もすぐ風呂に入ると踏んで、既に服を脱いで

いるのだろう。隼斗が恐る恐る、いや、むしろ、男の性で洗面所の鏡がリビングからでも見えるため、そこを見ると、案の定、真白な背中に金髪を結い上げて、うなじを露にしている稲浪の後姿があった。

「か、風邪引くから、とにかく先に入れてっ！」

「では、隼斗も入るか？」

「あ、ああ、洗濯物たんだから入るから、稲浪は先に入れて」互いに譲らない攻防がしばらく続いたが、隼斗の言葉に、必ずじゃぞ。と渋々根気負けした稲浪が浴室の戸を閉める。

「はあ、さすがに入れないって」

一息吐きながら隼斗が、散らばった洗濯物をかき集める。

「まさか、これからも、こう言う事が続くのか？」

稲浪のことだ。自分が納得する形にならない限り、譲らないだろうなあ。頑固と言うか、太い筋が通ってそうだし。今朝だって同衾も甲斐性だとかで、平気で隣で寝てたし。

「ま、まさか……」

隼斗がはっとして寝室の戸を開ける。備え付けのタンスに空きがあったからと、稲浪の送られてきた衣類などを仕舞うように言っていたが、隼斗はそれにはないものを見て、どこか照れくさそうに後頭部を掻いた。今朝まではベッドの上には枕が一つだった。大府に出てきた時に持参した寝具で、元々はクッションのようにふかふかな物だったが、数年も使うと、座布団になるんじゃないかと思わせるほど潰れた枕。だがそれでも愛着が在ったのか、今日の今朝まで使っていたが、今隼斗の見つめる先のベッドには、それがなかった。

「おいおい、俺の枕はどこ行っただよ？」

ベッドには枕があった。一つだけ。だがその大きさは一人分ではない。ゆうに二人は共に寝られるであろう、抱き枕のような大きさの新品の枕。

「こんなの買った覚えはないぞ？」

ふかふかモフモフで、固い枕より、柔らかい枕のほうが好きな隼斗にしてみれば、新品で寝てみたい願望があった。

「ん？ 電話か？」

ピリリりと、携帯が鳴り、リビングに戻り出る。

「風呂も同衾も赫職の甲斐性なのだよ。契りを結んだ稲浪は、既に君の嫁も同然。何をしたって稲浪が拒否しなければ問題ない。かつては据え膳食わぬは男の恥と言う素晴らしい言葉があったのだよ」「っ!？」

電話に出た瞬間、一歩的に誰かがそう言い、隼斗が固まった。

「さあ、素っ裸の据え膳稲浪が待ってる。お風呂にゴーしていったきまーす、だっ!」

電話越しにどこか興奮気味の男が隼斗を促す。

「ちょっ、な、何で知ってんですかっ!？」

隼斗は電話に出る手前、その電話が何処からなのかを見ていたため、驚きは一入だった。

「NBSLはCIAもKGBもSISも内閣情報調査室も世界各国の諜報機関なんて目じゃないのだよ」

電話の相手はNBSL日本を取り仕切る所長である、山田大郎。それで間違いはない。隼斗がとっさに慌てて部屋中をくまなく見て回る。

「そんなことをしても無駄だよ。私は全てを見通す力を持っているのだよ」

「なっ、何で知ってんですかっ!？」

隼斗が部屋に盗聴器などが仕掛けられていないかを見ているようだが、電話の向こうで大郎は高笑いをするばかりだった。

「ほら、早くお風呂にゴーしなければ、稲浪が怒って出てきてしまうよ?」

「ちょっ、た、大郎さんっ!？」

人の話を無視して好きに語る大郎の言葉は、間違いないようで、浴室の方から稲浪の声が聞こえていた。

「はっはっは。では私はこれで失礼するよ。稲浪とは仲良くするのだよー」

電話の向こうから、エコーがかかり、大郎の声が幾重にも響きながら通話が切れた。

「な、何だったんだよ、今の……」

一方的に喋るだけ喋って切られた電話。壁に耳あり障子に目ありの気がして、隼斗が呆然と部屋中を見回すが、何処にも盗聴器などが仕掛けられている雰囲気はなかった。

「NB SL、恐ええ……」

部屋名ことまで監視されているような気がしてきて、隼斗の動きが若干慎重になっていた。

「隼斗っ！　いつまで我を待たせれば気が済むのじゃっ！」

「うおっ」

リビングに戻ると、バスタオル一枚を巻いた全身が火照っている稲浪が怒って立っていた。

「後から入ると申したくせに、いつまでも入ってこぬではないかっ！」

待ちくたびれて上がってしまったではないかっ、と隼斗に迫る稲浪。火照った艶のある肌と、鼻腔を擦る優しい香りに思わず隼斗が息を呑む。だが稲浪はその様子とは裏腹に形相は険しかった。

「い、いや、洗濯物たたんでたら所長さんから電話があつて、今まで話してたから……」

まあ落ち着け、と隼斗が稲浪にどうどう、と両手を広げて言い訳をする。

「何？　会長じゃと？」

「あ、ああ。俺は入ろうと思ってたんだよ。でも、所長さんがなかなか話を切ってくれなくてさ」

そんなことはまるでなかった。むしろ隼斗は大郎に稲浪の待つ風呂へ行け、とけしかけられた。だが、約束を破られ憤怒している稲浪に真実を話し、その後起こりうるであろう惨劇を予想してしまい、

いかにもその通りになろうとしていたため、大郎に責任転嫁していた。

「隼斗、それを貸すのじゃ」

稲浪が隼斗の携帯を取り出し、メモリーに登録してあった大郎の連絡先を見つけると、通話ボタンを押した。

「じゃ、じゃあ、俺、風呂入ってくるから、ごゆっくり」

嫌な予感がした隼斗が、それほど大したことではない、ただ背中を流すから一緒に入るぞ、と簡単な約束をしておきながら放置されたことに対して、その原因が大郎だと聞かされた稲浪の怒りは、そつちに向いたようで、真実が露になる前に風呂へと逃げた。

「会長<sup>マスター</sup>っ！ 貴様っ！ 何故私の邪魔をするかっ この戯け者めがっ！」

風呂に入る瞬間、稲浪の怒声が響いたが、隼斗は身を小さくして、そそくさと浴室の戸を閉めた。

「ごめんなさい、所長さん……」

せめてもと、浴槽の湯に身を委ねながら、隼斗が合掌していた。

「隼斗、ようやく上がったか」

「ああ、って、またすごい着てるな……」

風呂から上がり、Tシャツと短パンを穿いた隼斗がリビングに戻ると、先ほどの怒りは沈んだようで、テレビを見て寛いでいた稲浪がいた。

「これか？ これは姉上の下がりじゃ」

一瞬絶句した隼斗。だがそれは嫌で衝撃的なものを見たからではなく、稲浪の容姿に何の違和感も感じさせないその姿に見とれるように驚いていただけだった。

「お姉さんの？ お姉さんもそういうの着るんだ？」

「うむ。じゃが、我には正直あまり姉上には似合うておらぬように見えていたんじゃない」

稲浪が着ている服。俗に言うネグリジェだ。シルク生地のような光沢のある淡いピンク色が稲浪の容姿に映えている。どこぞの少々



古い映画なら、ヒロインものじゃないかと思わせる。男勝りにも思える喋り方とは対照的な、フリフリピラピラのフェロモンムンムンな見た目に、思わず隼斗は言葉を出せなかった。日本人女性が着ていれば、少々違和感を否めないかもしれない。だが、稲浪は名前こそ日本人っぽさがあるが、容姿は完璧に欧米人だ。普通のパジャマ姿よりは断然似合っていた。

「どうしたのじゃ？ そっちはかりを見おって。何もないぞ？」

冷蔵庫から風呂上りにミネラルウォーターをコップ二杯ほど飲んで、隼斗がようやく一息つく。だが、その視線はどこか明後日のほうを向いていた。

「夜景を見てるんだ」

「カーテンが閉まっておるのか？」

稲浪が隼斗の見ている方向を見ると、しっかりとカーテンが引かれ、夜景など見えはしなかった。

「……テレビの音を聞いているんだよ」

「ならば正面を見れば良いではないか」

ソファに腰を下ろした隼斗の隣に、初めは床に座っていた稲浪が移動してきて、二人の正面にテレビがつけられているが、隼斗は稲浪とは逆の方向を向いていた。

「首が曲がって動かないんだ」

「ならば我が治してみせよう」

隼斗が声を漏らした瞬間、後から稲浪に耳をふさがれるように、稲浪の両手が顔を掴む。

「では、行くぞ」

隼斗の返事を聞くまもなく、稲浪が勢い良く隼斗の首を捻った。「うおっ！」

勢いが強かったのか、九十度曲げれば正面を向くのだが、隼斗の頭は百八十度回転し、痛みに声を上げたのではなく、首を捻られ、向いた方向には、目と鼻の先に稲浪の顔があり、その少し下に視線を動かしてしまった隼斗の眼前には、隼斗が稲浪を視界に捕らえな

いようにしていた原因の一つである、ネグリジェに包まれた胸元が目に入った。パジャマのように服として成立するよりも、下着としての分類に入るためか、ピンクの生地奥に、見える稲浪の胸の全て。いくら先ほど大郎が神子は嫁のようなものだと言われたからと言って、隼斗はそんなすぐには意識変換出来ず、極力意識しないように努めていたが、目の前に稲浪が恥じることなく晒しているのを目の当たりにすると、さすがにまだ稲浪に対しては微かに壁のある隼斗には、かなりの威力があった。

「うむ。これで大丈夫であろう？」

「あ、ああ。ありがとな。治ったみたいだ」

満足げな稲浪の微笑みに、隼斗は首を押さえて言葉を震わせていた。

「ん？ 何じゃ？」

未だに胸がドキドキとしている隼斗と、先ほどよりも隼斗にくっついてる稲浪。のどかな睡眠前の時間を過ごしていると、突如室内に音楽が響いた。

「誰か来たんだろ。ここのマンション、ピンポーンとか普通の呼び出し音じゃないからさ」

「そうであったか」

音楽のような呼び出し音に不思議そうにしていた稲浪が、頷き、隼斗が玄関へと向かう。

「あれ？ 琴音さん？」

「あ、夜分遅くにすみません」

玄関を開けると、控えめな態度の琴音がいた。

夕方つばさを運び、用があったら遠慮なく、と言っていたので、琴音が何か用があって訊ねてきたのだらうと、隼斗は思い、琴音を部屋の中に招いた。

「お邪魔します」

「琴音か。どうした？」

おっ？ と稲浪が部屋に入ってきた琴音を見る。

「稲浪さん、こんばんは」

「うむ。如何用じゃ？」

隼斗に勧められ、琴音が腰を下ろし、隼斗がお茶を用意するが、稲浪はそのままソファに座ったまま琴音を見る。

「明日にでもしようと思っていたのですが、早いほうが良いかと思ひまして」

これ、どうぞ。と琴音が箱をテーブルに置く。箱からは甘い香りが漂い、稲浪の鼻が真っ先に捉えた。

「けーき、とか言う菓子か？」

食べたことはないが、知識としては認知しているような稲浪の物言い。

「はい。今日は色々のご迷惑をおかけしましたので、そのお詫びに、と」

「わざわざありがとうございます」

「いえ、こちらこそ。あつ、ありがとうございます」

お茶を入れてきた隼斗が差し出すと、頭を低くした琴音が受け取る。

「隼斗」

「良いんじゃないか？ 別にまだ遅い時間じゃないし」

興味津々、話に聞いてずっと楽しみにしていたことが目の前にあるようで、稲浪の目が輝いていた。今狐の状態になれば、犬のように尻尾を振っていそうだった。

「おおつ、これがケーキなるものか。色鮮やかで甘美な香りじゃ」

「一つか二つにしとけよ。太るぞ」

初体験に先ほどまでの凛々しさではない、少女のようなあどけない無垢な笑みを浮かべる稲浪に、隼斗も琴音も苦笑していた。

「つばさ君は、大丈夫ですか？」

稲浪との戦闘で、疲労しきっていたため、隼斗も少々気がかりであった。

「あの後、夕食を食べて今はぐっすり寝てます」

琴音の穏やかな表情から隼斗も安堵した。問題はないようで、後は疲れがまだ残っているだけのようだ。

「稲浪さん、お味はどうですか？」

バクバクと食べるのではなく、稲浪は一口一口を吟味してから口に運んでいた。

「口に広がる果物の香りと酸味、クリームの甘すぎない甘さが見事に合致しておる。非常に美味じゃ。かようなものを知らぬかったとは、幾分損をした気分じゃ」

稲浪の少々興奮している表情からも、二人は稲浪がケーキを本当に始めて食べたのだと、笑みを浮かべていた。

「琴音、これは何ぞ？　こちとは違うようじゃが？」

「それはタルトですよ。稲浪さんが今食べてるロールケーキとはまた違うものですよ」

フルーツの詰まったロールケーキを食べながら、稲浪が箱に入っている他のケーキにも興味があるように見入っていた。

五個入っているケーキ。稲浪が一つ食べて、残りは四つだが、そのどれもが違う種類のもののため、目移りして味わってみたくなっているようだ。

「別に一気に食う必要はないんだぞ？」

「もう一つくらい問題ない。我は動くでな」

稲浪が動けば問題ないと、先ほどのチェリータルトに手を伸ばし、小皿に取る。子供らしいその様子に琴音は微笑み、隼斗は苦笑いを浮かべていた。

「そう言えば琴音さん」

「はい？」

稲浪のことを視界に入れないようにしたのか、それともただ隣に居たいだけなのか、隼斗が稲浪の隣に腰を下ろし、琴音を見る。

「新神話の創生ってやつで、所長さんとは何を話しました？」

隼斗は、まだ右も左も分かっていない。琴音もつばさと出会い一週間ほどだが、それでも自分よりは知っていることが多そうで、気

になった。

「山田さんと、ですか？」

「どうやら、神坐天照と言う名は所詮は自称で、つばさも稲浪同様に琴音に指摘したようだ。」

「俺は稲浪のことと、創生の為に勝ち残ることを聞かされたんですけど」

「私は、それと他にツーちゃんや稲浪さんのような神子のことを少し聞きましたよ」

「他の神子、ですか？」

「琴音の言葉に、隼斗が思い返すのは、隣で美味じゃと微笑ましくしているながらも、ネグリジェ姿で視線を横に向けると胸と下着が透けている稲浪と、自分を突き飛ばし、稲浪の逆鱗に触れた少々小生意気な態度の少年、つばさ。そして、稲浪との出会いを演出したと言う稲浪の姉の九尾の九稲の三人だけ。他にも神子がいることは大郎の話の中からも判断出来たが、どれほどの数かいて、稲浪やつばさのような能力を持っているのか、と言うことは何も分からなかった。」

「はい。山田さんの話では、日本には全部で百人の神子がいるそうです」

「百人、ですか」

「多いのか少ないのか正直、微妙。大府だけで百人とかなら多そうだけど、全国に百人となると、良く分からない。」

「じゃが、少なくとも七人は既に赫職と契っておるはずじゃ」

「稲浪がお茶で口直しをしながら、話に加わる。」

「そうですね、私もそう思います」

「稲浪の言葉に琴音も頷く。」

「どういう、こと？」

「一人蚊帳の外の隼斗が二人を見る。」

「我の赫職は隼斗、汝じゃ。そして琴音の神子である燕子の小童」

「そして、北海道・東北、関東・中部、近畿、中国・四国、九州・

沖縄地方のそれぞれには、その神子たちを監視するためにNBSLに遣わされた神子が一人ずつ配置されているそうです」

「恐らくそやつらは、既にNBSL内の人間か、会長と契マスターっておるのじゃろう。でなければ、そのような役目を背負えるのは限られておる」

二人の会話に、隼斗が半口を開いたまま聞いていた。

「ってことは、まだ赫職の居ない神子が全国には九十三人いるかもしれないってこと？」

隼斗の疑問を二人は否定した。

「恐らくその可能性は低いと思います」

「うむ。我や小童のように赫職と契った神子は他にもおるじゃろう」「そうか。でも、いずれにせよ、その神子たちと稲浪は闘うんだよな？」

そう運命付けられた神子。そして、その先に繋がる全貌の明らかにされていない新神話の創生。NBSLが何を目論んでいるのかなんて、バイトに明け暮れていた隼斗には知る由もなかった。今までNBSLなんて、電車からその巨大なビルを呆然と景色の一部としてしか見たことのなかった自分に降り注いできた、突然の関わりに未だ腑に落ちない部分を感じながらも、その中で出会った白狐稲浪。気が強く、自信過剰にも思える自信とそれに見合うだけの下地を持ち合わせていることを知り、そして、優しさも兼ね備えている憎めない存在。その神子の赫職になったことで、まだ漠然としているが、燦るように湧く不安のようなものがある。それが湧いたのは、夕刻の琴音の神子であるつばさとの戦闘。傷つくことこそなかったが、相手のつばさは疲労困憊だった。相手の神子は言え、気がかりになることは否めなかった。

「無論じゃ。我らはそのための神子。志同じであろうが、我らは、二つは一つになれぬ。一つが引くしかないのだ」

稲浪の言葉に、隼斗も琴音も静かになる。

「隼斗さん、稲浪さん」

だが琴音がしつかりとした目を二人に向ける。

「私は勿論ですが、ツーちゃんは闘うと言う事には向いていません」

「燕子である以上は、それは仕方在るまい」

「ん？ どう言う事だ？」

隼斗が稲浪を見る。

「燕子はつばめの幼体<sup>えんし</sup>じゃ。つばめになれば我のような戦闘での力を持つが、幼体にはその術など備わってはおらん。小童は能力開花の第一段階で高天原寫を出たのじゃろう。隼斗が汝らを仲間だと言った。我はそれに従い、汝らを襲う輩から守護をする」

隼斗が第一じゃがな、と頼りになる力強い言葉。

「ありがとうございます、稲浪さん」

そのことを今日は話したかったもう一つのことで、琴音が稲浪に頭を下げる。

「畏まるでない。我も琴音には礼がある」

感謝しておるぞ、と稲浪が琴音に礼を言った。いまいち分かっていないようで、琴音が不思議そうな顔を浮かべる。

「ケーキのことですよ。な？ 稲浪」

「うむ。かような美味なるものを食せたのじゃ。大きな借りを得たと思うて良い」

満足げに稲浪が琴音に向かって笑みを浮かべる。

「満足していただけたようで良かったです。でも……………」

琴音が稲浪に向かって手を伸ばす。

「おっ？」

「ふふっ、付いてますよ、クリーム」

優しい笑みを浮かべて琴音が稲浪の口はしについたクリームを拭う。隼斗からは逆のほうに付いてたようで、見えなかったが、琴音の指先には白いクリームが付いていた。

「あっ……………」

不意にポツと琴音の顔が紅潮する。

「ご、ごめんなさいっ。ついツーちゃんと同じように思っちゃって」

動揺する琴音。稲浪の口はしについていたクリームを指で拭うと、つばさにはよくしていたのだろう。その指を琴音は迷うことなく自分の口に運んだ。気を緩めていたせいで自宅と誤ってしたことでも、隼斗と稲浪の目の前だったため、それが羞恥心を沸騰させたようだ。「気にするでない。女同士じゃ」

「そうですよ。俺も気にしませんから」

「あ、うう……」

二人に言われると、さらにそのことを実感してしまったようで、琴音が小さくなっていった。

しばらく、一人にパニックになっていたが、ようやく落ち着くとお茶を啜る。稲浪もケーキで心も満たされたようで、悠々に寛いていた。

「そう言えば、琴音さんは東京に居たんすよね？」

緊張を解くように隼斗が尋ねる。

「はい、昔は首都だったのですが、生まれた時には大府大阪になっていましたから、あまり実感はありませんでしたけど」

隼斗と同じようなことを琴音も感じているようだ。

「東京では何をしてたんすか？」

見た目とその纏う雰囲気から隼斗は自分よりも歳上だと思っていた。だが、歳を聞くことは野暮な気もして、とりあえず目上に対しての言葉遣いだけを心がけていた。

「友人とフラワーショップをしてたんす」

「それじゃあ、オーナーだったんすか？」

「いえ、そんな大したものじゃないですよ。小さなお店ですから」  
先ほどまでの取り乱しようもなく、落ち着いた雰囲気に戻っていた。

「それじゃあ、つばさ君とはどういう経緯で？」

隼斗は稲浪の姉に騙されたといっても過言ではない出会いだっただが、琴音とつばさはそう言うものではないように感じていた。

「ツーちゃんは、お店と隣のアパートの合間に蹲っていたんす」



『じゃあ、琴音。それ外に出したら今日は上がって良いよ』

『うん、分かった。お疲れ、沙紀』

『お疲れ様〜』

花屋の仕事は想像以上に大変。よく小さい女の子は夢見るけど、実際は肉体労働の体力勝負の世界。朝、市場から買い付けた花を商品にするために、店で処理し、花によって処理方法が異なるため、種類別に処理する。その初めの段階を水あげと言い、いらない葉や茎を切り、花の吸水が悪くなり、保ちも悪くなるためきちんと処理する必要がある。

『ふう、疲れたあ』

日持ちの悪く、売り残りの花などはほとんど処分するため、営業の終わった二十時以降も仕事はなかなか終わらない。

花屋の仕事は基本は水替え。買い付けた花や陳列している花が折れたり枯れたり、汚れている部分を取り除き、花の茎の足を二〜三センチを切り落として綺麗な水に入れる。花と水の入ったバケツは重く、花の本数が多いほど気合が要る。それは販売後空になったバケツの整理もあるため、この水替えは体力をとにかく使う。

『よしっと。今日も一日終わりね』

店と隣に立つアパートの間にあるちょっとした空間。そこに自転車で通う琴音と、共に店を立ち上げ、オーナーと言うあって、ないような肩書きを持つ友人の沙紀。彼女の乗る大型バイクも止まっている。その奥にダンボールや花のゴミ捨て場があり、無人ゴミ回収機が道路に埋め込まれた誘導センサーを元に、順序と時間通りに早朝に回収に来る。

『あれ、琴音。まだやってたの？』

帰り支度を終えた沙紀がライダージャケットとデニム姿で出てくる。

『今終わったところ。私ももうすぐ帰るわ』

『そう。じゃ、その鍵お願いね。他は施錠したから』

水あげと水替えの後は、手入れだ。メンテとも呼ぶこともある。切り花は鉢物も手入れが必要で、自宅でなら良いことでも店では商品としてお客に出すため妥協はしない。水やりはもちろんのこと、枯れたり汚れた花や葉を取り除き、花鉢の場合、水やりは花びらが痛まないように花びらにはかからないように水をやり、観葉植物はたつぷりと葉水を霧吹きなどでかける。小さな虫や幼虫、ナメクジなどの花や葉を傷める可能性のある虫を取り除くこともれっきとした仕事。嫌々なんて通用しないのも慣れないと辛いもの。

『うん、お疲れ様』

『じゃね』

ヘルメットをつけ、先がバイクにまたがりエンジンを掛ける。底から湧き上がる重低音が夜の闇に吹き上がる。エンジンがある程度温めた沙紀が琴音に、腕を上げながら帰宅していくのを琴音が見送った。

『私も帰ろうっと』

誰も見ていないからか、琴音がうーんと両手を夜空に掲げ背伸びをする。

『う……う……う……』

どこからか、暗闇の中から小さな呻き声が聞こえた。

『え……？』

そして花屋の仕事での華と言うものは、やはりなんと言っても花制作。花屋に勤める者のセンスと腕が問われる一番の見せ場。店内陳列物に関しては製作者の好みや半端物を使って制作し、それを気に入ったお客様が購入する。それ以外は要望に応え制作する。希望の花や色、予算、用途内で短時間で出来るものから少々手間の掛かるものなど千差万別にニーズに応えることは、熟練した腕が必要になる。

『う……』

『な、何……？』

店とビルの合間にある小さな空間のため、微かな明かりしかなく、

琴音がその声に、体に緊張を走らせる。

『ううう……』

花屋としては、お客は人それぞれ完成が異なるため、お任せされるよりも、具体案を出してもらおう方が事を円滑かつスピーディに進められるため、好まれることが多い。プレゼント用にラッピングしたアソートフラワーを作ったりすることも仕事で、ギフト用や仏花、墓花など生活に密着したものや、お稽古花や開店花、葬儀花、会場花、生け込み、結婚式ブーケなどの一般的な生活とは少々離れたものも制作する。それをただ制作するだけなら良いが、大抵はお客の目の前で作ることが多い。じーっと見られることへのプレッシャーにも強くなければ、勤まらない、体力と精神力を使う仕事。それが花屋と言うもの。

『だ、誰か、いる……の？』

声のした方に、へっぴり腰になりながら琴音が恐る恐る歩く。合間の先に広がる住宅街の路上の街灯の明かりが、二つの陰をはっきりと映し出す。

『うっ……うう』

一つは琴音。細く長い影が弱々しいシルエット生み出している。

『え？ こ、子供……？』

もう一つの影。小さく丸っこい。だが、その陰が琴音が気づいた瞬間、トサツと音を立てて倒れた。

『えっ、ちよっ、……』

駆け寄るとハッキリ分かる。それが少年であると。周囲に人影も気配もなく、琴音が少年を抱き上げる。

『ちよっと、君！？……っ！』

街灯の明かりで微かに見えた、少年の服から露出した肌。擦り切れたような幾つもの切り傷。ほんのついさっきついた傷じゃない。既に自然止血し、黒く酸化した血液がかさぶたを作り出すための覆いになり始めていた。

『た、大変っ！？』

琴音が少年をお姫様抱っこで抱き上げると、店の事務所兼休憩室に運ぶ。思っていたよりもずっと小さな体。そのあちこちに出来た怪我。生易しい子供の喧嘩だけで出来るような傷じゃない。

『沁みるだろうけど、ちょっとだけ我慢してね』

運が良かったのか、花屋は手傷など日常茶飯事。常備していた消毒液も傷薬も包帯も大方は揃っていた。

『どうしたの？　こんなに傷だらけになって』

気を失ったのか、横になったままの少年。そのおかげで琴音の処置は難なく終わった。幾つも貼られた絆創膏。濡らしたタオルで、琴音が顔や手足に付いた汚れを拭き取る。

『喧嘩、じゃないわよね？』

琴音もその少年の様子に唖る。大怪我と言うほどでもないため、病院へ連れて行くほどでもなく、かと言って、むやみに少年を連れて帰ることも、家族のこともあるだろうから、気が引けた。

『沙紀に連絡……うん、ダメね』

つい先ほど帰った沙紀に連絡すれば、飛んで戻ってくるだろうと琴音は読んでいた。仕事終わりに呼び戻すことに、琴音は気が引けていた。

『今日は、ここに泊まり、かな』

置いて帰るわけにもいかず、琴音が小さくため息を漏らす。奥の棚には着替えやタオル、毛布が常備してあった。イベントなどの仕事が入ると、夜分遅くまで仕事が終わらないこともあり、仮眠室としても使うことがあり、琴音も何度も寝泊りしたことがあった。

『ちょっとここで休んでね。ご飯とか買ってくるから』

シャワー室もあるため、生活は出来るが、食材までは茶菓子以外は置いておらず、買いに行くしかなかった。

『ん？』

少年に毛布をかけ、琴音が立ち上がった瞬間違和感を感じた。

『あっ』

少年が琴音のロングスカートを掴んでいた。何処にも行かないで、

とても言うようなほど、ギュッと掴んでいた。

『大丈夫よ。すぐそこのお弁当屋さんに行くだけだから、すぐに戻るわ』

宥めるように琴音が優しく言うのと、少年の手がスルツとスカートを撫でるように離れた。

「じゃあ、それがつばさ君との出会い、ですか？」

「はい。ツーちゃんに、今回の事を聞かされて、その後に山田さんから電話があつて、ごちゃごちゃしている間に、こうして大府に移ってきたんです」

「何もわざわざ来ずとも、NBSLの支社に往けば良かったではないか」

隼斗は大阪に出てきて稲浪と出会ったため、本社ビルへと赴いたが、全国の主要都市には必ずNBSLの研究施設があり、稲浪が言うにはそこでも赫職申請は受け付けているようだ。

「そうなんですけど、東京には知り合いは沙紀しかいなくて、こういうことですから、相談もするに出来なくて……」

「本社がある大阪なら、と言うことか？」

「まさか来たその日に、赫職と神子のお二人にお会いするなんて思ってもみませんでした」

苦笑を浮かべる琴音。それは隼斗も同じだった。

「まあ、知り合ったのも何かの縁ですから、これから一緒に頑張りますしょう」

「はい。こちらこそ、よろしく願います」

「ふむ。我も久しく頼むぞ」

稲浪以外の二人は、未だにハッキリとしたものを感じてはいないようだが、とりあえずは、と言う事なのだろう。稲浪だけが二人とは違う思いで頷いているようだった。

「では、夜分失礼しました」

「いえ、こちらこそ、ケーキありがとうございました」

隼斗が玄関まで見送り、琴音が一礼して家を後にする。

「あ、そうそう。隼斗さん」

「はい？」

隣室のため、五秒も戻るのに時間は掛からない。思い出したように琴音が振り返る。

「私だから良いですけど、稲浪さんの格好、もう少し気をつけたほうが宜しいですよ？」

うふっ、と微笑みながら、琴音がおやすみなさい、と自宅の扉を開け戸を閉めた。

「いやっ、ちよっ、こ、琴音さんっ!？」

今の言い方と微笑み、絶対俺の趣味だとか思ってたよな？ ち、違いますよ。違うんですからねっ。俺の趣味じゃないんですからねっ!

思ったところで、既に琴音は自宅に戻っている。一人残された隼斗は静かに玄関を閉め、鍵をかけた。

「はぁ………ライトオフ」

廊下の電気がぱっと消える。リビングには稲浪が居るため、温度センサーが働き、廊下の照明だけが落ちた。

「ろうふいはのひゃ、ふぁひゃと？」

「何言ってるかわかんないって」

リビングに戻ると、歯磨きをしながら稲浪が隼斗の様子に首を傾げていた。

「どうしたのじゃ、隼斗？」

洗面所から戻ったばかりのようで、立っていたため、振り返った稲浪の全身が隼斗の視界に飛び込み、琴音の言葉が隼斗の脳裏で反芻していた。

「何でもない。それより、そろそろ寝るか」

「うむ、そうじゃな。我は長起きは苦手じゃ」

色々と激動だった一日がようやく終わろうとする、夜十一時。バイトのある日は寝るには早いが、休日だとすることもなくなり、睡

魔がやってくる。簡単に部屋の様子を確認し、隼斗が寝室へと向かう。それに続くように稲浪もその後追って寝室へ入る。

「明日は何をするのじゃ？」

寝室のカーテンを閉めている間に稲浪がもぞもぞとベッドに入る。「俺はバイトがある。さすがにいきなり神子と闘うことなんてないだろ。稲浪は琴音さんが引越しの荷解きで大変だろうから、手伝ってあげてくれよ」

欠伸をしながら隼斗が、ライトオフ、と言うと部屋の電気が消え、隼斗もベッドに入る。

「よかろう。ケーキの礼じゃ」

「頼んだぞ」

そう言うのと、二人同時に目を閉じる。今まで感じなかった女の香りと、温もりがすぐ隣にある。彼女のいた頃はそんなものを何度か感じながら眠った隼斗だが、ここ数年はそれもなく、一人静かに寢床についていた。自分以外の息遣いを感じながら隼斗は、少々気持ちの高まったまま、欠伸を漏らし、眠りに就いた。

「って、違うだろっ!？」

ガバツと隼斗が起き上がる。ライトオン、と同時に再び寝室に照明が付き、眩しそうに稲浪が目を開ける。

「なんじゃ？ 忙しないぞ」

「何で稲浪と一緒に寝てるんだ、俺っ!？」

何の違和感もなく、隼斗は稲浪の隣に入り、稲浪もまた違和感なく隼斗の寝るスペースのために体を端に寄せていた。

「何を言うか。昨晚も同衾したではないか」

「いやいや、同衾って……」

隼斗にはその意味が、アッチの方の婉曲表現を指しているようだが、稲浪にはその意味が、辞書通り、普通に男女が同じ夜具の中で一緒に寝ること。だと言う意味を取っているようだ。

「神子と寝るも、赫職の甲斐性じゃ」

あっさりと言い切る稲浪に、一人興奮した面持ちの隼斗は、傍か

から見れば少々馬鹿にも見える。

「女子おなこと寝たことはないのか？」

「いや、なくはないけど……」

「ならばよからう。じゃが、これよりの我以外と同衾は赦さぬぞ」

そう言うのと、稲浪は我は眠いのじゃ。邪魔するでないと言い残し再び目を閉じた。

「え、ちょっと、おーい？」

五秒も経っていないのに、稲浪は既に隼斗の声を聞いていないように、一定のリズムで呼吸を繰り返していた。

「ソファで寝るか……」

昨日は狐の姿だったから、気にもしなかったが、今日はさすがに、さあ寝るぞ、と言う気にはなれなかった。

「お？」

立ち上がろうとするが、途中で体が動かなかった。

「おいおい、マジかよ……」

狸寝入りをしている様子はない。本当に眠かったようで、乱れることなく呼吸のリズムが整っていく。それが就寝している何よりも証であり、隼斗が頭を掻いた。

「稲浪って、結構甘えん坊か？」

隼斗のシャツを掴んだまま安らかに眠る稲浪。起きている時の凛々しさではなく、表情自体は造形の良さから来る美人顔だが、その寝顔はあどけなさがあった。それを見て諦めたように隼斗がベッドに入り、少しだけ稲浪から距離を取るように、端の方で稲浪に背を向けた。

「静まれー、静まれー、俺え……」

隼斗は眠りに就くまで、隣から聞こえる息遣いと、香、温もりに呪文のように呟いていた。



## 六神噺 バイトと先輩

時刻は朝七時。今日は朝から引越しのバイトが入っている。未だ眠っている隼斗のために、そのことを知らせるアラームが鳴る。時代は進み、科学技術は進歩し、より良い環境化で生きるための設備が日々技術者、研究者などが切磋琢磨している。だが、それでも変わらないものもある。

「うゝ・・・・・・・・・・・・・・・・」

ピーとアラームが起床時間を指しながら鳴り響く。しばらくは鳴りっぱなしだったが、夢の中までその音色が響いてきたのだろうか。隼斗の表情が苦痛でも感じているように歪む。その隣ではアラームなどどうでも良いように、稲浪が安らかな寝息を立てていた。

顔と頭は眠っているが、腕だけが自我を持っているように動く。それに合わせて胴体、足、首、顔、声がのっそりとその手につられて動く。

「うううん・・・・・・・・・・・・・・・・」

慣れたように隼斗の手が横へと伸びる。ペンペンと何かを叩くように新たな動作が加わる。恐らくはアラームを止めようとしているのだろう。

ふに、といつもならカチツと固い感触と共にアラームが止まるが、今日に限ってやたらそのアラームが柔らかい。

「・・・・・・・・・・んだよお・・・・・・・・・・」

ペシペシ、と隼斗の手が何かを軽く叩く。いくら叩いても鳴り止まないアラームに、だんだんと腹が立ってきたようで、隼斗の手が勢いをつけるように天井高くに聳えた。

「うるせえっ」

パアンと音を奏で振り下ろされた隼斗の腕、高く挙げていた分、重力の影響を受けて勢いづいたその手は、見事にアラームを止めはしなかった。

「きゅんっ!？」

代わりに妙な声がアラームの中に大きく混じった。

「ん? . . . . . っ!？」

「な、なんじゃっ!？」

その声に目が覚めた隼斗が瞼を開けると、瞬間、全身が凍りついた。けたたましく鳴り響くアラーム。不意に感じた痛みに稲浪の目が瞬時に開く。

「. . . . .」

寝惚け眼だった隼斗が、パツチリと目を開き、稲浪を見ている。

その目は、やっちまったあーと、酷く後悔している目だった。

「隼斗. . . . .？」

稲浪が自分の顔に乘せられているものと、隼斗の怯えるような顔。それに稲浪が何かを空気をから読んだようだ。

「あ、お、おはよう、稲浪」

取り繕うに言う隼斗の挨拶は、震えていた。ピーとうるさいアラームを稲浪が手を伸ばし止める。すると訪れる静寂。微かな朝陽の明かりで、稲浪の口の端が上がる。そこには寝ていたあどけない少女のような表情ではなく、好敵手<sup>ライバル</sup>と対峙した時のような微笑だった。

「. . . . . 隼斗、我に何か恨みでもあるのか？」

「な、ないないないっ!」

ジンと感じる鈍い痛みに、稲浪は何をされたのか理解したのだろう。心地より眠りの中に突如訪れた頬を打ち付ける痛み。

「ほお? ないと言うに、我を打つか。なかなかない趣味をしているようじゃの」

艶のある稲浪の声。だが、隼斗は背筋を伝う冷や汗に、笑うしかなかった。

——パアアン。

「どうじゃ? 目は覚めたかの？」

「はい。覚めました。もうばっちり」

じんじんじんと感じる、遥かに自分がしてしまったこととは痛み

の違う痛み。涙目になっている隼斗。

「これからは、朝の目覚めはこれが良いか？　ばっちり覚めるであろう？」

「いえ、どうぞご勘弁下さい。寝惚けてたんです」

横になりながら、稲浪にヘコヘコと頭を下げる隼斗。それを横になりながら、うむ、と頷く稲浪。二人からすれば、普通に謝っているだけだろうが、横になっている時点でそれほど誠意を感じられなかった。

「じゃ、じゃあ、俺朝ごはんの用意するから」

「うむ。頼むぞ」

稲浪はもうしばらく横になるようで、隼斗が先に体を起こした。

「ぶっ！？」

起きようとする と 必然的に体を包んでいた毛布がずれる。その瞬間隼斗は思わず噴出してしまった。

「い、稲浪………」

「ん？　どうしたのじゃ？」

稲浪が隼斗を見るが、その視界が毛布に覆い隠された。隼斗が毛布をバツと稲浪の体にかけたのだ。

「な、何をするのじゃ」

「何を何も、稲浪っ、その格好は何だよっ？」

毛布がずれて現れた稲浪の寝姿。

「格好？　ん？」

稲浪が毛布を持ち上げ自分の体を見る。

「まくれておったか。どうりで、肌寒い気がしておったのじゃ」

毛布を捲った稲浪。そこには、ネグリジェが寝返りを打つ度に捲れ上がったのか、ほぼ上半身裸で、下着一枚の姿があった。昨日の既視感を思い出した隼斗には、朝から眼福以上の刺激があったようだ。

「これからは、それ、止めてくれ」

「何故じゃ？　これは肌触りも良く寝やすいのじゃ」

稲浪は散々隼斗に見られても構わないと言っていただけに、やはり気にしてはいないが、隼斗にはまだ割り切れていない部分があるようだ。

《いただきます》

朝のある意味情事未遂？　からしばし、ようやく落ち着いた朝の空気がリビングに漂う。

「何じゃ？　今日はやけに忙しいの？」

正面に座っている稲浪が、隼斗にもう少しゆつくりと食べ、と促す。

「時間がないんだよ。昨日飯を炊くの忘れてたから、余計に時間食ったしな」

ぱくぱくと次々と、ご飯おかずおかずご飯味噌汁の繰り返しで隼斗が箸を運ぶ。時間は既に八時三十分過ぎ。バイトの出勤時間は九時十五分。ちなみにバイト先までは電車で約三十分。そろそろ出る支度をしなければ遅刻。接客業のようにすぐに取戻しが出来るわけでもなく、遅刻すれば、次の担当に回されるか、今日一日は欠勤扱いされることもあり、隼斗は急いでいた。

「ごちそうさんっ」

稲浪がまだ半分も食べていないうちに、隼斗が、日々の命に感謝する気もなく手を合わせる。

「人間は忙しいものじゃな。ゆとりを持つことを知らぬのか？」

とりあえず自分の分だけ先に食器を洗い、身支度を整える隼斗。それを呆れたように見ながらものんびりと朝のニュース番組を見ながら、稲浪が朝食を取っていた。

「あ、稲浪。昼はとりあえず、おかずは作ってるし、ご飯と味噌汁は余ってるから、それを食うか、適当に好きにしろといってくれ」

「うむ。そこまでせずとも我一人でも大丈夫じゃが、了承した」

何だかんだ慌てつつも、隼斗は稲浪のことも考えていたようで、稲浪も感心していた。

「じゃ、俺行くから、琴音さんの手伝い、ちゃんとやってくれよ」

カバンを肩に掛け、隼斗がドアノブに手をかける。

「任せておけ。じゃが隼斗。汝も神子には気をつけよ」

「は？」

車に気をつけろ、などなら子供じゃないんだから、と笑ってそのまま出ていただろうが、稲浪の言葉に隼斗が首を傾げる。

「神子は神子同士で闘うが義じゃ。じゃが、中には赫職を襲う神子も居る」

稲浪がそう言うのと、隼斗の腕に目を向ける。その視線に隼斗も自分の腕を見る。

「我ら神子は赫職と契ろうとそうでなかうと、この社会に解放された時から、基は敵じゃ。中には赫職を倒すことで、その神子を手中に収めようと言う輩も居ると姉上が言うておった。用心するに越したことはない」

隼斗の手の甲には、ハッキリと刺青のような模様があった。何も知らない人間からすれば、刺青やファッションの一部にしか認知されないだろうが、神子や同じ赫職紋を持つ赫職にしてみれば、その紋で創生に参加しているか否かの判断材料になる。稲浪はそれを警戒しろと言っているのだろう。

「大丈夫だ。仕事中は軍手をしてる。バレはしないだろ」

「じゃが、油断はするでないぞ」

「ああ。それじゃ行ってきます」

隼斗が稲浪の忠告を受けながら、家を後にした。

「何事もなければ良いのじゃが……」

稲浪の吐息が立ち昇る味噌汁の湯気を揺らめかせた。

「おはようございます」

満員電車で揺られ、NBSビルを眺めながら隼斗はギリギリに到着した。

「隼斗、さつさと支度して来い。出発すんぞ」

「あ、はい。すぐ行きます」

奥の更衣室で作業着に着替えると、休む間もなく隼斗は今日の仕事に借り出された。

「珍しいな、お前が遅刻ぎりぎりに来るなんて」

話しかけてきたのは隼斗と先輩である湊川昂さん。みなとかあはる名前だけで見れば、音楽でもやって、二枚目の少し謎を含む良い男っぽさを感じさせる。

「いえ、ちょっと、色々ありまして……」

だが、隼斗の隣で車を運転している男。さすがは運送業に携わっているだけあって、体つきがごつい。二枚目には見えないこともないが、どこか違う顔。無精ひげを蓄え、あまりやる気を感じさせるような目じゃない。

「女か？」

「え？ いや、えっと、うーん……」

そう言われると、返事に困る。女であることは確かだけど、女じゃないと言えば女じゃない。でも、女。考えれば考える程、今置かれている状況を昂さんに説明出来ない。

「んだあ？ ハッキリしねえ奴だな」

「あはは……」

守秘義務のこともあり、無関係の人間に素直に事情を話すわけにもいかず、隼斗は苦笑するばかりだった。

「ところで、今日の現場は？」

隼斗が話題を持ち替える。

「今日は孤児院だ」

「孤児院、ですか？」

信号に捕まり、トラックが止まる。隣には無人バスと行き先を告げると、各タクシー会社の中央情報センターからの情報で勝手に走ってくれる無人タクシーが並ぶ。今じゃ徐々に無人化が進んでいるが、それでもまだまだ車などの移動機関は人の手が多いほうであっ

た。

「新しく出来るんだと。昨日までに大方の搬送は終わったが、残りの分だ」

「珍しいですね。この辺りに孤児院が出来るなんて」

大府大阪の中心区梅田。かつては西日本の中心的都市だったが、今じゃ日本の中心都市だ。昔と変わらないのは、鉄道や航空関係の施設で他は大阪湾に完成した各省庁施設や国会議事堂が新しいが、梅田で何より変わったのは、NBSLのビルが建ったこと。町の様子がそれに合わせるようにガラッと景観が変わった。

「全国から人間が集うからな。子供見捨てる親も居るんだろ」

あまり興味無さそうに昴がトラックを走らせる。

「子供、可哀想ですね」

世辞のような隼斗の言葉。自分は家族が居るから、そういう子の事情や心情を酌むことが上手く出来ないようだ。

「そうでもないぜ。孤児院を仕切ってるのが、べっぴんだからな」  
ありゃ、良い女だぜ。と昴がにやける。

「べっぴん、ですか」

今の隼斗には、それがどれほどのものだか、上手く想像出来ない。元々は基準は低いほうだったが、稲浪と出会い、その基準が大きく変わった。街行く女性に昴が、良い、と目星をつけても、隼斗には、基準が稲浪であるため、そうでもないようにしか見えなかった。

「あれ？ 昴さん」

「あん？」

声だけ隼斗に向ける昴。

「その首の刺青、いつ入れたんですか？」

「ん？ ああ、これか。こりゃ刺青じゃねえよ」

不意に隼斗が昴を見て気づいた。今までは何ともなかった昴の首に刺青のようなものが出ていた。

「そうなんですか？」

「こりゃ、お前のそれと一緒にだ」

昴が前を向いて運転したまま、隼斗に言う。

「えっ？」

その言葉に隼斗が自分の腕を反射的に見る。

「赫職紋だろ、お前のそれも」

「なっ！」

昴の言葉に隼斗の目が大きく開く。

「お前も巻き込まれちゃったんだなあ」

「しっ、知ってたん、ですか？　ってか、昴さんもっ！？」

家を出る時、稲浪に他の赫職にも注意せよ、と言われていた直後に出会った新たな赫職。しかも、自分のバイト先の先輩。隼斗は動揺を隠せないようで、ひたすら驚いていた。

「あー、心配すんな。俺は、契った神子にも赫職にも興味はねえ。別にやることあるからよ。襲ったりしねえから安心しな」

ぶつきらぼうに言う言葉に、隼斗は驚きながらも順応していた。

「他にやることですか？」

隼斗がバイトに就いて以来面倒を見てくれる昴。冗談は多いが嘘は言われたこともないためか、その言葉を素直に受け入れたようだ。

「ま、お前には関係ねえことだ。お前はお前の神子と適当にやっつけ」

昴が笑う。

「な、何をですかっ！」

「何をつて？　そりゃあ男にやナニがついてんだから、それをだ。

良いか？　この国を生み出したイザナギとイザナミは鵺鴿の交尾を見てヤッタんだ。同じことだろうが」

その笑いに、ただ新神話の創生をしろと言っているわけじゃないことは隼斗にはすぐに分かった。

「で、お前の神子ってどんなだ？　女か？　男か？　いや、さっきのこともあるから、女だろ？　しかも、あれだけごまかしたんだ。良い女なんだろ？　紹介しろよ。ってかやらせろ」



「だ、ダメにきまつてるじゃないですかっ！」

獲物を待つ獣のような雰囲気、隼斗は断固拒否していた。そんな冗談と分かり合えるやりとりをしているうちに、トラックが停車した。

「ここですか」

「おら、ぼさつとしてないで、働け」

仕事モードに切り替えると、二人は話を区切り働き出した。

「あ、はいっ」

一階建ての平屋のようだが、元々は家じゃないような造りで、太陽の丘、と手作りらしい温かみのある看板があった。昴は先に搬送の連絡にでも行ったようで、隼斗がトラックの荷台から、荷物を降ろす準備をしていた。

「隼斗、挨拶しろ」

建物から戻ってきた昴が女性と共にトラックに来る。

「あ……」

隼斗が昴ではなく、女性を見て声を漏らす。

「初めまして、如月こはくと言います。今日はお願いしますね」

優雅で上品な笑みを浮かべる。荷解きがあるからか、黒髪をポニーに括り、大した格好ではないが、それでも稲浪の気高き気品のある雰囲気とはまた異なる、安らぎの温もりを感じさせる大和撫子のような雰囲気があった。

「は、はいっ。風祭隼斗です。今日はよろしくお願いしますっ」

軽く挨拶を済ませると、先日までに届いた荷物の整理にこはくが戻り、隼斗と昴は早速荷下ろしに取り掛かった。

「どうだ、美人だろ。ありゃ」

「そ、そうですね。確かに綺麗な人ですね」

高くなっていた隼斗の基準にも十分に満ち足りるほどで、稲浪にも引けを取らないように思えた。

「あれが園長なんだからよ、全く、ここで暮らすガキが羨ましいぜ」  
昴の言うことに、隼斗も思わず頷いた。様々な事情で預けられる

子供たち。心だけじゃなく体に傷を負っていることもざらじゃないが、それでもこはくがこれからの面倒を看てくれるとなると、羨望が湧くことも否めなかった。

そんなことを話しながらも、二人は慣れた手つきで机やテーブル、棚などを運び入れる。

「もう、入園者は決まってるんですか？」

トラックから全ての荷物を降ろすと、人手が足りないため、二人も荷解きを手伝う。だが、若干昴は面倒臭くなったようで、隼斗に回される仕事が多くなっていた。

「ええ。明後日には二人が来る予定で、その後は希望や相談所からの紹介があれば、と言うことになっているんです」

不躰な問いにもこはくは表情を変えることなく答える。

「ここは、お一人で経営というか、やられるんですか？」

先ほどからこはくと隼斗、昴の三人だけ。他に職員らしい姿はどこにもなかった。

「それほど多くの子供を預かるわけじゃないですから、私一人で十分だと思って」

「まあ、人手が要りそうになれば、こいつを使ってやってくれて構わないぞ」

家具の設置をしていた昴が、隼斗の首に手を回してくる。

「えっ？　ちょ、昴さんっ!？」

「まあ、良いんですか？」

昴の言葉にこはくの表情が嬉しそうに輝く。

「ああ。使ってやれ。こいつ、最近調子乗ってるから、何させても良いぜ」

につこにつこな少々気色悪い笑みを浮かべて昴が隼斗をこはくに売る。どうやら、さきほどの稲浪を紹介しろと言うことを拒否されたことへの仕返しなのだろう。大人気ないが、本当に人手不足なのか、こはくは助かります、と隼斗に微笑む。

「もう、何でもしますよ……」

こはくの笑みに照れながら、押し負けるように隼斗苦笑した。

「ありがとうございます。風祭さん」

まあ、こんな人と仕事出来るなら、良いか。

すっかりこはくの笑みの虜になったようで、気合を入れなおすと隼斗は俄然やる気を出していた。

「単純だろ？ あいつ」

「ふふっ、可愛いじゃないですか」

その様子に昴とこはくが少しだけおかしそうに微笑んでいた。

## 七神嘶・稲浪とつばさ

「琴音。手伝いに来たぞ」

「あ、稲浪さん。ありがとうございます」

昼を過ぎ隣が騒がしくなった頃、稲浪が大郎の送ってきた、少々派手で露出の多い服を身につけて琴音の部屋を訪れる。どうやら、神子にはそれぞれの戦闘服のようなものがあるようで、琴音は稲浪を見ても、特に驚く様子もなかった。

「げっ、オバサンっ！」

昨日のことが記憶に残り、琴音と隼斗が手を結んだことを知らずに眠っていたつばさ。突然の稲浪の訪問に、つばさが稲浪を睨みつける。

「ダメよ、ツーちゃん。稲浪さんは私たちの味方なの。闘いはしないのよ」

「え？　そ、そうなの？」

「そうじゃ。我は汝らを倒すつもりはない」

稲浪が小さく笑う。琴音の顔色を見ても、本当のようで、つばさが表情を戻す。

「じゃ、じゃあ、何しに来たんだよ。オバサン」

それでも警戒は解かないようで、琴音を庇うように稲浪を見る。

一方の稲浪は、既に二回もオバサン呼ばわりされて、ヒクヒクとこめかみと眉が動いていた。

「ツ、ツーちゃん！　ダメよ。ちゃんと稲浪さんと呼びなさいっ」

稲浪の放つ雰囲気を一瞬早く察知した琴音がつばさの口を塞ぐ。

「……………気にするでない。我は寛容じゃ。小童の戯言など気になどせぬ」

そうは言うが、つばさを見るその目は、昨日と同じ目でつばさを見つめ、その稲浪の青く酷く冷たさを感じさせる瞳に、口をふさがれながらもつばさが何かに頷いていた。

「さて、我は何をすれば良い？」

既に荷物の搬送は済んだようで、後は箱の整理やらをするだけのようだった。

「それじゃあ、この箱の服をこっちの戸棚に仕舞っていただけですか？」

「うむ。任された」

琴音の服の入った箱を受け取った稲浪が、タンスの棚に入れていく。そこはやはり男とは違うようで、季節物と日常物などを稲浪もきちんと考えて仕舞っていた。

「稲浪」

「何じゃ？ 小童」

「俺は小童じゃない。燕子つばさだ」

突然つばさが稲浪の背後に立つ。稲浪は神子服だが、つばさは琴音の用意したような子供服を着ていた。

「そうじゃったな。つばさ、何用じゃ？」

つばさが稲浪が何を考えているのか模索するような目でじっと見ってくる。琴音はリビング辺りで片付けをしているようで、食器の音などが聞こえていた。

「お前と、お前の赫職が何を考えているのか知らないけどな、琴音は俺が守るんだからなっ」

意を決したようなつばさの言葉に、稲浪が呆氣に取られる。

「ふふっ」

「わ、笑うなっ」

稲浪が豪快に笑いだし、それに羞恥したのかつばさがむきになって吼える。

「つばさ」

「な、何だよ………？」

突然笑いを止めた稲浪が真剣な表情でつばさを視界に捕らえる。

「我は隼斗と契った。故にこの命、赫職のためにここに在る。隼斗に危害を為す神子があらば、我はそれを滅す。それが我が赫職との

命約じゃ。隼斗に危を成さぬ者には、我は手を出さぬ。琴音とは隼斗が仲を括った。故に我は琴音の保全もその命約にある」

「・・・・・・・・・・」

「ただ、契ったからとそれに囚われていては、何も守れぬぞ。もとより我らと人間とは相容れぬ異なる存在じゃ。それを会長の手により、こうして人間社会に居ることが出来る。じゃが、我らはそのために闘わねばならぬ。赫職となった人間には、神子より命をも狙われる。我らはそれより赫職を守ることも定めじゃ。己の力を過信したお主は、まだ甘い。故に我はここに居るのじゃ。琴音を取ったりはせぬ。我は既に隼斗のものじゃ」

言葉が難しいのか、自分の考えていることよりも遥かに大人な考えを持つ稲浪に圧倒されているのか、つばさが口を小さく開けたまま黙る。

「つばさ、貴様はまだ高天原寫を出るには早い時期にここへ来た。琴音に出会う前に、闘う術もなしに、何者かと闘って惨敗を帰したのであろう？」

「っ！」

琴音に聞いた話だが、つばさはその場にいなかったため、何故稲浪がそのことを知っているのか、と驚いたように見る。

「燕子は元なら、創生には加わるだけの力はない」

「あ、あれは、本気出してなかったんだよっ！」

不服そうにつばさが言い返してくるが、稲浪は頷くだけだった。

「ほ、本当なんだからなっ！」

「生憎じゃが、我も本気ではなかった。その我に一撃も与えられない貴様が本気を出したところで、たかが知れておると言うものじゃ」

「っっっ！」

凶星を突かれたようで、つばさが握りこぶしを浮かべ悔しそうに稲浪を見る。言い返さない辺り、自覚はあるようだ。

「じゃからこそ我がここに居ると言うておろうが。焰に慣れておらぬ貴様は、白狐の敵ではない。じゃが、我に出来ぬことも貴様は持

ち合わせておる」

「？」

怪訝そうな表情を浮かべたままつばさが小首を傾げる。

「神子には様々がおる。無鉄砲に力を使うものも居れば、策略を立て、自らは最低限しか動かぬものも居るじゃろう。我は姉上のように画策を練るのは苦手じゃ。故につばさ、貴様の力が役に立つこともあるのじゃ。それを見越してかは知らぬが、隼斗と琴音は仲を括った。我らは敵ではない。それを覚えておれ」

つばさは完全に稲浪に吞まれ、呆然と聞入っていた。

「お、俺に出来ることって、何だよ……」

「それはいずれ分かろう。今は今するべきことをするのじゃ先決じゃ」

未だに多くが積まれ、未開封のダンボールの数々。稲浪に任せられた箱も三つほどあり、つばさに話しながらもその手は止まることなく、次々と片付けていた。

「ともかく、我は隼斗を優先する。その間に琴音の身に何かあれば、つばさが守るのじゃ」

「どうかしました？」

つばさの声を聞きつけてか、琴音が顔を出す。

「いや、何でもない。神子としての役割の話をしておったのじゃ」

「そうなの？」

特に気にしたようではないが、琴音が二人を見る。

「う、うん。何でもないよ」

「？　そお？　それじゃ、ツーちゃん、ちょっと手伝ってくれる？」

「分かった」

つばさが琴音と共に寝室を出て行く。

「ふっ、小童もまだまだじゃな」

一人稲浪が琴音には従順なつばさに笑みを浮かべていた。

「ん？　隼斗……」

琴音の服を仕舞っていた稲浪が何かを感じたのか、胸元を露出し

た神子服から見えている赫職紋に手を当てた。

「何じゃ、このざわめきは？　・・・・・・・・っ、まさかつ！」

稲浪がバツと立ち上がり、琴音とつばさを呼んだ。



八神嘶……誰？

「お先でーす」

孤児院への仕事のほかにもう一軒の仕事終え、隼斗が事務所を後にする。昴はまだ終わらないようで、その姿はなかったが、定時を過ぎたため隼斗は次のバイトへと向かっていった。

「さすがに、掛け持ちするわけにはいかないよなあ」

稲浪が来る前は、このまま夜間のバイトを入れていたが、稲浪が来て夕食の支度やらを外すことも出来なくなり、隼斗は牛丼屋のバイトを辞めることにしていた。

「ま、これもあるし、生活には困らないよな」

カバンの中に仕舞ってある、この歳には不相応な通帳。隼斗にとって宝くじが毎日当たっているような高揚感を感じさせ、周囲の人間の目が自分を狙っているような緊張感も感じさせる、人生を変えることの出来る額を記された通帳。だが、隼斗はそういうことに関しては堅実なのか、小心者なのか、自由に使う気になれず、最低限の日常生活での不足分を補う形でしか使用してはいなかった。

「とりあえず、荷物を片付けて夕飯の材料買って帰らないとな」

引越し業のバイトの休憩時間に、牛丼屋にはバイトを止めることの連絡は入れていた。バイトの身だからか、あっさりと認められ、先週分までの給与の受け取りと、荷物の片付けに顔を出した。

「でも、寂しいねえ。君が辞めちゃうと」

「すみません。色々と事情がありました」

口には出せないことに、店長は、ため息を漏らしながら、隼斗に給料を払った。

「また必要になればいくらでも来てくれよ。君は見込みのあるバイト君だったんだから」

「あ、はい。その時はまたお願いします」

お互いに社交辞令で簡単に話を終わらせると、隼斗は店を後にし

た。

「さて、帰るか」

カバンを肩に掛け、駅へ向かう。仕事終わりの大人から、学生まで様々な人間の中に隼斗も紛れ、住宅街の傍を通る。

「ん？ 何か光った………？」

横目に一瞬感じた光。微かに感じる空気の振動に、隼斗は妙な気配を感じ、注意しながらその気配のした方へ向かった。

「まさかな………」

近付くにつれて感じる、嫌な気配。微かに感じるは人外の力のよ  
うな、自然の力のようなもの。住宅街の外れにある、取り壊しが決  
まって静まり返っている廃墟ビルに、隼斗の足は、野次馬根性でも  
湧いたように向かっていった。

「にしても、まさか三人目の赫職が昴さんだったなんてなあ」

一昨日の夜に稲浪と出会い、翌日には琴音とつばさとの出会い、そ  
して今日、バイト先の先輩である昴が赫職だと言うことを知った。稲  
浪や琴音さんの話から日本には計百人の神子がいると聞いた。昴  
の神子に関しては何も聞いていないが、少なくとも、稲浪の姉を含  
め、四人はこの大府大阪に居ることが分かった。所長の大郎の言う  
闘い抜くことが、創生と言うことなら、謂わばトーナメントのよう  
なものなのだろう。

「昴さんの神子って、どんな人なんだろう？」

自分は白狐、琴音さんは燕子、稲浪のお姉さんは九尾。稲浪は物  
の怪の類のようなものが神子だと言うからには、やっぱり昴さんの  
神子も人間じゃないってことなんだろうな。

「おわっ！」

突然隼斗が何かを感じ、身を振じらせる。すると、隼斗が立って  
いた地面が、地割れでも起こしたように盛り上がり、割れた。

「な、何だ………」

突如アスファルトの地面をも容易く盛り上げた、謎の地割れに隼  
斗が周囲を見回す。

「あん？ 人間？」

「え？ あっ……」

隼斗が廃墟ビルの方に目を向けると、そこには三人の姿があった。二人は女、でいずれも稲浪のような少々派手にも思える服装で、一人は土の色のような黒っぽいゴシック系の装束で、もう一人は胸元まではだけさせた、白無垢のような和服に近い格好をしていた。

「やばっ、赫職と神子かっ」

慌てて隼斗がビルを取り囲む工事壁に身を隠す。稲浪に言われていたことを思い出したようで、思わず隠れた。琴音とは仲間と言うことで敵対関係はなく、昴も自ら隼斗に手を出すことはしないと宣言した。だが、稲浪には他の赫職を持つ神子には十分に注意をするように喚起されていた。命にも関わるということで、そのことを思い出した隼斗が身の危険を感じ己を隠した。

「どうすんのよ？ 見られちゃってるわよ？」

「守秘義務があんだろ？ だったら先に始末しろ」

「はいはい」

黒服を着た女が面倒そうに返事をする、対峙していた女に待つように声を掛ける。

「おい、そこのお前」

「っ！」

壁の向こうから聞こえる男の声。やりとりを聞いている限り、この男が黒服の神子の赫職らしい。

「え、えーと……」

あ、あはは……、と、つい見ちゃいましたあ的な苦笑いを浮かべながら隼斗が壁から顔を覗かせる。

「今の見たろ？」

「へ？ あ、はい。で、でもっ、俺口堅いんで誰にも言わないですっ」

言い訳をするように隼斗が三人を見る。手前に二人、その奥に一人の女が居る。その奥の廃墟ビルが、不自然に窓や鉄骨、壁などが

損壊している辺り、先ほど隼斗の傍を走った地割れはやはり神子同士の戦闘の余波だったようだ。

「悪いな。てめえにや恨みはないが、これは知られちゃまずいんでな。死んでもらうぜ」

不良のような井出達の男。センスのないだらけた服装に、茶髪にピアス。目下にある刺青のようなものが、この男と隣の女の契約である赫職紋なのだろう。神子が闘っているというのに、呑気に煙草なんか蒸かしている。

「やれ、エン」

「はいよ。あたしを恨まないでくれよ」

女が隼斗に向かって腕を大きくしたから振り上げる。すると、先ほどのような地割れが隼斗に向かってモグラが大地を抉りながら向かってくるように走ってくる。

「うわっ！」

隼斗が慌てて横に飛ぶ。それと同時に隼斗の足元を大きく盛り上がった土の棘柱が、幾重も飛び出す。隼斗のズボンの裾を棘柱が掠り、弾けるように破れた。

「な、何だっ？ 今のっ？」

冷や汗を流しながら、隼斗が自分の立っていた場所に目を向ける。大きく突出した土の棘柱。刃物のような鋭さで、隼斗のズボンも破れた。

「死ぬ前なら聞いてて損はねえだろ。こいつは神子つつつてな。トオンのエンってんだよ」

「トオン・・・？」

新たな神子の情報に隼斗がエンを見る。相手の男は隼斗が赫職だと気付いていないようで、警戒もすることなく、自分の神子のことを話す。

「まあ、災難つつーことで、終わりだ」

隼斗の周りを取り囲むように、エンが腕を振るうと、土柱が壁のようにならびに盛上がる。逃げ道をふさがれ、隼斗が焦燥と恐

怖に駆られる。

「あばよ」

エンが隼斗にそう言いながら、手を翳す。すると、エンの背後から土の竜のようなものが二本地面から立ち昇り、隼斗に向かって蛇のようにうねりながら向かってくる。

「うわああああっ！」

逃げ道もなく、対抗する術を持たない無防備の隼斗は、殺されると言う、たった一つの意識に囚われ、両手で顔を庇うような仕草でみを縮こませるしか出来なかった。

（稲浪ツ……！！）

心の中で、隼斗が稲浪の名前を叫んだ。

ボオオオオン、と土が何かに勢い良く衝突した音と、土埃、土の匂いが辺りに漂う。

「あ……れ……？」

隼斗に向かっていた土の竜の衝突音と、それに合わせて恐らくは砕けたであろう音と匂いが隼斗の鼻につくが、どこにも痛みは感じなかった。

「大丈夫ですかあ？」

桜模様の施された着物姿で、少しばかり長い裾が風に靡いた。

「へ？」

不意に聞こえた不相応なやたらものんびりした声。女性の声だ。

「何っ！？」

エンが驚いた声を漏らす。一撃必殺のつもりだったようで、無傷で立つ隼斗と、その前に立つ女に思わず動揺の表情を見せた。

「あっ、てめっ、待ちやがれっ！」

土埃が夜風に流れていくと、男が背後の廃墟ビルの方に叫ぶ。先ほどまでそこにいた神子らしき白服の女が、ビルの鉄骨や割れた窓辺を利用して軽やかに空へと跳び、その場から逃亡していった。

「あら、逃げられてしまいましたねえ」

その様子に隼斗とエンの間に立つ、女が気が抜けそうなのんびり

声で、逃げた女を見送る。逃げられたと言う割には追う様子もなく、隼斗に振り返る。

「お怪我はありませんかあ？」 風祭さんく？」

「へ？ あ、は、はい。大丈夫、みたいです……」

「そうですかあ。それは何よりですう」

うふふ、と急いでいる時には腹が立ちそうな間の抜ける声に、隼斗も困惑の表情を浮かべる。

「ちっ、逃げられたか。まあいい。エンそいつらをぶっ殺せっ！」

「あんた、その腑抜けの神子かい？」

エンの赫職の男が、どうやら赫職なしの契っていない神子を手中に収めようとここまで追い詰めていたようで、逃げられたことを隼斗と、その前に立つ女のせいだと言わんばかりに逆上したのか、神子に二人を倒すように命じてくる。

「いいえええ。私の赫職様は昂様わたくしですよ」

「え？ 昂……」

女の言葉に隼斗が声を漏らす。その声に、隼斗の視線がその女にだけ向く。

「赫職でもない人間を庇って何になるんだい？ 邪魔するなら、あんたを高天原に送り返すよ？」

エンが両手を胸元に持ち上げると、それに合わせるように、先ほど隼斗に襲ってきた土の竜を生み出す。

「無関係な人であるなら、私は干渉いたしませんがあ、風祭さんはあ、昂様のご後輩とのことですからあ」

のーんびりとした口調に、エンが苛立ちを感じているようだ。

「あー、もうっ。何なのよ、あんたっ。そのろまな口調はっ！」

「そう言われましても」

後からは黒髪の長髪が街灯に照らされ、天使の輪を作り出している。その耳付近は寝癖のようにぴょんと両方跳ねて、犬や猫の耳のように見える。

「エンっ、いつまで戯れてやがるっ。さっさとやっちまえっ！」

痺れを切らした赫職の男が、煙草を投げ捨てる。

「分かってるわよっ、うっさいわねえ」

エンが男に向かって言い返す。

「風祭さん、しばらくそこから動かないで下さいねえ？」

「え？ あ、はい……」

一人状況把握が追いついていない隼斗。自分の命が狙われているにも拘らず、その空気をかき乱すように現れた一人の神子。彼女の口からは赫職は昴だと出た。そして、彼女は隼斗のことも知っていた。後輩だというからには、漠然とだが、隼斗は彼女がもしかしたら、昴の神子なのではないかと言う思いが強かった。

「二人して散りなっ！」

エンが両手を横に広げ、土の竜が二匹大きくうねる。そのままエンが両手を二人に翳すと、合図のように竜が二人に向かってくる。

「うふふ、怖い顔ですねえ」

隼斗はすっかり場に吞まれていたが、昴の神子らしき女は余裕の表情でエンに微笑んでいた。

「わあああっ！」

宙を蛇のように土の竜が女に襲い掛かってくる。

「なっ!？」

ぎゅっと目を閉じた隼斗の耳に、赫職の男の声が入ってくる。それと同時に先ほどと同じように土埃と衝突音と匂いが再び辺りを支配する。

「そんな攻撃ではあ、私の守りは壊せませんよお」

うふふ、と女が微笑む。

「な、何、これ……」

恐る恐る瞼を開いた隼斗が周囲の様子に戸惑いにも似た声を上げる。

「あたしの土竜どりゅうを防いだってっ!？」

エンが驚愕の声を漏らす。

「甘いですよお。それくらいで粹がられてもお」

のんびりとした口調でも、少々毒を含んでいる。だが、ほんわりとした雰囲気、その毒の効果もいまいちだった隼斗とエンと赫職の男は、目の前に広がっている光景に哑然としているが、昂の神子らしき女だけが場違いなおっとりした口調で佇んでいた。

「な、何だ、お前、それ……」

赫職の男とエンが女を目を見開いてみる。土埃が晴れると、そこには淡い光のベールのようなものが女と隼斗を取り囲んでいた。

「うふふ、もう終わりですかあ？」

男の問いに答えることなく、女がのんびりと笑う。

「エンっ！」

「そう大声出さなくても聞こえてるっつーの」

エンが男に呼ばれ、男の元へ戻る。

「おや、あれをしますかあ？」

微笑みながらも、微かに女の放っていた雰囲気が変わる。隼斗は周囲の何が起こったのか分からないことに囚われ、気づいてはいなかった。

「あれ？」

「赫職と神子にはあ、契りを結んでいない神子とは異なる力が宿るのですよお」

女の言葉に隼斗が意外な事実に驚いていると、エンと男が二人の目の前で口付けをかわす。すると、エンの足元を中心に光が四方八方に掛けぬける。

「んっ……」

「さっさと奴らを片付けろ」

ふん、と男が二人を見て鼻で笑う。相当な自信があるようで、エンの表情も先ほどとは少々異なり、自信に満ちていた。

「あんた、最後に聞いとくよ。名は何てんだい？」

エンが女に向かって問いかける。神子同士の戦いの中で名告<sup>なのも</sup>ことは礼儀のようなものなのだろうか。隼斗はただ空気に吞まれ、呆然とするしかなかった。



「あたしは……」

「結構ですう、あなたには枝毛ほども興味はございませんのでえ」

女がエンが自己紹介しようとするのを止める。のんびりとした口調から吐かれる毒に、エンが眉間に皺を寄せる。

「良い度胸じゃないか。これを喰らってもそんな余裕あるのかいっ」

エンが両手を空に翳すと、先ほどは二本だった竜が、エンの周りに無数に現れる。

「これが、あの人の力？」

「そうみたいです。開紋は赫職との相性と、赫職の持つ潜在能力を反映してえ、神子の能力が上がるんですよ」

先ほどとは明らかに異なる雰囲気のエンを前にしても、女はのんびりとあくまでもマイペースを貫く。緊張や焦燥、恐怖が漂う現場にも拘らず、たった一人のマイペースな毒吐きに、掻き乱され、隼斗は困惑するばかりだった。

「その口調がむかつくんだよっ！」

エンが大きく振り上げた腕を女に向かって翳す。周囲を土壁に覆われ、逃げ道を封じられた隼斗は逃げるにも、前にはエンと赫職の男と、その前には突如現れた自分を知る女がいて、逃げられなかった。

大地をうねらせながら、幾つもの竜が襲い掛かってくる。夜間のため、それなりに音が響くが工事壁に覆われているせいか、他の一目についていないようで、誰もその場に気づいてはいなかった。

「あらあら、野蛮ですなえ」

上下左右から襲い掛かってくる土竜に、まったく驚きも慄きもすることなく、女が手を目の前で重ね合わせる。

「龜壁きしやう」

女が竜に向かってそう言うと、隼斗が意味が分からないように首を傾げる。だが、その言葉と同時にエンの放った幾つもの土の竜が女に一斉に降りかかる。

「あっ！」

隼斗が声を上げるが、四方から降りかかった土の竜の中から朗らかに聞こえる声が聞こえる。

「こんなものですかあ？ 貴女のお力はあ？」

土の竜の隙間から淡いピンクの光が空気を切るように夜空に輝き出てくる。その次の瞬間、女を襲い掛かった土竜が一瞬にして弾け飛ぶように元の土と化し周囲に大きく散った。

「なんだとっ！？」

「ほんとに大したことないですねえ」

「ちっ！」

それに男が大きく目を見開く。あれで倒したつもりだったのだろう。だが、それをなんら先ほどから変わらない様子の女が容易く打ち破った。

「うふふ。随分と舐められたものですねえ」

「あ、あ……」

穏やかな口調で、微笑を浮かべる女。その様子に啞然とする男と隼斗。

「おやあ？ 神子の姿がありませんねえ？」

一様に啞然とする中、女が不思議そうに唇に人差し指を当てながら首を傾げる。

「どこ見てんだい？ あたしはこっちだよ」

ボゴオオオン、と轟音と共に、隼斗の視界が土埃に包まれる。女の足元が急激に隆起し、下から土の竜を纏ったエンが女の足元から一気に空へと駆け登った。大地が大きく揺らぎ、隼斗も視界を圧迫する勢いに背後の土壁に仰け反った。

空へと駆け登ったエンとその体を取り巻いていた土の竜が、上空から穴を掘るように地面に舞い潜った。

「なっ……え？」

エンがその竜と共に地中に潜ったが、やがて男の傍に土を彫り上げるように地中から姿を現した。

「これで終わりだよ」

エンが誰にでもなくそう言うのと、その場にいたはずの女の姿がなく、突然空から何かが落ちてきた。風と土埃を巻き上げ落ちてきたのは、女だった。

「あれは囧でしたかあゝ。少々油断してしまいましたねえゝ」

「なにっ!？」

「なんでっ!？」

土埃の中から、やはり何も変わらないトーンで女の声が漏れる。

パンパンと汚れを払う音と共に、女が姿を現す。

「でも、困りましたねえゝ。ましてちゃんがないとお、私攻撃出来ないますよおゝ」

「へ？」

女が仰け反った沖おいで倒れた隼斗へ歩み寄り、手を差し出してくる。すみません、と隼斗がその手を掴み、立ち上がる。

「実は私ゝゝ。守護には自信があるのですがゝ、攻撃する術はないんですゝゝ」

困りましたあ、このままでは埒が明きませんねえゝ、と女が困った様子を見せることなく、そう言った。

「こ、攻撃は出来ないんですか？」

「私は防御しか出来ませんのでえゝ」

ううゝん、どうしましょおゝ、とのんびりと小首を傾げる女。その向こうでは、二人にしては結構な技だったのだろう。だがそれを以っても女は傷一つついていない無傷で、呆然としていた。

「隼斗っ!」

「え？」

だが、そんな空気を一気に切り裂く声と共に、隼斗の視界が青い熱に染まった。その声に反応した女が空に向かって手を翳し、淡い光が隼斗と女を包み込み、光と轟音だけが隼斗の目に眩しく輝いた。

## 九神噺！最強神子の手のひら（前書き）

遅くなりましたが、ようやく更新再開しますっ！

他の作品も合わせて評価をいただけると意欲を掻き立てられますので、厳しい意見の方が嬉しかったですので、よろしく願います！

## 九神嘶！最強神子の手のひら

「貴様かつ！ 我が赫職を貶める輩はっ！」

聞き覚えのある声に隼斗が空を見上げる。そこには、元々ミニだったスカートと、後から足を隠すようなマントを纏った衣装。上半身は捲れ上がったスカートで隠れているが、肝心の下半身が風で大きく捲れ上がり、下着を丸出して、夜空から勢い良く舞い降りるというよりも、落ちてきた。

「稲浪っ！」

その瞬間、隼斗の表情に光が宿った。

「違いますよぉ。勝手な憶測で悪者にしないで下さいね」

落ちてきた稲浪がキッと女を睨みつける。女が勘違いをされたように、頬を膨らませながらのんびりと反論する。

「ならば、何故密着しておるっ！ 隼斗っ！ その神子から離れようっ！」

どこか私情を挟んでくる稲浪。稲浪にはエンではなく、この女が隼斗を襲っているように思ったのだろう。先ほどの焰も、女が防御壁を張らなければ、隼斗をも飲み込み、その狙いは明らかにエンと赫職ではなく、女を狙っていた。

「お、落ち着け、稲浪。敵はこの人じゃない。あっちだ、あっち」

隼斗が指を指した方に稲浪が振り返る。その目に驚いたのか、男が慄く。

「貴様らか。我が赫職を手にかかけようとした不屈きな輩とは」

「だったら何よ？ あんたがあいつの神子なわけ？ じゃあ、問題ないわよね？」

一般人かと思っていた隼斗が、赫職であると稲浪の登場で明らかになると、エンが挑発するように稲浪に対峙する。元々は目撃者の排除で隼斗を狙っていたが、赫職となると、掟の範囲内の行動となる。そこにはNB SLの正当性があり、ただの不可解な殺人事件に

はならなくなった。

「ふむ。貴様らが敵であることは認識した。じゃが、貴様は何ぞ？  
何故隼斗に密着しておる？」

稲浪が再び女を振り返る。その表情は、エンたちに向くよりも陰しい。

「あ、稲浪。この人は俺を守ってくれたんだ。あ、えーと……・？」

自己紹介もなしに始まった戦闘で、すっかり隼斗は名前を聞くことを忘れていた。

「申し遅れましたあゝ。私、わたくし しれいき四霊龜の龜甲きぎょうと申しますうゝ。風祭さんは、私の赫職のご後輩とのことですのでえ、お守りさせていただきますいたあゝ。以後お見知りおきの程をよろしくお願いしますのですうゝ」

「四霊じゃとっ！？」

龜甲の挨拶に、稲浪が驚いたように声を上げる。

「何だってっ！？」

稲浪と同時にエンも声を上げた。

「え？ な、何？ どしたの、稲浪？」

エンと稲浪の声に、隼斗が思わず驚く。

「四霊とは、日本各地を取り仕切るjpコードNo. 03～06の  
神子の上に立つ、基、き世界に散開する神子の頂点に君臨する四対の  
守護神子、コードNo. 00を持つ神子じゃ」

稲浪の話に龜甲が、うふふゝ、どうもおゝ、と隼斗に微笑む。基  
本マイペースのようで、その微笑みは、時と場合次第では万人を和  
ませる力がありそうだが、今この場では、少々場違いに見える。

「それって、凄いのか？」

「我も実際に交えたことはないが、その力は神大と聞く。所在は不明  
じゃが、龜と、鳳凰、麒麟、虎が居ると聞く。汝が内の龜である  
とはの」

かような場で出会うとは思わなぎ、と稲浪が少々興奮気味に龜

甲を見る。その視線に亀甲が微笑む。

「私も他のお三方は見たことがあります、お強いらしいですよ。私は守ることしか能がありませんから」

亀甲がさも他人のように言う。自分には攻撃能力がないからそう言うだけなのかもしれないが、その判断は隼斗にも稲浪にもつかないようだった。

「あの、亀甲さん？」

「はい？」

何となく、亀甲さんが凄い神子だと言うことは話で理解はしたが、どうしても気になることがある。

「亀甲さんって、昴さんの神子、なんですか？」

亀甲の話を聞いている限り、赫職として名を言った人物は、間違いなく隼斗の知る人間で、今日も共に仕事をしてきたばかりだった。

「私の赫職様は湊川昴様ですよ」

夜闇に浮かぶ亀甲の微笑み。何処から見ても、そこに神子の中にも特出したものがあるようには到底思えない。

「マジッすか・・・」

「はい、まじですよ」

あの先輩が赫職だと驚いたが、こんな人が神子だとは思ってもしなかった。何気に先輩って凄いのか。

隼斗が言葉を失ったように、あく、と言いながら頷いていた。

「ちょっとっ！ あたしを無視すんじゃないよっ！」

「ん？ 何じゃ、まだ居ったのか？」

「なっ！ ……いい度胸してんじゃないのよ。そのまま散りなっ」

亀甲の空気に吞まれたのか、稲浪も隼斗もすっかりのほほん世間話ムードに移行していたが、その背後でエンが声を荒げ、片手を翳し土の竜を稲浪に向けて放つ。

「ふん、かような攻撃、私の敵ではないわ」

だが、あっさりと稲浪の焰がその竜を焼き消した。辺りに漂うは熱気と粉塵。それでも稲浪の周囲は青い焰で煌めくように揺らめい

ていた。

「神子さんがいらしたのでしたらあゝ、私の出番はここまでですねえ」

「なんじゃ、もう帰すのか？ 我としては汝と一戦交えてみたかったのじゃが」

「私の役目は、別にありましたのですがあ、もう用件は済んでしまいましたので、後はお任せしますねえ」

稲浪としては、なかなか出会えることもなく、その存在は神子の中でも特別視されているため、どうやら闘争本能のようなものが疼いてきたのだろう。

「ふむ、四霊ともあらば下手な戦など赴きはしまい。赫職ありとなれば、敵でないと判明した以上、ここは我が赫職隼斗の命は我にある」

「あちらと違ってご理解が早くて助かりますう」

ねえ？ とゆったりとした同意を隼斗に向ける亀甲。その背後では小馬鹿にされたエンが表情を濁して土の竜を差し向けてくる。

「うふふ、赫職さんをもっと良く見て契りを交わしてくださいねえ」

その竜を余裕のほんわりとした笑みで、手を翳し防護壁を呼び起こし、亀甲は粉碎する。

「ちっ、四霊ってのは化け物かいっ……？」

力の通用しないエンは憤りと怒りに表情が濁り続けていた。

「稲浪さん、あとのお相手はお任せしますねえ？」

「何故じゃ？ 何故あやつの相手はしおるからに、我の相手をする気はないのじゃ？」

亀甲はエンの相手をする気はないようだが、稲浪にはそう見えているのだろう。どこことなく羨望のようなものを向けていた。

「私にはお相手する理由がありませんもの。それに、私を相手するならあ、あれくらいは倒せますかあ？ 負けてるようでは私の髪の毛を揺らすことも出来ませんよお？」



「むっ」

「くっ……」

對抗心に火がつけられたようにエンを見る稲浪と、さらに馬鹿にされるエンの視線が絡み合った。

「あ、あの、変に焚き付けないでくださいよ」

「大丈夫ですよ。稲浪さんなら余裕ですよね？」

隼斗の苦言を他所に、稲浪は無論じゃ、と意気込む。

「ちょっと、あんたっ！ 言いたいことズバズバ言ってたで済む  
と思ってんのかいっ？」

去ろうとする亀甲にエンが声を荒げる。

「ですからあゝ、私は攻撃出来ないですよ。あなたが稲浪さん  
を倒せるのでしたらあ、お相手して差し上げても宜しいですけど、  
出来ますかあゝ？」

どこまでもおっとりとした挑発的な態度の亀甲。

「当たり前だろっ！ こんな奴にあたしが負けるわけないだろ」

「何じゃと貴様っ！ どの口で戯言を吐くかっ！」

そして、その挑発に易々と乗ってしまう二人に、隼斗はおろおろ  
するばかりでエンの赫職の表情も限界を迎えようとしていた。

「この口だよ。狐ごときが威張るんじゃないよっ」

「ほお？ もぐらごときが我によく聞けたものを。モグラは大人し  
く土の中で蠢いておれ」

「何だっってっ！？」

「やると申すのであれば、この白狐稲浪、相手になろうぞっ」

「ちょっと、い、稲浪……」

「隼斗は黙っておれっ！ かような侮辱、放置するわけには沽券に  
関わるっ。四霊亀よ。この勝負、次に預けるぞ。我にはやらねばな  
らぬことが出来たのじゃ」

どんどんお互いに火がつく光景を、亀甲は口実作りに成功したよ  
うに穏やかに微笑んだ。

「はい。では、私は失礼しますねえ」

ロングスカートを揺らしながら、亀甲がエンが作った土壁に己の能力である防御壁で打ち砕いて、隼斗と稲浪に優雅なのか、のんびりなのか一礼すると、夜の闇に消えた。

「しかし、日本に四霊が居るとはの」

あっさりと亀甲を見送る稲浪は、己が口車に乗せられたことを悟ったのか、その後姿を見送る視線の中にあった、興奮と高揚の気持ち次第に治まり、言葉だけで身を引いた亀甲のことを、それすらも実力だと感心したように、いずれ交えることを羨望する眼差しを向けていた。

「って、稲浪。感心に浸ってる場合じゃないって」

完全にシカトされて、エンと赫職の男が呆然としながらも、こめかみを震わせていた。

「そうじゃったな。隼斗を貶めたのはあやつらなんじゃったか」

切り替えが早いようで、稲浪が意識をエンに向ける。

「エンか。まあ我の敵ではないの」

「何よ、あんた。随分舐めてくれてるわね」

稲浪はどうやらエンのことを知っているようだが、エンは稲浪のことは知らないようだった。

「どいつもこいつもうぜえ。エンっ、さっさとあいつら消せっ!」

本来の目的を邪魔され、神子には逃げられ、他の赫職の神子の邪魔も入り、男が苛立っていた。

「貴様も妙な男に取り入ったものじゃな。神聖なる神子が見る目も持たぬのか」

いきり立っている男やエンを前に涼やかな表情で稲浪が二人に對峙する。稲浪の登場で心持安堵したのか、隼斗の表情も落ち着きを取り戻していた。

「あんたに言われたくないね。そんな取り柄も無さそうな男の赫職のくせに」

エンの言葉に、稲浪の眉が片方つりあがる。

「貴様、我が赫職にやきもちか? そのような下らぬこと<sup>うつつ</sup>に現を抜

かして居るような赫職のようじゃからのお」

余裕そうな表情で稲浪が言うが、表情は顔で笑って心で怒っているようだ。

「はぁ？ あんた頭大丈夫う？ あたしがそんな優男を選ぶわけないでしょ」

エンもエンで稲浪と似たような顔をしている。その様子に隼斗と男は気まずそうな表情を浮かべていた。

「どうやら、やはり貴様とは相容れぬようじゃの」

「そうね。あんたとは一緒な考えにはなりたくないわ」

お互いにそう言うのと、口調とは裏腹に纏う空気は嫌悪で空気が大きく歪んでいた。エンが片手を持ち上げ土の竜を呼び起こし、稲浪が両手に青い焰を宿す。これまでの比ではないものを。

「い、稲浪………？」

「心配するでない。あやつごときに我は負けん」

「いや、でも………っ！」

隼斗が、エンが開紋していることを言おうとしたが、その前にエンが竜を放ち、それに稲浪が火炎放射のように焰を撃った。

「ふん、少しはやるじゃない？」

「たわけ。貴様手を抜いておろう？ 勝負を喫す場を侮辱すること、我が赦さぬぞ」

「ならあんたも開紋してみせれば？ そうすればあたしと同等くらいにはなるんじゃない？」

開紋しているため、少々稲浪の様子を探っているのか、先ほど亀甲との戦闘で見せた竜の数が明らかに少なく、エンの表情も余裕を感じさせた。

「愚かなり。開紋など不要。その余裕、我が打ち砕いてくれる」

稲浪が大きく息を吐き精神を統一する。エンが何かただならぬものを感じたのか、自分の前に土壁を作り出す。

「青き狐の焰の業火をとくと見るが良い」

稲浪が不敵な微笑を浮かべると、はぁぁあっ！ と全身に力を込

めるように息を吐く。その間にもエンはただ防御に徹するだけではなく、土壁の前に幾つもの竜を生み出す。

「隼斗っ。我から離れておれ」

「え？ は？」

稲浪に呼ばれ、後退するように言われるが、隼斗は状況が理解できていないようで、困惑するばかりだった。

「エンよ、往くぞっ」

「やれるもんならやってみなさいよっ」

稲浪が土壁に向かって咆哮すると、稲浪の全身を包み込むように青い焰が一気に何処からともなく噴出す。熱による急激な気圧の変化で熱風が隼斗を吹き、隼斗がその風に後方に飛ばされる。同様にエンの周囲にも暗黒に染まる土の竜が幾重にも蠢き経つ。

「我が赫職に手を下したこと、その身を持って償うが良い」

稲浪の全身が青い焰に包まれ。大きく陽炎に浮かぶ陰のように、稲浪の周りが明るく青く輝く。

「狐業（こくごう）」

稲浪が熱で吹き飛ばされたとは言え、隼斗が安全圏に離れたことを確認すると、正面に立ちただかるように夜闇に浮かぶ、エンの土壁に向かって稲浪が片手を向けた。

「なっ！」

つばさとの戦闘で見た稲浪の青い焰の柱。それにも十分に驚かされたが、今日の前に立つ、己の神子である稲浪の纏う炎。それが壁に向かって手を翳しているにも拘らず、焰はそれに反発でもするうちに、星空煌めく夜空へ焰の巨大な柱が昇っていく。

「何処を狙ってるのよっ」

エンが土壁の向こうから稲浪の焰を笑う。空高くに舞い昇る稲浪の青い焰を他所に、大地から湧き出した土の竜をエンが稲浪へと走らせる。

「稲浪っ！ 危ないっ」

思わず隼斗が稲浪に声を掛け立ち上がる。エンの放った幾つもの

竜が稲浪に向かって縦横無尽に大地を張って突進してくる。

「ふんっ、戯れにもならん」

隼斗が稲浪に声を掛けるが、稲浪は下らないとエンに向かって言葉を吐くと、前に翳していた腕を上から下に振り下ろした。すると、上空に立ち昇っていた焰が、稲浪の腕を合図に一気に上空から稲浪の下へと降りてくる。その間もエンの放った竜が稲浪に向かってくる。

「稲浪っ！」

それでもエンの土の竜の方が若干早く稲浪へと襲い掛かったように、隼斗が目を見開いて稲浪の名前を呼ぶ。爆音に近い轟音と共に、稲浪にエンの土の竜と、空から舞い降りた焰が辺り一面に土煙を撒き散らす。

「終わったわよ」

エンが大したことないわね、と息を漏らした瞬間、

「戯けと言っておろう。所詮はこの程度とは、まだまだじゃの、エンよ」

稲浪の声が土煙の中から、聞こえた瞬間、青く尾を引く狐が稲浪の立っていた場から飛び出した。

「なっ!？」

稲浪から飛び出した青い焰が狐へと変貌し、エンの作った土壁に噛み付いた。壁に衝突した焰が周囲にも広がり土壁が熱で赤く染まっっていく。怒涛の焰が稲浪から次々とエンに向かって吹き荒れ、やがて壁に穴を開けた。

「我が焰は最強じゃ」

全ての焰が壁を突き破り、壁の向こうに立っていたエンが奥の廃墟ビルにもたれかかるように倒れていた。

「エンッ！」

赫職の男は、エンが稲浪の焰から逃がすために張ったもう一つの壁に守られ、無事のようにだったが、エンは正面から稲浪の焰を受け、服が焼け、ビルまで吹き飛ばされたのか既に気を失っていた。

「勝負ありじゃ」

その様子を見て稲浪が髪を振りまく。

## 十神嘶、状況終了

「エンツ、おいつ、しっかりしろっ！」

エンが気を失ったと同時に、男を守るために作り上げた壁が、ロボロと崩れ落ちた。

その様子に隼斗が、言葉を失っていた。エンは男に抱きかかえられ、名前を何度も呼ばれているが、それに応えることはなかった。啖呵を切るように挑発的だった男がうろたえている様子に、隼斗は良心の呵責を感じているようだ。

「隼斗、無事か？」

「え？ あ、ああ……」

何事もなかったように稲浪が隼斗に振り返る。その背後では男がうろたえているが、稲浪の興味は既に失せたようだった。

「全く。あれほど注意せよと申したと言うに、このようなことに巻き込まれおって」

稲浪が隼斗に説教を垂れてくる。

「なあ、稲浪」

だが、隼斗は稲浪の説教など右から左に聞き流して稲浪を呼ぶ。

「あの子、ひよっとして、死んだのか……」

男がいくら呼びかけても、エンは目を覚ます様子もない。

「エンのことか？ あれほどであやつは死にはせぬ」

「え？」

稲浪が見よ、とエンを指差す。

「我らは元々そうそうに死ぬような柔ではない。一時的に機能が停止しただけじゃ。NBSLが後に回収に来るじゃろう」

「どういうことだ？」

エンは見た目は気絶よりも、稲浪の炎を受けて焼死とも呼んでもおかしくはないようにも見えるが、稲浪は死んでいないと、隼斗の心配そうな顔をばっさり切った。

「我らは元より長寿や強靱な肉体を保持しておる。じゃが、人間社会に溶け込むにはNBSLよりの赫職紋の烙印が不可欠なのじゃ。

エンを見てみよ。赫職の男と共に、紋が消えておるじゃろう？」

「あ……」

稲浪の視線を隼斗が辿ると、男の顔にあった赫職紋がすう、と消えていた。同じようにエンの胸元に在った紋が消えていた。

「紋が消えるとNBSLに回収され、勝者は次の神子の闘いに望む。我らの闘いはその繰り返しじゃ。それが定められし神子の導になるのじゃ」

夕餉の時間を越えておる。と稲浪が早く帰るように隼斗に促す。

「紋が消えた神子って、どうなるんだ？」

考えないわけにはいかないのだろう。エンを稲浪が倒したことはなるようだが、赫職である男にとっては、この時点で新神話の創生からは脱落することになるのだ。

「神子は高天原寫へ戻され、再調整を受け、元の世界へ返されるだけじゃ。あの男は赫職としての資格は剥奪され、二度と創生には参加できぬ。さばいばるとか言うものじゃ」

抑揚のない稲浪の言葉。だが隼斗は衝撃を受けたような表情を浮かべていた。

「じゃ、じゃあ、稲浪も負ければ、その高天原寫に戻されるってことか？」

「我は負けぬ。隼斗の傍を離れることはない」

力強い稲浪の言葉。その言葉には信憑性がないわけじゃない。今目の前で、つばさとは異なる、戦闘をしたのだ。そして、稲浪はエンを倒した。その強さは改めてこの場で証明されたが、それでも昂の神子であることの判明した亀甲かめこうがどういいうわけか、隼斗を守った。そして、稲浪の話にあった四霊という神子の存在。ただでさえ、稲浪よりも強く、各地を静定している神子が五人もいると言うのに、その上に立つ四人の神子の存在を知った今、稲浪とであったことに浮かれていては足元を救われることもあるという現実を目の当たり



にした。

「隼斗、電話を貸すのじゃ」

「へ？ ああ。はい」

稲浪が隼斗から携帯を借りると、どこかに電話を掛ける。テレビ電話を使用したようで、小さな空中映像が浮き上がる。

「会長か。エンと戦闘し、勝敗は決した。回収を要求する」

《おお、さっそく闘ったのかい？》

映像越しに大郎が満足げな表情を浮かべながら、稲浪の申し出を受けていた。

《それにしてもエンを早々とやるとはねえ。さすがはNO13なだけあるねえ》

大郎が一人でどこか不敵にも思える笑みを浮かべ頷く。

《赫職の隼斗君はそこにいるのかい？》

うむ、と稲浪が隼斗に携帯を返す。

《やあ、久しぶりだね。元気かい？ この間はこの僕を見捨ててくれたよね？ 隼斗くん》

呑気に大郎が声を掛けてくる。毒を忘れずに。まだ根に持ってたんだ、あの稲浪の怒りを。

「ええ、まあ。その節は稲浪が勝手に電話しただけなんで」

話したいことは多々あるが、あまりにも場とは異なる呑気な面持ちに呆れなのか、言葉が出なかった。

《まあいい。それよりも驚いたかい？ まあそうだろうねえ》

応えてもいないのに大郎が一人で話を進める。

《神子とは闘うものなのだよ。ああ、だからと言って勘違いしないで欲しいな。中には荒くれ者もいるだろうが、基本的には神子は礼儀を持っているのだよ》

「は、はあ………」

稲浪がエンとの戦闘で付着した土を払っている。その奥で、エンを静かに横たえさせた男が逆上したような面持ちで立ち上がるが、夜闇に隠れ隼斗には気づけなかった。

《神子は、命約を交わした赫職の精神に自ずと己の精神を通わせ、人格をもそれに合わせ適応修正する。言わば、神子とは赤子なのだよ。心優しい神子になるも、殺戮に喜を見出す神子になるも、全ては赫職次第と言うわけなのだよ》

あつはつはつ、と大郎が映像越しに一人でポーズを取っているが、携帯の映像だけに体は見切れていた。

「くそっ！　よくも俺のエンをやりやがったな。赦さねえっ、赦さねえっ！」

キラッと街灯を反射した鋭い刃。男が護身用になのか、隠し持っていたサーベルナイフを取り出す。

《まあ、稲浪は元々やんちゃな子だからねえ、九稲と離れてからのことは、私も少々心配していたのだよ？》

「そうなんですか？」

だが、男の様子に隼斗は大郎との話に夢中で気づかない。

「ん？」

その隣に立つ稲浪が殺気に気づいたようで、目つきが鋭さを増した。

《全国に人間は、まだまだいる。その中で君は稲浪に選ばれたのだ。彼女は本来優しい子だ。その稲浪が選んだのだから、君には期待しているのだよ。隼斗君》

先ほどとは少し異なる、心からの言葉。そう隼斗には見えた。

「くっそおおっ！」

「え？　な、何っ？」

突如響いた怒声に隼斗が周囲に目を向ける。映像の明るさに目が慣れてしまい、その声の主の男の姿を見失っていた。

「やれやれ、じゃな」

「くっ！」

隼斗が目の前に掛けてきた男に驚き、携帯を落とす。不意に画像が乱れ、大郎がおや？　とさほど取り乱すこともなく不思議そうな声を漏らす。

「貴様も懲りぬ男よの。引き際と言う言葉を知らぬのか」

「あちいっ！」

隼斗の鼻先三寸ほどに夜闇を切り裂くように現れた刃。だが、それが隼斗を襲うことはなく、逆に男の表情が歪んだ。隼斗を襲う手前で稲浪がその刃を掴み、青い焰をその手に宿らせた。刃から伝わる熱に男が手を離し、後ずさりしながら尻餅をついた。

《おやおや、悲しみのあまりの逆上かい？ みっともないねえ》

一人呑気に大郎が映像に映った様子に呆れのため息を吐いていた。

「稲浪っ！」

「問題ない。これくらいすぐ治る」

隼斗を守るためにその刃を素手で掴んだ稲浪。男が刃を離れた瞬間か、隼斗に向けて突きつけようとした瞬間かに擦れたのだろう。刃はただ掴んでも切れはしないが、軽く押すか引くかをするだけで、皮と肉を割く。

「結構切れてるじゃないかっ」

隼斗が慌てて自分のバッグからタオルを取り出し、稲浪の手を取りタオルを強めに結ぶ。

「騒ぐほどのことではない。こんなもの姉上との修行に比べれば痒いものじゃ」

稲浪は大したことはないと言うが、隼斗はその滴る血の量が切り傷にしては少々深いようで、それを無視して圧迫止血をしていた。

《もうそろそろ職員が到着する。その時に包帯をもらうと良いよ》

電話越しに大郎が言うが、誰も聞いてはいなかった。

「お前、よくもやってくれたな？」

「ひっ！」

隼斗が今まで稲浪に見せたことのない形相で男を睨む。その睨みが街灯に照らされ、いい感じに怒涛を感じさせたようで、男が完全に怯んだ。

「む？ おお、来よったか」

隼斗と稲浪の背後に一台のトラックがやって来た。夜闇にも負け

ずの黒塗りのトラック。横には白と黒でNBSLと記されていた。  
《到着したようだね。それじゃ、後は二人して仲良くするのだよ》  
大郎が一人で高笑いしながら通話を切ったが、やはり誰も大郎の言葉を聞いてはいなかった。

「コードNo. 13、白狐稲浪。コードNo. 43、とおんエン。  
白狐稲浪の勝利により、とおんエンの回収及び、赫職立川啓一の資格剥奪を行う」

完全防弾服に身を包み、フルフェイスのヘルメットで顔を隠した男たちが、数人出てくると、横たわっているエンと腰を抜かしたままの男を抱える。

「ちよっ！ な、なんだよっ、てめえらっ。は、離せっっ」

男が突然のことに困惑しながら抵抗するが、完全防備の男たちは聞く耳を持つことなくエンと男をトラックに乗せた。

「な、何、あれ・・・・・・？」

男たちが隼斗と稲浪に一礼して、トラックが夜闇に消えていった。口を挟む間もなくいきなりやって来て、あっさりと撤退して行った謎の男達に隼斗が首を傾げていた。

「あれはNBSLのえーじえんととかいう連中じゃ」

「エージェント？」

二人はポツンと残され、稲浪が空腹じゃ、と促し二人して駅の方へと歩きだす。廃墟ビルの周囲に無数に見られる掘り返したような地面と、稲浪の熱によって奇怪に捻じ曲がった鉄骨などの後始末を隼斗が気にしていたが、NBSLのエージェントの男が気にしなくとも、この解体はNBSLが行う、と言うので、そのまま言葉を鵜呑みにしていた。

「我ら神子は紋が消えると、機能を停止する。仮死とか言う状態になるのじゃ。そうになるとNBSLの回収班が神子を回収し、赫職の記憶を操作するらしいのじゃ」

その回収班のことをエージェントと呼ぶらしい、と稲浪が言うが、稲浪自身も詳細は知らないようだった。

「赫職の記憶を操作するって、どう言う事だ？」

隼斗が疑問にも似た不安を口にする。

「我らのことは未だ内密項じゃ。敗退した神子は赫職とは引き離され、再会も出来ぬと聞く。口外を封じるために赫職の記憶を葉で神子との記憶を証拠するとか言われておるが、我らには分からない」

稲浪は神子じゃないから、赫職のことまでは分からない、か。なんだか一気に色々なことを知った気分だ。新神話の創生は、単に神子が闘うだけじゃなくて、赫職にもそれなりのリスクは背負うことになっているのか。

「我は負けぬ」

「え？」

隼斗が先ほどの戦闘でエンと男のことが脳裏を離れず、あの二人はもう共にいることが出来ないのだと思うと、自分のことも他人事ではないのだと、焦心に駆られるような気持ちが湧いたのだろう。

「我と隼斗は契った。心の乱れは我が心も揺らす。考えておることは大体は分かるのじゃ」

稲浪の言葉に隼斗が稲浪を見つめた。

「我はいつでも隼斗の傍で、隼斗を守る。赫職が居るから我は強く在れるのじゃ。隼斗の心が弱くなれば、我も弱くなる。故に怯えるでない」

檄を入れる稲浪に、隼斗はその言葉に魅せられていた。

「我の見込んだ男ならば、我を信じよ。我を信じる者に我は心を預けるのじゃ」

「稲浪……」

決める稲浪に比べ、隼斗は稲浪に見せられ腑抜けな返事しか出来なかったが、それでも稲浪は隼斗の心が平静を取り戻したのを感じたようで、うむ、と頷いた。

「では帰るぞ。我は空腹なのじゃ」

稲浪が隼斗を急かし、そのまま二人は帰路に就いた。

「ふふっ、稲浪ったら。この数日でちょっと大人っぽくなったのかしら？」

そんな二人を廃墟ビルの屋上から紅い髪を靡かせ、赤と白の神子服に身を包んだ稲浪の姉である九稲が微笑を浮かべていた。

「でも、やっぱり心配ね。あの癖が隼斗さんを悩ませなければ良いのだけど……」

九稲が稲浪の何かしらの癖を心配して二人を見送っていた。

「さて、私の出番もなかったことだから、今日は帰ろうかしら？」

九稲が隼斗と稲浪の歩いて行ったほうではない、別の場に一瞬目を向けると、その場から姿を消した。

「あ、お帰りなさい隼斗さん。お怪我はありませんでしたか？」

自宅アパートに戻っていると、家の前に琴音の姿があった。その後で壁に寄りかかっているつばさもいた。

「あれ？ 琴音さん？ それにつばさ君も？ どうしたんですか？」  
「君なんかつけるなっ！」

つばさが俺は子供じゃない、と言うが、気にすることなく隼斗が何故二人が玄関外にいるのか不思議そうに声を掛ける。

「琴音。つばさ。世話になったの。この通り隼斗は無事じゃ」

「そうですか。それは良かったです。ツーちゃんも心配してましたから」

ねっ？ と琴音がつばさを見ると、つばさが気恥ずかしそうに、ふんっ、とそっぽを向いた。

「え？ 何？ どういうことですか？」  
一人隼斗が話に混ざれず、困惑する。

「稲浪さんが突然隼斗さんが危ないって、飛び出そうとしたんですよ」

「え？」

琴音の言葉に、隼斗が先ほどの稲浪の登場を思い出した。

「距離があつたでな。つばさに運んでもらったんじゃ」

「べ、別に、手貸したわけじゃねえからなっ！ 借りを返したただけだっ！」

例を言われることが恥ずかしいのか、つばさが微かに顔を紅潮させながら隼斗を睨む。

「え？　じゃ、じゃあ、あの時って……」

稲浪が空から降ってきた。稲浪は空は飛べないはずなのに、どうして空から来たのかおかしいとは思った。でも、それもそうだけど、何で稲浪は俺の居場所が分かったんだ？

「うむ。つばさの飛行で我を隼斗の下へ飛んでもらったのじゃ。我の紋が隼斗の危機を知らせたのじゃ」

「赫職紋が？」

「神子の紋は心に通ずる。故に隼斗の心が我を呼んだのじゃ」

あの時の恐怖やらが稲浪を呼び寄せたってことか。ここからじゃあそこまでは電車で二十分は掛かるから、つばさに頼んで連れてきてもらったってことか。

「急だったので心配してましたが、ご無事だったようで安心しました」

ありがとうね、ツーちゃん。と琴音がつばさに言うが、隼斗と稲浪の手前、素直になれないようで、顔を紅くしてそっぽを向いた。

「そうだったんですか。ありがとうございます」

隼斗が全員に向かって礼を言う。琴音と稲浪は満足げな顔を浮かべ、つばさは相変わらずそっぽを向いていた。

「皆さん、お夕飯はまだですよ？　ちょうど用意しましたので、お二人も一緒にどうですか？」

琴音が二人を夕飯に招待する。玄関上にある換気口からは、食指を刺激する香りが漏れていた。

「良いんですか？」

夕餉の時間はとくに過ぎ、稲浪も空腹を強く訴えている今、一から作るよりも手間と時間が掛からないことは嬉しい。

「はい。稲浪さんはいかがですか？」

「隼斗の料理が好ましいが、この時間では長らくの我慢は出来ぬ」  
「どうやら稲浪も了承らしく、二人の返事に琴音がつばさを見る。

「好きにすればいいじゃん」

照れくささで、つばさがそっけなく言うが、つばさも空腹のよう  
で三人に聞こえるほどに腹の虫が鳴いた。

「それじゃ、ご飯にしましょう。どうぞ」

琴音の言葉に三人が家が上がっていく。玄関が上がった瞬間に香  
る香に稲浪が頬を緩ませた。

「すぐ用意しますので、ゆっくりしてて下さい」

「あ、俺も手伝いますよ」

リビングで早速寛ぐつばさと稲浪。二人して何やら会話をしてい  
るが、隼斗はキッチンで支度をしている琴音と共に思わず味噌汁  
をよそっていた。

「今日は稲浪、大丈夫でしたか？」

朝引越しの手伝いをするように言っていたが、見るからにあまり  
家事などをするようには思えなかった隼斗には、少々気がかりでも  
あった。

「大丈夫ですよ。稲浪さん、結構綺麗好きで几帳面みたいで、思っ  
たよりも早く片付けられましたから」

クツクツと煮物が食欲を誘う香りと音を奏で、琴音が満足げに味  
見をしていた。

「それは良かった。もっと大雑把かと思ってたんで」

隼斗が苦笑する。琴音もそれに同調するように苦笑した。どうや  
ら琴音も初めは稲浪のことが男勝りに見え、繊細と言うよりも大雑  
把な性格だと思っていたようで、引越しの荷解きがスムーズに終わ  
り、その認識が改められたようだ。

「ツーちゃんも、何だかんだ言いながらも、稲浪さんのことは認め  
ているみたいですよ」

琴音が視線を向けた先に、隼斗も視線を向ける。



「じゃあ、そいつぶっ倒したのか？」

つばさが先ほどとは異なる落ち着いた面持ちで、稲浪に話しかけている。

「無論じゃ。我の敵ではなかったわ」

それに稲浪が自慢げに胸を張っている。事実のこのため、過剰には見えない。

「はあ、すつげえな。やっぱ稲浪って強えんだな」

「今更なことを言うな。我が居るゆえ、隼斗も琴音もつばさもゆくりと生活できるのじゃ」

「へっ、俺が運んでやったから、稲浪の赫職は助かっただけじゃねえか」

「それもそうじゃな。感謝しておるぞ。我とつばさの初勝利じゃ、今日は」

俺の活躍もあったからな、とつばさが稲浪に対抗するように声を高くする。

「ねっ？ ツーちゃん、戦闘出来る力がない分、稲浪さんには割り切ろうとしてるんですよ」

自分のことを少しずつ自覚していかうとするつばさ。それを茶化すことなく弟を可愛がるように稲浪が今日の、創生での初めての勝利を噛み締めているようだった。

「何か、俺だけ取り残されてる？」

つばさは稲浪には心を開いていこうとしているようだが、隼斗には目の敵のような目を時折向けてくる。

「ふふっ、ツーちゃん、今日は稲浪さんに色々教えてもらってたみたいで、師匠にも感じてるんでしょうね」

「そうなんですか？ 稲浪がねえ」

遠めで稲浪とつばさを見る限りでは、琴音の言うことも納得できるように見える。だが、稲浪が隼斗という時の様子が脳裏に在る隼斗には、そこまでの人格者には思えないこともあるようだ。

「稲浪さんは、まだ他の神子のことを知らない私が言うのは変です

が、立派な方ですよ」

「ま、確かに稲浪の奴、たまに大人っぽいと言いますからね」

一日に一回は稲浪と出会ってから、魅了されることを平然と稲浪は口にしていた。そのことを思うと、新神話の創生に巻き込まれ、稲浪と出会ったことも後悔することは少なかった。

「俺ももつと強くなりてえなあ」

つばさがごろんと、ため息を吐きながら大の字に横になる。稲浪の話聞いて、飛行能力しかないことを悔いているようだ。

「生憎じゃが、我には手ほどきすることは適わぬ。燕子である以上、類の者でなければ分からねぬことが多いでな」

つばさの心情も理解出来るようだが、稲浪は狐であるがゆえ、空に関することは分からないようだ。

「私たちには、あの子たちを見守ってあげることが一番なのかもしれないですね」

「そうですね。いくら創生とは言え、戦うのは稲浪たちなんですよね」

隼斗の言葉は若干トーンが低かった。エンのことがまだ記憶に激しく焼きついているのだろう。隼斗の視線が稲浪の手にいく。

「そう言えば、稲浪さんの手、どうかしたのですか？」

怪我は大したことはない、琴音にも稲浪は言うが、包帯を巻いていると大したことはないと言っても、それだけで人は大した怪我だと無意識に認識してしまっていた。

「俺が余所見をして、相手の赫職の男の突きたてたナイフを素手で掴んだんですよ」

隼斗の言葉に、あらあ、と琴音が表情を濁す。言葉だけで痛みを感じているようだ。

「痛くはないんでしょうかね？」

「稲浪はそう言ってますけど、見てるこっちにすれば、痛そうですけど」

あの時、稲浪の手からはぼたぼたではなく、流れるように血が滴

った。それほど浅い傷ではないということでもある。包帯には微かに血の跡もあるが、稲浪は平然とした表情でつばさと夕食を待っていた。

「本人がそう言っているなら、恐らくはそうなのかもしれないですね」

うん、と琴音が鍋をかけていた火を止める。

「折角の初勝利なんですから、あまり詮索はしないようにしましょう？」

琴音が稲浪とつばさが、初勝利に浸っているのを見て、今はそっとしておきましょう、と隼斗に言う。

「分かりました。まずは夕飯ですね」

奥からまだか、と稲浪がこっちを見てる。折角の気分を害すのは野暮だろう。

「はいはい。出来ましたよ」

琴音が頬笑みを浮かべながら、隼斗と共に夕食を運んで、いつもより遅くなった夕餉を相成った。

## 十一 神嘶 見せる男と見せる女

「夕飯ご馳走様でした」

「はい、いつでもいらして下さい。皆で食べるほうが美味しいですからね」

夕食も終わり、隼斗と稲浪は自室へと琴音に見送られ戻っていた。

「風呂湧いたら先に入れよ。汚れただろ？」

稲浪の服は微かにエンの攻撃を受けて土で汚れていた。

「すまぬ。では先に入らせてもらおうのじゃ」

湯張りど沸かしが完了した音が部屋に響くと、先に稲浪が風呂へ行った。

「………やっぱり、まだ止まっていなかったか」

稲浪の姿が浴室に消えると、隼斗が稲浪の何気なくゴミ箱に放った、包帯を手取る。ガーゼには、まだ血が完全に止まってから時間の経っていない赤い色の血が付着し、包帯にも染みっていた。

「痛くないなんて嘘だろ」

浴室からは水の音がテレビの音に限れて微かに聞こえる。隼斗は包帯を見て、稲浪が痛みを我慢しているのだろうと、包帯を握り締めていた。

「馬鹿だな、俺。ちっとも稲浪のこと分かってないんだな」

今日はバイト先の先輩が赫職で、エンとの戦闘で自分を助けてくれた神子が先輩の神子で、バイトで行った仕事先で如月こはくと言う、孤児院を開設する女性と出会い、その手伝いをするのを半ば勝手に決められ、そして、初めて神子と赫職との戦闘を行った。力量の差から、稲浪は苦戦する様子をわざと演出して見せ、その手で勝利を勝ち取った。初めて見た稲浪の狐焰の威力の強大さに圧倒され、大郎との電話に気を取られていた隙の男の逆上に、稲浪が契ったからだ、自分を守った。

神子だから。新神話の創生で契ったから。自分が稲浪の赫職だから。稲浪にとっては、それが当然で、そうすることが当たり前だから、と食事の前と跡に当たり前のように手を合わせることに同じように、自分の危機に駆けつけ守った。正義感が強いのかもしれない。自分が最強だと自負するだけに、誇示するためなのかもしれない。「……ははっ、お前、凄いな。大人っぽいんじゃない、大人なんだよな、俺よりも」

稲浪が己の役目を理解しているから出来ること。赫職なのに守られてばかりいた自分。琴音の言う通り、稲浪は立派なのだと、本当に隼斗は理解し始めたのかもしれない。

「ふう、良い湯じゃった。隼斗、汝も早う湯浴みすると良い」

相変わらぬのネグリジェ姿に、風呂上りの火照った体と、濡れて垂れる金髪。何もしてなくとも思わず隼斗が生唾を飲むほどの艶があった。

「分かった。包帯巻いとけよ」

稲浪の申し出を素直に受け入れ、隼斗がテーブルの上に置いておいた薬とガーゼ、包帯を稲浪に向け、風呂へと向かった。

「我には必要ない」

稲浪がドライヤーを手に取り、隼斗の言葉を一蹴した。

「稲浪の跡って、ほんと良い匂いがするなあ」

浴室に漂うソープの香り。どうすればこれほど匂いが残るのか、感じながら隼斗が体を洗っていた。

「って、変態か、俺っ」

隼斗がシャワーを捻りジャーと勢い良く体についた泡を洗い落とした。

「隼斗、これを貰っておるぞ」

「ん？ ああ、別に良いぞ」

風呂から上がると髪を乾かし終わった稲浪が、冷蔵庫に入れていた生クリームたっぷりプリンを食べていた。元から昨日の買い物で、琴音から貰ったケーキなどにハマリ、リクエストで購入したプリン

だ。

「って、包帯してないじゃんか」

稲浪の座るソファの前のテーブルには、隼斗が置いたままの治療具がそのままだった。

「我には必要ない。これはモサモサして慣れんのじゃ」

手の自由が利かないことが嫌なようで、稲浪が拒否をするが、隼斗がそれを赦さなかった。

「ダメだ。治るもんも遅くなるだろ。ちゃんと付けるんだ」

嫌じゃ、と稲浪が頑なに拒否するが、手と口はプリンに夢中だった。隼斗は稲浪がプリンを食べ終えるまで待つと、稲浪の手を取る。

「何じゃ、我はいいと言っておろう」

稲浪が抵抗するように隼斗の手から逃れようとするが、隼斗はギョツと稲浪の手を握っていた。

「うっ・・・く・・・く・・・」

「痛むんだろ？ ちゃんと消毒しないと化膿するぞ」

隼斗に強く握られ、稲浪の顔が一瞬歪見、隼斗がそれを見逃さなかった。

「お前は俺を守ってくれた。神子だからなのかもしれないが、ああして助けに来てくれた。俺は何も出来ないからな。これくらいはさせてくれ」

消毒液を拭きかけ、ガーゼに傷薬を塗る。隼斗の表情と言葉に稲浪が、少し驚いたように声を漏らす。

「俺の油断が、稲浪をこうして傷つけたんだ。ちよっと不自由だろうけどさ、これくらいしか俺には出来ないから、我慢してくれ」

ガーゼをはり、剥がれないように隼斗が稲浪の手に包帯を巻く。

隼斗の言葉が効いたのか、稲浪が大人しくその様子を見つめていた。

「よし、これで大丈夫だろ」

キョツと隼斗が稲浪の手の甲で包帯を結び、手を離した。

「隼斗」

少しの間稲浪が自分の手を見つめ、その視線を隼斗に向けなおす。

「これくらい、とか言うでない。これくらいしか俺には出来ないなどと言うでない」

「え？」

稲浪が静かな口調で、真っ直ぐと青い瞳を向ける。

「汝は我が赫職じゃ。先にも言うたであろう。己を卑下するでない。我は私の役目を果たしただけのことじゃ。神子と赫職の契りは、創生の為だけのものではない。姉上と会長が言うておった。契りとは互いを支え合い、互いの足らぬ部分を補い合うことじゃと」

隼斗がハッキリと理解出来ないように、眉間に皺を寄せる。

「我は元々狐じゃ。人間ではない」

稲浪のその一言に、隼斗の心に小さな痛みが走った。

「ゆえに一方的に主従関係を結ぶ赫職もおる可能性は否めぬ。じゃが、本来はそうではない。我も隼斗も対等じゃ。我に足りぬ所は隼斗が補い、隼斗の足らぬ処を我が補う。それが契りと言うものじゃ。今の隼斗は我が主で汝が従者のようになっておる」

「そうか？」

いまいちよく分かっていない隼斗が困惑した苦笑を浮かべる。

「たとえば我が嫌じゃと言うても、隼斗が我に嫌じゃと言うても、それが正しいもののだとすれば、遠慮してはならぬ。互いの身の為にならぬからの。故に、我は嬉しいのじゃ」

ずっと稲浪が隼斗に包帯の白に包まれた手を目の前に掲げる。

「我は必要ないと言った。じゃが隼斗は己が正しいと判断したから、こうしたのじゃろう？」

「あ、ああ。まあそうだけど……」

改めて、理由付けのようなことの後に言われると、流石に照れる。「あの隼斗は我は好きじゃ。他人に流されず我を通すことは容易いことではない。我が嫌と言うから引き下がる。そこに優しさはない。在るのはひ弱だけじゃからの」

稲浪が真っ直ぐに隼斗を見る。

「間違っても、我は怒りはせぬ。過ちと誤りは似て非なるものじゃ。」

我の我儘を受け入れることだけが赫職ではない。我が見込んだ男。ならば遠慮せずに誇示せい。己を卑下する赫職の神子になる者は悲しいだけじゃ」

今日は動いた。そろそろ寝るぞ、と稲浪が説教のような褒め言葉を隼斗に送る。対等だと言う割には、今は隼斗の方がまだまだ未熟なようだ。

「やっぱ、そう簡単には追いつけないよな」

「何か申したか？」

歯磨きに洗面所に行っていた稲浪が歯ブラシを加えたまま戻ってくる。日本なのに、自分の部屋なのに、稲浪を見ると外国映画を見ているような不思議な感覚があるのは、未だ稲浪との生活に慣れていないからなんだろうな。

「なんでもないよ。ありがとな、稲浪」

「？」

何でもないと言われ、感謝され、意味が分かっていない稲浪は、シャカシャカと歯ブラシを動かしながら不思議そうに隼斗を目で追っていた。



## 十二神噺 神子に立つ者

「だが、俺にはどうすることも出来ない。マスターの仰せだ。諦めろ」

携帯を耳に当てながら、誰かと話している男。今のほとんどが空中映像を映し出す携帯だが、男の使用しているのは、少々、いや結構型が古い。直接耳に当てなければ相手の声は聞こえず、口元に近づけなければ相手に声の届かない電話機だ。

「それはこちらと同じこと。恐らく他の連中もそうだろう。しばらく様子を見てみる。お前なら大丈夫だ」

じゃあな、と男が数回の言葉を交わすと携帯を仕舞う。

「何故俺が九州沖縄を見張らねばなんのだ」

ため息を吐きながら、福岡市内の上空を風と共に水面にたゆたうように漂う、全身を夜闇と同色の黒マントに身を包んだ男。

「大体マスターは何を考えているのだ？ 全く分からん」

一人でぼやき続ける男。誰にもその声は届かず、風の中に消えていた。

「第一、沖縄までとは広すぎる。目が届くわけがないだろ」

男がぼやきながら地上を見下ろす。博多の中洲街が夜の賑わいを見せていた。

「だが、腹が減ったな。そろそろ夕食と行くか」

川の近くに幾重にも連なる屋台街。焼き鳥やおでん、博多ラーメンやらの様々な食欲をそそる匂いが漂う。昼間は閑静にも似た静かな雰囲気、仕事終わりの人間の安らかな憩いの場を貸している。

「親父、ラーメン一丁」

男が地上に降り立つと、目に付いたラーメンの屋台に入る。近代化の一途を辿る街の中にある、いつまでも変わらない人情のある風景。そこに大衆の安らぎがあるのだろうか、何処からともなく笑い声が聞こえる。

「兄ちゃん、暑かなかと？」

「気にするな。これが俺だ」

見知らぬ親父が男のマント姿に声を掛けるが、男はマントを脱ぐことなく席に着く。匂いからもこつてりした臭さが屋台の中に広がっている。嫌いな人間には耐え難い豚骨臭さだろう。

「あいよ、おまち」

男の前に差し出された、豚骨の真白な濃厚なスープ。縮れのないストレートな麺がスープに絡みつくように香りを放っている。チャーシューと木耳きくらげ、ねぎに着色料で真赤に染まった紅しょうが。他には何もない、シンプルな博多の豚骨ラーメン。

「では、頂こう」

割り箸を割り、蓮華で男がスープを一口啜り、麺を啜る。両隣からも同じ音が響く。麺を啜ると同時にスープの臭さが味を一層引き立てる香料と化し、鼻腔をつく。

「やはり豚骨が一番だな」

男が味わいながらも手を止めることなく、食す。ストレートの麺と麺の間に絡みつく、しつこさのある濃厚スープと共に麺を啜ることが醍醐味であるように、男があつという間に平らげる。

「ごちそうになったな。美味かったぞ」

「へい。ありがとうございます」

男がそそくさと店を後にした。人気の少ない場所に行くと男が大地を蹴り、空へ飛び上がる。

「さて、腹も満ちた。では、行くとするか」

男がそう呟くと、マントを大きく開く。すると、人間体だったからだが、夜闇に鋭眼を光らせる大鷲のように変態し、羽ばたきすると、星空の中へ消えていった。

「監視下は十二匹か。探すだけでも一苦労だな……」

その声だけが静かに空を舞った。

「この歳に、この寒さは堪えるのお」

白髪交じりの顔に幾つもの皺を彫った男が小樽の運河沿いを歩く。既に陽は暮れ、仄かに赤みを帯びた街灯が静かに夜を照らす。深夜ではないため、幾分かの店明かりと人影はあるが、昼間のような喧騒は消え失せている。町並みは景観保護のためレンガ造りの建物が数回の補修を繰り返しながらも、かつてと変わらぬ姿をそこに残し、観光の名を馳せていた。

「道に東北、合わせて十八人じゃったかのお。年寄りには移動は苦じゃというに、太郎は何故、ワシを遣わすじゃか」

杖をつきながら、曲がった腰でゆつくりと運河沿いを歩く男。

「おい、爺さん。悪いんだけどよお、金貸してくんね？」

夜ともなれば、ゴロツキも多い。札付きの悪とまではいかずとも、それを憧憬するような半端者が活動をする時間が夜になる。

「何じゃ、年寄りに集る<sup>たか</sup>か。ろくに働きもしない若造が」

男の前に数人の若い男が周囲を取り囲むようにやってくる。

「ああ？　っるせんだよっ！」

「さっさと金だせっつーの」

爺の戯言にしか聞こえず、聞く耳など持ち合わせてはいないのだろう。大人しく金を出そうが出さまいが関係なしに、己らの鬱憤晴らしを自分よりも弱いものに対して発散したいだけなのだろう。

「小童共が。これじゃから人間はなっておらんのじゃ」

「ああ？　何だ、こいつ」

「やっちまうか？」

一人の若者が男の胸倉を掴んでくる。

「良いから金だせってんだよっ！」

男たちの脅しにも、男はふう、と呆れたようにため息を吐くだけだった。

「痛い目を見んと、分かんのかのお。近頃の若者は」

男の言葉が挑発的だったのか、若者たちが眉間に皺を寄せて男を取り囲む。道行く通行人たちも恐怖から見て見ぬ振りをして通り過ぎていく。

「仕方ないのお。その器の小ささ、思い知るが良い」

精神を統一するように男が息を吐く。そんなものにも苛立ちを感じるのか、若い男たちは男を締め上げようとした。だが、それは叶わなかった。

「なっ！」

赤い街灯の中に突如浮かび上がる巨体。

「う、うわ、うわああっ！」

胸倉を捕まれ、爪先立ちにさせられていた男だったが、次の瞬間には男を持ち上げていた若者が腕を掴まれ、完全に宙に浮かび上がった。

「仲間意識も薄いのか。助けようともせんとは。実に情けない」

突如爺から身長が軽く三メートルを超える巨体へと変貌した男に、若者たちは慌てて逃げ出した。一人腕を掴まれている男だけが一人で喚いていた。

「た、たすけてくれえっ！」

男が手を離すと、目の前でヒグマにでも遭遇したように、完全に若者が腰を抜かして、へっぴり腰になりながらも、必死の形相でその場から駆けていった。

「やれやれ。この姿を見るだけで逃げ出すとは、何とひ弱な生き物じゃ、人間とは」

周囲に誰もいなくなると、男が人間の姿へと元に戻っていく。暗闇に浮かんだその巨体の影が、再び腰の曲がった高齢者へと化け、男は一人ぼやきながら、再び杖をつきながら歩き出した。

「さて、次はどこへ行くかのお」

掠れのかかる声で、ゆっくりと男の姿が運河沿いから遠のいて行った。

「あーはっはっはっ」

「だあっはっは、良いぞ、姉ちゃんっ。気に入った。ドンドン飲めえっ」

「そいじゃ、もっと辛い頂戴っ！」

店内は忘年会でも行われているのかと思わせる、ドンちゃん騒ぎ。店内は十五席ほどしかない小さな居酒屋。仕事終わりのサラリーマンたちが占めているが、その中に一際目立つ赤く体にびったりと密着する装束を見に纏った女。黒髪に真紅のメッシュの入った長髪で、タイトスカートのようで、チャイナドレスのような深いスリッドの入った、少々エロティックな井出達。

「一升、一気、いきまーっす」

店長が差し出したから口の焼酎の一升瓶を、女が片手を腰に当て、もう片手で一升瓶を持ち口をつけた。そのままビンを傾け己の胃袋に流し込む。

「おっー、良いぞー、姉ちゃん、もっといけえー」

女が無呼吸で一升丸々入った酒を飲み干していく。その足元には既に同じ一升で異なる銘柄の酒ビンが転がっていた。

「んっ、んっ、んっ・・・ふうはあっー！」

見た目こそはお色気ムンムンだが、酒を飲み干し腕で口元を拭い、アルコール臭い息を躊躇いなく大きく吐くその姿は、ただのおっさんにしか見えないが、店内にいるのは、全員が酔っ払い。店長までも一緒になって騒いでいる。故に女はこの中では主役の座を射止めたヒロインなのだろう。

「姉ちゃんやるなあっ」

「あー、おいしいー！」

満足げな満面の笑みを浮かべる女。店内からは拍手喝采が沸き起こる。

「おじさーん、もういっぽーんっいっっちゃうわよ！」

あーはっは、と豪快に笑いながら女が店長に次の酒を要求する。

「おいおい、金はあるのか？」

一升を丸々飲み干し、それでもまだまだ次を求めてくる女に、店長が苦笑する。

「お金え？ お金ならいくらでもあるわよおっ」

女が店長に向かって、もとい、店内に掲げる戦の勝利を示す旗を掲げるように、胸の谷間から札束を取り出す。微かに体温を帯びたその札束に、店内から再び先ほどとはまた異なる歓声が漏れる。

「今日は、あたしがおごっちゃうんだからあ、どんどん持ってきてなさーい」

「あんた、凄いな。今日は特別だっ、これも出してやる」

「いやーん、これ飲みたかったのおー！ も、店長サイコーッ！」

女が店内にその札束をばら撒くと店内が大きく沸く。店長も店長で、気前の良さにか、興奮していた。

「姉ちゃん、あんた何者なんだ？」

「あたし？ あたしはあ、中国四国を取り仕切るう、女王様よっ、あーはっはっは……」

すっかり酒に酔っ払い、女がそう言うが、周囲の客も酔っているだけに、それを煽るようにしか笑ってはいなかった。

「神子の監視なんてやってられるかってのー。あたしはお酒が好きなんだからあー」

「おーそうだそうだ。姉ちゃん、良いぞー」

何が良いのか良く分からないが、酔っていると何でもどうでも良くなるのだろう。そのまま深夜まで、女は店内で客の歓声を受けながら大酒を浴びていた。

「たーのしいー、あーはっはっはっ……」

「あー、えっと、えと……」

きょろきょろと挙動不審げに一人の女が元副都心であった新宿の街の中を右往左往している。

「ど、どこで、何をしたら良いんだろ……」

遷都された東京は、新宿に政令都市を置き、東日本の政治経済の中心となっているが、かつてのような繁栄はなく、都心もすっかり人口が減少し、東京都庁の全ての庁舎ビルはNBSLの研究施設へと買収された。

「うう、聞こうにも聞けないよお……」

道行く人に声を掛けようとするが、己の役目を理解しているから声を掛けかけて差し出した腕を力なく下ろした。

「他の人たちはどうやって把握してるんだろう……」

涙目になりながら女が空を見上げる。関東の気象情報では、明日は雨。既に夜空は雲に覆われ始め、町明かりで夜雲が灰色と小豆色を混ぜ合わせたような妙な色をしていた。

「雲が低いと、地上が見えないし」

はああ、と小さく女がため息を漏らす。

「飛んでも神子かどうか分からないし……」

どうしようう、と女の声が小さく震える。

「うう、マスター……」

女がとうとう、遠く離れた大府大阪にいる大郎に助けを求めるように声を漏らしていた。

「関東、中部って、どれだけ広いのかも分からないのに、その中から二十四人を見つくるなんて無理だよ……」

今にも泣きそうな女。鼻をグスッと啜り、両手で瞳を潤わせている涙を拭く。

「シュウ君は九州だし、うう、誰も知り合いないと心細いよお。赫職さんとも出会えないし……」

どうしたら良いのか分からないようで、女が携帯を取り出した。

メモリーに登録されている、数人のうち、特に仲の良いと言うか、類の男にかける。

「あ、ごめんなさいっ」

ドンッと通行人とぶつかり、女がへこへここと頭を下げながらビル壁にくつつくように退く。

《いきなり謝罪か？ 鴻鳴。意味が分からんぞ》

「え？ あ、ち、違うのっ。人とぶつかっちゃったの」

男の声が聞こえると、女が見えもしない相手にも拘らず、片手をワタワタと振る。通行人が怪訝そうな目を向けるが、既に女の意識

は電話越しの男へ向いているようだ。

「あ、もしもし、シュウ君？」

《今更繕うな。遅い》

「うっ、だって、急に出るんだもん」

《電話と言うやつは急に出るものではないのか？ 出るのに許可を取るものなのか？》

「う、うーん、私も使ったことないから、慣れてないから分からないけど……」

二人して携帯などは生まれて初めて大郎から与えられ、機械と言うものを使い慣れていない二人は、最新機種よりも結構古い液晶モニターの携帯を何とか使いこなすのが限度だったようだ。

《それで、どうした？ 狼<sup>ロウエン</sup>艶ではなく、俺に掛けたみたいだが？》  
電話越しにシュウが鴻鳴が自分二電話を掛けたことが意外そうな声を返してくる。

「う、うん。シュウ君はどうしてるのかなって……」

《どう、とは何だ？》

鴻鳴の言う事が分からないようで、シュウが戸惑いの声を返してくる。

「神子のこと、なんだけど……」

《何だ？ まだ動いてないのか？》

「う、うん。皆何処にいるのか分からなくて……」

恥ずかしさもあるのだろう。週に返す言葉が全て語尾が小さくなる。

《全く、お前と俺はNO. 05までの中で飛行が出来るんだ。飛んで探せば良いだろう》

何を言ってるんだ、とシュウが電話越しに鴻鳴を叱咤する。

「だ、だって、曇ってて見えないんだもん」

言い訳のようだが、鴻鳴にしてみれば事実で、それをシュウも分からないでもないためか、ため息を漏らした。

《調整は受けたら？》



「受けたけど、人がいっぱい良く分からないよお……」  
心細げな声に、シュウの声が途切れる。色々と同類の力を持つ者として、考えているのだろうか。

「ねえ、どうしたら良いのかなあ……?」

《そういうことで俺を頼るな。熊<sup>ゆうひ</sup>の爺さんに聞いたほうが、経験論が聞けるだろ?》

「熊<sup>ゆうひ</sup>のおじいちゃんは、私とシュウ君の能力とは違うから、分からないよお」

電話越しにシュウの唸り声のようなため息が漏れる。

《だが、俺にはどうすることも出来ない。マスターの仰せだ。諦めろ》

「そ、そんなこと言わないでよお。私一人じゃ何をしたら良いのか分からないだもん」

《それはこちらと同じこと。恐らく他の連中もそうだろう。しばらく様子を見てみる。お前なら大丈夫だ》

シュウにも、その詳細を明かされることなく、創生の任を受けて派遣された。そこでどう言ったことをするのかまでは、各々の判断ということらしく、シュウもアドバイスらしい助言は出来ないようだ。

「うゝ、うゝ。もう少し頑張ってみる……」

頑張ってみる割には、決意の感じられない不安に満ちた鴻鳴の返事に、シュウは頑張れ、と言いつ残した。

《他に困ったことがあれば、マスターに聞いたほうが早い》

「うゝ、うん。ありがとう、ごめんね、シュウ君」

ピツと通話を切ると、鴻鳴に一気に孤独の波が押し寄せる。

「……寂しいなあ。赫職さんの反応もないし、他の神子も何処いるのか分からないし、私、これからどうしよう」

シュウには頑張るとは言ったものの、やはりそう簡単には決意出来るわけではないようで、人ごみの波の中にゆっくりと一步を踏み出していった。

「やあ、九稲、お帰り。どうだったかい？」

NBSL本社ビル最上階にある、自称神坐天照、本名山田太郎の住居スペース。NBSLのビルは上階になるほどスペースが狭くなるため、最上階である太郎の家は、展望スペースほどで、通常の高層マンションに比べると、僅かに広さを感じる程度だった。それでも夜間は大阪市内の夜景が神戸の港町まで見渡せる絶景を独り占め出来る贅沢な邸宅だった。

「三件の戦闘があり、一人の神子が赫職との命約を結び、残りの二件で一件は敗績者の逃亡、もう一件は一人の赫職と神子の敗戦により戦闘は終結。神子を回収、赫職より資格の剥奪を行いました」  
事務報告のような言葉に太郎が満足げに頷く。

「それで、敗れたのは誰だい？」

「逃走したのが、No. 71、馮封マシカふうふうしかりです。敗戦したのが、No. 43とおんエンです。赫職は……」

「いや、赫職の事はいいよ。エンも調整不足が原因で判断を誤ったのだろう」

人間よりも神子を気遣う太郎。

「あなたは人間への慈悲はないのですか？」

太郎の下へ戻ってきた神子。紅い髪の稲浪の姉である、妖狐の九稲。稲浪が青い瞳であるのに対し、九稲は赤い瞳。顔つきは姉妹なのだろう。日本人離れした美しい造形。稲浪に比べ露出が少ない白と赤の神子服。

「何を言うんだい。私は見る目のある神子が婚いだ赫職のことは、きちんと見ているのだよ」

そうですか、とあまり興味なさげに九稲が息を吐く。

「ところで、エンを倒したのは誰だい？」

太郎がどこか含み笑いを浮かべ九稲を見る。

「赫職とお電話されていたのは、何方でしたか？」

太郎の思惑をあっさりと見透かす九稲。

「見ていたのかい？ 盗み見は感心しないなあ」

九稲の言葉に太郎が笑う。

「私の役目ですから。あなたが仰せになられたことですよ？」

それでも九稲の方がやりとりに関して上手うわてのようだ。

「君はしっかりしているねえ。さすがはお姉さん、かな？」

太郎の言葉を易々と九稲が受け流す。

「実際に稲浪の闘い方を見てどうだったかい？ 高天原とは随分異なったのだろうか？」

「周りをきちんと把握した上での行動を取るように心がけさせた甲斐もあって、赫職である隼斗さんをきちんと守り通しました。次第に適応出来てきているのでしょう」

九稲は己の役割以外にも、やはり姉として妹のことが気がかりだったようで、自分の教えを実行していたことに満足していた。

「そうかい。隼斗君には私もこの近畿地区ではなかなか見込みがあると思っているのだよ」

「そうなのですか？」

「何しろ、君のお目に適った青年だ。それに四霊龜が直々に赴いて彼を守ったそうじゃないか」

太郎が窓辺に立ち、階下の夜景を見つめる。

「彼女は隼斗さんのアルバイト先の先輩が赫職であり、そのことを理に手を貸したようですが？」

「だが、あの四霊神子だ。その中で唯一、紋を持つ彼女がわざわざ他の赫職を守るようなことをすると思うかい？」

赫職と契った神子は、赫職を守り、その赫職と自分を狙う神子を倒す。いかなる理由があろうとも、創生に加担している者は同調を結んだところで、裏切りなどがないわけではない。

「……そうかもしれませんね。稲浪の様子を見ている、何となく理解出来ます」

九稲が苦笑を浮かべると、太郎が勝ち誇ったように笑う。

「やはり大府は面白い。まだ他の地域では大した戦闘はないと言う

のに、こうも早々と神子たちが動き始めている」

「影響されているのでしょうか。他地域と比べて近畿は行動範囲が狭く、一つの戦闘でも神子なるものは感じるものですから」

「君も遅くならないうちに赫職を見つけておいたほうが良いのではないかい？」

「警戒に値するだけの神子の出現はまだありませんから」

大郎の言葉にも九稲は動ずることなく受け流す。

「果たしてそうかな？」

だが、大郎は九稲を刺激するように不敵に九稲を見る。

「………どういうことです？」

九稲の興味心が揺れた。

「この新神話の創生で、神子たちは大凡の均等で各地に散った。だが、この大府には、少々厄介な神子もいるかもしれない、と言うことだよ」

「それは行方不明とされている者ですか？」

大郎の言葉に九稲が乗る。

「どうだろうか。ここ近畿はNBSL日本本社がある。神子はそれを目指し集うだろう。そうなれば、九稲、君の力だけではどうすることも出来なくなるかもしれないのだよ」

「それはまだ先のことで？ 熊罴、鴻鳴、狼艶、シュウがいますよ」

九稲が各地を静定している神子を少々見下すように言う。

「だが、それはNo. 03～06までだ。君には一つ情報を与えよう」

大郎が咳払いし、衣を正す。

「No. 02と07が近畿にいるのは確認済みだ。そして、あの01もね」

大郎の言葉に九稲がハツとする。その表情に、大郎が満足げに近いしてやりたり感のある表情を浮かべる。

「まあ、あの二人はしばらく動くことはないだろうし、01も相当

なことでもない限りは動きそうもあるまい。だが、その内各地からもここへ有力者が集まる。そうなれば、分かるだろう？」

大郎の言葉はまだそう近いうちには起こらない。だが、いずれはそうなる時が来るということに間違いはない。

「私は私の信ずる道を往きます。あなたに指図される謂れはございませんので」

微かに見せた動揺も、すぐに眼差しを大郎へと真っ直ぐに向け、言い切った。

「そうかい。まあ君を止める理由はない。自由にするといい」

「そうさせていただきます」

とりあえずの報告が終わりと、九稲は大郎に一礼し、部屋を後にしようとした。

「あまり長く意地を張らないことだよ、九稲」

「何のことでしょう？ 私には思当するものがございません」

最後まで大郎の言葉を受け流した九稲が髪を靡かせながら、大郎の部屋を後にした。

「これからだ。これからが新神話の創生の始まりなのだよ」

誰もいない部屋で、大郎が一人夜景眺めながら、笑い続けていた。

## 十三神噺 二人きりの夜

「なあ、やっぱり今日も、だよなあ……」

隼斗が歯磨きを終わると、やはり先にベッドインしている稲浪がいた。

「何をつっ立っておるのじゃ。早う入れ」

ポンポン、と稲浪が自分の隣を叩く。一昨日と昨日の二日で、既に稲浪の中ではそうすることが当たり前だという認識が出来上がっていたのだろう。はは……、と乾いた笑いを浮かべ突っ立っている隼斗に、隣を叩いて早く来いと急かしている。

「やっぱり布団、出そうか？」

生活には慣れてきた感はあるっても、さすがに一緒に寝るってのは、なあ？

「必要ない。隣が空いておるのじゃ」

稲浪が布団を出そうとしている隼斗を止める。

「いや、でもな。さすがにやっぱ、マズいだろう？」

隼斗とて、まだまだ盛んな時期。いくら自分と結婚にも似た、赫職と神子として契りを交わしたとは言え、その見た目は明らかに欧米の美人だ。毎日毎日同じベッドで床を過ごすことは、少々苦しいとでも思ったのだろう。

「何がマズいのじゃ？ まだ我に遠慮しておるのか？」

稲浪がこうじゃなあ……。さすがに大人しく寝るって言うのは厳しいだろ。

稲浪の何も分かっていない無垢な表情に、隼斗が心でため息を吐いた。

「やっぱり、俺は布団で良い。稲浪はベッドを使ってくれ」

稲浪の首を傾げる様子を見て、隼斗が押入れの中に入れていた来客用の布団を取り出す。

「何故じゃ？ 隼斗は我と寝るのが嫌なのか？」

「嫌じゃないけど、さ。男には色々あるんだよ」

口に出せないことがな。色々と稲浪のことを知って、嫌いになんかなっていかない。むしろその逆だ。だからそこ、分けるところは分けないと自己抑制が狂う。そんなこととして稲浪に幻滅されるようなことはしたくない。

「何じゃ。そんなことか」

隼斗の言葉とその様子を稲浪が見て、体を起こす。

「そんなことって……」

「ここは隼斗の家じゃ。我と隼斗以外には誰もおらぬ」

それが問題なんだって。稲浪は分かっただよなあ。

「別に恥じることも、遠慮もいらぬ。我を欲するならば、我は構わぬ」

「ぶっ！」

稲浪の言葉に隼斗が噴出す。

「隼斗は我を抱きたいのじゃな？」

何処にも曲がらない真っ直ぐすぎる直球に、隼斗が動揺の色を隠せない。

「我と隼斗は契ったのじゃ。番も同じ。自然なことじゃろう？ 神々もそうして世界を創造したそうじゃ」

透け透けのネグリジェ姿で稲浪がそう言うと、誘っているようにしか隼斗には聞こえないようだ。どこかで聞いた覚えのある話を交えて。

その言葉が隼斗の理性を決壊させたようで、布団を出した隼斗が稲浪の隣にベッドに入る。

「……」

ベッドに入っただけは良いが、急に理性を取り戻したのか隼斗が、稲浪と顔を見合わせて見つめあう。

「どうしたのじゃ？」

稲浪が何もしてこない隼斗に不思議そうに見てくる。

「あ……」

隼斗が心の中で葛藤しているようで、やがて、稲浪に背を向けた。  
「ライトオフッ！」

隼斗がそう言うと、部屋のライトが消えた。

「？ 隼斗？」

自分に背中を向けて、電気を消すと、そのまま大きく息を吐いた隼斗に稲浪が声を掛ける。

「やっぱダメだ。俺が赦さないし、赦せない」

寝る、と隼斗が稲浪に背を向け目を閉じる。どうやら隼斗の心の中で、自制を呼びかけた天使が勝利を収めたのだろう。据え膳食わぬは男の恥。そう言う言葉があるが、隼斗にしてみれば、ただ創生に巻き込まれ、稲浪と赫職と神子と言う関係が出来、それに甘える形で情事に走ることが赦せないかったのだろう。相手の承諾の上のこととは言え、時間を掛けて気づいた関係でのことじゃなければ、隼斗は嫌なようだ。

「ふふっ、全くおかしな奴じゃな」

背を向ける隼斗に稲浪が笑う。暗闇に微かに見える隼斗の頭と肩。小さくなっている。

「っ！」

隼斗が背中感じる温もりに緊張を走らせる。

「どうじゃ？ 温かいじゃろう？」

「い、稲浪・・・・・・・・？」

稲浪が隼斗の背に寄り添い、腕を回してくる。首筋に感じる稲浪の吐息に隼斗が息を呑む。

「今、隼斗は情けないだとか思っておるのじゃろ？」

凶星のようで隼斗が声を漏らす。まあ、稲浪が良いと言っているにも拘らず、何も出来なかったのだ。男としてのプライドが崩れたも同然なのだろう。

「己を責めるでない。我は幻滅などではおらぬ。嬉しいのじゃ」  
ギュッと稲浪が腕に力をいれ、さらに密着してくる。

「正直、あのまま隼斗が迫れば、我は隼斗を突き飛ばしておったや



もしれぬ」

稲浪が小さく笑うのを、隼斗は身を硬くして驚く。

「我はそういった経験がない。良いとは言うたが、それなりに不安もあるのじゃ」

心臓の音でも聞かせようとするように稲浪が隼斗にくつつく。

「ドキドキしておるの、隼斗」

どこかおかしそうに稲浪が隼斗の耳元で笑う。

「そ、そりゃあ、な」

言葉を詰まらせる隼斗。鼻腔をくすぐる香と体温と感触を否応なく感じさせられると、先ほど押し殺した感情が再び湧きあがる。それを必死に押さえているようだ。

「我も同じじゃ。聞こえよう？ 我の心音」

自分のがドクドク脈打ち、稲浪の心音なんか聞こえないって。

「隼斗は我を思うて、己の欲を押さえた。我を氣遣つてのことじゃろ？」

全てを見透かすような稲浪の言葉。だが、それにも自信が満ちている。

「隼斗はそのことを思つて、昨夜も今宵も我と寢床を共にすることを躊躇ったのじゃろう？」

「・・・まあ」

照れ臭さに隼斗の声が小さくなる。

「姉上によく言われておった」

「ん？」

振り返ろうにも腕を回され、体を密着させられ、隼斗は 背を向けたまま稲浪の話に耳を傾ける。静か過ぎる暗闇の中に漂う空気が少しだけ落ち着く。

「稲浪はもう良い年をしてるんだから、一人で寝られるようになりなさい、とな」

自信に満ちた稲浪の声が、徐々に静かになる。酷く優しさを含んでいるように隼斗には聞こえた。

「こういう話をするのは、得意ではないが、我は今まで一人で寝たことがない」

「一人で？」

「うむ。父上、母上が我が幼き頃に他界し、以来我は姉上と二人で生きてきたのじゃ」

「稲浪にも両親がいるんだ？」

「てっきり大郎さんが、産みの親だと言ってたから、作り出したとかそういうのだと思った。」

隼斗の言葉に稲浪がコッソ、と痛くない頭突きをしてくる。

「当たり前じゃ。両親が居ったから我や姉上が生まれたのじゃ。會長は、我らをこの世界への導きを受けた、言わば育ての親に過ぎぬ」

「そうだな、悪かった」

人間ではない、白狐である稲浪が人間と同じよう親と言うものがあるように思えず、幾星霜の時を物の怪などとして生きてきたのだと、勝手に思っていた。

「寂しさもあったのやも知れぬ。姉上は我にとって母上でもあったくれた。我はそれに甘えておった」

稲浪がギュッとさらに力を入れて隼斗に抱きついてくる。

「狐焰を司る我らは長寿なる身。故に記憶は薄れ往くが、心の傷は一度ついてしまえば、人間の寿命を超えても癒えることがない。人間との闘争。理解を得られぬことへの辛さ。受け入れてもらえぬ心苦しさ。そう言うものが我らには多いのじゃ。この世は人の世じゃからな」

「・・・・・・・・・・」

隼斗は静かに目を閉じ、稲浪の話を聞入っていた。それしか応えることが出来なかった。

「かつて、愚かなる人間を打ち滅ぼし、我らが世界を構築するべき、と言う者があったそうじゃ。じゃが、その愚かなる人間がこの世界に何よりも大きな礎を築いた。我らには必要あらば狩猟をし、必要があらばこの力を用いて敵を討った。じゃが、人間は田畑を耕し、作

物を育て、恵へ感謝する。我らにはなかったものじゃ」

隼斗には、それは遠い遠い歴史の中での事なのだろう。稲浪も聞いた話じゃ、と過去の自分の種族を思い出しているようだ。

「我らは学んだ。故に会長の話に我らは惹かれた。遠くから見つめていることしか出来ぬ人間の生きる世界というものに。それに賛同した者が、神子じゃ」

「そう、なんだ？」

話が脱線していることに気づきながらも、指摘をすることなく聞き耳を立て続ける隼斗。

「姉上は達者じゃ。我に人間の生き方と言うものを教えてくれた。我は子供じゃ。姉上はよく我が眠る前にそうした話を聞かせてくれた。我は話を聞いて胸躍らせ、目が覚めることの方が多かった」

稲浪が感傷に浸るように笑う。

「それは母上も同じじゃった。我は眠る前に母上によくいろいろな話を聞いた。姉上は創生への承諾をしてから、我に実になる話をしてくれた。我が眠るまで、私の隣で」

「そっか。妹思いなんだな、稲浪のお姉さんって」

「そうじゃな。じゃが、それは我が子供じゃから、不安があったのじゃろう。創生に加わることで、我と姉上は離れることを聞いた時、我は拒否した。一人になることなど、考えたことがなかったでな。恐かったのじゃ」

少々恥ずかしさも感じさせる声のトーン。だが、聞いて欲しいという想いが隼斗を抱きしめる腕からも、密着している体からも隼斗は感じていた。

「我は常に姉上が傍に居ると思っていた。姉上の後に着いておれば、それで満足じゃった。じゃが、姉上はいつまでも我に子供でいさせてはくれなかった」

創生で、別れることを稲浪に理解させるためなのだろうか。それとも一人の大人へと成長させ、己の人生を歩ませようとしたのだろうか。隼斗の脳裏には様々な憶測が飛び交っていた。だが、一つだ

け分かることもある。稲浪がこのままではダメになることを示唆し、九稲は独り立ちさせようとしたのだろう、と。いくら長寿だからと、不死ではない。何事もなく天寿を全うすれば、九稲は間違いないく稲浪よりも先に死ぬ。そうなれば、九稲を中心に回っていた稲浪の時間が、一気に崩壊する。そこで稲浪が壊れないように、九稲は創生を足序あしついでにしたのだろう。

「我は、冷たいのは嫌じゃ」

「ん？」

「温かいのが、良いのじゃ」

隼斗の首元に直に吐息が感じられた。柔らかい稲浪の髪感触が隼斗の髪を交じり合う。

「隼斗が我を見た時、温かさの嬉しさと、隼斗の瞳に冷たさを感じた」

「っ！」

正直、ギラギラしていて少し恐かったぞ、と稲浪が小さな声で呟く。だが、隼斗にはその一言が恐ろしく耳元で大きく聞こえた。

「……ごめん」

熱くなっていた体の熱がどこかへサーッと消えていく。

「謝るでない。隼斗は何もしておらぬ。人とはそういうものでもあらう」

それが良かったのか、良くなかったのか、判断は微妙なところだが、稲浪が嫌そうじゃないなら、それが正しかったのかもしれない。突き飛ばされるよりは断然良い。

「今は温かい。それだけじゃ。我はこの温もりが心地良くて好きなのじゃ」

ギュッと離すつもりもなく、さらにこれでもか、と稲浪が隼斗に寄り添う。

「硬いだろ？」

「姉上とはまた異なる温もりじゃ。新鮮で良い」

バイトのおかげで嫌でも筋肉がついた。だが、稲浪はそれはあま

り関係ないようで、心地良さそうに声を漏らす。

「そっか。俺も温かいよ」

「うむ。私の温もりじゃ。堪能せい」

二人して小声で笑い合う。だが、顔は合わせない。お互い表情を見ていないから、そう、平気で言えているのかもしれない。声だけで相手の表情を思い浮かべる。それだけで今は良いようだ。

「明日はあるばいとか言うものがあるのじゃろう？」

「ああ、そろそろ寝るか」

隼斗が再び目を閉じた。

「うむ。こうしておれば隼斗も我を打つこともないじゃろう」

「・・・・・・・・あれはわざとじゃないっての」

根に持っていたのか、稲浪が笑いながら言う。

「今日は良い夢が見られそうじゃ」

そう言うのと、稲浪が小さな声で何かを呟き、隼斗に全身をくっつけた。

「眠れるかな、俺・・・・・・・・」

首筋に感じる吐息に、隼斗はため息をついて、稲浪が眠って一時間ほどしてようやく眠気に身を任せていた。

「稲浪って、甘えん坊なんだか大人なんだか、よく分からない奴だな」

まどろみに浮かぶ中で、隼斗のそんな呟きに稲浪は夢見の中で微笑んでいた。

## 十四神嘶 幼き神子の芽生え

「ねえ、琴音」

「うん？ どうしたの？ 眠れない？」

隼斗が稲浪を意識してなかなか寝付けない夜を過ごしている、その隣の部屋で琴音とつばさは親子のように寢床を共にしていた。

「そうじゃないけどさ、あの二人、信用していいの？」

つばさが琴音に甘えるように寄り添っている。大人な風貌で甘える稲浪とは異なり、つばさは見た目も実際も子供だ。隣室のような空気は一切なく、静かな夜を過ごしているようだ。

「ツーちゃんは、信用してないの？」

隼斗たちと出会った時のような慌てぶりは欠片もなく、落ち着いたお姉さんの雰囲気で、琴音がつばさの前髪を掻き揚げる。

「だって、俺たち神子は、元々同じ種族以外とは交流がなかったし」  
急に多種族との交流を持ち、その上、人間社会への融解ともなるとそれに適応するだけでも心身に掛かる負担は大きいのだろう。適応力を身につけた大人は、短期間で馴染むことが出来ても、つばさのように子供にしてみると、人間社会に出るだけでも精一杯の中で創生という闘いをしないといけないことに対しては、なかなか全てに目を向けることが出来ないのだろう。大府に来ていきなり、妖狐族の白狐稲浪と出会い、ほとんど流れるように仲間となったが、つばさにはまだ素直に納得出来ないようだ。

「でも、今日は稲浪さんと仲良く話してなかった？」

引越しの手伝いの時の様子や、稲浪が隼斗の危機を感じ、二人に協力を求めた時のこと。真っ先に稲浪と対話したのは、琴音ではなくつばさだった。

「それは、そう、だけど……」

夕飯の前の時も、つばさは稲浪と傍から見れば仲良くしているように見えていた。

「隼斗さんと稲浪さんのこと、ツーちゃんは嫌い？」

琴音の問いかけに、つばさ、うーん、と唸る。

「好きとか、嫌いとかは、よく分かんない」

琴音に対しては全幅の信頼でもあるのか、つばさは素直な男の子だった。

「今日、ツーちゃん、稲浪さんを隼斗さんのところまで連れて行ってあげたよね。その時、稲浪さんの闘い方って見てた？」

遠く離れた所で隼斗が神子との戦闘に巻き込まれた時、稲浪はいち早くそのことを感じ取り、片付けがようやく終りそうな時に、二人の下へ駆けた。

『琴音っ、つばさっ、我はここで失礼するっ』

稲浪の表情は真剣なものだった。

『どうしました？ 随分と急いでいるみたいですけど？』

琴音が突然の稲浪の変わりように、首を傾げる。

『隼斗が他の神子との戦闘に巻き込まれておるのじゃ』

『……分かるの？』

隼斗はバイトがそろそろ終わり、帰路に就こうとしている時間帯で、ここにはいないが、稲浪は一刻も早く駆けつけなければ、と言うような面持ちだった。

『紋が疼いておる。これは隼斗の身に何かが起こっておる証なのじゃ』

『そうなの？ ツーちゃん』

稲浪は自分の神子ではないため、琴音にはそれが本当なのか判断がつかなかった。

『うん。俺たち神子は赫職紋が、赫職に何かあると知らせてくれるんだ』

つばさの答えに稲浪が、頷き、琴音もそれを信じたようだ。

『でも、隼斗さん、梅田にいるんじゃないですか？』

この時間なら、バイトで近くにはいないだろうと琴音は思った。

『うむ。じゃが我の足ならば、ここからでも遠くはない』

『狐って足速いのか？』

つばさが足遅いんじゃないの？　と言うと、稲浪がつばさを睨む。  
『こらこら、二人とも喧嘩しないの。そういう事をしている場合じゃないでしょ』

仲間になった以上、他人事のように済ますわけにもいかない。隼斗よりも数日だが、創生についての知識をその分蓄えている。稲浪の焦る気持ちも分からないでもないのだろう。

『ここからは、稲浪さんでも遠いでしょ？』

『う、うぬ。じゃが、隼斗を守るが我の命約じゃ。すまぬが我は先を急ぐぞ』

稲浪が琴音の部屋を跳び出て行こうとするのを琴音呼び止めた。  
『待って、稲浪さん。隼斗さんは今、戦闘に巻き込まれているのでしょう？　だったら稲浪さんの足でつく頃には、どうなっている分からないわ』

琴音が少しだけ口調を強くして稲浪を呼び止める。核心を突いたのか、稲浪が足を止め振り返るが、この時も無駄にはしたくないように、表情には焦燥が浮かんでいた。

『ツーちゃん、稲浪さんを運ぶこと、出来る？』

琴音がつばさを見る。

『え？　まあ、一人くらいなら』

あまり自信は無さそうだが、琴音はその一言を信じたようだ。

『稲浪さん、ツーちゃんはきつと貴女よりも早く移動出来るわ。燕子とは言っても、私の神子だから、きつと大丈夫』

根拠は、相手を信用すること。それだけ。だが、それだけで良いのだ。稲浪も隼斗を助けに行くと言うことは、相手を信用し、大事に思っているからだ。

『良いのか、つばさ？』

稲浪がその方が助かる、と言っているような視線を向ける。

『はあ、分かったよ』



つばさが、はいはい、と乗り気ではないようだが、赫職の琴音が頼むことだけに断れないようだった。

『では、頼むぞつばさ』

ポンッと稲浪が白狐の姿に姿を変える。人間の状態では、つばさが稲浪を運ぶことはさすがに厳しいようで、それに考慮したのか稲浪が変化した。

『それじゃあ、ツーちゃん、稲浪さんのことお願いね』

『分かったよ。そんじゃ、行くよ』

玄関から行くよりも、と隼斗が稲浪を抱き上げベランダから大空へと飛び上がった。

『ツーちゃん、間に合って……』

琴音がただ小さくなっていくつばさを見つめるしかなく、その姿が遠い空に消えていくのをいつまでも見送っていた。

「危ないから先に帰って言われたから全部は見えない」

隼斗を見つけた稲浪が、地に降りるのも待ちきれないようで、つばさの腕から飛び降りた後、つばさは最後まで見届けることなく琴音の元へ戻っていった。

「そっか。でも、二人が帰ってきた時、隼斗さんも稲浪さんも大きな怪我とかしてた？」

優しく琴音が、すぐ近くで横になっているつばさを見つめる。男としてはまだ意識していないためか、琴音は母親のような優しい顔をしていた。

「えっと、してなかったと思う」

「うん、稲浪さんは少し切ってたけど、二人とも無事だったでしょう？」

うん、とつばさが小さく頷く。

「それに稲浪さん、ツーちゃんに感謝してたよね？ ツーちゃんを信用しているから、稲浪さんはツーちゃんの頑張りを無碍にしないように、隼斗さんを無事に守って、帰って来れたんじゃない？」

琴音に言われ、考え込むようにつばさが、琴音を見る。

「稲浪さんのことは、ツーちゃんも悪い人じゃないって言うのは分かってるでしょ？」

しばらく考え込むと、コクンと頷く。

「その稲浪さんが信用している隼斗さんが、悪い人に見える？」

ん？ と琴音がどこか少しだけ意地悪な笑みを浮かべ、つばさを見る。

「琴音、いじわるだ」

つばさがふてくされるように、背を向ける。

「ふふっ、ツーちゃん、まだまだ知らないことも沢山あるけど、隼斗さんと稲浪さんと協力して頑張ろうね」

っーん、と意地を張っているつばさを、琴音がそっと包み込むように腕を伸ばして抱きしめた。

「ツーちゃんには、闘いは難しいよね。でも、私たちには隼斗さんと稲浪さんがいる。私たちに出来ないことは助けてもらって、隼斗さんたちには出来ないことは、私たちがサポートしよう？」

「………どんな？」

隼斗が稲浪と分かち合う温もりのように、つばさが琴音の自愛に包まれ、ゆっくりと振り返る。

「ツーちゃんは、空を飛べるでしょ？ だから、稲浪さんには見えない所まで見渡せる」

「どうということ？」

大人と違い、子供は本当に信頼している人間には、いつまでも意地を張らない。優しさに包まれれば、それだけで安堵する。それが大事な人なら、意地を張ることも、構って欲しくて、でもその方法が分からないから、そうしか出来なくて、そうしただけのこと。だからつばさは、先ほどのことは忘れてしまったように、琴音を見つめる。

「私には、どんな神子がいるのかは分からない。でもね、ツーちゃんみたいに空を飛べる神子もいれば、稲浪さんみたいにすごい力を

使うことも出来る神子もいる。それは分かるの。色んな神子と闘うことになるんだろうけど、その時がいつも同じ状況だとは限らないでしょ？」

優しい顔をしながらも、琴音はそれなりにつばさのことを考えているようで、創生に対しての心構えと言うものを築き始めているようだ。

「そんな時に、ツーちゃんは稲浪さんの闘いを遠くから見つめれば、稲浪さんや隼斗さん、それに私やツーちゃんが傷つかないでいられる方法を見つけられるかもしれないでしょう？ 上手く出来るかどうかは分からないけど、ツーちゃんなら大丈夫だよな？」

目と鼻の先にあるお互いの顔。無言の信頼の証の距離なのだろうか。赫職である琴音は、自分の神子である燕子つばさを心の底から信じ、それと同じように隼斗と稲浪をも信用しようとしているようだ。

「俺、強いもん。琴音だって守れる」

「ふふっ、そうだね。ツーちゃんは頑張り屋さんだもんね」

琴音がつばさに微笑を浮かべ、つばさの頭を撫でた。

「でも、やっぱ、もっと強くなりたいなあ」

やれるだけのことをすれば良い。それでも子供は貪欲に求めたくなる。そんなつばさの言葉を琴音は笑みを浮かべて見つめていた。

## 十五神嘶 人間嫌いな稲浪？

ピーと朝の訪れを知らせるアラーム音が寝室に響く。

「ん．．．．ふああ．．．．．」

隼斗が目覚めが良いタイミングで目覚めたようで、大きな欠伸を漏らす。

「体、動かねえ．．．．．」

徐々に脳の回転がスムーズに働き始め、目を開くことが苦にならなくなってくる。昨日は目覚めの悪さから稲浪にビンタを喰らったが、今日はそんなことは無さそうだ。

「って、近っ！」

朝陽で微かに明るみのある寝室のベッドの上。昨夜は稲浪が隼斗を抱きしめていたため、隼斗の体の上には稲浪の腕がしっかりと回されていた。寝返りを打った際に、そのまま稲浪が強く抱きついてきたのか、隼斗が目を開くと少し顎を引けば、稲浪の唇に当たりそうなほど、稲浪の顔が近くにあった。

「い、稲浪．．．朝だぞ．．．」

自分の胸に押し当てられる、男にはない柔らかさ。短パンで寝ていたため、ネグリジェで下着一枚しかはいていない稲浪の足が、絡みつくようにくっついていて、全身に感じる柔らかい温かさに、寝起き一番で隼斗の体温が一気に上がっていた。

「んう．．．．．は、やと．．．．．」

「ぐっ、ちよっ、い、稲浪．．．．．？」

寝言なのか、稲浪が小さく呟くと、さらに隼斗の体が稲浪に傾く。

「く、苦しいぞ、稲浪」

焰だけではなく、九稻との鍛錬の甲斐もあるのか、稲浪はなかなか力もあるようで、ギュッと抱きしめていた腕の力が、ギュウツとなる。

「お、おいっ、稲浪、起きろ、いたいって」

稲浪の力に、隼斗は心地良さも半分、苦しさのほう若干上回っているのか、何とか稲浪を起こそうともがいていた。

「ん……んう………すう………」

だが、稲浪は隼斗のものがきがかえって心地良い揺すりにでもなっているのか、起きる気配もなく、顔を擦り付けてくる。

「あ、柔らかいけど、痛いって」

それでもやはり隼斗の鼻の下は、伸びていた。

「いつまでもこうしてられないしな。殴られるのはごめんだし、あれしかないか」

バイトの時間もあり、昨日のような遅れをとるわけにもいかず、隼斗が稲浪の顔に近づく。頬に掠る稲浪の寝息に、男の性が疼くが、昨夜のことを思うと、寝ている稲浪に行動をする気は起こらなかった。

「やっぱ、綺麗だよな、お前」

性格は、なんかまだまだ大人っぽい子供って感じで可愛いし。それでいて強い。ほんと俺、良い神子に出会えたんだろうな。

そんなことを稲浪の寝顔を見ながら思っていたが、それでも時間は待ってくれるはずもなく、隼斗は一呼吸置くと、そっと稲浪の耳元に何とか体を動かす。

「稲浪、起きろ………ふうう」

「きょうんっ!？」

隼斗が稲浪の耳元で、息を吹きかけた。その瞬間、稲浪がビクンと跳ね、青い瞳が大きく開いた。

「お? うう? ……?」

痛みはないが、全身に走った鳥肌、稲浪が混乱した表情を浮かべていた。

「おはよう、稲浪」

ビクンと跳ねた勢いで、隼斗に抱きついて腕が解かれた。

「は、はや、と?」

いまいち状況が分かっている稲浪が戸惑いの顔を、すぐ隣にい

る隼斗に向ける。

「稲浪も耳は弱いんだな」

予想以上の驚きように、隼斗は笑っていた。お互いに、すっかり目は覚めたようだ。

「な、何をしたのじゃ？　ゾクゾクゾクと、した気がするのじゃが・・・」

痛みはないため、稲浪も反論しようにも出来ないようで、息を吹きかけられたことへの混乱で、少々興奮にも誓い驚きの波に吞まれているようだ。

「何にもしてないさ。夢でも見たんだろ？　きっと」

だが隼斗は明かすことなく、笑って済ませると、先に起き上がる。毛布がズレて昨日のように捲れ上がり、裸体を晒している稲浪に、さっと毛布をかけた。さすがに三日も経てば、対処するだけの能はあるようだ。

「朝飯作るから、着替えて顔洗っておいてくれよ」

未だに頭上に『？』を浮かべている稲浪を一人残し、隼斗がキツチンへと出ていった。

隼斗が嘲笑の支度を済ませると、稲浪もそれに合わせるように、神子服に袖を通し、腰を下ろした。

「そう言えば、所長さんから送られてきた服って、そういうのばっかなのか？」

二人して穏やかな朝食の時間。隼斗の視界には朝から少々刺激の強い衣を纏った稲浪がいる。寝ている時のあどけなさはなく、凛とした大人の風貌だ。

「うむ。我らの普段着のようなものじゃからの。いつ戦闘があっても良いようにじゃ」

誰も見えていない朝の情報番組が、二人の朝食のBGMになっている。

「いつ戦闘があっても、ね・・・」

何事もない穏やかな朝。何処にでもいる恋人同士の同棲生活。男

は日本人、女は欧米人の国際カップル。何も珍しいことじゃない。だが、それはあくまで見た目だけのこと。昨夜の稲浪の闘いを見て、穏やかな朝だと言うことはなかなか思えなかった。

「稲浪はさ、闘うことに関しては何とも思っていないのか？」

「？ どういうことじゃ？」

隼斗が稲浪に声を掛けると、稲浪が口をもごもごと動かしながら傾げる。

「闘うことを条件に人間社会に来たんだろ？」

「そうじゃ。我が決めたわけではないが、結果はそういうことになるの」

「それって、人との生活が出来る代わりに、強制的に闘わないといけないんだろ？ 稲浪は嫌じゃないのか？」

昨夜のエンとのこと思い出して、聞かずにはいられなかったのだろう。

「隼斗は嫌のなのか？」

聞いた隼斗に稲浪が問いで返してくる。

「嫌って言うか、やっぱ日が浅いこともあるんだろうけど、恐くない？」

人間にはない能力を駆使して戦う姿。そして、自分にも襲ってきた神子の力に、隼斗は恐れを感じていた。得体の知れないものに対する恐怖と言うものは、動物には必ず存在するのだろう。何も感じることなく生きているものはいないのだから。

「恐い、か。我は姉上との鍛錬で恐いと感じたことがないからの。闘うことに関しては愚問と言うものじゃ」

アメとムチで育ったのだろうか。稲浪は創生での戦闘については、己に降りかかる対峙する神子には恐れを成していないようだ。

「我より強いものも居ろう。じゃが、我はそやつらと一戦を交えてみたいと思っておる」

隼斗の心配を他所に、稲浪は戦闘を好んでいるようだ。

「自分よりも強い神子と、か？」

「うむ。我らは力が全ての生き方をしておった。強きものは生き残り、弱きものは死に絶える。それが自然の摂理なのじゃと教わった」稲浪の言っていることは確かに正論だ。自然界は弱肉強食。強い種が残り、弱い種が滅びていく。この地球<sup>ほし</sup>に生命が息づいてから、それはいつまでも変わらないことだ。

「故に我は弱き者よりも、強き神子と闘い、己を高めるのじゃ。それが姉上に教わった我の生き方じゃ」

疑問は抱いていない真っ直ぐな心の言葉。綺麗なはずなのに、隼斗にはそれが悲しく思えた。

「稲浪は、自分が負けた時のこととか、負けるようなことは考えたりしないのか？」

だが、人間は違う。全てを平等に守り、共に生きようとする。弱いものを助け、強いものから守るための力を学ぶ。そして全てを守ろうとする。

「負けることなど考えて、何になる。負けるということはそこで終わりと言うこと。そのようなことを考える暇があるなら、己を鍛錬するに当てる方が当然の所業じゃ」

下らんことを聞くな、と稲浪が隼斗を叱咤する。

「人間は理を覆そうとする。じゃが、それが誤りなのじゃ」

「どういうことだ？」

稲浪の言葉に、隼斗が怪訝そうな目を稲浪に向ける。

「平等を謳うことは、既にその時点で平等ではないということじゃ」稲浪が穢れのない瞳を真っ直ぐに隼斗に向ける。

「人間は己らが生き残るために、他者を捕らえ飼育する。時には人間のためだけに生物を生かし、研究し、殺す。保護と謳い、我らの仲間である動物たちを囲う。誰が望んだのじゃ？ 我らが頼んだのか？ 言葉も理解出来ぬ我らに、適当な情を押し付け見世物にする。そして、人間を超える力を持つものを恐怖の対象に、里へ餌を求め下りてくるものを捕らえ、払い、殺す。そこに平等などない。人間はそうすることで己を誇示し、支配者を気取っておる」



どうやら稲浪は元々人間嫌いのようだ。隼斗を見る目が、敵でも見るように厳しい目をしている。ここで稲浪が狐の姿になれば、恐らく全身の毛を逆立て、隼斗に牙を向いているのかもしれない。

「人間は、勝手気ままに星を己らの物とし、破壊していく。我らの棲み処を無作為に破壊し、殺すために動物たちを飼育する」

「でも、それはそうしないと生きていけないからだろう？」

隼斗がせめても一声挟むが、稲浪には戯言にしか聞こえないようだ。

「かつての人間は我らと同じ生き方をしておった。空腹を感じれば獵に出、己らよりも強いものには仲間と共に戦い、守るものを守るという生き方を。じゃが、人間はざる賢かった。あらゆるものを生み出し、それを利用し、我らを恐怖に貶める。娯楽と称し、我らを見て楽しむであろう？」

稲浪の指す我らとは、人間以外の生物を指しているのだろう。

「己らが住みやすい暮らしを手に入れるために、我らの生活の場を破壊し、餌を求め彷徨う我らを邪魔者のように払う。そこに何の平等がある？ 我らを見下す以外に何の意味がある？」

初めて目にする稲浪の心底から沸く怒り。それは隼斗の背筋に冷たいものを感じされるには、圧倒的な力があつた。

「我らは我らを守るために、弱きものを見捨てる。じゃが、人間は我らだけではなく、己らすらも殺す。手を差し伸べ助け、時には殺す。我らには理解出来ぬことを仕出かす。力のない動物たちは人間に平伏すしかないのじゃ。じゃが我らは違う。我らが奮起すれば人間など容易く絶やしてみせられるのじゃ」

ゾツとしたものを感じさせる稲浪の言葉。積年の直接的であったり間接的であったり、人間の仕打ちに募る怨みなどは消えることがないのだろう。

「我らは生き残るために闘ってきた。ゆえに我は生き残る為の闘いに恐怖は感じぬ」

一通りの稲浪の話は終わったようで、稲浪が味噌汁を啜った。

「じゃ、じゃあ、稲浪は人間が嫌いなのか？」

「人間を恐れぬ生物はおらぬ。我もかつては人間と言うものは嫌いじゃった。己らの満足の為だけに種を滅ぼし、今度は勝手に守ろうとする。我らは頼んではおらぬ。何事に巻き込まれようが、我らには我らの力で生き残るだけの能力がある。人間などに頼ったりはせぬ」

そういう稲浪が隼斗の元でこうして朝食を頼っていることを、隼斗は気づいていない。

「じゃが、中には人間に保護され、大切に守られる者も居る。そのことを思うと未だに人間と言うものがよう分からぬ」

稲浪の顔から陰しさがなくなる。

「それじゃ、今はそうでもないってことか？」

隼斗が内心で安堵のため息を漏らす。

「そうではない。虐げられた事実には確かにある。我は全ての人間を好むことは出来ぬ」

そ、そうなんだ、と隼斗が気まずそうな表情を浮かべる。

「じゃが、隼斗のことは嫌いではない」

「え？」

「隼斗は我を助け、こうして我を養っておる。その心に我は惹かれておるのも確かじゃ。ゆえに我も、それほど人間は嫌いではないのかもしれぬ」

「かもって……」

「我はあくまで姉上や類の者から聞いた話でしか、人間と言うものを知らぬ。知らぬことが多いのじゃ。それだけで判断は下せぬ」

稲浪がふっと表情を和らげる。どうやら昔話のようなものを聞いて、刷り込まれた事実に対しての怒りはあっても、実際に人間社会に進出したことで、まだまだ自分の知らない世界を目の当たりにして、その基準が分からなくなったようだ。

「それに我には帰るべき場が出来た。そこを守るための闘いならば、我は何も恐れはせぬ」

安心せい、と稲浪が隼斗を見る。

「そっか。でもあんまり無理はするなよ」

「無論じゃ。我が身を崩せば、困るものが居るのじゃ。無粋な真似などせぬ」

今は隼斗が優先とは言え、琴音もつばさも稲浪が守ると自ら宣言した。そのことを稲浪はきちんと念頭に置いているようで、隼斗がその言葉に満足そうに微笑んで箸を進めた。

『昨夜、大府大阪の北区梅田、河内長野市、兵庫県豊岡市で、爆発事件が発生しました』

ふと会話が止まった二人の耳に、近畿圏のニュースが入ってきた。「そういや、最近多いよな。大府だけじゃなくて、全国でもあつてみたいだし」

焼き鮭とご飯を口に運ぶ隼斗が口を動かしながら呟く。

『原因は今のところ不明ですが、ガス爆発などの危険もあり、周辺住民の方へは避難勧告が発令されてます』

現場のリポーターとの中継で、リポーターの背後は大地が抉れていたり、建物が崩壊し、警察の管轄化に抑えられている様子が映る。

「また、相当な爆発だったみたいだな」

「何を言う。これは神子の戦闘の形跡じゃ」

稲浪が中継されている現場の様子を見て、言う。

「そうなのか？」

隼斗が意外そうに言うと、稲浪が呆れたようなため息を漏らす。

「創生が本格化してきておるのじゃ。見よ」

稲浪が目で隼斗にテレビを見ろ、と促し、隼斗が画面に目を向け直すと、そこにはこの一ヶ月で起きた原因不明の爆発事故と付けられた日本地図が映し出され、全国各地に赤い点マークがついている。画面が変わり、元警察庁捜査本部長だとか、評論家だとかが勝手な推測を差も事実であるように言っているが、稲浪はそれを下らんと一蹴する。

「闘いを望まぬ神子も居るそうじゃが、大半は赫職と共であったり、

己の力を誇示するために神子が戦闘をしているのじゃろう。連続してガス爆発など起こるはずがなからう」

「言われてみればそうだな。じゃあ、もうこんなに創生が動いているってことか」

稲浪と出会ってまだ数日だが、既にそれよりも前から神子が闘いをしているという証の印がいくつもある。隼斗は稲浪と出会った時が創生の始まりだと思っていたようだが、実際はそうではなかったのだと、驚きを隠せないようだ。

「恐れを感じるか？」

「そりゃあ、まあ」

いくら稲浪が強いからと言っても、昨日のエンとの先頭の後に比べると、比にならないほどの痕跡が画面に映り、隼斗のその騒然としている現場の様子に考えるものがあるようだ。

「我と隼斗は異なるのじゃ。それは仕方のないことなのじゃろうな」稲浪がいつもなら、そこで隼斗を安堵させるような一言を言うが、今日は静かに答えた。やはり稲浪も自分で人間とのことを言っていただけに、そのことを少なからず意識しているのだろう。

「これから、こういう闘いもあるんだよな……」

「それは避けられまい。創生に加担している以上、我は神子として、隼斗は赫職として、闘わねばならぬのじゃ」

改めて言う稲浪の言葉に隼斗は小さく息を吐いた。

「よし、では往くぞ、隼斗」

朝食後、バイトへの支度を整え隼斗が家を出ようとすると、稲浪が玄関前で待っていた。

「往くって、どこにだ？ 俺、これからバイトなんだぞ？」

隼斗が不思議そうに首を傾げていた。

「承知しておる。昨夜のことを忘れたのか？」

稲浪が隼斗に何を下らぬ、と見てくる。

「また神子との戦闘に巻き込まれた時、昨夜のような四霊は助けに

は来ぬ。昨夜は偶然じゃ。いつ隼斗が巻き込まれるやも知れぬのじゃ」

「どうやら稲浪は隼斗に何が起きてもすぐ傍で対処出来るように、ついていくつもりようだ。」

「いや、昨日のことはまあ、俺の責任でもあるけど、もう、そんなことはしないって」

流石にバイト先にまで連れて行ってしまえば、仕事に支障が出るどころか、昴さんがいる。それを考えると、稲浪を連れて行くのは気が引けるんだけど。

「何を言うか。隼斗がそうでなくとも、相手は時と場を選びはせぬ。我は隼斗の神子じゃ。本来はその傍につくのが当然なのじゃ」

稲浪はもう隼斗についていく気満々らしく、隼斗が来るなど言ったところで、聞く耳は持ち合わせないらしい。

「ほれ、遅刻するのじゃろう？ 早<sup>はよ</sup>う参るぞ」

「何て説明すりゃ良いんだよ……」

自分の身を案じてくれることに関しては素直にありがたいと思っても、流石に仕事となると、バイトの身ゆえに説明の仕様がなく、隼斗がうな垂れる。

「あつ、そうだ」

「ん？ 何じゃ？」

家を出て、二人が駅へと向かう中で、隼斗が思いついたように声を上げた。

「稲浪、俺がバイト中は何もないだろうから、稲浪には別の場所で待っててもらえるか？」

「どこでじゃ？」

待つことは了承したのか、稲浪が何処に居れば良い、と隼斗を見る。

「ちょっと待ってな」

隼斗が携帯を取り出し、どこかへ掛ける。不思議そうにしながらも、稲浪は隼斗と歩幅を合わせて歩く。

「はい、はい。それじゃお願いします」

いくつか言葉を交わすと、隼斗が通話を切った。

「よし、オッケー出たから、まずはそっちに顔出しに行くぞ」

「何処にじゃと言うておろう？」

「行けば分かるって。女性一人だから安心だろ？」

隼斗がそう言うと、女性、と言う言葉に反応した稲浪がキツと隼斗を見る。

「まさか、我以外にまぐわう女子おなこが居るのではあるまいな？」  
隼斗が噴出した。

「い、いるかつ！ 仕事の関係で知り合った人だよ」  
隼斗の様子に嘘ではないと感じたのか、稲浪が頷く。

「それじゃ、行くぞ、隼斗」  
グイッと稲浪が隼斗の手を引く。

「あ、おいっ、そんな急がなくても今日は大丈夫だって」  
駅へと向かうサラリーマンや学生の中を、見せ付けるように稲浪が隼斗の手を引いていった。

「我はもっと、隼斗のことを知っておきたいのじゃ」  
「何でだよ……」

周囲の人の目に隼斗が少々恥ずかしそうに、稲浪の手を振り払おうとするが、稲浪は離そうとはしなかった。

「赫職のことを知りたいのは当然のことじゃ。隼斗は我のことを知りたくはないのか？」

有無を言わせないような稲浪の物言い。

「そりゃあ、知りたいけど……」

「……何故に問いかけるのじゃ？」

「いや、知りたいですっ、はい」

「うむ。それで良い。我はもっと人間社会も知って学びたいのじゃ」  
今まで聞かされてきたことと、実際に己の目で見える社会との相違を稲浪は感じたいようで、その言葉に隼斗が納得したように数回頷いた。

「だからって、あんまりはしやぎすぎたりしないでくれよ」

「我は子供ではない。それくらいは弁えておる」

そうは言うが、稲浪はどこか楽しい面持ちで隼斗を引っ張っていた。

「あらあら、こんな朝早くからあんなにはしゃいじゃって。やっぱり、あの癖が出ちゃったのかしら」

隼斗と稲浪が傍からはいちゃついているように見えるのを、遠くからうふふ、と苦笑を浮かべながらも安堵した表情を見せる九稲がビルの屋上から二人を見守っていた。

「でも、ちよつと焼けちゃうわね」

## 十六神噺 こはくの忠言（前書き）

久々に連載再開です！

他にも連載がストップしてる作品がありますが、今は文学賞用の作品を書いていたり、ここに掲載してる作品を執筆していたりとあまり時間がないので、しばらくは連載停止とさせていただきますことを、ここにお詫びします。

本作は、閲覧が多い作品なので、ユースウォーカーズやIfなどと共に連載していきたいと思っています！



## 十六神噺 こはくの忠言

「すみませーん、遅くなりました」

今日のバイトが終わったのは午後五時過ぎ。多くの学生が下校路を賑やかに彩る。多少学生の若さに押されるようにつなぎから私服に着替えた隼斗は、太陽の丘へ来た。

『なんじゃこは？』

今朝、稲浪のテンションに多少疲れを見せつつも、親になった気で隼斗は先日訪れた施設へ来た。

『まあちよっと、待っててくれ。すみませーん』

物不思議そうに施設を見る稲浪を他所に、隼斗は出入り口から声をかけた。

『あらあら、おはようございます、隼斗君』

いつの間にか君付けに呼ばれる。そんなことにも気づかないくらいにこはくは大人びていて、朝から隼斗には潤いをもたらす。

『おはようございます。今日は、その、よろしく願います』

『はい、構いませんよ。それで、稲浪さんと言うのは？』

こはくが隼斗の背後に視線を向ける。

『むっ？ 隼斗、こやつは誰ぞ？』

隼斗に呼ばれこはくを見た稲浪の表情は警戒に変わる。それは神子としてのものなのか、稲浪にとってこはくの美貌が脅威と感じ取ったのかは露知らずだが、稲浪は隼斗とこはくの間に立つ。

『この人がここの経営者さんだ。俺がバイトから戻るまではこの人のお世話になるんだぞ』

『経営者だんて、大げさですよ。初めまして、稲浪さん。如月こはくと申します。ここで園長先生をしています』

こはくの少しだけ恥ずかしそうで嬉しそうな笑みに、稲浪は警戒するような、物見するような、何かが納得出来ないような表情だった。

『おい、稲浪、ちゃんと挨拶しろって』

それを失礼と感じた隼斗が、小声で囁く。

『主、何か臭うな？』

だが、稲浪はあくまでマイペース。隼斗の言葉などどこ吹く風だ。  
『おっ、おい、稲浪。何言ってるんだよ』

隼斗はいきなり失礼を働く稲浪に焦ったようにこはくを見る。

『あら？ あっ、いけないっ。お魚を焼いてたんだったわ。ごめんなさいね、すぐに戻りますから』

たったった、とスリッパ音を残してこはくが奥へと駆けていった。  
長い黒髪の残香をほのかに漂わせていた。

『うぬ？ 我はそう言うつもりではなかったのじゃが……』

姿を消したこはくに、稲浪はやはりかすかに拭えない疑問に首を傾げていた。

『おい、稲浪』

『何じゃ？』

隼斗に呼ばれ、ようやく稲浪が振り返る。

『お前な、いきなり失礼だろ』

『それは分かっておる。じゃがの隼斗、何か臭うぞ、ここは』

稲浪に言われ、隼斗が鼻を鳴らす。

『確かに、ちょっと塩焼きの匂いにするな。今朝ごはんみたいだな』  
入所した孤児の朝食なのだろう。奥から子供の声もちらほらと聞こえてくる。

『そうではない。我が言いたいことはそのようなことではない』

稲浪は隼斗の行動を一蹴する。それに隼斗は首を傾げる。

『ごめんなさいね。稲浪さんのおかげでお魚が焦げずにすみました』  
ありがとうございます、とこはくが丁寧な物腰で笑む。

『ふぬ、そうか。それは良かったの』

戻ってきたこはくに、その笑みに稲浪は調子を狂わされたのか聞くに聞けないようで、その場はそう凌いだ。

『じゃあ、俺はバイトがありますので、稲浪のこと、よろしくお願

います』

『案ずるでない。我は任されたことは見事にこなしてみせるわ』

稲浪の自信に満ちた言葉に、隼斗は先日琴音宅の片づけを無事にこなしたことを思い出したのか苦笑し、こはくは嬉しそうに笑った。

『それでは稲浪さんには、子供たちの遊び相手をお願いしても良いですか？ 私はまだ掃除と食事の片づけがありますから』

『うむ、任されよう』

そんな微笑ましいやりとりを耳にした隼斗は、改めてこはくに謝罪とお礼を言うのを背を向けた。

『隼斗』

その背中に稲浪の声が降りかかる。

『ん？ どうかしたのか？』

『妙なことに首を挟むのではないぞ』

『……分かってるって。じゃあ行ってくる』

昨夜のことを思い出したのか、隼斗も反省したように苦笑し、仕事へ急いだ。

それから数時間。朝陽だった太陽の丘も戻ってきた時には夕陽に包まれていた。

「はあ、今日はしんどかったなあ」

予約していた引越しが四件に、飛び入りだとかで急な配送が二件。いくらマッスルスーツを着用しての仕事と言っても、やっぱり疲れは溜まる。しなくても良い大金を手にしたとはいえ、早々一生遊んで暮らせるなんて出来るはずがない。夢見た世界の一つだけど、いざとなると俺ってダメだ。小市民には小市民の生活が染み付いてる。

「さて、稲浪はちゃんと出来てるのかなあ？」

こはくさんの言っていたことが確かなら、まだ受け入れてる孤児は二人。見える範囲じゃ静かなものだ。遊び道具が散乱してるとか、子供の賑やかな声が聞こえることもない。インターフォンを押した。

《はい？ どちら様でしょうか？》

こはくさんだった。

「こんばんは。風祭ですけど」

《隼斗君ですね？ 今鍵を開けますから》

言い終える前にフェンスで区切られ、防犯用に閉じられていた門の鍵が開く音がした。

「静かなもんだな」

門を潜って中に入ると、まだ花をつけていない黒土に植えられた植物に、乾いた砂地、何かを設置でもするのか、杭が打ってあるだけで何もない、孤児院としてはいささか寂しい気もした。

「あ、こんばんは。稲浪を迎えに来ました」

「はい、こんばんは。稲浪さんは中にいますので、どうぞ」

艶やかな黒長髪を縛ることなく背中に滑らせて、その対極の白のワンピースと黒のパンツルックで、綺麗なお姉さんって印象が強かった。ほんと先輩の言う通り、ここで暮らす子供が羨ましいと改めて思うな。

「じゃあ、おじゃまします」

玄関には靴が七足あった。四足は子供用で、後はこはくさんと稲浪のだ。棚には活けられた花が少し爽やかで甘い香りを放ってた。そう言えば、琴音さんの部屋も似たような匂いがしてたな。

「これ、斉人っ。好き嫌いをするのは良くない」

「やだっ！ これ嫌いなんだよっ」

いきなり怒声の応報が聞こえた。どう考えても一つは稲浪だよな？

「あらあら。ごめんなさいね。今夕食の時間なので」

こはくさんは苦笑するけど、俺の方がそうしたい。

「いえ、何だか俺が申し訳ないです」

稲浪が大人しくすると思うほうがおかしいんだよな。この数日で分かってたはずだ。

「そんなことはありませんよ。稲浪さん、私が思っていた以上に子供の相手が得意みたいですから」

そうやって本当に問題ないと笑ってもらえると、安心はするけど少し微妙な気分。

「ならん。男子たるもの、いかなるものであらうと出されたものは食す。これは人の世の語りだけではないぞ」

ぶっ。稲浪のやつ、今何言った？

「稲浪さんは面白いお方ですね。海外の方のような容姿なのに、古風な喋り方なんて」

「で、ですよねえ？　ちょっと変わってるんですよ」

あ、危ねえ。どうにかばれてないみたいだけど、もつとちゃんと教えとかないといつか絶対変なこと口走るな、稲浪は。

「見てみよ、斉人。此芽は好き嫌いせずきちんと食しておろう？  
女子が食せるものを斉人が食せぬわけがなからう？」

「斉人君、これ、おいしーよ？　食べないならわたしがもらっていい？」

どうやらここに居るのは斉人という男の子と此芽という女の子みたいだな。こはくさんに可愛がられるなんて男として羨ましいぞ、斉人。って、そうじゃないな。

「だ、ダメだっ！　これは俺のだから、俺が食べるのっ」

「うむ。それは汝のじゃ。己のものは己が食す。それでこそ恵みへの慈しみと感謝に繋がるのじゃ」

あれ？　けんかが始まるかと思ったんだけど、何か和解？

「隼斗君、不思議な表情をしていますよ？」

「あ、いえ……」

笑うこはくさんについてガラスドアを通る。広く明るいダイニングに三人が四人がけのテーブルに座っていた。斉人君と此芽ちゃん は普通の子供らしい格好だったのに、稲浪だけは朝の、神子服姿で一人浮いてる。

「そう言えば、稲浪さんの服装は奇抜ですよね」

こはくさんがさも今気づいたように俺に言うけど、絶対俺の趣味とか思ってそうな笑顔だ。何か恐い。

「ええ、まあ。あいつ、ああいう服が好きらしいんですよ」

言えるはずがない。俺が赫職で稲浪が神子で、よく分からないまま創世に参加させられて神子が訳分からない力を使って闘って、勝つ為に闘うんです。なんてさ。俺の頭が弱いみたいに思われるに違いない。

「そうなんですか……」

こはくさんはそう言いながら、静かに稲浪を見つめていた。その横顔は綺麗で思わず見とれた。

「……いてっ!」

「はーやーとーお。主、来ておるならまず我に言葉を掛けるべきではないのか? 何をデレデレこはく殿を見ておるのじゃ?」

いきなり即頭部にカッーンと痛みがあった。同時に足元に何かが落ちた。プラスチック製のスプーンだ。ついでにそれから顔を上げた瞬間、嫌に鋭く嫉ましそうな視線で俺を貫く稲浪がいた。

「あらあら、稲浪さん? 食事中に物を投げるだなんてお行儀が悪いですよ?」

俺が拾おうとしたスプーンを、こはくさんが屈んで拾った。長い髪が床に広がった。やばい。屈んだだけなのに可愛いと思ってしまうくらいにその姿が綺麗だった。

「そ、そうだぞ稲浪。そんなことをしたらダメだろうが」

「う……ぬう?」

ごまかすつもりで言ったんだけど、何だか急にダイニングの空気は冷たくなった?

「お夕飯の時はみんなで仲良く、好き嫌いせずに食べましょうね?」

もちろん、オ夕食に使うスプーンを投げてはいけませんよ?」

「はーい。でもでも、ママ先生え。俺食べたよ。美味しかった」

「私も私も。ママ先生のご飯、とってもおいしーよ」

こはくさんが腰を上げて、俺を見ることなく手にしたスプーンをダイニングに連なる対面式キッチンの流しで洗う。俺からは壁で見えないけど、斉人君と此芽ちゃんこはくさんの優しい物言いの忠

告にお互いに背中越しに元気だ。稲浪のさっきの誘いの言葉に乗せられた斉人君もしっかり食べたみたいで、そこは稲浪に感心した。

「ねっ、稲浪さん？」

「う、うむ。すまなңыз。我としたことが、猛省しておるからに、こはく殿よ……」

でも、対面式キッチンに正面を向いて一人座ってる稲浪だけは、二人とは表情が明らかに違っていた。

「稲浪？」

「は、隼斗よ……」

対声をかけて近づいた。

「兄ちゃん、だれー？」

「だれえ？」

すると、斉人君と此芽ちゃんが俺を見て首を傾げた。

「お兄さんは、稲浪さんの恋人さんなのよ」

「えっ？　ちよっ、こはくさんっ？」

背後からの俺と稲浪の関係を勝手に吐露したこはくさんに振り返ると、にっこりとやっぱり見惚れる笑みのこはくさんがいた。

「うふふっ、照れなくても良いんですよ」

いや、照れてるわけじゃないんだけど。どうもこの人のペースには逆らえないと言うか、自分のペースを維持出来ない。稲浪もどうしてかこんなに笑顔の綺麗な人を前に、凄んでるというか恐れてるように俺を見ってくる。

「それで稲浪。さっき俺を呼ばなかったか？」

縫るような、救いを求めるように見てきた気がしたんだけど。

「い、いや。我の気のせいであつたようじゃ」

何でもない、と稲浪は食事を終え片付けを始めた二人を他所に、テーブルを拭いた。変な稲浪。

「おい」

「ん？」

不意に体が少し右に傾いた。袖を引張られた。斉人君に。どこと

なくどっかの誰かに雰囲気似てるような。

「ママ先生はな、俺の嫁だっ！ 兄ちゃんになんか渡さないからなっ」

は？ 何だ？ いきなりのその告白は。

「あら？ まあ、うふふっ」

こはくさんはほほえましそうにこつちを見て微笑んでる。

「いや、俺は別にそんなつもりはないよ」

「そーだよ。お兄さんには、かのじょ、がいるんだもん」

「うぬ？ 何じゃ、此芽？」

ほらほら、と此芽ちゃんが稲浪の背中を押して、俺の方へ連れてくる。稲浪も困惑したように俺と目を合わせる。

「やっぱりお二人は仲がよろしいんですね。この子達もそう思ってるみたいですよ？」

「そーだよ。お兄さんはママ先生より、稲浪お姉ちゃんが大好きなんだもんね」

決め付けられた。状況がイマイチ理解出来ない。でも、漂う空気から、何となく斉人君からはこはくさんに近づくなよ、と鋭い視線を浴びるし、此芽ちゃんは俺に稲浪が好きだよね？ と者素顔笑顔だけど、その目がどうしてか笑ってるようには俺には見えない。

「うむ。無論じゃ。我と隼斗は契っておるからの。誰であろうと入る隙などないのじゃ」

なあ、稲浪。俺はお前のその都合の良い事への反応が羨ましいよ。俺にはどうしてか此芽ちゃんにもこはくさんに近づくなって言われてるよう泣きがしてならないってのに。

「こらこら、斉人、此芽。隼斗君たちをからかうのはそれくらいにしないさ」

「はーい。でも、ママ先生は俺と結婚すんだから、あんま仲良くすんなよ」

「お兄さんは、稲浪お姉ちゃんと幸せになるんだよ？」

斉人君は裏表がないんだろうな。此芽ちゃんは怒らせるときつと



恐いタイプだ。可愛い子供と言う印象が崩れてきたな。

「えーと、何かお邪魔みたいなので、俺たちはそろそろお暇しますね」

さっさと帰れ。そう言う視線が下からチクチク刺さってむず痒い。

「そうですか？ ではお見送りしますね。斉人、此芽、二人はお風呂の支度をして置いてね」

こはくさんに言われて素直に二人が部屋を出て行く。俺に睨みを効かせて。一瞬だけ。

「今日は稲浪をありがとうございました」

玄関先まで見送りに来てくれたこはくさんに、もう一度頭を下げた。

「いえ、こちらこそ、稲浪さんには掃除と子供たちと遊んで頂いて、私も随分と楽をすることが出来ました。それにごめんなさいね」

にっこりと笑うこはくさんが、苦笑に変わって俺に謝罪した。

「あの子達は、両親に捨てられたと言うことを自覚しているみたいで、私がまたそうするんじゃないかって、きっと恐怖を感じている部分があるんです。あんなことを言うのは気を悪くされたかもしれないが、愛情を求める子供の思いつく方法の一つですので、あまりおきになさらないで下さい」

その一言に俺が感じたことがフラッシュバックして、改めて思い直した気持ちを当てはめると、今度は微笑ましさすら覚えた。なるほど。愛情に飢えた子供は愛情を欲する為、己に出来ることをする。斉人君が俺を嫌煙するのも、此芽ちゃんが稲浪と俺を異様にくっつけようとするのも、二人にとって俺が大好きなママ先生を取ろうと近づく不貞の輩とでも思ったから、出来ることをした、か。

「うむ。子供は何も知らぬ。だからこそ、気に留める必要はない。我も隼斗と別れた後は奇異の目で見られたが、時経つ後に我への警戒も解けた」

稲浪も最初はそう思われたのか。まあきっとその格好のせいもあるんだろうけど。

「ええ。可愛いらしい子でこはくさんが羨ましいですよ」

「まあ、隼斗君ったら」

うふふ、と気品ある笑みを浮かべるこはくさん。やっぱり綺麗だ。この後あの子達はお風呂か。

「これ隼斗。何を鼻の下を伸ばしておる」

「いってっ！」

「あらあら」

稲浪に足を踏まれた。なかなか痛い。

「こはく殿よ。また我は来ても良いか？」

「ええ。いつでもいらして下さい。大したおもてなしは出来ませんが、あの子たちも楽しみにしていますから」

稲浪はまた来る気があるらしい。まあ迷惑を掛けなければ俺はそれで良いけど。

「それじゃ、失礼します」

「ハイ、お気をつけてお帰り下さい」

「うむ。さらばじゃこはく殿」

物腰穏やかな一礼を背に受け、俺たちは太陽の丘を後にしようとした。

「隼斗君、稲浪さん」

門を出て閉めようとしたら、こはくさんに呼び止められた。笑顔ではなく、凜とした大人の女性の風貌で。

「今宵よりの三日間、夜間の外出はお控え下さい。お仕事が入り用であろうと」

冷めたような視線。穏やかな空気を無数に張り詰めさせた糸を纏うように白い緊張を感じた。

「え？ それってどういう……」

「？ よう分からんが、忠告に感意を示すぞ」

「では、またいつでもいらして下さいね」

そしてこはくさんに笑みが戻った。稲浪の会話に阻まれ、俺の疑問は風の中へ消えてしまい、改めて聞きなおす間もなく、稲浪が俺

の腕を引いた。

## 十七神噺 静寂と匂い（前書き）

更新です。

今回はアクションをそろそろ持っていこうかと思う人がいるかもしれませんが（私自身が書くこうと思ってたんだけど（苦笑））、そう言う展開は次からにしました。

先に企画物と文学賞物、「i f」と「Youth Walkers」を更新するつもりなので、次回更新日は7月4日くらいになります。

## 十七神嘶 静寂と匂い

「お、おい、稲浪」

手を引く稲浪の力は、そこいらの女の子とは比にならない強さだった。

「待てって。さっきのこはくさんって……」

「隼斗。こはく殿は只者ではない。忠言を申したのであらば、我らは従うに越したことはないのじゃ。直に日も暮れる。我も意を解したわけではないが、ここは引いた方が良いのじゃ」

稲浪にしてはやけに素直な反応だ。かえって疑問が大きくなる。

「なあ稲浪。お前、今日何かあったのか？」

そうとは思えない。

「うむ。こはく殿は只者ではない。そう感じただけじゃ」

只者じゃないって。俺には綺麗なお姉さんって感じしかしなかったけどなあ。

「詳細は帰ってから話そう。我もあまり良い気がせぬのじゃ」

駅に向かって歩く俺たちは、主に稲浪がだけど、人の注目を集めている。格好が格好ってことなんだろうけど、俺まで一緒に恥ずかしい。それでも稲浪が堂々と歩くもんだから、さらに困るんだ、これが。

「まあ、ここでゆっくり話すのは俺も遠慮したいしな」

奇抜な格好をしている人はいるにはいる。稲浪も恐らくその一人として見られているんだろうけど、中には俺たちみたいに、趣味とかそう言うものじゃなくて、創世の神子としての戦闘に特化した各神子の特徴を支援する神子服の可能性もないわけじゃない。稲浪が何も言わない以上、俺が分かるのは赫職の体のいずこにある、俺の手にあるものと同じ赫職紋を探すことだけ。とは言ってもやはりこの人の波の中で一人一人を見ることは難しい。俺も手はポケットに入れたままだし、他の赫職も同じように隠しているはず。湊川先

輩は別ものとして。

「じゃがの、隼斗」

「ん？ どうした？」

話が終わったものかと思っていたら、稲浪が腕を引いた。引き寄せられて腕が胸に当たる。やわらかいと思おう前に、公衆の面前ではやっぱり恥ずかしい。

「あくまでも我の推測に過ぎんのじゃが、近いうちに強大な力が動くかもしれない」

道行く人の顔は誰もが笑顔か無表情、覇気のない顔の三種類ばかり。その中で稲浪だけは真剣と言うか、表情を固くしていた。

「強大なって、亀甲さんみたいな、か？」

四霊亀の亀甲さん。湊川先輩の神子で世界中の神子の中でも圧倒的な能力を有する人。のんびりと毒を吐くちよつと変わった人だけど、あの人のおかげで俺は助けられたのは事実。

「四霊とはまた別じゃ。と言うより四霊の力は今の我では対抗するものではない。あれはそう簡単に動きはせんじやろう」

どうやら違うらしい。俺としてはまだまだ知らないことが多いから、ちよつとした体験に合わせてその世界を知ることが出来ると言うか、それでしか分からないんだけど。

「じゃあ他のことなのか？」

「前に言うたことがあるう。この国には我も其の内である神子と、NBSLより遣わされし神子がおると」

「狗とか言ってた神子のことか？」

「うむ。四霊は無論じゃが、あやつらの力も別格じゃ。確証得るものはないが、我にはこはく殿の忠言に相賛するものを感じるのじゃ」  
人間の俺には分からないものを、稲浪は感じているのか。疑うものがない以上は、そのことに関しては間違いない可能性はある。

「帰ったら琴音さんにも話したほうが良いな」

「うむ。じゃがああの二人は元より戦闘向きではない。故に出歩くようなことはせぬと思うが」

腕を組んだまま稲浪が言う。離す気はないんだろうな。これは単に稲浪がくつつきたいだけなのか、それとも感じる何かに対する不安のようなものを紛らわそうとしているのか、俺には判断が付かず、そのまま歩くしかない。

「それでも、琴音さんとはつばさ君は仲間なんだから情報は共有したほうがいいだろ」

「あくまでも我の予感でしかないのじゃがの」

稲浪が苦笑する。その苦笑すら綺麗なもんだと思う俺は、随分と絆されたんだろうか。

「俺は創世のことは稲浪の話と山田さんの冗談かどうか曖昧なことからしかよく分からないんだ。だから稲浪がそう思うなら信じるよ」

「隼斗……」

じゃないと、またあんな目に遭ったら、次は助かる確約なんかありはしない。だから創世に関しては俺は稲浪が最も信頼の置ける人いや神子なんだ。つーかもっと本音を言えば、稲浪を信用しないと俺が死ぬかもしれないって体現があったらなんだよな。

「だから、まだ力のないつばさ君の為にも俺たちがしっかりしないとイケないだろ？」

「……そうじゃな。全く、我が赫職には感心させられてばかりじゃ腕を組む力が強くなった。腕に感じる柔らかな感触に神経が集中した。」

「それは俺の言葉だと思うぞ」

稲浪には巻き込まれたこともあるけど、生活においては潤いと温もり、懐が厚くなった恩がある。その上俺の危機を助けてくれた。どう考えても俺が稲浪に言うべき言葉だと思う。

「いや、これは我の言葉じゃ。我の言葉は我のものじゃ。誰のものでもない」

かっけえ。とか思った。

「なら、俺にも言葉はあるぞ」

そこでちよっとした対抗心のようなものが燃えた。稲浪が俺を少

し見上げる。綺麗な目だよなあとかつい見惚れそうになる。

「稲浪が来てくれて、俺はほんとに感謝してる。退屈で何もなかった生活が楽しくなった」

それは事実だ。無意味に明日を迎える為だけに生きている俺の前に現れた、あまりにも俺には不釣り合いな美しさを持つ稲浪。専門の頃に学んだものが、今日の前で現実としたある。それは恐怖であり、混乱であり、不安であり、楽しい。

「ふむ、ならば良い。これもまた巡り合わせの賜物じゃ」

ふふっ、と稲浪が笑った。俺を見ずに夕陽に顔を赤くして歩き去る人間の行き交う前を見ながら。

「自演したのも賜物なのか？」

「あれは姉上の仕業じゃ。我は何もしておらん」

そこはお姉さんのせいと言うことは変える気はないのか。俺にしてみればどっちもどっちなんだけど。

「あ、おかえりなさい、隼斗さん」

「琴音さん。今からお出かけですか？」

電車を降り、家に向かって歩いてたらマンションの階段で琴音さんとつばさ君がいた。

「はい、ちよっとお夕飯の買い物に」

陽は随分と落ちた。一番星が煌めいている。稲浪とこはくさんの言葉を思うと、どうするべきか少し躊躇った。

「うむ。往くはあそこじゃろう？」

「？　そうですよ」

階段の先から稲浪が指す、俺がいつも利用するスーパー。そっからそこだ。

「何だよ？　なんかあんのかよ？」

つばさ君が相変わらずまだ少しふてくされたように見てくる。

「この辺りならば影響はないじゃろうが、夜間の外出は抑えよ」

俺の代わりに稲浪が簡潔に言う。ほんとに凜々しい奴だよ。

「どういうこと、ですか？」



琴音さんが首を傾げる。

「神子、か？」

勘づいたつばさ君が言う。やっぱり神子には神子なりの勘のような本能でもあるのか？

「それはまだはつきり分からないんですけど、稲浪と俺の知り合いの人がそう言うので」

間違いはない。と思うことにしている。

「知り合い、ですか？　と言うことは隼斗さんは他にもこのことをご存知の方が？」

琴音さんの疑問の声に、俺ははっとした。

「そう言えば、そうだ……」

何でこはくさんは俺と稲浪にあんなことを言い残したんだ？　俺は創世のことなんか言っていない。

「稲浪、お前もしかして喋った？」

「何を言う。機密は我とて守る」

馬鹿を申せ、と稲浪が言う。そうだよな。こいつ何気に危ないことはあるけど、確信は言わないよな。

「どういうことですか？」

「何だよ、俺にも分かるように言えよ」

琴音さんとつばさ君が不思議そうな目で見てくる。

「あ、いえ。なんとと言えば良いのか……」

正直なところ、こはくさんに関して知ってることは少ない。太陽の丘という孤児院の園長をしていて、綺麗で優しい人。それくらいだ。

「今は何とも言えぬ。我もあくまでと言うわずかの可能性でしか感ずるに至っておらぬ。詳細は追って伝えよう。今はこの忠告を片隅においておくが無難と言うものじゃ」

「はあ……」

「わけわかんねえけど、分かった。夜に出かけなけりゃ良いんだろ？」

「うむ。今は神子の活動も感じられぬ。ならば今のうちに要件を済ませておくと良い」

稲浪がそう言うなら安心なんだろうな。

「はい。では足早に買い物は済ませます。行こう、つーちゃん」

「うん。じゃあな」

俺たちの横を抜けて二人がマンションから出て行く。別に大したことじゃないんだけど、今日は夕飯は一緒じゃないのかと、ちょっと残念だった。

「隼斗よ。我らも夕餉の支度じゃ」

稲浪に急かされ部屋に戻る。支度と言いつつも、結局稲浪は料理は出来ぬと食器を出すだけを手伝った。それって手伝って言えるのか分からないけど、まあ片付けも手伝ってくれたから良しとする夜だった。

「なあ稲浪」

「なんじゃ？」

夕食後、入浴を済ませ、休憩を挟んで寝る。いつもの繰り返しなのに風呂上りの稲浪の色っぽさにはまだ慣れなかった。

「お前、今日何したんだ？」

「こはく殿の下でのことか？」

「ああ」

そして就寝。稲浪が歯を磨いている最中に部屋に布団を敷いたんだけど、入れ替わりに俺が歯を磨いて部屋に戻ると、その布団がなくなってた。そして俺のベッドには稲浪がいた。まあ予想してなかったわけじゃない。形式として、モラルとして一応の策を講じた。それを稲浪は見事に打ち払った。

「そうじゃな。我がしたのは、まずは清掃じゃ」

「掃除？」

「うむ。こはく殿曰く、掃除は全てを整理し始まりをもたらし行い、だそうじゃ」

勉強になったぞ、とどこか自慢げにトイレからリビングを掃除し

たことを俺に話す。その様子は俺と横になって、広がった髪から甘い香りが漂い頬に垂れる稲浪の顔が俺を誘っているようにしか見えない。感じる温もりすら妖艶だ。でも、言葉は幼い子供のように弾む声色で、妙に自制心を働かせる。

「他には？」

「斉人と此芽と共に荷解きも手伝ったぞ」

「また荷解きか。稲浪って何気にそう言う仕事多いな」

琴音さんの時といい、今日のことといい、稲浪には俺と同じ引越し業務の一つの荷解きをする定めでもあるのか？

「その後は昼餉を囲み、花壇に花を植えたな。花が咲くのは春じゃそうじゃ。色とりどりで綺麗な花が咲くと言うておった」

「そっか。ならその時に見に行かないとな」

「うむ。じゃが、こはく殿には他にも習うたこともある。いや、見透かされたようなものを感じたのじゃ」

「ん？ 見透かされたって？」

稲浪の表情と声色が相応に戻る。もぞもぞと動き、稲浪がうつぶせになり、枕を抱きかかえるようにして俺を見る。三段階の小照ライトがついているから稲浪が妙に色気を帯びて、うつ伏せでベッドのマットに押し付けられる裸体が布団に曲線を帯びさせ、ネグリジェ姿のせいで形の分かる乳房が押しつぶされて、思わず視線が何度も稲浪の顔と行き来してしまった。ダメだ、俺。こんな美人を横にしてはしたないことしか考えてない。

「なんと言うべきなのかの。こはく殿はどこか姉上のような匂いにするのじゃ」

「匂い？ お姉さんと同じ？」

ごまかす為に稲浪を見ないで天井を見る。けど美しく艶かしい体温と香りだけは遮れない。

「何とも言えぬは誠じゃ。じゃが、こはく殿にはどうも神子として反応するものを感じるのじゃ」

「それって、こはくさんが神子ってことか？」

どう見てもそんな雰囲気はないし、神子としての稲浪にあるような紋も見られなかった。

「それは分からぬ。今分かるは只者ではないということだけじゃ」「何だそれ？」

思わず苦笑がもれた。どう考えてもあの人は綺麗な女性だ。落ち着いていて穏やかで、俺が巻き込まれているような非現実な世界なんか知らなくて、孤児の為に宿りの家を構え、安息をもたらししている、強いて言えば聖母のような印象しかない。

「人間にはない、じゃが我らにはある特異の雰囲気を感じるのじゃ」稲浪の言うことはよく分からない。稲浪も俺に伝わらないから、どう説明すれば良いのか分からないように、何度か小さく唸った。

「とにかく、我が居ぬ間にこはく殿には不用意に近づかぬことが無難なのじゃ」

良いか？ と稲浪が顔を寄せてくる。それに合わせて足にスツと稲浪の足が触れる。思わぬ温もりに脈動が強くなる。

「いや、別にこはくさんはそんな人じゃないって。人を疑うのは大事かも知れないけど、あんまり失礼な態度は取るなよ」

「そのようなことは承知しておる。じゃが隼斗。主は先日のことを忘れたわけではあるまいな？ 警戒を怠るはすなわち、命を捨てたも同然ぞ」

「うっ……痛いところを」

先日の騒動。そのことに關しては素直に聞き入れるしかない。

「良いか隼斗。隼斗は軽視しすぎておる。神子による創世は甘いものではないのじゃぞ」

稲浪が頬に垂れる髪を掻き揚げる、いちいち色っぽくて話が半分ほど聞こえない。

「隼斗の神子は我だけじゃ。他の九十九の神子は全て隼斗の命をも狙うのじゃぞ」

「いや、つばさ君は違うだろ」

「今でこそじゃ。出会いこそ違えば、琴音とは敵対に解するところ

じやったのじゃぞ」

「そりゃあ、まあ……」

言われてみればそうなんだよな。つばさ君の赫職が琴音さんじゃなくて、この前のあの男みたいな奴だったら、確実に稲浪は手に掛けたはずだもんな。

「じゃからこそじゃ。疑わしきは解<sup>げ</sup>する前に距離をとれ、じゃ」

ふふん、と良いことを言ったように稲浪に笑みが浮かぶ。ほんと何人だよお前とか思う。

「気をつけるよ。稲浪がここまで心配してくれてるんだし」

「なっ、何を当たり前のことをゆうておるのじゃっ。我は隼斗が神子。赫職こそが我が御霊も同然なのじゃ」

薄暗くても分かる稲浪の紅潮は可愛いと思うのと同時に愛くるしかった。

「明日はどうする？」

「こはく殿の下、と言いたい所じゃが、我はまだ人間社会を垣間見ておらぬ。隼斗について往くぞ」

「えっ？ それはちよっと……」

「何じゃ？ 我が同行するは不満か？」

さっきの愛くるしさはどこへやら。稲浪の顔が近くで俺を威嚇してくる。

「なんて言うかな……ちよっと、まずいかも」

今の話を聞いていると、稲浪を仕事場に連れてきたらどういうことになるのか、何となく予想がついてしまう今が嫌だった。

「何がまずいのじゃ？」

何も知らないからこそその無垢なる疑問の瞳を見返せない。だって、仕事場には湊川先輩が居るし、この前助けてもらった亀甲さんは先輩の神子らしいし、亀甲産の話を聞いているともう一人先輩は神子と命約を交わしてるっばい。もしそれが稲浪に知られたら、俺は何を言われるのか。きつと怒られる。稲浪に怒られるのって怖いんだよな。外人に怒られてる感覚しかないし。

「いや、まあ稲浪には関係ないから」

思いつきり関係ある。つーか、稲浪を連れて行けば創生のことは先輩も知ってるけど、俺を敵視しないって言ってるから、それは少しは信じてるけど、それ以上に稲浪は白狐だけど、見た目はどう見ても女。それもかなりの美人。そうなると会社の人たちはともかく、先輩が一番厄介だ。

「我に関係なきことなら、我が同行したところで問題はなからう？」

「あ、いや、関係ある、かな？」

思わず口が滑った。否みに思い留まってもらおうと思ったのに、そこを突くとは。

「怪しいのお。何を隠しておる？ 赫職と神子は一心双体。体は違えど心は一つ。我への隠は隼斗への不信になるのじゃぞ」

つまり、包み隠さず話せと？ じゃなければ稲浪は俺を信用しないと？ なんと言うか子供の駄々みたいだな。

「まあそんなに言うなら来てみるか？ 俺は勧めないぞ」

「構わぬ。我は往くと決めたのじゃ」

俺が折れた。稲浪のこの状態での我儘が、正直俺にはいつもの稲浪よりも愛おしさを感じてしまった。ダメだな俺。

「でも明日も現場だから、ついてくるのは事務所までだからな。作業は契約で人数決まってるんだ」

「ふむ。その間は我は町を流浪でもするでしょう」

「流浪って……」

俺は隣でふさふさサラサラの好い匂いの髪に包まれて目を閉じる稲浪に、不安が脳裏を過ぎって、なかなか寝付けなかった。

次回予告

「はあい、みんな。あたしのこと覚えてる？　つーか覚えてるわけないわよねえ……」

「あらあら、いきなり暗い顔ですね。どうかしましたか？」

「誰よ、あんた。あたしはね、この前金髪狐にやられたのよ」

「もしかして稲浪さんですか？」

「そうよっ！　って、何であんたが知ってるのよ？」

「うふふっ、何となくです」

「何となくねえ。ま、良いけど。つーかさ、あの狐もそうだけど、

亀よ亀。馬鹿じゃないの、あれ」

「亀、ですか？」

「あんたも知らないのね。なら忠告しといてあげる。どうせあたしなんて創世から外されたんだし、あとは高天原に戻らされるんだもん……」

「あらあら、そう落ち込まないで下さい。あなたはお強いじゃないですか」

「亀に傷一つ付けられなかったのに？　狐の火にあたしの土竜は打ち碎かれたのに？」

「……………」

「ほおら見なさい。良いのよ、別に。どうせあたしなんて掴みの為に駆り出されたキャラなのよ。名前しか出てこないようなキャラじゃない分いくらかマシよ」

「随分捻くれてますね……。とりあえず、ここはそう言う場ではありませんから、元気を出していきましよう？」

「そうね。と言うかさあ、何であたしがここに居るわけ？　あたし回収されたのにさ」

「だからじゃないですか？　創世中の神子は赫職様と行動を共にしなければなりませんし、単独の神子は生き残る為に下手な行動は取

れませんし」

「……つまり、敗者に与えられたせめてもの時間って感じ？」

「端的に言ってしまうえば、そうですね」

「……何よ何よ。つまりあたしは敗者のレッテルを公にされた哀れな神子なだけじゃないっ！ ……負けたのは負けたけどさ」

「まあまあ。そう気を落とさないで下さい」

「……あんたも負けたの？」

「いいえ」

「は？」

「いえ、ですから、私は敗者ではありません。マスターに頼まれてここにいますから」

「……………」

「さて、話が脱線してしまいましたが、そろそろ次回予告をしましょうか」

「ちよっ、ちよっと、待ちなさいよ。それ、どういうことよ？」

「次回、いよいよ皆さんお待ちかねのあの方が稲浪さんと隼斗君の前に登場するようです」

「ちよっ、それあたしの台詞じゃないっ！ ってかADっ！ 何であたしがあの狐のことをいわないといけないのよっ！」

「ですから私があなたを思って代弁したのですけれど……」

「それ単にあたしの出番減らしてるだけじゃないのよっ！」

「では、ご自身でこれ、お読みになれます？」

「んなもん嫌に決まってるでしょっ！」

「我儘な方ですね……」

「何がよっ！ あんたはどうせ闘いもせずに逃げて隠れてるだけでしょ？ だから負けない。勝てない。倒せない。倒さない。のない尽くしであたしのことをあざ笑ってんでしょっ。これだから戦わずの神子は嫌いなよ。そんなだったらさっさと嵩天原に帰りたいじゃない。何しに來たってのよ、この弱虫」

「……黙りなさい、下級神子が」



「へ？」

「……神子は闘うことに疑問を持たず、戦うことに意義を見出している以上、勝者であろうと敗者であろうとそれは愚者でしかないのです。愚者の貴女に言われる筋合いはありませんよ。言葉を慎みなさい。位を弁えなさい。私を誰と心得ているのです？」

「え？　ちよっ、な、何よ、急に……」

「あなたに愚弄されるのは甚だ心外です。私も随分と舐められたものを覚えておきましょう」

「え？　それ、どう言う意味よ？　ちよっとちよっとAD、何者なのよ、こいつって」

……………。

「はぁあっ！？　ちよっ、な、何でこんなところにいんのよっ！　つか、あんたのカンペのおかげであたしすっごい失言しまくりじゃないのよっ！　馬鹿じゃないのあんたっ！」

「良いのですよ。あなたがそこまで言うのでしたら、お見せしましょう、私の神火<sup>しんび</sup>を」

「え？　あ、ちよっと、ま、待ちなさいって、っていや、待ってくださいっ！」

……………。

「うわぁ、ちよっとやばいんじゃないの、これってさぁ。AD、あんた何てことしてくれたのよっ！　あたし人間界に戻れないから知らないわよっ！　ちよっとカメラっ！　あんたもいつまで映してんのよっ！　こんなの放送したらあんた埋めるわよ。じゃあテープはどうしろって？　んなもんさっさと捨てる馬鹿っ！」

……………。

「あゝあ、なんかやばいことにならないと良いと言うか、あのお方の餌食になる神子の為にも、ゆっくり休める穴倉でも作ってあげるか。えっと、そんなわけであたしには無関係だから、何かあってもあたしを責めないでよ。んじゃねっ！　人間界はなかなか楽しかったわよ。」

それから啓一。……って、どうせ覚えてない、わね。……いいわ、  
やっぱり最後のは無しっ。ほら、さっさとカメラ止めて撤収よ撤収」

## 序幕章・一神抄（前書き）

少し書き出しだけですが、更新しますっ！

ここからは少しずつ本題へと進ませるつもりですので、新章として、区切りをつけ、新たに嚟を始めます。

## 序幕章・一神抄

「マスター、九稲です」

「ああ、入りたまえ」

町が寝静まりを迎える頃、NBSL最上階、山田太郎の部屋に、九稲が姿を現す。

「何の御用でしょうか？　このような時間に」

「ふむ。少しはふざけも善しと思っていたのだがね、これは真面目な話だよ、九稲」

本気か冗談か分りにくい言動をする太郎には不相応な、雰囲気九稲は居を正す。

「これはとある神子よりの情報なのだがね、ここ数日おかしな動きをする神子の姿が全国より報告されているそうだよ」

一面のガラス窓から眼下を見下ろしつつ、少々面倒そうに太郎は話す。

「おかしな？　どういふことでしょうか？」

「まあ、さほど大したことではないのだがね。どうも神子を矢継ぎ早に囲おうと動く赫職たちが、どうやらグループを作っているらしい」

下らないことをするものだね、と太郎は息を吐き、頭を掻いた。

「それが何か問題でしょうか？　契りを結ぶ為に囲う。ただそれだけでは？」

九稲には、それはただ契りを結ぶだけのことのようにはしか思わないのだろう。

「九稲。私はこの創世に賭けているのだよ」

太郎が振り返る。白衣がマントのように舞った。

「世界に蔓延る人間が、力を手にした時、そこに神は生まれる。私はそれを確かめたいのだよ。しかし、その行動はあまりに幼稚で情けない。中には契りを結んだ神子すらを略奪する者の話すら届いて

いる」

「はあ……それで私にどうしろと？　愚痴を仰りたいのでしたら、その壁の方が従順ですよ」

真剣な表情に居を正した九稲は、愚痴を吐く太郎に失念したように、力を抜く。

「愚者たちの行うこの行為に、愛はない」

「はい……？」

唐突に断言する太郎に、九稲は呆気にとられた。

「良いかい？　創世とは赫職たる人間と神子との共立なのだよ。そこには絆と言う愛があるからこそ、新神話は創造される。しかしっ。しかしだよ。それを意図的に創造しようとする愚者が現れた」

オーバーアクションで太郎は大げさに全身を使って、自身の失念の大きさを伝えているようだが、九稲は表情一つ変えることなく、ため息を一つ漏らした。

「つまり、マスターのルールにそぐわない者へ粛清を与えよ。そう言うことですか？」

「ザアツツライトッ！」

ズビシッ！　と太郎が九稲の鼻先に指を指す。九稲は失礼と言うようにその指を弾く。

「仰せであれば従います。しかし、この創世に関し、そのようなことは大儀であるとは思えません。それも戦略と言うものでしょう？」

「そんなの面白くないからダメ」

「子供の駄々ですか……」

自分の意見に即答する太郎に、明らかに失意する九稲。

「それにだ、九稲。連中はどうやらそこにビジネスを見出してもいるようなのだよ」

「ビジネス、ですか？」

少し起動の変わる話に、首を傾げる九稲。後ろで束ねた髪もつられて垂れる。

「この世界には様々なトリックがあり、神秘がある。超能力、霊能

力、スピリチュアル、占術、気道、上げればきりが無い。しかし、神子たるは何だね？」

太郎が問う。

「古より隠匿されし、妖怪、神々、精霊の化身ですね」

「そう。それは明朗なる別離にある者。人非ざるが故に人に在れり。人間とは愚かな探求者であり、日本人は流世の愚者。故に運命を定められし神子より、運命を奪うものがある。私は神子の父であり、神だ。我が子の幸せを願わぬ由は持ち合わせていないのだよ」

「無駄に格好をつけなくても宜しいです。つまり、私には近畿圏において、不条理より神子を救い、不届きへの粛清。今回の任はそれで宜しいですね？」

「そうとも。無論、シュウ、鴻鳴、狼艶、熊罷への通達は既済だ。我が子を虐める輩には、私よりの虐めがあることを教え込んできておくれ」

太郎は、純粹に神子を思うようで、自分が面白くないことをする連中を虐めたいだけのようだ。

「その裏にあるものは如何なものでしょう？」

しかし、九稲は勘より感じるのか、その言葉に隠されたものを問う。太郎は一瞬、意外そうに瞳を大きくしたが、無邪気な子供のように笑みへと変える。

「さすがは妖狐九稲、と言うべきかな？　良いだろう。君には教えておこう」

太郎が面白そうにしながら、部屋のモニターをつける。

「これは監視部より確認された不調整神子たちだよ」

映し出される映像には、幾人もの男女が並んでいる。

「今回、嵩天原での調整を最終段階まで終えていない神子がこれだけいるのだよ」

「何をされていたのですか？　彼方の成すべきことではありませんか」

それが全て神子だということは、風体を見れば調整を受けた神子

との差異は明白だった。明らかな殺意を帯びた目を宿す神子から、誤認した知識に偏る姿の神子、子供のような神子もいた。

「この子たちは元よりの神子力の調整が困難でね。私も反省しているんだが、あまりに自我が強いが故に、最終調整中に職員より逃れて逃亡した。九稲。君たちにはこの神子の暴走を粛清し、安寧なる創世の秩序を守護する。それが役だよ」

「そう言うことですか。人とは所詮非力、と言うことなのですね」  
九稲が本当の任の意味を理解すると、少々毒を吐く。

「それは仕方あるまい。人とは力ではなく、ここを使い生きてきたのだよ」

太郎が自身の頭を人差し指で小突く。

「考える葦、と言うことですか。分りました。その任、九稲が承りましょう」

「他の神子と違い、加減を知らない子が多い。その力を手にし、契りを果たそうたる赫職への注意も忘れないことだよ。中にはN O.<sup>ファイフティーンズ</sup>15以内の神子もいるようだからね」

「問題ありません。どのような神子であろうと、私は科せられし役を果たすのみです」

九稲は何も臆することなく、太郎に一礼すると室内を後にする。

「九稲、君はまだ理解していないね。大府にいる狐は、君の知るあの子が最上ではないのだよ」

姿を消し、再び静を取り戻す室内で、太郎は会長席に腰を下ろし、背もたれを微かに軋ませた。

「さて、楽しませてもらうか。創生の第一段階の幕開けだ」

随分前に宣下を下した時とは異なり、太郎は静かに序幕を一人、告げた。

幾星霜の時ぶりの人界か。実に変化に富む人の世よの。何たる愚かなことか。

「天照とやら、妾が如何なるものであらうと、仕掛けてくるか」

黄色のようできて、その輝きは決して黄色ではない、金が夜空に栄える。

「貴様っ！ 大人しく投降しろっ！」

同じ服を纏う人間たちが、深夜の天府の繁華街を封鎖し、たった一人を数十単位で包囲する。

「下らぬ。人間ごときが妾に口を叩くな」

ふん、と飛んでくる羽虫を払うように、女が手を振るう。その指先から起こされる微かな風の中から、金の焰がたちまちベールのうに辺りを輝かせ、熱を帯びさせる。

「構うなっ！ 特殊消火弾、撃てっ！」

列を成し陣を取る先陣数人の構える銃口が女を捕らえる。夜空に響く銃声に女は手を翳す。

「己が無力を弁えろ、人間風情めが」

掌からあふれ出す金色の焰が女を包み込み、銃弾が炸裂する。焰に焼かれるように消火弾の白煙が焰に弾かれて。

「くそっ！ これがNo. 15以内なのか……っ」  
ファイファイ  
インス

「下らぬ戯言に付きおう由はない。散れ」

女の纏う焰が霧散し、男たちが一斉にその時を待ち、銃を構える。晴れる焰の向こうに立つ女は、口元に両手を組み合わせ輪を作っていた。

きつねまひ  
「狐窓」

女は笑みを浮かべていた。その輪に向かい、吐息を吹きかける。吹きかけられた吐息が、その輪を通った瞬間、金色に輝く茫漠とした巨大な焰の弾となり、対峙する男たちへと飛ぶ。「ひ、怯むなっ！ 撃てっ！」

指揮官の声は、最期だった。

半ば小さき太陽のごとく、膨れ上がった焰の玉は、四車線道路を覆いつくし、吹き抜けた。放たれた銃弾は、砂糖菓子（砂糖菓子）の弾丸のように灼熱に燃え尽き、そこにいた数十の男たちは一瞬の阿鼻叫喚を残し、炭と化し失せた。それが人間であったと言う痕跡はなく、ある



のはただ、焦げ尽きた何か黒い物体。

「なっ……」

「に、逃げろっ！」

「に、逃げるなっ！ コードに従えっ！」

女の背後を包囲していた男たちが、ほんの一瞬の出来事に吞まれた。吹き抜けた焰玉えんぎよくが車線に沿って飛び行き、やがて突き当たりのビルに衝突し、燃えつき消えた。ビルを一棟破壊して。

「愚たるは常に人間なり。妾が滅してくれよう、積なる苦を以って」  
女の表情は、破壊者だった。振り返る先にいる男たちを捕らえる女の瞳は、金を埋め込んだように一色に染まり、シルクのような白い髪が自身の放つ焰の熱に靡く。

「さあ、その力を以って妾が前に集えよ同士。空狐くうこはここにて待つ」  
空狐は片手を空へ掲げ、掌ほどの小さき金の焰を宿す。

「い、今だっ！ 空狐を捕縛しろっ！」

残された男たちは、それを隙と踏み、有り余るだけの余力を以って空狐へ立ち向かう。

「諦めの悪い人間よの。良からう。共に妾が礎と成すか？」

空狐は空に掲げた手の焰を空へ放つ。垂直軌道を行く小さき焰は、一閃を残し雲すら燃やし、はるか上空で四方八方へ分裂し、深夜の星空を昼間の煌きへと変貌させた。まるで、己の位置を知らせ、全ての始まりを告げる合図のように。

「狐焰きつねび」

そして空狐は空いた片手を迫り来る男たちに構えた。その手には稲浪の青き焰のごとく、金色の焰が宿り、焰柱と化し放射に突き抜ける。

「か、かわせっ！」

「無駄な足掻きよの」

だが、稲浪の狐火とは別格だった。焰柱に触れたものは当然としての焼死。NBSLより派遣されし証の特殊防火服に身を包んでいようとも、その紋章が焦げ落ち、辺りには硝煙の匂いと、肉の焼け

る臭さが浮揚する。解けた銃が熱を帯び、アスファルトに雫のように垂れ、焰柱の直撃を免れた左右でも、烈火を受けたように、街路樹は燃え、避けたNBSLのエージェントたちも重いもので死、軽いもので防火服を燃えつくされ、肌が赤を超え頃に変色し、白煙を立ち上らせ、立ち残るものは一人たりともそこにはいなかった。燃え尽くエージェントの乗っていたトラックが、その熱に爆発を引き起こす。付近のビルのガラス窓が砕け、歩道に音を奏でて散る。

「下らぬことは哀しきかな、とな。妾を阻むものあらば、それすなわち死を以って報いと成せ。妾は逃げも隠れもせぬ。妾が求むる力よ、その力で妾を討ってみよ」

誰一人、空狐の言葉を紡ぐ者はいない。大都会へと変貌した大府の繁華街は、一瞬にして廃墟と化す。どこかしこから騒ぎの音を聞きつけ、集い始める野次馬と警察消防機関。

「さて、妾も移ろうさの」

その中で空狐は、次第に騒ぎが大きくなる様子に地を蹴る。飛び上がる脚力に付随する金の鱗のように舞う焰の欠片が昇竜のごとく夜空へ消える。

「ふっ……来おったか。じゃが、汝が一人、妾の相手にはならぬ」

空狐が金の焰を瞬かせ、空を高層ビルを蹴り飛ぶと、一瞬、上空から降りてくる紅き焰と交差した。

「……この粛清は、私が下します」

空狐は星空を見上げ、紅き焰は下界を見下ろし、その瞬間の会話だけで、双方は別離した。顔を見合わせるはおろか、互いの持つ神子力を感じ取るように、上下に同時に交差した。

「妾は何たる者をも受け入く。妾の前に集えよ、妖狐よ」

さらば、と空狐は金の衣を撒き散らし、星の瞬きの中へ消えていった。残す言葉に、振り返る女には、驚きの表情が小さく浮かんでいた。

「……あの者は、もしや……鬼<sup>もの</sup>？」

大府大阪の中心街、梅田。その一端にあるスカイビル。難波の凱

旋門とキャッチフレーズの授けられた、歴史あるビルの屋上。円形に吹き抜ける天井からは遙か眼下に赤く燃える惨状に、続々と集い始める大阪府警と消防、役所の行政から立法までの機関。その中にはNB SLの研究員らしき白服からスーツ姿まで、見下ろせた。

「これを一人で……？ 由々しきを引き起こすのは、やはり鬼」

もはや誰もいない夜空を見つめる所で残るものはない。古来より日本人は鬼と言うものを、怪物ではなく、得体の知れないものを鬼と記し、モノと呼んでいた。

「マスターの仰せは、あの者への危惧？」

強い風に靡く髪にも金色とは異なる、紅き焰が散る。

「これは、注視すべき対象のようね」

赤と白の服の居を正すと、九稲は眼下の惨状を焼き付けるように沈黙を守った後、表情を陰しくさせ、空へと跳んだ。

「やはり、動きましたね。大伸狐<sup>だいしんこ</sup>は」

遠くの空より響く夏の夕立音のように響く、爆発音と揺れる窓。

子供が夢の世界へ旅立ち、その安寧を見守る母のような温もりは、静かに鎮座していた。

「誰が何を起こそうと、手は出しません。しかし、私の領域を侵犯するならば、全てを排除します」

それは暗闇に消えていく決意ではない。暗闇に微かな明かりが点る。

《それは君が判断することだ。私はそこまで関与はしないよ。ただ、今回ばかりは、と思っただけさ》

事態が悪化を辿る一方で、ここはあまりに静か。吐息すら煩く思えるほどに。

「状況に関知はしません。私は私を守り通す役目があります」

《では、大府が戦況に競々された日々に陥れられようと、動き出すことはしないと？》

通話中にも爆発音が響き、救急と緊急のサイレンが響く。しかし、

ここでは誰も感知しない。

「私は狗とは異なります。私を頼る由々しき自体であるならば、もう少し緊張を持つべきでは？」

その声に、笑いが返ってくる。

《まあ、君の我が強いことは承知している。だからこそ、不調整の神子への対応への支援を、こうして直々に申し込んでいるのだけだよね？》

含みを持たせ、語尾が上がる声にも動揺しない。

「私は、予め予測はつけておりました。故に手遅れの事態を招いたそちらへは感じえるものではありません」

その時、地震が発生したような小さな揺れが、建物を軋ませる。

《随分大きいようだ。こちら揺れているよ。今、九稲を向かわせたが、彼女単体では収められはしないだろう。何しろ赫職がない》  
「それはこちらも同様です」

電話を携えたまま、立ち上がり、カーテンを捲る。夜空が金色に輝いていた。言葉では無関心を伝えつつ、眩い光を前に表情は険しかった。

《どうしても手は貸してもらえないかい？》

「同じ返答を変えるつもりはありません」

即答する返事に、やれやれと小声が帰ってくる。

《仕方ない。ならば私の知る期待神子と赫職に援助を申請しようかね》

男の言葉に眉が微かに動き、動向を聞き分けようと沈黙する女。

「……それはけしかけではないのですか？」

《それは君には関係ないだろう？ 私は君に断られ、新たな選択をした。もう君への関係性はないはずだよ？》

言葉による攻め。自ずとその先にある答えが、互いに交差へと向かう。しかし、決意を見せた以上、女は通話口にそれ以上のことを言えなかった。それは男の策だと気づいている証。

《では、夜分に手間をかけて申し訳ないね》

「……ええ。弁えない殿方ほど、嫌いなものはありませんので」  
《私は皆への惜しめない愛を約束しているよ》  
そこで室内に暗が戻る。聞こえるは、小さな吐息。  
「ほんに嫌いなお方です、貴方と言う人は」  
もう返答を得ない電話に、そう呟くと、夜空の眩さを遮断するよう  
にカーテンを閉じた。

## Ⅱ 予告Ⅱ

「はい、第二回目予告が始まりました。今回も私が担当します」  
「ふむ。妾は何をすれば良い？」  
「そうですね、とりあえず自己紹介でもしていただきましょうか？」  
「紹介とな？ それはそちがするものではないのか？」  
「それもそうですね。では、今回のゲストは、大伸狐空狐様です」  
「うむ。良しなに頼もう、愚かな人間よ」  
「いきなり人を中傷とは、さすがですね」  
「褒めの言霊として賜っておこう。二度は無いと心せよ、貴様」  
「ええ、気をつけましょう。ここで焰を使われては適いませので」  
「ならば話を進めよ」  
「はい。前回、エンさんがいらしましたが、今回は敗北神子もおり  
ませんので、特別に神子紹介コーナーを付随させていただきました」  
「それで妾か？ 他に紹介する神子もおおろうに」  
「マスターからの指示ですので」  
「またあやつか。実に懲りぬ男よの」  
「大人しく来られる貴女も貴女では？」

「ほっほ……貴様、妾が空狐と知っての言葉のようだの。死するか？」

「遠慮いたします。と、言うところで、本日のゲストは狐族より参戦された空狐様です。性格はこの短時間の会話よりご想像下さいませ」

「ふふっ、実に面白きよ、貴様。気に入ったぞ」

「それはありがとうございます」

「しかし。前回の予告とやらと差異ある内容のようだが、貴様、どう釈をするつもりだ？」

「ええ。その点に関してはご説明いたします。前回、稲浪さんが……と発言しましたが、これはあくまで新章のプロローグですので、前回の次回予告は次回より始まる一神抄よりお楽しみ下さい」

「いい加減な言付けよの」

「なんと言われようと、そういう構成でしたので、私はそれ以上存じません。文句がお有りの方はこのコーナーを無視すれば良いだけのことです」

「開き直りか。その性格、妾は気に召したぞ。いずれは貴様と交えてみたいものなのだ」

「お断りします。そこは私の出番ではありませんので。さて、では次回予告です」

「それは前回しておろう？」

「追伸部です。内容は前回を引き継ぎます。私が承ったのは、更新日程に関してです」

「ならばそう申せ。相変わらず昔と変わらぬな、貴様は」

「ええ、貴女も。では、次回更新予告です。更新はユースウォーカーズとi fと更新後に更新するつもりですので、7月16日程度になるということです」

「また退屈な時間が空くのか。実につまらん」

「その間に下手なことは避けてくださいね。九稻様が馳せ参じますよ」

「それも良いな。狐同士の戦も悪くはない」

「今回のような被害を起こした場合、いいえ、私が領域を侵した場合においては、私も黙って見過ごしは致しませんので」

「ほっほっほ、それも良い。だが、貴様と交えるは時期尚早というものであろう？」

「ええ。あなたが私の元へ表れることが出来るかを、私はお待ち申し上げませぬ」

「まずは、狐じゃ。あやつには妹もおろう？　これを聞いておるや？　稲浪とやら。聞いておるならば参れ。強気を望むならば、姉妹より妾が下へ参れ。妾が魅せてくれようぞ」

「楽しいのは良いですが、そろそろお別れの時間です」

「ほう、早きものだの。致し方あるまい。愚かなる人間よ。死にたくなくば、妾を楽しませよ。妾が望みを叶えたる者に、妾は望みを与えて進ぜよう」

「そうやって人を愚弄されていると、足元を掬われますよ、空狐様」

「妾が待つは、それこそ。さて、用は済んだの。妾は往くぞ」

「ええ、わざわざのご足労ありがとうございました」

「貴様も、夜月が金色に輝く夜には、出歩かぬことだ」

「肝に銘じておきます」

## 開幕・一神抄（前書き）

これも予定より早い更新です！

とは言っても、ちょっと長くなりそうなので分割更新しますので、次回予告のコーナーは次の続編掲載時にします。



## 開幕・一神抄

「な、何だ、これ……」

翌朝、いつものように稲浪に抱きしめられて、幸福と苦痛で目覚めた。そして寝ぼけ眼で相変わらずの捲れるネグリジェに、下半身に自制を働かせて朝食を用意する。その傍らで朝のニュースをつけていると、いつもならトレンドを紹介するコーナーのはずが、緊迫感漂う中継映像が流れてた。

《ご覧いただけますでしょうか？ まるで隕石の衝突でもあったかのようにビルは倒壊し、道路は焼け焦げています。辺りは焦土の臭いが立ち込め、所々の水道管、電線、ガス管が破裂し、警察と消防による規制線が張られています》

——あれ？ ここつて、大阪、だよな？

とっさに言葉も出ない。瞬きが無駄に多くなる。味噌を溶く手が止まる。何が起きた？ これは映画か何かの紹介か？ そんなことしか浮かばない。

《松本さん、現場の混乱はどのような感じでしょうか？ それから死傷者の情報は入っていますか？》

スタジオの様子がワイプに出ている。どう考えても宣伝映像じゃない、現実。右上にあるニュースの題が、『大府大阪 梅田地区大爆発事故』と出てる。

《えー、現場は渋滞が起きています。地下鉄、JRともに環状線は一部区間で折り返し運転を行っており、現場周辺への立ち入りは完全に遮断されています。情報によりますと、被害者の数は倒壊したビルの爆発に伴うガラスの破損などで軽傷者が数名程度病院で治療を受けている模様で、死者に関しては不明とのことです》

場面が空撮に変わる。

「おいおい、ちょっ、マジ、これ？」

沸騰する鍋を止め、リビングのテレビに寄る。明らかに俺の知っ

てる町並みだったものだ。それが何？ 特撮でもしたのかとか考えてしまうくらいに、大地震でも起きたのか？ と思うくらいに街が崩壊してる。

「ふう、さっぱりしたのじゃ。隼斗、朝餉は出来ておるのか？」

「あ、稲浪。これ、見てみろよ」

朝食どころじゃない。髪を下ろしたままでさっぱりしたんだろうけど、今だけは稲浪を見てる場合じゃない。

「ん？ 何じゃ、ここは？」

混乱と驚愕に囚われてる俺だつてのに、稲浪は首を傾げるだけ。すげえな、これ見て動揺しないのか？

「梅田だよ。ほら、こはくさんの太陽の丘があるところから近い」

「おおっ！ あそこじゃったか。して、これは何事なのじゃ？」

「分んねえ。何か爆発があったらしいけど……」

どう考えても爆発には思えない。崩壊したビルの痕跡と道路に沿って焼け焦げてる街路樹とか、明らかにおかしい。それに空撮映像にNBSLのトラックが幾つも現場に入ってる。

「よもや、かような事態が起きるとはの。こはく殿は無事なのじゃろうか？」

けど、やっぱり稲浪は動揺しないで、静かだ。それはそれで珍しいんだけど。

「いや、太陽の丘はここから少し離れてるから大丈夫だろ。つか、仕事、どうなるんだ？」

現場も現場に、俺のバイト先の事務所のビルがある。見覚えのあるビルを見つけて、モニターを凝視した。ビルは倒壊はしてないけど、立ち入り規制区域内にあった。

「あ、稲浪。悪いけど、魚焼いてるから、皿に移しといてくれ」

「うむ。相分かった」

タイミングよく携帯が鳴った。会社からだった。

「はい、ああ、おはようございます」

映像が浮かび上がる。

《今、テレビをご覧になられていますか？》

「はい、何かすごいことになってますね……」

何となく稲浪の様子を見て分かった。事故なんかじゃなく、神子の戦闘の痕跡だと。ただ、稲浪は無関係だからか、自分の空腹が優先らしい。意外と手際よく俺と二人分の食事を寄ってくれた。

《ええ。事態の收拾と会社ビルの修復に当面の間、業務は他社へ委託することになりましたので、申し訳ありませんが業務は停止となります。その間の間は希望者への派遣業務を紹介していますが、風祭さんはいかが致しましょうか？》

早い対応だと思った。今朝ニュースになったばかりなのに、もうそこまで他社と連携が取れているなんて。まあ所詮はバイトの俺には従うしかない。

「あの、それは希望しなくても、いずれは復就出来るんでしょうか？」

《現段階では大阪支店を始め、一部支店の営業の継続となりますが、会社ビルの修復後にはそのつもりを予定しています》

他の仕事を紹介してもらえるのは、悪い相談じゃない。でも、迷った。金に困ることはない。

「隼斗。朝餉の支度が出来たぞ。早う食するのじゃ」

「えっと、じゃあ、また業務が再開してから連絡をもらえますか？」

《では、当面の間は給与の支払いも不能となりますが宜しいですか？》

「はい。それで構わないです」

《では、今月分の支払いは給与日の支払いとなりますので、ご確認をお忘れないようお願い申し上げます》

そこで話を終わらせて通話を切った。

「これ隼斗。朝餉が冷めてしまうではないか」

「ああ、今終わったよ」

稲浪の急かしに、思わずそう言ってしまう。恐らく今日から俺はプー。しかも大金持ちの。でも、今は状況が分からないから、それ

でも良いか、とどこか納得してる俺もいた。

「何じゃったのじゃ？」

「仕事。当分は会社がほら、あれだから業務がないってさ」

せっかくいつものように早起きしたのに、意味がなくなっただな。

「それは何じゃ？ 隼斗は今日より働きはせぬと言うことなのか？」

「まあ、そう言うことだな」

牛丼店のバイトも辞めたし、これで稲浪がいなければ本当にダメ男だ。

「ふむ。働かざるもの食うべからずと言う。爛れた日々を送るわけにはいくまい」

稲浪に意外な一言を言われた。少し驚いた。

「まあ少しは創世のことを知る良い機会だし、何かしら調べてみようと思う」

「ならば我も手を貸すのが、我が務めであり、働きじゃ」

相変わらず緊迫した映像を映し出すテレビを他所に、稲浪はいつもと同じ様子で朝食に箸を進ませていた。

食後、時間も空き家事を済ませ終えると、いよいよ暇になる。今まで規則正しい生活をしていたから、手が空くとどうも落ち着かない。

「なあ稲浪。これ、やっぱ神子の闘いのせい、なのか？」

気になってつけっ放しにしていたテレビは、番組を変更して特集を組んでいた。災害のようで、そうじゃない。人為的でいて、人為的でない。けど、それを知るのの一部。

「様子からして恐らく狐か聖獣族の手技じゃろう」

「狐？ 聖獣？ 何だ、それ？」

狐は恐らく稲浪や、稲浪のお姉さんなんだろうとは分かる。

「よく見てみよ。これは明らかな焰じゃ。神子の中で焰を操るは狐族、もしくは聖獣族に部類する者だけじゃ」

稲浪がテレビを指す。焦げ付いた木々や解けた壁面や車。確かに焰の熱でもなければ、まずその状況には至らないと理解できる。

「そうなのか？　じゃあ、これって稲浪のお姉さんの可能性も？」  
稲浪は俺と家にいたアリバイがある。琴音さんとつばさ君もそれは知ってる。そうなる俺が知るのは稲浪のお姉さんだけ。

「姉上がかような真似はせん。恐らく不調整神子の可能性もあろう」  
最近、どんな知らない言葉が出てくるよなあ。辞書引いても出てこない言葉だし。

「未調整？」

「つばさもその類じゃ。最終調整を受けぬまま嵩天原へ来た神子は、能力の開花が未熟な者も居ると申したであろう？」

「ああ、前に言ってたな」

だからつばさ君は力が未熟で、琴音さんと俺は手を組んだ。

「その逆も居ると言うことじゃ。未調整は力を開花させ、かつ抑制を行うのじゃ」

稲浪が不意に掌に狐火を起こす。少し熱い。そして相変わらず不思議でならない。

「我也抑制を受けた身。故にかように操れる。じゃが、抑制を受けぬ神子は発動させた能力を常力とし使役する。そこに加減はないのじゃ」

ポッ、と稲浪が狐火を消す。これが加減しているのは知ってる。エンとか言う神子との戦闘で使った比じゃない。

「状況を我が目で見ぬことには何とも言えぬが、恐らくいずれかじやろう」

そこで会話が途切れる。災害対策本部だとか様々な中継を挟み、現場の状況が刻一刻と告げられて、上空のヘリやら野次馬の姿が多くなっていた。

その時、ドアフォンが鳴った。

「はい」

稲浪を残して玄関に行く。

「あ、隼斗さん。いらしたんですね」

「琴音さん、おはようございます。つばさ君もおはよう。どうかし

ましたか？」

「うん」

琴音さんだった。つばさ君は何か照れてるみたいなのじゃない返事。慣れたから良いけど。

「ええと、その、今朝のニュースのことで、なんですけど」

どうやら琴音さんも考えてることは同じだったらしい。

「あれ、絶対神子の仕業だぜ。俺分かるんだよ。俺と同じ未調整って奴の仕業だ、絶対」

「と、つーちゃんが言うもので、隼斗さんたちにもと思ひまして」  
琴音さんに比べれば、俺たちの方が確かに詳しい。琴音さんを出来るだけ危険な目に遭わせない様に言わないだけで。

「あ、じゃあ、どうぞ。ちょうど稲浪ともそのことで話してたので二人を招き入れる。」

「お？ 琴音につばさか。如何用じゃ？」

「おはようございます、稲浪さん」

「おっす」

「稲浪、琴音さんたちもこれ、気になったって」

相変わらず映るテレビ画面の惨状。全員の視線を集めていた。

「なあ、これ絶対どっかの神子だよな？」

「うむ。かような真似は人間には出来まい」

神子同士、やっぱ何か通じ合ってるみたいだ。

「こんなことが近くで起きるなんて、思ってもみませんでした、私」  
俺もです。創世を浅く考えてましたよ」

ですよね、と俺と琴音さんの乾いた笑いも重なった。

「今は私たちは何もしてませんが、こういうことが大々的になるとさすがに考えなければいけませんよね？」

「やっぱりそうなんですかね。出来ることならこのままってのが理想ですけど」

何があったのかは知らないけど、あんなことに巻き込まれたら、この間みたいにはまずいかな。下手したら死ぬ。だったらこのま

ま隠れて……。

「相手は何奴かは知らぬが、我が同域においてのこの始末。NBS  
Lが動き出さないわけがないじゃろうな」

「当たり前だろ。映ってんじゃない」

つばさ君がテレビを指す。確かに公安機関の白や赤の車の中に、  
幾台もの黒の車が停止している。規制線のように道路を封鎖して、  
上空からの映像じゃないと、きつと見えない。

「我らは破壊をせしめるが故に闘うのではない。これは罪じゃ」

稲浪が言う。

「罪、ですか？」

琴音さんは規模の大きさにこれが犯罪とは思えないように首を傾  
げる。俺もそうだけど。

「罪って何？」

「悪いことをすることだよ」

つばさ君は根底を知らないみたいだな。自分の事を未調整って理  
解してるくらいだから、きつとこれを見ても悪いことだって認識は  
薄いつてことか。ちよつとだけ、つばさ君が戦闘力を大して持つて  
いないことに安堵してる俺がいたりした。

「罪には罰を。罰には肅清を。恐らく狗が放たれておるかも知れぬ」  
稲浪の言葉に、俺たちは稲浪へ意識が映る。

「なあ稲浪。その狗つてのはやっぱ別格なのか？」

前に別格の強さつてのを聞いた覚えがある。もしかして、これく  
らいの力はあるんだらうか？

「別格は別格じゃ。じゃが、奴らはマスターよりの調整を受けきつ  
ておる。愚弄を働きはせぬじゃろう。なればこそ、狗は嗅ぎつけ牙  
を剥く。そうならば、この程度では納まらぬかも知れぬ」

この惨状をこの程度と括る稲浪には、呆氣に取られると言うか、  
稲浪は一体何を知っているのか、興味心もあった。

「でも、もしですよ？ もし、仮にそうなってしまった場合、大府  
はどうなるのでしょうか？」

琴音さんの不安に小さくなる問い。

「大丈夫だって。琴音は俺が守ってやるんだからさ」

つばさ君は、きっと理解はしていないだろう。その言葉は今ほ浮いていた。

「うん。でもね、私はツーちゃんのことにも心配なんだよ?」

でも琴音さんはやはり女性だ。身を屈め、つばさ君と目線を合わせて優しく言う。

「俺は負けないって。琴音は気にしすぎなんだってば」

「そうは言ってもね……」

「つばさよ」

強く言うにもつばさ君は子供。琴音さんは困ったように苦笑する横で、稲浪は凜とした目で見つめる。相変わらず綺麗な目してんなあ、とかこれが俺の神子かあ。と改めて想い直すものが多いな、稲浪は。

「威勢は認めよう。我は嫌いではない。じゃが、威とは得てする力を誇るもの。安易たる威は虚でしかない」

「なっ、なんだよっ。俺だって闘えるんだからなっ」

稲浪の言葉は、弱いくせに見栄を張るなと俺には聞こえた。

「闘えるというのは、如何なるものでも可能じゃ。神子での戦闘と戦を同等に捉えておる時点で、未調整たる誠の証じゃ」

「い、稲浪。それは言いすぎじゃ……」

「分からぬが故の愚行がこれじゃ。赫職と契った神子は、汝が欲の下に行いは慎みを知らねばならぬ」

愚行として映し出される梅田中心街。未だに白煙が所々に立ち上っている。

「よく分かんねえよ、そんなこと言われても」

稲浪の話はつばさ君にはまだ少々小難しかったよう。分からないでもない。

「ならば、赴くかの。己が目で世界を知ることこそが万時の自制を得んとするのじゃ」



稲浪の唐突な提案。一瞬何を言ったのかと思った。

「ちよっ、待てよ稲浪。まさかここに行くのか？」

「無論じゃ」

即答ですか、そうですか。素直に納得できるわけがないじゃないか。

「あ、あの、でも、ここって立ち入り禁止区域ですよ？ 近づいても分からないと思うんですが……」

その通り。空撮映像から分かる通りに、現場付近にはNBSLのトラックが道を封鎖して市民は立ち入りが認められていないと報道されている。

「我らは創世の神子と赫職じゃ。現場を指揮するは当にNBSLじゃ。警察など所詮は着せものじゃ。我らの立ち入りを制限するは、マスターのみ」

「え？ 入れるの？」

つばさ君もよく分からないのか、意外そうに聞く。

「我は白狐。我が焰は最強じゃ」

ああ、分かったぞ。何日も稲浪と生活してると。

「それで肅清、とかないよな？」

「さあの。その時はその時じゃ。我が焰を以ってすれば狗であろうと恐るるに足りぬ」

突破する気だ。しかも闘う気まで満々ときたか。

「え？ 本当に行くんですか？ これからですか？」

琴音さん、今は貴女の驚きに俺は全くもっての賛意を示します。行きたくないという驚きに。

「戦において先手は必勝じゃ。不視なる神子の情報を得ることも戦においての糧となるというのもじゃろう？」

そりゃあ、こんなことがあったんなら、何かしらの情報が欲しいと思う。いつ何があるか分からない世の中なんだから。本当に。でも、だからって唐突にも程があるだろ。

「面白そうだし、琴音、行こうよ」

「つ、つーちゃん？ 遊びじゃないのよ？」

「平気だって。稲浪が言うんだから。だろ？ 稲浪」

「うむ。如何なることがあるうと、この白狐稲浪が相手を仕つてくれようぞ」

ああ、神子の二人は行く気満々だったのに、俺は反比例した気持ちの重たさを感じる。

「どうしようか、隼斗さん」

「どうしようか……」

琴音さんと顔を見合わせる。

「支度をするぞ。つばさよ、神子装束を纏ってくるのじゃ。戦なきとは限らぬからの」

「分かった。琴音、一回帰ろう」

「え？ あ、つ、つーちゃん？」

早く、と琴音さんがつばさ君に連れて行かれた。ぽつんと部屋に残される俺と稲浪。元に戻っただけなのに、何か落ち着かない気分だった。

「本気か？」

「無論じゃ」

稲浪は寝巻き以外は常に神子服。もう見慣れて最初に比べてドキ感がなくなったとはいえ、ショート丈の前のスカートから見える真白に近い妖艶な太ももには、視線がいつも追いかけてしまう。後ろはロング丈になってるのに、何で前はそんなにオープンなんだか。

「反対したところで無駄なんだろうけどさ、大丈夫なのか？」

「断言は出来ぬ。ただ感じることは出来る。神子が集うかも知れぬ。じゃがの、白昼の戦を好む神子はおらぬ。万一が起ころうと我がおる。我は負けぬ。隼斗が恐れるならば、無用な戦はせぬとここに誓って申すのじゃ」

そう言うことじゃないんだけど、言い返しても無駄だと悟った。稲浪がリビングに置いてるワイドミラーで、何もせずとも凛々しい

姿だつてのに、まるで今までの神子との戦闘とは異なる何かを感じているような、相手に対する己の最大限の魅を以つての敬意を示し、神子としての威厳を纏うとするように、身なりを整えていた。ただの女の子の鏡見とはまるで違う。ウェーブの流れる後姿には、それを見ているだけで何もいらぬようなものすら感じてしまった。

「うむ。整つたのじゃ」

振り返る姿に舞う髪と後ろのスカート。青く微かに上に上がる瞳が俺を捉える。

「では、往くかの、隼斗よ」

楽しいことを待つのではなく、自ら赴くように自信に溢れた綺麗な笑顔で俺を魅惑する。

「稲浪、こっちは準備できたぞー」

「来たようじゃの」

「……はあ」

素直に行くぞと稲浪の誘いに乗れるほど、俺は強くもないしドキドキもしない。代わりに出たため息は、もう諦めでしかなかった。

「何事ありませんように……」

玄関先で俺たちを呼ぶ琴音さんたちの下へ、俺は稲浪の後姿を焼きつけるように追った。

《現在、現場付近はNBSLの大型トラックによって地上からでは現場を確認することは出来ません。ですが辺りには焦げ付いた鼻につく臭いが立ち込めており、現場に向かう警察、消防員はガスマスクなどの装備を身に付けています》

案の定、現場はトラックの向こうで何も見えなかった。幾社もの報道関係者がカメラを廻し、中継をしている。野次馬も多い。この中に、もしかしたら神子や赫職がいるのかもしれないと思うと、稲浪とつばさ君の服装は、ここに敵がいると相手に教えているような気がして周囲に無意識に変化しつつある警戒に体が硬くなった。

「なんか臭くない？」

「そうね。嫌な臭いかも」

つばさ君と琴音さんが花と口にハンカチを当てた。二人だけじゃない。野次馬の大半もタオルやハンカチ、上着で目だけを出してる。

「死人じゃの。それも焼死の香りじゃ」

「香り、か？ 臭いじゃないか？」

稲浪の表現に、どう考えても漂うのは嫌な、吐き気のする臭い。

何度嗚咽が出そうになったことか。古い公衆便所の糞尿の臭いとはまた違う、燃え尽きた焦げ臭さと生物を焼いた鼻を突く生臭さのよ  
うな臭い。胸の中から気持ち悪い何かが出そうだった。心なしかこのあたりは暑く、それがまた助長させる。

「人間と我らの感じ方は異なるのじゃ。じゃが、痕跡は残っておる」

稲浪が少し鼻を上げた。小さくスンスンと嗅いでいた。俺は布で隠しているのに、稲浪はこの臭さを物ともしていない。さすがは犬の仲間なんだろうな。でも、どう見ても外人の稲浪だと変だ。

「やはり、じゃの」

暫くあちこちに鼻を向けていた稲浪が息を吐いた。

「何だよ？ 何か分かったのか？」

「うむ。我の存ずる神子が来ておった」

「え？」

つばさ君の問いに答える稲浪に、俺たちの声が重なった。

「じゃが、おかしい」

稲浪が腕を組んで考える。似合わないな、稲浪が腕を組んで考える仕草は。それはどうでもいいんだけど。

「何がおかしいんだ？」

「神子とは、姉上がおる残香があるのじゃ」

そして俺たちの声は重なる。

「え？ 稲浪さん、お姉さんがいるんですか？」

「稲浪、お前姉ちゃんいるのか？」

「姉って、前に言ってた？」

琴音さんたちと俺の驚きは違う意味だった。

「我が姉は名を妖狐九稻と申すのじゃ」

そう言えばそうだった。でも、どうしてここに九稻さんの匂いがあるのか？

「もしかして、これって稲浪の姉ちゃんの仕業か？」

「そうではない。じゃから我也考えておるのじゃ」

「どうしてここにお姉さんがいたのかを、ですか？」

琴音さんの勘の良さに稲浪が肯く。稲浪のお姉さんの話は稲浪から聞いている以上、俺としてもこの所業が九稻さんの仕業には思えない。

「うむ。姉上の匂いは確かじゃが、どうもおかしいのじゃ。かすかでしかないが、別のものも感じるのじゃ。それは我也分からぬ。そやつの所業か否か、確かめようぞ」

稲浪が歩き出す。匂いを追っているのか、俺たちも自ずとついていく。

「そのの。ここから先は立ち入り禁止だ」

案の定、黒光りするトラックの手前で完全武装に近い格好の警備に止められる。

「そのの退け。我らは創世の神子と赫職じゃ」

行き止る俺たちを他所に稲浪は堂々と対峙する。頼もしいな、全く。

「神子？ 赫職？ 何だそれは。下らんことを言うならさっさと帰れ」

けど通じない。

「何じゃと？ 貴様。我らを知らぬと申すのか？」

「何を言っているんだ？ いいからそこを退かんか。邪魔だ、邪魔」  
稲浪の物言いもあっさり払われる。

「あ、あの、稲浪さん……」

「だめじゃん」

琴音さんとおばさ君はこの先に行けるとついてきたが、結局ダメだったことに苦笑と言うか、あちゃあと表情を渋らせていた。俺も

だけどさ。

「稲浪、やっぱ戻ろう」

「ならぬ。その戯け。我は聖誇なる狐が白狐稲浪じゃ。我の行く手を阻むとは何たる愚行か分かっておるのか？」

「ここはコスプレ会場じゃないんだ。いいからさっさと帰れ。これ以上邪魔をすると公務執行妨害の現行犯だぞ」

物凄く俺たちを面倒そうに見てくる警備。よく見れば話が通じないことがよく分かった。

「おい、稲浪」

稲浪の手を引いて一步下がらせる。警備が俺のことをお前がこいつの男か？ と妙な睨みを利かせてきた。間違っではないけど、何だか理不尽な気もした。

「何じゃ？ 何をする？」

「稲浪、あの人は警察官だ。きっと話が通ってないんじゃないか？」  
全員が男を見る。

「あっ、本当ですね」

「なんて書いてあんの、あれ？」

よく見れば、警備の胸には大府警と書かれていた。この間のNB SLのエージェントと似た格好だったから気づくのが遅くなった。

「連携が取れておらぬのか。なっっておらんのじゃ。我が物申してくる」

事情が分かったからか、稲浪が今度はNB SLの関係者を出せとか言いに行くんだって、稲浪の顔を見て分かった。絶対またひと悶着を起こす気だ。嫌な予感の的中率は高い。だから止めに稲浪を追った。

「貴様、警察の者じゃな？ 貴様では話にならぬ。NB SLの者を出せ」

「またお前か。関係者以外の立ち入りは禁止だと言っているだろ。こっちはお前の相手をしているほど暇じゃないんだ。これ以上は本当に逮捕するぞ」

「何じゃと貴様っ！ 我が申しておるのじゃ。貴様は大人しく賜っておくが人の定めじやろうが」

「お、おい、稲浪、止め……」

「その警備の方。その方々を通して差し上げなさい」

留めに入ろうとした時、トラックの間から女性が出てきた。

「は？ 何を急に仰るのです？」

警備が振り返ると同時に、稲浪の声が警備の背中を超えた。

「姉上っ！ やはり居ったのじゃな？」

「え？ 稲浪さんのお姉さん？」

「あいつも神子？」

稲浪の声に隣に來た琴音さんとはつばさ君が声を漏らす。

「あの人が……」

稲浪のお姉さん？ 俺たちの目の前に來た巫女服のような赤と白の着物を纏った、金髪の稲浪とは似つかない赤く風にたゆたう長髪。瞳も紅く姉妹には見えない。

「久しぶりね、稲浪。元気そうで安心したわ」

「姉上よ、これまでどこに居ったのじゃ？ 我は心配したぞ」

二人が、間に警備を挟み言葉を交わす。警備は状況が分からないように二人に視線を行ったり来たりさせてる。

「私は大丈夫よ。それよりも……」

不意に稲浪から視線を外した紅き瞳が俺を射抜いた。

「初めまして、風祭隼斗さん。私が稲浪の姉、妖狐九稻と申します」

「あ、は、はい。初めまして。あれ？ 何で俺のことを……？」

稲浪と出会ってから一度として稲浪はこの人には会ってないし、俺たちとの接点はないはず。

「あ、もしかして……」

そう言えば、その出会いこそが九稻さんの仕業じゃなかったっけ？

「ええ、その節は申し訳ありません。本来ならばあのようなことは創世としては罰すべき汚行」

「いえ、そんな。むしろ、俺は嬉しかったですから……あっ」

九稲さんがぽかんとした顔で見てる。そして俺は何と恥ずかしいことを言っただと、気づいた。

「うふふっ。稲浪。やはり貴女の目は確かだったみたいね」

「うむ。無論じゃ。何より姉上より享受の恵ものじゃ」

俺を見る九稲さんと稲浪の目が和やか過ぎて恥ずかしい。

「それはそれとして、稲浪、そちらの方々は？」

「我らは協定を結びし、琴音とつばさじゃ」

「は、初めまして」

「あんたが稲浪の姉ちゃん？」

「ええ、初めまして。いつも妹がお世話になっております」

深々と一礼する姿が、美しいと言葉が似合う。でも、やっぱり稲浪と姉妹だと思う。服装こそ日本人、と言うか巫女さんっぽいけど、顔はどう見てもやっぱり外人。変な感じだ。

「隼斗さん、このお方々と協定を結ばれているのですね？」

問いかけの割りには聞いているように聞こえなかった。けど、稲浪と最初にいた頃みたいに妙な緊張に

「は、はい。そういう形になってます」

「私たちではこのことには非力と言いますか、不似合いなもので。それで隼斗さんと稲浪さんに協力していただいてます」

「燕子つばさ、あなたはまだ最終調整まで受けていない未調整ね？」

「だから何だよ。俺じゃねえからな。俺、こんなこと出来ないもん」  
九稲さんがつばさ君を見る。

「誠じゃ、姉上。つばさは未調整とは言え、代償たるは戦闘力の劣勢じゃ。かような真似は不可能じゃぞ」

「ええ。それは分かっているわ。これを引き起こした不貞の神子は存じているわ」

え？ 俺たちは皆して同じ顔で九稲さんを見た。

「姉上、存じておるのか？」

「そのことは創世の神子と赫職として権利あることです。私がご案内致しましょう」



九稲さんがついて来て下さいと背を向ける。稲浪の凜とした姿が誰に似ているのか、その背中に知ることが出来た。

「稲浪さん」

「何じゃ、琴音？」

「お綺麗なお姉さんですね」

「うむ、我が自慢の姉上じゃ」

揺れる髪と、淑やかな歩き、香る後姿に思わず見とれてしまった。稲浪が誇らしくするのもやっと理解できた。こんな姉がいれば確かに自慢したくなるよな。こんな姉ならだけど。

「おい隼斗。目がえろいぞ」

「なっ！ 何言ってるんだよ、そんなのじゃないって」

つばさ君に横腹を叩かれた。まさかツッコまれるとは。子供の視線も侮れないな。

「あ、ちよっと？ え、えっと、良いのか？ と言うか、今のが、そうなのか？」

警備の男が取り残されたことは、きっと気づかないままだった。

## 開幕・一神抄（後書き）

続編掲載は、まだ未完結なので、それが終わってからですが、他作品にも書いている通り、これからは他作品の連載を順次再開させますので、暫くお待ち下さい。先に九つの作品の連載を再開する予定なので。

## 一神抄 姉妹再会（前書き）

更新します。もう少し一神抄は続きます。思った以上に長くなりそうなので、分割連載にします。おそらく次で一神抄は終わります。

## 一神抄・姉妹再会

「うっわー、めちゃくちゃじゃん」

つばさ君の一言は純粹にして、明確だった。ニュース映像とはまるでの異世界。どこの戦場跡地に來てしまったのか。そう思わずにはいられない非現実の現実の中にいた。

「ひどい……」

琴音さんもショックを隠しきれず、口を覆った。

「これは何者の仕業なのじゃ？」

一方で稲浪だけは顔色一つ変えない。肝が据わってると言うか慣れてるのかもしれないけど、今の場では何かずれてるようにしか思えない。

「それを知ってどうするつもり？」

九稲さんが質問に質問を返す。表情だけは真剣で険しさがある。

「無論、かような真似をする神子と一戦交えるのじゃ」

強そうな相手だと稲浪は誰だろうと戦いたくなるのか。こっちはそんな気は全くないってのに。

「赫職の隼斗さんはそうでもないみたいよ」

九稲さんに見透かされる。

「うぬ？ 隼斗よ。ここへ來て尻込んでおるのか？」

「いや、そう言うわけじゃないけど……」

この状況下で戦闘意欲を見出すなんて無理だ。でかいビルを丸ごと一棟破壊して、数百mの四車線道を炭に染め替えてる。街路樹も道路標識も爛れてるんだぞ。幾ら創世とは言え、こんな惨状を残した神子と戦うなんて、無理。

「闘う意思があると申されるのでしたら、私の知る限りの情報をお伝えします。ですが、この現状を見て、多少でも怖気を覚えられたのでしたら、ここから身を引くことを提案します」

そんな俺の心情すらも見透かして、逃げるように九稲さんが見る。

稲浪も綺麗だと思う。でも九稲さんはさらに顔立ちが凛として、大人の女性に見える。狐族は美人揃いなんだろうか。ちょっと稲浪の赫職になれて鼻が高い気がした。

「隼斗さん、やっぱり私たちなんかじゃ……」

琴音さんが一步後ろから周囲を見ながら九稲さんの意見に賛意を示す。現状は想像以上だった。専門時代にCGで制作した映像にも廃墟があった。でも所詮は映像。目の前にある瓦礫と散乱する会社の書類、机や椅子、パソコン、道に散乱しているものを撤去してる公安・消防組織の数が桁違いに多い。俺たちは明らかな場違い。琴音さんが周囲に覚えているわけは俺もよく分かる。

「えー？ 闘わねえの？」

つばさ君の反応は琴音さんを驚かせるが、俺には何となく予想できた。

「そうじゃ。ここまで来て戻るなど神子として見過ごせはせぬ」

「だからと言って赫職への配慮不足は神子として失格ですよ、二人とも」

九稲さんが二人を宥める。この人は実に話の分かる人と俺の中で印象づいた。

「それにこの現状を引き起こした神子は、NBSLより危険指定を受けた未調整神子なのです。創世だからと闇雲に闘うことは、すなわち己が短命を示唆するも同然です」

早急に引き返しなさい。九稲さんは俺たちのみを案じて注告してくれてるのがよく分かる。

「ならば姉上。姉上は何故ここにおるのじゃ？ 我らは足止めを食ろうた域に、何故姉上は容易く入れるのじゃ？」

引き下がろうと決めかけた俺と琴音さんを他所に稲浪が食らいつく。

「私は役目があるから、ここにいるの。稲浪、あなたはもう一人ではないわ。そして燕子つばさ。貴方も未調整ね？」

九稲さんが鋭さのある眼光を向ける。

「お、俺じゃないって。俺、飛行しか出来ないんだって」

犯人と思ったのか、つばさ君が慌てて否定する。

「そう言うことではありません。貴方が未調整である以上、協定を結んでいる間柄であるとは言え、この罪を犯せし神子との対峙は絶対的不利があります。赫職と共に歩む道を選択するならば、時を経る前にここより去りなさい」

稲浪の能力は把握している。だからきついことは言わない。だが、つばさ君は風体からして子供。そして未調整だという事実、九稲さんは何かしらの危惧を感じたのか、問答無用の無調だった。美人に強く言われると言いつ返す気が湧かない。俺が言われているわけじゃないのに、俺が言われている気が強くした。

「何で俺だけなんだよ。稲浪がいるからだいじょーぶだって」

「つ、つーちゃん。やっぱりダメよ。つーちゃんはまだ闘えないんだから、ここは大人しく従おう？」

琴音さんが優しく諭す。

「何言ってるんだよ、琴音。もしここで俺たちが逃げたら、またこんなことが起こるんだぜ」

「うむ。つばさの言うことは最もじゃ」

これ幸いと言わんばかりに稲浪が同調する。俺と琴音さんの顔が一緒だった。そして九稲さんも。

「これは遊戯ではない、戦闘という闘いよ。仮にも稲浪もつばさも神子であり、命約を交わした赫職のいる神子なのよ。そして、この件を引き起こせし神子との戦を勝ち抜いたところで、他の神子との創世に関与し手不利を被る可能性は高い。創世とは誰が為に交わせし命を結ぶ選択。悔いなき終わりの存在を得てして早める必要はないのです」

九稲さんの言葉に喧騒が遠のく。作業音はどこまでも響いているはずなのに、夏の真白な暑さに遠のく蟬時雨のように、俺たちの周りは九稲さんの放つ空気に包まれた。圧倒的な存在感。絶対的な不可侵の神の子。そう見えた。

「ふむ。姉上の申しは理解した。じゃが、我らは神子。不届きなる神子にならず、厄を起こす神子を野放しにせしめるは、人間との共存の災いに他ならぬ。我らが往くは光ある場。それを犯すやからを我は見捨てては置けぬ。姉上の言とはいえ、我は引き下がらぬぞ」  
俺は今すぐ帰りたいんだけど。そんなことを言ったところで、稲浪に叱責されるのが目に見えてる。わがままな狐だから。

「俺も。琴音を危ない目になんか遭わせたくない。これやったやつがこの辺にいるんならこっちから先にやっちまったほうが良いに決まってるだろ」

「つ、つーちゃん。だからね……?」

琴音さんがつばさ君の肩を抱いて引き寄せる。

「我は白狐稲浪。狐なるもの汝が信を貫く通すが古が妖じゃ」

稲浪の決意は固まっていた。俺は諦めていた。

「良いのですか？ 神子を統制するは赫職が務めです」

俺たちは一体今、何と対峙しているのか。稲浪のお姉さんである九稲さんのはずだ。でも、空気が違う。静粛なる審判の中にいるような遠いものがある。

「九稲さんなら分かりますよね？ 稲浪のこと。俺には止められません。稲浪には多くの恩があります。それにこんな状況で俺が逃げることを稲浪が許してくれませんよ」

たとえこの場を逃れたとしても、後が恐い。俺は稲浪には敵わない。言葉も態度も力も。

「それは私にも責任があります。ですが、宜しいのですか？」

その問いには色々な想いが含まれているんだろう。優しさを感じた。だから俺は肯いた。だって、妹と一緒にいる男が俺。そのお姉さんにみつともない真似は見せたくない。それが稲浪に付き従う形でも、潔さで決めるしかなかった。

「……お二人が納得することを私には否定出来ません」

言葉は折れても、態度は不変。渋々認めたという感じだ。ちよつと罪悪感が湧く。

「では、あなた方は？」

稲浪の力を知ってるからこそ、九稲産はそれ以上何も言わなかった。

「わ、わたしは……」

「無理はしないで下さい。俺も恐いです。つばさ君の事を考えると余計だと思います」

「余計ってなんだよっ！ 俺は大丈夫だって言ってるだろ！ 平気だっての」

頑なな少年の我儘。琴音さんの不安なんかまだ気づけない年頃なんでしょうな。俺だって昔やんちゃだったし、つばさ君くらいの頃のこととは何となく分かる。

「つ、つーちゃん……っ」

琴音さんが止めに入るが、つばさ君は稲浪同様に頑固に闘う意思を告げる。

「……あなた方の思いは確かに受け止めました。ですが、私の見立てよりの真の言を言わせて頂きますと、今の稲浪および燕子つばさの能力では到底及びません」

はつきりと言われると、逆に実感が湧かない。周囲は壊滅的状况だったのに。NBSLの職員だかだってわんさかという。曖昧に言われるほうがこの状況下では事態を痛感しそうだ。

「あなた方にお教えしましょう。この厄災をもたらす神子を」

九稲さんが居を正す。それはもう煮詰まった意見の先にある答えを与えるように。

「大府大阪が梅田曾根崎。ここを壊滅させた神子は、我らが狐族、大伸狐空狐です」

「な、何じゃとっ！？」

俺と琴音さんをつばさ君は首をかしげた。人間の俺と琴音さんには分かるはずがない。翼君も空狐という狐という言葉に聞き覚えはないようだ。でも、稲浪だけは違った。驚きが誰よりも大きい。

「い、稲浪。知ってるのか？」



「知っておるも何も、空狐とは、我らがババ様じゃ」

「へ？」

間が起きた。喧騒の中の一時の間。えっと、今稲浪は何と？

「お恥ずかしながら、これを引き起こしたのは私たち狐族の先代長狐なのです」

「え？ えっと……？」

「どゆこと？」

琴音さんとつばさ君も稲浪と九稲さんを見る。

「少し、場を変えてお話ししよう。ここは他の神子の気配がします。これは私たち妖狐族に纏わる話です。現状とは無縁ですので、どうぞこちらへ」

詳しい話は別の場所です。そう九稲さんが俺たちに背を向け歩き出す。神社の神子さんのような装束は九稲さんの神子服なんだろう。色気よりも荘厳さに、ただついていくだけだった。

「まさか、これをババ様がしたとは……信じられぬ」

稲浪だけは周りの惨劇に驚きを見せ続けた。最初に俺たちが浮かべた顔をして。

## 一神抄・姉妹再会（後書き）

次回更新もまた暫く後になります。いつ頃かは提示できませんので、他の作品の更新時に次回更新作を提示しますので、そのときにご確認をいただければ幸いです。

## 一神抄・姉妹・ババ（前書き）

予定より早い更新です。これで一神抄は終わりです。  
次回よりやつと戦闘シーンがかかります（笑）  
では、ご覧くださいます。

## 一神抄・姉妹・ババ

稲浪だけは周りの惨劇に驚きを見せ続けた。最初に俺たちが浮かべた顔をして。

九稲さんの後をついていく。いつまでも変わらない惨状と刺激臭、目にさえ痛みを感じる粉塵は熱を帯びていた。

「このあたりで良いでしょう」

足取りが止まる。俺の隣の稲浪は表情を崩さない。後ろに居る琴音さんとつばさ君は手を繋いでいた。周りは直接的な被害を受けては居ないけど、規制線に阻まれ無人街に果てている。昼間だったのに気味が悪いくらいに生暖かい風が吹いていた。

「姉上、どういことなのじゃ？ 何故ババ様がかようなこと犯すのじゃ？」

「落ち着きなさい、稲浪。順を追って説明するわ」

振り返る九稲さんは、冗談などではない、真剣過ぎるほどに険しい顔つきだった。

「まず、隼斗さんはご存知でしょうが、私は稲浪の姉、妖狐が九稲と申します」

九稲さんが琴音さんたちに頭を下げる。

「は、はい。私は藤川琴音です。こ、こっちは、私の神子の……」

「燕子つばさだ」

つばさ君が名乗る。

「存じております。先日、東京よりこちらへ越されたそうですね」

「は、はい。で、でも、あ、あの、どうして……？」

不思議だった。どうして九稲さんが琴音さんのことまで知っているんだ？

「私は稲浪とは異なり、全ての神子の所存を探知出来ます。詳細は良いでしょう。話を戻します」

上手くはぐらかされ、それ以上何も聞くなと、九稲さんの表情に

俺たちは押し黙った。

「先もお話した通り、この惨劇を引き起こした神子は、私たち狐の先代長の大伸狐空狐と申します」

「我らのババ様じゃ」

稲浪が明朗に補足する。

「はい。空狐は狐族の神子にとってはババ様と崇められし存在で、その力は未だ健在なほどに強大なのです」

きつとそうなんだろう。この現状を目の当たりにしては、嘘には思えない。

「しかし永年の時を持つ空狐の徳は尊く、己が念を失うほどではありません」

長生きしてるのか。妖怪だから人間の寿命みたいなものは無いんだろうけど、ならどうして？　と思う。

「それもNB SLによる神子という名の適応によるものです。本来、神子は適応を通し、人と物の怪との差を学びます。しかし、未調整の段階にて嵩天原島を出た神子は、物の怪としての自覚を改善しておりません。故に神子となりさらに力を増した物の怪は、程を知らぬ存在なのです」

「だからとて、ババ様は何故かようなことを仕出かす？　これではただの殺戮に他ならぬではないか？」

今、この場において稲浪以外は呆氣に取られてる。と言うよりも、何のこっちゃ？　って感じかも。

「それは分かりません。だからこそ、私はここにて空狐を待つのです」

「待つ？　何でだよ？」

つばさ君が聞く。

「定めだからです」

九稲さんは即答した。意味が分からないんだけど。

「ならば我もここにてババ様を待つ。姉上が居ると言うに、我が去つては白狐の名が廃ると言うものじゃ」

はあ。またそんな勝手に決めちゃってさ。少しは俺の身を案じてくれたりしないのか？

「そうしてどうするの、稲浪？　空狐とは言え、先代が長。稲浪一人の力で勝ることは不可能よ」

九稻さんが言い切る。姉のことばだからか、稲浪は反論の代わりに言葉をのんだ。少し悔しげに。

「あ、あの、一つ、良いですか？」

琴音さんが俺の隣に来る。

「その、先代と言うのは分かりましたが、その、今の代の、方も創世には……」

「無論、参戦されております」

琴音さんの意味を言葉を区切って言う。琴音さんがトーンを落として肯いた。

「今の代の長って、誰なんですか？」

ちよつと興味心をそそられて聞いてみた。

「今代が長は、名を天狐てんこと申します」

「天狐？　色々いるんですね？」

空狐に天狐、稲浪の白狐に九稻さんの妖狐。一体狐だけでどれくらい創世に参戦してるんだ？

「うむ。狐族が物の怪において名馳せし一族じゃ。他にも赤狐せきこ、黒狐くこ、金狐きんこ、銀狐ぎんこがおる」

「すげえ。狐ってそんなにいんのかよ……」

つばさ君も驚いてる。俺も驚いた。まさかそんなにいるなんて。

「ですが、狐族は大きく分け、三種にぞくしております。まず、仙狐せんこと区分されしが空狐と天狐。双方は一族が長となれし強大な力の持ち主です。次いで善狐と呼ばれますが、稲浪が申した狐たちに加え、私たちも属します」

「善狐である我らは不要なる悪を持たぬ。故に善いものじゃ」

傲慢げに稲浪が語る。まあ悪い奴じゃないのは分かってるけど。

「そして、野狐やこと呼ばれし区分に属するは、地狐と申す粗悪なる狐

なのです」

「うむ。我は知らぬが地狐の噂は予てより有名じゃ」

狐の中にもやっぱり悪いものもいるのか。人間と一緒になんだな、その辺は。

「創世において、地狐の参戦はありません。地狐は人世に生きるモノではないので、恐らく今も姿を眩ましていることでしょう」

「そ、そうなんですか……」

なんだかよく分からないけど、悪い狐はいないっぽい。それならとりあえず一安心かも。

「でも、空狐って良い狐なんだろう？ 未調整だからってやりすぎくらいは自覚ねえの？」

また鋭角にツツコムなあ、つばさ君。感心するよ、その子供の無垢さってのには。

「空狐の嗜好は得てして善とは限りません。神たるものが善悪を両断し、在るものではありませんので、恐らく空狐は己が欲望に動いているのでしょうか」

破壊したい欲望に駆られての所業なのか？ だったらめっちゃ恐

いんだけど。そんな欲望に忠実に動いた結果が、これって、何？

「姉上よ。ババ様と謁してどうするのじゃ？」

「それは、私が定めを果たすのみ。この件くだんにおいての詳細は明かせません」

稲浪も頑固だけど、九稻さんもなかなか頑固っぽいな。

「……ふむ。まあ姉上のことじゃ。我が心配する必要もないのじゃろう」

「だからこそ、この場を去ることが神子と赫職が永らえることなのです」

やっぱり俺たちを追い出したいみたいだ。心配してくれている表情なのは分かる。嘘には聞こえない。きっとまたここで何かが起こるのかもしれない。そんな危惧を教えてくれてるなら、従うことが一番。俺はそう考える。

「でも俺、その空狐ってのに会ってみたいな。狐の長なんだろう？  
そんなもん滅多に見れるもんじゃないよな？」

「つ、つーちゃんっ!？」

「我もババ様とは会したことはない。基、我は姉上もといよりが狐はみな  
知らぬ」

知ってはいても、見たことはないのか。俺としてはこのまま会う  
こともない方が事なきを得る結果じゃないかと思うけど、神子二人  
はそうじゃないんだろうな。目、輝いてるし。

「ほっほっほ。そなに我が見たいとな？ 誠に愉快よの、九尾が九  
稲？」

「っ!？」

不意に響く声。九稲さんが殺気を帯びた鋭い視線で空を見上げ、  
風が止んだのに赤い髪が揺らめいた。

眩すぎる焰が見えた。

「隼斗っ!」

「琴音えっ!」

俺の前に稲浪が立った。琴音さんの前につばさ君が立った。

「つーちゃんっ!」

「稲浪っ!」

琴音さんと俺も叫んだ。

「炎舞、召照しよちやう」

灼熱の劫火。眼前に迫り来る橙色の焰。何が起きたのか分からな  
かった。気がついたら稲浪とつばさ君の神子が俺たちの前に立った。  
「ほっほっほ。やりようようだの。さすがは九尾よ」

でも俺たちは何もしなかった。稲浪とつばさ君の前に立っていた  
九稲さんが神楽を舞うようにその場で舞った。

「……随分なご挨拶ですね」

すると俺たちの周囲に風のような焰の渦が多い尽くし、迫った炎  
を打ち消した。熱さは無かった。稲浪の青焰に近いものがあつた。

「お怪我はありませんか？」



「うむ。姉上の焰に守られたぞ」

「す、すごい。一瞬であんなに出来るんですね……」

「かけえー……」

各々の九稲さんを現す言葉。俺は綺麗だと思ってしまった。神子であり、まさしく巫女に見えた。

「うむ。手加減とやらはしてやった。ほんに挨拶と言うものよ」

霧散した焰の向こうの空に、浮いていた。

「何故に舞い戻られたのです、大伸狐空狐」

「何じゃとっ！？ ババ様となっ？」

「うええっ！？」

「あれ、が……？」

「う、そ……？」

九稲さん以外、この場は驚きに満ちた。稲浪や九稲さんとは違う短髪。サイドヘアーが異様に長い。日本人のような黒髪に白い髪がメッシュのように混じっている。

「何故とな？ 並びに揃う一族あらば、赴かぬわけにはいくまい？」

俺は、稲浪がババ様って言うし、九稲さんも長って言っていたから、てっきりお婆さんかと思った。

「現長は天狐様です。貴女は既に引かれた身。創世へ加わりのこの所業。妖狐九稲、見過ごすには参りません」

ゆっくりと空から降りてくる空狐。驚きが止まらない。

「子供じゃん」

「つ、っーちゃん……っ」

「ふあぐっ」

慌てて琴音さんがつばさ君の口を塞ぐ。

「す、すみませんっ」

「よいよい。我とて身の丈の程は解しておる」

穏やかだった。つばさ君と差して変わらない風体の少女。どう考えても婆さんには見えない。呆氣に取られて変な緊張が解けた。

「油断してはなりません。子供の様態と申しても我らを凌駕する焰

の用事です」

九稲さんは警戒を強めた。それを見た空狐が鼻で笑った。

「稲浪とやらよ」

だが、言葉はない。あるのは稲浪を呼ぶ声だけ。

「ん？ 我か？」

稲浪が視線を微かに下げる。

「かわいい、かわいい、我が孫<sup>そん</sup>よ。ほんに良い良い」

何だ？ いきなり稲浪を褒めた。

「何じゃ？ 気に解せぬぞ」

稲浪も首を傾げてる。いきなり褒められたって分からないよな、普通。

「ほんに良う育ったものよ。まことに愚かで醜きよ」

声は子供のように高い。でも口調は不相応に年美いている。

「……何じゃと？」

でも言葉は毒だった。稲浪の表情に怒の感情が沸く。

「その顔じゃ。その顔こそ我を走らせよる」

比べ、空狐は愉快そうに笑う。少女のあどけない笑み。そうしか見えない。

「我を蔑むか。我は誇り高き白狐稲浪なるぞ」

卑下するものを許さない。稲浪の相変わらずの格好良い物言い。

「稲浪、下がりなさい。ここは私の場。稲浪に出る幕はないわ」

だが、九稲さんがそれを左手を出し、制す。

「ほっほっほ。良い良い。我を楽しませるとあらば、姉妹して我に挑めよ」

緊迫している。九稲さんと稲浪が空狐を睨む。でも空狐は笑顔。分からない。それが素直な感想。

「は、隼斗、さん」

琴音さんが裾を引く。どうしたらいいのか分からない不安な顔だった。

「赫職藤川琴音、神子燕子つばさとやらよ。貴様らはどうするかえ

？ 我を楽しませるか？ はてさて、逃げ出すか？」

二人を置いて、その向こうにいる琴音さんたちを空狐が見る。笑顔なんだけど、無意識下に訴えてくる恐怖は何なんだ？

「戦う必要はありません。これは忠告ではなく命令です。お二方は直ちにこの場を去りなさい」

振り返ることなく九稻さんの背中から声が通る。

「姉上の警告は絶対じゃ。つばさよ。琴音をつれ去れ。ババ様の神子力はつばさでは防げぬ」

同族だから分かるのだろうか？ 俺にはまるで分からないんだけど。

「つーちゃん、我俣はダメよ」

「お、うん……稲浪、大丈夫なんだよな？」

空気に感じたんだろうな。

「無論じゃ。この場は我に任せよ」

「分かった。行こう、琴音」

小さな手が琴音さんの人差し指から薬指の三本をとった。

「は、隼斗さん……」

「逃げてください。俺は稲浪がいるんで大丈夫です」

「急げ、琴音」

つばさ君が先に俺を通り過ぎる。

「死ぬなよ、隼斗」

「ああ。琴音さんを頼むぞ」

小さな風が琴音さんをつれて行く。

「なかなか良い度胸よの。しかし、つまらんな」

振り返りはしなかった。つばさ君ならきっと大丈夫だと思ったから。

「え……っ？」

何かが通り過ぎた。熱い風が二つ、俺の横を吹きぬけた。

「弱き神子に価値はない。散れ」

怒の無情。

「つばさっ！ 琴音っ！」

稲浪が俺を向いて叫ぶ。青い焰が掠めた。

——何が起きた？

「え？」

「なっ……！？」

振り返る。つばさ君と琴音さんと一瞬目が合った、ように見えた。

「つばさぁっ！ 琴音えっ！」

背中に稲浪の大声が突き刺さった。

〈FCE放送局〉

「皆さん、こんばんわ。またこのコーナーがやってまいりました。

今回は長らく待ったゲストをおよびしております。では、どうぞ」

「うむ。呼ばれてきてみたが、何の样じゃ？」

「このコーナーではFCEの世界を皆様にお送りするコーナーなん

ですよ」

「そうなのか？　して、主よ。何故般若の面などをしておるのじゃ？」

「大人の事情です」

「ふむ。まあよい。我は何をすれば良いのじゃ？」

「そうですね、とりあえず自己紹介をして頂きますか？」

「自己紹介とな？　うむ。聞けよ、見えぬ輩よ。我は狐族最強、白狐稲浪じゃ。赫職は風祭隼斗じゃ」

「仲が宜しいようですね、隼斗さんとは」

「無論じゃ。命約を交わせし赫職じゃ」

「では当然、夜の営みもお済なんですね？」

「夜の営み？　何じゃ、それは？」

「ご存知ない？　そうでしたか。夜の営みと言うのはですね……」

「ふむ？」

……………。

「……………と、言うのが定番ですね」

「なっ、あ、そ、それを、申すか？」

「はい。ですが、関係が深まると、殿方の……を……したり、稲浪さんの……を殿方に……して頂いたり、奥が深いものなのですよ」

「……わ、我と、は、隼斗が……？」

「ごく一般的なことですよ？」

「な、なんとっ！？　ま、誠なのじゃな？」

「はい。殿方ならば、稲浪さんのようにお綺麗な方に対しては特にそう思われているかもしれませんよ」

「むむ……は、隼斗が、わ、我に……」

「うふふ。稲浪さん、可愛いですね。私が殿方なら間違いなくそう思いますよ？」

「なっ、なな、何を申しておるのじゃっ。主は女子おみなこじゃろうっ」

「私が殿方でしたらのお話ですよ。それくらいに稲浪さんは可愛らしいと言う事ですよ」

「うむ……複雑じゃ」

「うふふ。稲浪さんならきつと隼斗さんにぴったりの神子さんですよ」

「そ、それは当然じゃ。隼斗は我だけのものじゃ」

「あらあら。まあ、愛らしい稲浪さんのご紹介はこの辺りにして、予告に移りましょう」

「そ、そうじゃ。して、予告とはどうなのじゃ？」

「はい。これは私がお送りします。次回FCEは絶体絶命のピンチっ！？ 助けはない。術もない。圧倒的で絶対的な力。どうなる稲浪っ！？ どうする稲浪っ！？ をお送りします」

「……なんじゃ、それは？」

「お気になさらずに、ですっ。では、次回より皆様の待ち望んだ戦記らしい戦記に突入です」

「主よ。愛らしい声をしておるが、その面を外したほうが良いとみるぞ？」

「稲浪さんにはまだまだ早いです、私の素顔は」

「な、何じゃ。それはどうということじゃ？」

「それでは次回もご覧くださいね」

「あ、こらっ、待たぬか……………」

プツ……。

## 一神抄・姉妹・ババ（後書き）

拝読ありがとうございます。

読まれた方はぜひ評価、感想をお願いします。感想等をして頂いた方には、こちらよりも貴作に評価をさせていただきたいと思えます。まあ、大したことは書けないですけど（苦笑）

次に更新する作品は、「ハウンと犬の解消記」です。  
更新予定は当初の今作の予定日の六日です。

## 二神抄・激突・前編（前書き）

更新しました！

評価の返信もまだ終わっていませんので、きちんと返信はしますの  
で、しばしお待ち下さい。



## 二神抄・激突・前編

「うわっ」

振り返った瞬間に、熱波が吹き荒れた。自分の事を精一杯に庇うだけしか出来なかった。何が起きた？ 何だこれ？ 何がどうなってるんだ？ さっぱり分からない。

「っ！」

ただ、守れなかった、自分自身すら。

「隼斗っ！」

急に体が不安を訴えてきて、血の気が引いた。鳥肌が立った。ただ足が地面に着かなくて、サウナ室の中で吹き飛ばされたような圧迫感のある熱風に弾かれた。

「隼斗、大丈夫か？」

でもそれはすぐに安堵に変わった。脇下からぐっと胸を交差して掴む腕。吹き飛ばされた向きとは逆に体がその力に反転した。

「稲浪っ」

稲浪が俺を抱えていた。でも、足は地に着かない。浮いてるんだって稲浪の柔らかいものを感じながら不思議と恐怖が消えた。

「降りるぞ、隼斗」

すっと、足が地面に着いた。全身の力が抜けていたのがすぐに立ち上がれなかったことに気づく。その間も稲浪が支えてくれて、やっと立ち上がると忘れていた熱さが甦る。

「な、何が起きたんだ……？」

物凄い熱気と風。さっきまで見えていた琴音さんとおつばさ君の姿が焰で見えない。

「分からぬ。じゃが、ババ様と姉上が焰の向こうに飛んで行ったのじゃ。私の焰では追いつけなかったのじゃが……」

稲浪も状況は分からないみたいだ。でも、向こうには二人が……。

「っ！ 琴音さんとおつばさ君はっ!？」

轟々と燃える炎。そっちには琴音さんとつばさ君が。

「待つんじゃ隼斗っ！ 今焰に飛び込めば、隼斗が灰になるぞ」

稲浪に引き止められる。もしかして、さっきの二つの熱気は空狐と九稲さんだ。一瞬のことで分からなかったけど、さっきの空狐の言葉、あれは戦線離脱した二人を殺しに行ったのかもしれない。まずい。あの二人があんな焰の使い手を相手に出来るはずが無い。

「稲浪っ！ どうか出来ないのかっ？」

そして俺は縋るしかない。俺が闘えるはずが無い。

「落ち着くのじゃ、隼斗。姉上が参っておる。今は焰が消えるのを待つんじゃ」

予想以上に落ち着いてる稲浪に、俺まで力が抜ける。でも、心配だ。あんなにいきなりの攻撃で容赦がほとんど無かった空狐だ。あんな一瞬で俺の横を通り過ぎたんだから、逃げ切れるはずが無い。焰が消えるのを待つしかなかった。

「ほお？ 我的足蹴に追従するとな。是、驚きよの」

居た。焰が消えて、空狐の背中与九稲さんが見えた。

「お褒めに預かり光栄の所存です」

空狐と九稲さんの片手同士が触れ合っていた。いや、そのわずかな隙間に焰が渦を巻いてる。小さい渦なのに、あの焰の熱がこっちまで吹き付けてくる。

「焰玉<sup>えんぎよく</sup>じゃ……焰玉が出来ておる」

稲浪がその小さな焰を見て、驚いていた。

「危険じゃ……琴音とつばさが危ういぞ」

「え？ それって……い、稲浪っ!？」

急に稲浪が俺の横から青い焰を纏って飛んで行った。稲浪の熱が俺の上着の解れを散り散りにさせた。と言うか、稲浪の動き、早いんだな。見えなかった。

「稲浪。そのお二人を早くっ」

九稲さんが稲浪に何かを言っていた。俺にまでは聞こえなかった。「うむ。琴音っ、つばさっ。来るのじゃ」

稲浪が空狐と九稻さんの近くに倒れていた琴音さんとつばさ君を抱えて、また焰を纏ったままこっちに来る。

「ほっほ、美しきかな、姉妹愛、とな？」

空狐が笑ってる。やっぱりお婆さんには思えない。

「空狐。貴女は、これの理を解しているはずです。何故、このようなものを戦闘を離脱するものに放つのですっ？」

九稻さんが怒っていた。目つきがこっちを向いているから良く見えた。稲浪の怒ってる時よりも恐い。

「戯言よ。創世たるは、唯我独尊。逃げようが逃げまいが、いずれは果てる。ならばこの空狐、即を以って楽を得させんとする。親切心と言うものよ」

何か言い争いのようなものが聞こえるけど、はっきりとは聞こえなかった。その間に稲浪が二人を抱えて戻ってきた。

「琴音さん、つばさ君、大丈夫ですか？」

「は、はい。私は。で、でも、つーちゃんが」

琴音さんには怪我也無いみたいだ。

「つばさ君っ！」

稲浪の腕の中にあるつばさ君。神子服の背中が焦げて破れてる。背中が酷く赤く染まってる。

「隼斗。我は早急に二人を離脱させてくるのじゃ。隼斗は極力姉上たちに近づくではないぞ。我が戻るまで逃げるのじゃ。良いな？」

有無を言わせない顔に、肯く他は無い。

「つーちゃんっ！　しっかりしてっ」

その間も琴音さんがつばさ君の目を覚まさせようと呼んでる。でも、つばさ君は意識が無いのか返事が無かった。俺にはどうすることも出来なくて、ここは稲浪に任せるしかない。

「琴音、案ずるでない。神子たるは人間を越える強靱を持ち得ておる。我がNB SLに連れて往く。参るぞ」

稲浪がそのまま二人を抱えて、すぐ戻ると言い残して青い焰の固まりになって駆けていった。早すぎて、何が何だか整理出来ない。

「九稲さんは……」

逃げるべきなんだろう。でも、分からない中で逃げても、周りの破壊された建物がある以上、逃げ場なんてあるのか？ ガラス片、コンクリート片、粉塵が舞ってる上にこの熱気。汗が滴る。動けるはずがなく、俺は九稲さんと空狐に視線を戻す。

「創世において、背を向けることこそが愚行。ですが、離脱するものを殺めるなど言語道断。やはり貴方は危険すぎる存在。今ここで、妖狐九稲が滅します」

九稲さんが紅い焰を全身に纏った。髪が揺れてる。燃えないんだとか思う時点で、俺は少し余裕があるのかもしれない。

「ほっほっほ。良い良い。我を楽しませよ。だがの、主も解しておろう？ 焰玉は双<sup>そ</sup>が焰を得てしてあるものよ。我は撃つことも滅することも容易い。しかし、主はどうなのじゃ？」

熱いのに、静かになっていく。まるで九稲さんと空狐の手のひらの中にある、あの小さな焰の玉が音を吸い込んでいるみたいに。九稲さんの表情が怒りの中に、苦渋が出てた。

「そうであろう、そうであろう。妖狐と言えど、所詮は善狐。仙狐ならぬは弱きものよ」

「たえそうであろうと、私は私の責務を果たすだけです。全力を持って貴女を押さえます」

その時、あの焰の玉から輪っかの形をした焰が二人の間の壁になっていてみたいに飛んだ。離れるに連れて輪が大きくなって、最初に地面が解けた。オレンジにアスファルトが光ってる。

「え……？」

そう思ったのも束の間。上空に広がった輪がビルに触れた。触れた所から破壊じゃなくて、解けた。ビルを真っ二つに溶かして、ビルを構造していたものがドロドロになって、ゆっくりと地面の草を燃やした。似た光景を見たことがある。溶岩だった。

「うそ、だろ。コンクリートを……？」

コンクリートが溶けるなんて、強酸性雨で溶けるのは知ってる。

でも、熱で溶岩のようになるなんて、熱いのに寒気がした。ビルが解けた部分から歪んでいく。通りに居る二人の両サイドのビルが同じように解けていく。窓ガラスがあちこちで碎けて、空から降ってくる。

「やば……」

俺は慌てて後退した。熱も怖い。汗で服が張り付いて気持ち悪い。少しふらふらする。でも、逃げないと。ガラス片に触れれば血まみれだ。逃げ場が多そうに見えるビル街なのに、この辺りの封鎖地域は、ビルが倒壊しているのが当然のように廃墟だ。逃げ場なんてビル街の方がどこにも無い。とにかく離れよう。

「ふむ。良い眼よの。ならば見せてもらおうかの」

「っ！？ 空狐っ！」

「ほっほっほ。我は退くことも出来ると言うものよ。見せてみよ、九稲。焰玉を打ち消す力とやらをの」

一度振り返る。空狐が浮かんだ。そう思った瞬間だった。

「うわあっ！」

背中から強く押されたように、熱波が吹き抜け、俺の体が地面から浮いた。その勢いは、解けていたビルまでもが倒壊させて、通りを封鎖した。

「あぐっ……つくう……」

運が良いのか悪いのか、ビルが倒壊して背中からの熱波が止んで、飛ばされた体が落ちて、滑ってこけた。

「つつ。な、何だ……？」

少し擦り傷が出来た。微妙な痛みは後を引くから嫌いだ。でも、それ以上に振り返って、啞然とした。そこに立っていたはずのビルが、物凄い熱を帯びて赤く光っている。

「熱っ！」

サウナなんてものじゃない。本能が危険だと身体を走らせた。熔けている。俺の背中にあったものたちが。俺はどこかの火口にいたのか？ そんな風にすら思える、建築物の熔解。信じられない現実

が背中から焼こうとして、逃げるしかない。異常も異常だ。どんどんビルが倒壊して、熔けて、通りが赤い川になっていく。この辺りにいたはずのNBSLの人とか警察関係者たちはどうなったのか、助けを求めようにも姿がなかった。

「ふむ。やはり妖狐ごときに抑うるは否のようだの」

逃げていた方向、ビル六階ほどの高さに、空狐がいた。俺のことなんか見てなくて、俺の後ろの惨状を静観してる。今のこれは、空狐の仕業、なんだよな？

「ほれ、そこいく人間よ」

「うわっ」

降りてきて、俺の前に立った。見た目は子供、素性は稲浪たちよりも年上のババ様。目の前にいて、恐怖が襲う。殺される。俺なんか一発で。そう思ったら引き返そうと身体が動いて、止まる。

「焦ることもなからう。それとも焰の川に焼かれないのかえ？」

後ろはゆっくりと蕩けるように熔けていく灼熱。汗が止まらない。肌に焼けるような熱が痛みを与える。水が欲しかった。水道なんて見当たらない。時々蒸気が勢い良く噴出してる場所がある。多分、そこに水道管か何かがあるんだろうけど、飲めたもんじゃない。

「な、何を、した……？」

稲浪に助けを求めようにも、つばさ君を連れてNBSLに行ってる。九稲さんの姿は、倒壊するビルの向こうで見えない。俺の目の前には空狐。一対一の構図が求めないのに出来てしまう。さらに背中から迫り来る溶岩のような流れ。俺はここで死ねと言うことか。それしか悟れない。

「何をした、とな。何もしてはおらぬな」

言い切られる。でも、信じられるか、そんなこと。

「稲浪が言ってた。焰玉とか言うの、お前が、だ、出したんだろ？」  
子供なんだ。どう見ても。でも、子供なのに恐いって思う俺がいる。

「ふむ。主よ、何も知らぬと見るが、まことに稲浪の赫職かえ？」

分からないことに素直に首を傾げる子供の仕草。つい、屈んで視線を合わせて話そうとする、見下しのような感覚がある。

「稲浪の？ う、うん、確かにそうだけど？」

「その割には、得てして知らぬことが多いようだ。稲浪とやら、言葉にせなんだな」

一人で納得している。見る限り、闘う意思は感じられない。

「そ、その、焰玉って、何なんだ？」

つい、緊張を解いて、尋ねてしまう。

「簡単なことよの。仙狐なる我が導き出す烈なる焰。あらゆるものを焼き尽くし、溶かし去る。妖狐とて御するは叶わなのであろう。結果がこれと言うものよ」

振り返る。梅田の一角がなくなっていく。豪快な音とかないんだ。ただ、沼地に沈んでいくみたいに、高層ビルまでが地面に埋まっていくように無くなっていく。焰の川の中にあちこちで小さな焰が何かを燃やしていく。その全てが灰になることも無く、熱と光を発し続ける。本気で危険だ。逃げないと、俺も溶けて死ぬ。冷や汗が垂れた。

「な、何でこんなこと、するんだよ？」

「何でとは、是、疑なり。創世たるは神子の戦。ならばこそ、出会いし神子は生くか逝くかであろう？ この狭き界で害なく終える戦など、神子は持ち合わせてはおらぬものよ」

確かに、こんなビル群で戦闘をして、被害を出さないのは無理だ。でも、だからって全部を破壊しようとしてる、これは別問題だろ。

「焰玉は御すべく力なくは、留まりを知らぬ焰。快天に煌めく星のごとく、御さねば一帯は果てるかの」

自ら生み出した焰を、もう過去の産物のように放置する。許せないとかじゃなくて、信じられなかった。自分の焰なのに関心が無い。町が破壊されようと、誰が死のうと、空狐にとっては炎を生み出した時点で興味はなくなってる。恐ろしいとは思えない。目の前の小さな狐の耳をピンと立てた女の子を。

「焰帝、七の舞」

差し出す手のひらの中に煌めく焰。熱に耐える九稲は、その強大な力を前に次第に表情が濁る。だが、焦りはない。その表情は凜を留め、手のひらに焼きつく焰玉に静かに息を吐いた。そして九稲は静かに焰玉から手を離し、その場で舞を舞う。全身を焼き尽くす焰の中で、九稲の身体を焰が走る。炎の中の焰は色を増し、九稲の正面にある小さく凝縮された太陽の縮図のような焰玉を覆っていく。同時に九稲の背中から一つの灼熱色の焰が空へを昇る。破壊されていく町を包み込むように、一本の焰の柱が空を覆い始める。

「空狐、貴女の好きにさせるほど、私は寛大ではありません」

焰玉が九稲の焰に包まれ、激しさを増してさらに圧縮されようとする。一方で被害が拡大していく周囲の惨状を炎が覆い尽くす。焰のドームが出来上がり、被害がその壁に遮られる。

「ほっほ、九稲め、少しはやりよるようだよ」

空狐が笑った。でも俺は、動けなかった。空狐の目が、殺戮を楽しむような恐ろしさを醸し出している。下手を踏めば、すぐに灰になる。そんな予感がした。子供なのに、目つきだけは稲浪がババ様と呼ぶに相応しいような力量を覚える。

「うわっ！」

そう思ったのも束の間。背後から真っ赤すぎるくらいに赤い炎が目の前に降り注いできた。

びっくりして尻餅をついた。俺の眼前に焰の壁が燃えている。

「ほお。なるほどのお。かような真似をしてくるは、七の尾、か。

九稲よ、姿を我が前に晒せよ」

空狐が俺を追い越す。小さな背中が揺らめいて見えた。俺には見えない何か空狐を守るように、小さな背中を陽炎のように纏っている。何となくそれだけは分かった。

「く、九稲さんっ！」

でもそれ以上に、目の前の焰の壁の中から全身に焰を纏い、赤白



の神子服が靡く。

「九稲、さん……」

生きていたんだという安堵。でもすぐに異変に気づいた。

「ほっほっほ。久方に戯れられそうだの」

空狐は笑っている。口調はどこか古さがあるのに、声はやはり子供。

「空狐。貴女が犯したこの罪、これは許されることはありません。恐らく、日本国における創世の中で、甚大な被害を被ったことでしよう」

鋭く怒りを含んだ感情の言葉。別人に見えた。九稲産の瞳が焰と同じように赤く輝いている。綺麗と言うよりも、これも恐怖だった。俺のことは届かなくて、俺は路肩の野草のように二人の視線に取り入れられていなかった。

「それこそ愚かなり。我は葬ることをしたまでよ。これは戦であろう？ 戦場に罪があるとな？」

挑発的な物言いに、九稲さんが焰に包まれた腕を翳す。そこには渦を巻いている焰の玉があった。でも、さっき見えたものより小さい気がする。でも、何だろう。物凄く嫌な予感が冷や汗なのか、暑さの汗なのか、分からない汗が出てきた。

「人々は生活を育み、人は生きています。私たち神子に、それを犯す権はありません。その罪、この焰をもって鑑みなさい、空狐」九稲さんが焰を持つ手ではない、空いた手を横に伸ばす。それでもその手には焰が宿っていて、そこから焰が焰のドームに伸びた。

「真に壮観なり。人栄など、我が焰の前に岩と化す。見よ。これこそ理。我らが今こそ、治むるは、人界なり」

空狐が満足げに笑んでいる。でも、俺は啞然としていた。焰のドームが九稲さんの腕の焰と同化して、莫大な焰が九稲さんの中に取り込まれた。あれだけの焰を稲浪より艶やかに見えないでもないけど、比較的華奢な体のどこに収まっているのか、不思議だった。でもそれ以上の驚愕の世界が、背景になっていた。

「な、何、これ……」

空が開けていた。昼過ぎの白さのある青空が、視界を覆い尽くすように見下ろしている。大府大阪に来て、見たこともないくらいに広い空があった。でもその下は、なくなっていた。

「仙狐とて、身を引かれた身。罪と罰を解さぬなど、誰が聞き入れましょう？ 覚悟は宜しいですね？」

青の空と、黒い大地。熱は冷めない。白煙が立ちこめ、焼臭が鼻をつく。溶けた溶岩は固まる。固まっているんだ。黒に溶けたあらゆるものが、一面をアスファルトのように蔓延っている。遠くに見える景色。数百メートルは軽く焦土と化していた。俺が知る大阪の都会並木がどこにも無かった。

「ほっほっほ。良い良い。かかってきやしゃんせ、九稲？」

それでも空狐の楽しげな宴は終わらないんだ。その挑発に九稲さんが焰玉を持つ手を赤く鋭い瞳で掲げ、放った。

その瞬間は、本当に一瞬。目の前が真っ赤に染まった。眩しすぎて目を腕で覆い隠した。

「何を勘違いしておるか、九稲」

「……やはり、通用はしませんか」

腕を退けて、視界が開いた時、俺はいつの間にか大地にねじ伏せられていた。誰かの直接的な作用じゃなくて、何か、もっと強大なものに踏まれるように。

「あ、ぐっ……」

重たかった。ただからだの自由を奪われて、重量を覚える。それから、空が赤くなった。

「焰玉は私の生み出したる焰。触れることなど容易すぎるわ」

空を見上げた。それは焰の空。爆発だったんだ。九稲さんの放った焰の玉。それを空狐は容易く弾いて、空で爆発した。だから重たくて熱いんだ。もう熱さに感覚がおかしくなってる。どうすることも出来なくて、どうしようもない。

「しかし、我に焰を振るった。如何なることがあれど、これは戦よ

の。手加減はもうせぬぞ」

空狐が俺の視界から消えた。

「受け立ちましょう。貴女を肅清するが、私の役目なのです」

そして、九稲さんが焰の尾を引きながら飛び上がった。空には三つの焰が飛び交っている。赤い焰と、橙の焰。その二つの合わさる焰。青空が消えた。

「お、俺、どうすれば、良いんだ……？」

蚊帳の外だ、俺。空を飛行機雲みたいに空狐の橙の焰と九稲さんの赤い焰が飛び交ってる。俺が見た、稲浪との戦いとはその規模がまるで違う。

「これが、神子、なんだ……」

勝ち残ることを前提にした神子の創世が、こういう力の衝突がある。稲浪のことはまだ知らないことが多い。その中でこんな戦闘を目の当たりにして、何も考えられなかった。

「この程度か、九稲よ」

空狐が片腕に宿した焰で、九稲の焰を振り払う。縦横無尽に飛び回る九稲に比べ、空狐はその場で炎に合わせて身体の向きを変えるだけ。大きく動くことは無い。

「蛇焰<sup>じゃび</sup>、一の舞」

空狐の挑発に、九稲が空中での動きを加速する。舞を踊るように九稲の身体が宙で焰を躍らせる。空狐はただ眺めるだけ。そこに九稲の背後から一陣の風を纏う焰が立ち上る。九稲を越える焰の規模は大蛇のごとく、九稲の身体を取り巻く。

「ほっほっほ。蛇焰を使役しておるか。我の知る好し頃の九稲ではないようだの」

「無論です。私はこの近畿を仕切る神子なのです」

だからこそ、町を破壊した空狐には罰を与える。九稲の目の色は怒りを含むように赤く、冷静に対峙している。巨大な蛇焰が獲物を狙うように風の中で燃えている。

「ならば仕向けてみよ。我は逃げはせぬぞ？」

空狐は耳で挑発するように動かす。九稲が腕を横に出した。

「行きなさい、私が焰よ」

静かに九稲が腕を空狐へと手向ける。それに合わせて巨大な焰がうねりながら飛んでいく。もはや誰に見られようと無関係な戦闘。勢いを増しネズミを喰らわんとするように焰が空狐に襲い掛かる。空狐は何もしなかった。ただ、どこか楽しげであり、何かを含んでいるように口の端を上げ、蛇焰の中に身を飲み込ませた。

「……………」

九稲は己の背後、腰部から伸びる焰の先、空狐がいたであろう空間を凝視する。風に赤い髪が揺れ、香りが流れるように九稲の髪からは火の粉が煌めいて飛んでいる。それを地上から呆然とへたり込んでいるように隼斗は、息を呑んでいた。

「さて、次は如何に我を楽しませる？」

「っ！ ……あぁっ！」

蛇焰の中から、その焰を串刺しにするように、一閃の雷鳴のような焰が突き抜けた。九稲の小さな悲鳴と共に、その身体を黄色の焰が焼く。九稲の焰とは比にならない小さな一閃。だが、その到達速度は稲光をも越える兆速で、焰が九稲に直撃して爆発すると共に、空に九稲を中心にした炎の波紋が走った。回避しようにも蛇焰の動きでは対応できず、九稲は蛇焰を解放し、己から焰を吹き出し、空狐の焰を払った。それでも神子服の端に焦げが出来ていた。

「妖狐九稲よ。技は得てして一を出すものではないぞよ。常に二は繰り出しておらんぞ、間に合いはせぬ」

蛇焰が消え、空狐はそこにいた。だが、その小さな身体は無傷で、異質なものがその全身を包み込んでいた。

「神通力、ですか…………？」

空狐の周囲の空間が揺らめいている。だが焰ではない。空狐の姿が揺らめいているだけで、透き通っている何か。それこそ蛇のよううねり、時折焰が稲光のようにその何かから噴出する。

「仙狐なればこそその、焰の使いよ。我とは別離した自我において、我を守るのもよ」

姿を明確に捉えることは叶わないが、その焰の使いは、動いている。空狐の姿が揺らめいているのが、せいぜいの判断材料だが。

「私の焰を食らう使い魔とは、少々軽率に存じておりました」

九稲に微かな笑みが浮かぶ。

「真に力を見せてみよ。さもなくば、我より往くぞ？」

だが、空狐は下らない戦いを続ける気はないようで、瞳は笑ってはいないが、声は笑っていた。と、同時に空狐の姿が空間から消えた。

「っ！」

九稲が眼前で焰を纏った腕で崩御姿勢をとる。そこへ、無邪気な笑みと言うよりも、殺し合いを楽しむ鬼のように勢いづいた表情で、空狐の拳が焰の尾を引きながらそこへ突出したように打ちつけ、九稲の身体が宙を滑る。

「対応速度が若干遅いの？」

「あなたが早すぎるだけ、ですっ」

九稲がそこへ焰を発す。だが、空間には何もない。空狐はいなかった。九稲が繰り出す焰の間逆の方に空狐が狂演したように九稲に焰を打ち込む。それでも九稲も簡単には受け入れはしない。

「独焰、三の舞」  
どくえん

九稲の腰部から焰が人の形に変化し、九稲に並ぶ。

「ほお、焰の化身とな。まことに九つが焰を司るようになったようだよ」

九稲の轟々と燃える炎の化身に、空狐が一度距離をとった。

「ええ。あなたのそれには、到底及ばないのでしょうが」

仙狐と善狐には決定的な違いがある。仙狐は、千年の時を超えて存在する。故に空狐はあらゆる神通力を身に付けている。それこそ、狐の階級において、空狐は千年を生きる天狐より、さらに三千年を経ている。もはや神の領域としての地位がある。狐は力を得ること

によって、尾を増やす。しかし、九の尾を身に付ける狐は、やがてその尾を減らしていく。故に空狐には焰を宿す尾はない。あるのは耳だけ。あとは人型。不要なものを切り捨て、得たものは濃縮する。もつとも威厳と脅威を人間が感じるものは九尾。だが、狐にとっての脅威は尾を捨てた零尾の狐。それが仙狐たち。

「無論なり。しかし、一匹より二匹。我に相對するのならば、数もまた力であろう。本氣にて参れ、九稲」

神通力の一つ、神足通。空狐が風のように姿を消す。九稲には掌握は出来ない。だからこそ、九稲は視界を閉じる。

「源焰<sup>げんび</sup>」

黄色の焰が空間から噴出し、空狐の周囲に吹き荒れる。

「焼き尽くせ、我が焰よ」

言葉だけが轟き、姿は見えない。

「焰帝、七の舞」

九稲に無数の焰の柱が襲い掛かり、九稲が焰のドームを張る。熱風が吹き荒れた。空狐の焰を受け止めるが、

「甘い<sup>かいばく</sup>の。戒爆」

「独焰っ」

焰帝の防御のドームに突き刺さる無数の焰が、空狐の言葉と共に戒めのごとく爆発する。空に烈風が吹き、遠くを飛行してきたNB SLの恐らくは監視ヘリだろう。烈風に急激に高度が降下した。九稲は焰帝の中で、意識を集中させ、独焰を操る。空狐の使い焰とは違い、独焰は自らが御するようだ。命じられた独焰が、焰帝を破壊せしめんと爆発しているのを見下ろしていた空狐へ襲い掛かる。

「ふふっ、良いの。我はかようなものを待っておったものよ」

九稲を模した独焰が焰を空狐に放つ。だが、空狐は笑顔でその焰を片手で受け止めた。

「失せろ」

そして、空狐は鼻で笑い捨てるように腕を振るう。そこから溢れた焰が、雪崩のように独焰を飲み込み、赤い焰は黄色の波に打ち消

された。

爆発が収まり、九稲が再び姿を現すと、空狐が手のひらから焰を幾つも放つ。

「っ……恐ろしいお方……っ」

九稲も同様に焰で受け止めるが、数は圧倒的に空狐が勝り、九稲が交わす度に町へ焰が降り注ぐ。

「避けても良いのかえ？　町が燃えておるようだよ」

「っ!？」

ただでさえ、地上は一区画を穢土と化している。それに加えての空狐の焰が火災を呼んでいる。NBSLの車が消火に当たっているようだが、きりが見出せない。

「その姿では、我を倒すは叶わぬぞ？」

能力を使役すれば、同然疲労は蓄積する。九稲は先ほどから大技を放っている。当然九稲の疲労は明らかに増している。

「……いいえ、私が役目は人々の生活を守り通すことです。害を及ぼしたりはしません」

「そうか。なら、果たして見せよう！」

空狐が少しばかり本気でも見せようと、一步踏み出すように宙を蹴る。姿はそれで消えた。

「っ!」

九稲の目の前で焰が炸裂し、その中から小さな少女の拳が打ち抜いてくる。九稲が受け止めるが、少女の姿には不相応ではない圧倒的な力に、九稲に苦渋が浮かぶ。

「本意を見せてみよ、我が可愛い孫よ」

拳を打ち込み、九稲が腕で受ける。

「隙を見せては射抜かれると言っておろう」

拳に意識を向けていた九稲に、拳を繰り出したまま空狐が脇腹に蹴りを打つ。

「っく……」

全身に焰を纏っている九稲だが、それでも、その衝撃に表情が苦

痛に歪んだ。それでも攻撃の手は止まず、空狐を取り巻く使いの见えない焰と共に、垂れ流しにされているような空狐の焰が、空狐の攻撃とは別に襲い掛かる。

「どうした？ 舞わぬのかえ？」

口調にも表情にも疲れを見せない空狐。遊ぶことに夢中で疲れを知らない子供のように九稲に攻撃を止めることが無い。

「お戯れを……」

九稲の弱点でもあるのだろう。空狐は悪戯な笑みで訊きつつも攻撃は激しさを増す。拳を打ち込んで、蹴りを加える。九稲も防ぐが、そこへ焰が襲い、相殺する焰にも徐々に疲労が見える。そして何より妖狐としての九尾の尾の力を使役しようにも、その隙を与えない攻撃の連続に、舞うことが出来ない。

「ふふっ、まだまだよの、九稲。さも疲労が露呈しておるかの？」

拳に烈火を宿し、打ち込む。防いでいた九稲の焰が打ち破られる。

「っああ……っ！」

九稲の長く赤い髪が大きく乱れ、九稲の身体が落下する。

「これで終わりではなからう」

「あつく……っ」

落下する身体に、空狐は両手を組み合わせ、肢体を反らせる。勢いをつけ、落下する九稲へ向かって。

「九尾を見せよ。我はひ弱な輩を相手にするなど、つまらんぞ」

反らせ、勢いをつけた両腕を、九稲の腹部に叩きつける。九稲の瞳が大きく開き、口から胃液が逆流した。しかし身体は叩きつけられた勢いに、加速して焦げ落ちたビルへ落ちた。

「やれやれ、だの。既に我らは目視の渦中の中であろう。何を努めることがあると言うだか」

舞い上がる粉砂塵を見下ろす空狐は、小さく息を吐く。そして視線は上空で戦況の始終を監視するようにホバーリングしているヘリヘ向く。

「NBSL、か。我が愛しき孫をここまでひ弱にさせたるは」



九稲から興味を失ったように、空狐がへりに腕を伸ばす。

「我が孫よ。ババよりのせめてもの手向けよ。安らかに散り、人界より離れ、再び魔となせ」

空狐から焰がへりへ飛び、大蛇のごとくへりを飲み込んだ。焰に包まれ爆発を起こすが、それすらも焰は飲み込んだまま、空狐が引き寄せるように腕を引いた。

「創世など、人の戯画。ならば我は見せよう。神の戯画を」

へりを飲み込んだ巨大な焰が、上空へと舞い上がり、九稲が落ちたビルへ向かって、空狐が振り下ろした。

「あ、ああ……うそ、だろ……」

あんなに強くて、俺たちを守ってくれた九稲さんが、落ちた。俺の目の前のビルを突き破った。空には小さな空狐が見下ろしていた。最初は優勢かと思ったのに、何が起きてるのか分からないままに、九稲さんが空狐に叩きつけられるように落ちてきた。

「く、九稲さんっ！」

たまらずに駆け出した。まだ熱過ぎるくらいに黒焦げの道路に、九稲さんが横たわっていた。このままじゃ火傷する。九稲さんの服に火がついたから。俺は走った。

「うおっ、と？」

踏み込んだ瞬間、ぐにゃりと足が沈んだ。まだ固まってなんかいなかった。ゴムが焼ける匂いが鼻について、持ち上げる足に違和感があった。

「熔け、てる？」

靴底がボンドをついた指を引き離すように糸が引いた。かすかに足に熱を感じる。

「やばっ」

そう思った瞬間に、俺は自分の事よりも、九稲さんを見た。急がないと九稲さんが俺の靴みたいになりそうだった。

「九稲さんっ！」

意識がないと思ったけど、俺の声が聞こえたのかゆつくりと身体を起こす。その瞬間、手が燃えた。俺の靴底が解ける溶岩のようなビル跡に素手をついた。火傷じゃ済まないはず。

「はや、と、さん……逃げて、下さ、い」

起き上がる体が燃えている。赤かった瞳が元に戻ってる。それにも服も焼け焦げてる。驚きしかない。でも心配が今は勝った。

「ここは危ないですっ！ 早く離れましょう」

駆け寄る頃には、足は少し熱い湯に浸けてるような熱さがあった。「平気、です。それよりも、隼斗さん、逃げて、下さい……ここは、危険で、す」

さっきまでの力強さのない九稲さん。腕を取ろうとしたけど、躊躇った。炎が肢体を包んでる。しかも熱かった。分かってるように九稲さんが自力で起きた。

「稲浪の所、へ、急いで、ください。空狐は、まだ、戦いを、終わていません……」

立ち上がると俺よりも小さかった。燃える炎を振り払うように衣を正すと、空を見上げ、俺もつられた。

「え……？」

空には、空狐の姿が小さくあった。でも、その後ろの空には、燃え盛る焰が球になっていた。もしかして、また？ そんなことが脳裏を過ぎる。

「ここにいては、私にもお守り差し上げる猶予はありません。ご自信の神子の下で、身を潜めて下さい。空狐は、恐らく狐を狩るはずです。私は抑えることが精々かもしれません」

「そ、そんなっ。じゃ、じゃあ稲浪にも……」  
手で遮られる。

「いいえ。私一人で十分です」

振り向く九稲さんは、小さな笑みを浮かべていた。でも俺には、それがなんと言うか、遺言に聞こえた。

「で、でも、あんな力に……」

空に広がる絶望を呼ぶような焰。地上と空からの熱が唇をすっかり乾かしている。喉が痛い。

「ご心配ありがとうございます。ですが、私は、これでもNBSLの監視神子なのです」

「……え？」

カミングアウトに、言葉が消えた。

「ですので、お痛いが過ぎる神子には、お仕置きをしなければなりません。隼斗さん、どうぞ、稲浪のことをよろしくお願いいたします」

九稲さんが全身に焰を纏って、また瞳の色が変わった。なのに、俺は不安だった。勝てる予想なんか消えた。だって九稲さんは傷ついているのに、上空にいる空狐は平然としてる。

「……それでは、ごきげんよう」

「く、九稲さんっ！」

吹く熱風に顔を覆った。燃える炎の音が遠ざかり、九稲さんが空に舞った。俺は何も出来なくて、呆然と見ようにも、足からの熱に耐えられなくなって、慌ててその場を離れた。次に見上げた瞬間には、二人の神子の小さな姿が巨大な焰の眩しさに見えなくなっていた。

「稲浪、まだ戻ってこないのか……」

俺にはどうすることも出来ない。九稲さんはまるで勝てなくても、何とかして一手を打とうと、捨て身に見えた。いや、たぶんそうなんだ。あんな少女の空狐でも、詳しくは分からないけど、圧倒的な壁がある。監視神子って言うていたから、きっとその役目を果たすために、一人で闘う気だ。守ってもらったのに、俺には何が出来るんだよ……。

「くそっ」

初めて、神子の闘いで悔しいと思った。



## 二神抄・激突・前編（後書き）

今回は、一気の乗せると量が多いので、前後編に分けました。後編はサイクルをおって、更新します。

次回更新予定作は「ハウンと犬の解消記」です。

予定日は9月7日です。

## 二神抄・激突・中編（前書き）

ファンタジー大賞エントリーとしては、これが最後の更新です。

次でとりあえずの決着をつけようと思いますが、どうなるかはまだ考えてません。

今回は次の伏線とでも考えてください。

## 二神抄・激突・中編

「千の時を崩し、人代も散る脆葉。されど狐はここへ生き、流す涙も枯れ葉の舞。……哀れよの。されど赴き深し仁なれば、我は滅せう。無尾の焰舞」

小さな身体の伸ばした腕。その先に広がる巨大な火の玉。核を成すへりの残骸が折れ曲がり、黒の鋼を渦巻かせている。空狐の表情は無。それを地上へ植えつけければ焰が芽吹く。喜びもなければ、悲しみもないただの破壊。

「我が愛しき孫よ。邪炎の妖狐を呼び覚ませ」

「渦焰、五の舞」

腕を振り下ろそうと構える。その時、地上のビルが轟音と共に粉塵を巻き上げ、その中から突出してくる五本の巨大な焰の渦。破碎したビル片が焰の渦の中に取り込まれ、紅い焰の中に橙の流れを纏っていた。

「被害を出すことなく、御するつもりでしたが、いささか逸れましよう」

負傷しながらも、九稲が空狐と地上の間に舞い上がる。無の表情の空狐に微かな笑みが浮かぶ。

五本の焰が九稲を取り巻くように空を赤く染め上げ、橙の焰と対峙する。

「良からう。散り往く花は愛でねばなるまい」

スツと、本当に軽く腕を振るう空狐。その眼前を焰の玉が滑り落ちる。九稲が腕を開き、焰を引き離す。勢いを増す焰の玉が広がり燃え盛る焰の柱に落ちつく。双つの焰が互いを飲み込むように接する面で激しく燃え盛り、夕暮れのように空を埋め尽くす。それでも空狐の放つ焰は徐々に重みを増し、九稲の焰を飲み込んでいく。五つの焰柱に支えられる太陽の屋根。隼斗はただ呆然と口を閉じることを忘れていた。その半面で九稲は硬く閉じた口と滲む苦痛に力を

注ぎ、焰を支える。

「落ちよ、九稲。もう、良いのだ。飽きた」

焰の玉を見上げ、焰をたぎらせる九稲の眼前に、空狐が哀れみと失望の表情で浮かび上がる。九稲が気づいた時には、空狐の拳が胸を打ち、一本の焰の柱が飲み込まれ、消えた。

「っ……！」

「無駄よの」

堪える九稲に容赦はない。繰り出す拳のもう片腕が顔面を射抜き、一本の柱が消え、若干降下した九稲の腹部に小さく細い空狐の蹴りが振るう。

「かつ……ふっ！」

九稲の口から血が弾け、焰が一本また消える。それでも蹴りはまだ振った。最後の片足が九稲の横腹部にめり込む。赤い瞳に比例する紅い鮮血が堪える口を突き破り、空に飛ぶ。四本目の焰柱が消え、焰の玉の落下が著しく加速する。九稲はそれでもその焰に力を注ぎ込み、地上への衝突を避けようと懸命に空狐を睨みつける。

「理とは、不変なる差よ。身の程を弁え、我に追従するのだ、九稲」  
空狐が九稲の頬に手を添え、口端から垂れる血液を拭い——小さな舌で味わうように己の指を掬った。

「貴女、は……何も、みてい……ない……っ」

その行為が酷く屈辱なのだろう。九稲の集中する先は焰の玉だが、その集中をかき乱され、熱波が包み込む。高層のビルの屋上部が煙を立ち昇らせ、焰を発していた。

まずい。このままだと、俺が居るここの数分もしないうちに焦土と化す。九稲さんが逃げろといっていた意味が、今になって眼前で足を竦ませる。

「見る必要なきことを見ることに意味はなかるう？ 無用なものな  
ど見受けるだけ無駄と言うものよ」

空狐に九稲の言葉は届かない。それでも九稲は最後の焰柱で押さえようと浮く。空狐がそれを見下し、小さく息を吐いた。それはつ



まらないと吐き捨てるような残忍な瞳で。

「この状況下においても、変化をとわぬか。興醒めよ」

空狐が己の腕と焰の玉とを繋いでいた細い焰を断ち切るように振り下ろした。ゴムのように伸びた焰が千切れ、九稲が睨みと共に焰をさらにたぎらせる。

「九稲さんっ！」

隼斗の叫びが響き、その呼び声に若干反応した九稲。しかし、反応と同時に集中力がわずかに欠落し、空狐の焰が降り注ぐ。高層ビルの上層部は燃え、溶け、赤く染まる。

「つつ……!？」

空狐の口端がわずかに上がる。燃え往く地上の地獄絵図を完成させる画家の高揚。ものの哀れを覚えることなく、大地に終わりを注ぐ。それはさぞ興奮するのだろう。

「……なんたる、お方……っ」

九稲の焰が押され、飲み込み消された。苦渋の表情ながらも、九稲の瞳には絶望も諦めもない。あるものは——使命。

「焰帝、七の舞」

九稲の焰のドームが、九稲の背後——地上を包み込むように広がっていく。隼斗の視界から、二人の狐の姿が消え、空が再び焰に包まれる。

「受けは効かねど、守りに殉ずとな」

空狐は傍観していた。見下す下の二つの焰。その間に九稲がいた。焰の玉は己が犠牲を払い受け止め、万一に地上を焰のドームで守る。九稲は背中から燃える炎をひたすらに強めていた。

「狐業っ！」

だが、その時だった。空に劈く美声と共に、空の青さを増した蒼い焰が狐を象り、空狐の焰に突進した。

「ほっほっほ。来たかの、稲浪よ」

物足りなさを覚えていた空狐の表情に、笑みが宿る。それと同時に空狐の焰の玉と稲浪の狐業が激しくぶつかり合い、コロナのよう

な焰が吹き荒れた。三人の髪を大きく乱し、熱波が空を切り裂く風のように雲を焼き払う。

「稲浪……どうして……？」

それでも空狐の焰は強靱に玉を成していたが、狐業の勢いに落下が止まり、空へと押されていく。地上の九稲の焰帝が徐々に解かれて、再び空と大地が顔を合わせた。

「それよりも姉上。一体何が起きたのじゃ？ ……っ！？ な、何じゃこれはっ！？」

焰帝が解かれ、稲浪の眼下に広がる惨状に、稲浪は大きく目を見開く。その間も狐業は焰の玉を空へ通しているが、炎の玉の勢力はまるで変貌を遂げず、ただ、勢いに落下を引き伸ばしているだけだった。

「空狐の……犯した……罪よ」

九稲が稲浪の到着で幾分余裕を取り戻したのか、疲労の息を吐き捨て、空狐を見上げる。

稲浪は九稲の話半分に、呆然と空狐と眼下の焦土を見比べた。

「何たる、ことを……」

絞り出した声に、空狐が笑みを浮かべ、挑発するように首をかすかに傾げ、空へと昇る焰の玉に腕を伸ばした。

どうなったのか。また空が九稲さんの焰に覆われて、何も見えなくなかった。思いつきり蚊帳の外だけど、圧倒的な光景に何も出来ることがなくて、ただ見ているだけだ。恐怖よりも衝撃、驚愕、そんなものが全身を硬直させた。

「狐業っ！」

何を考えていたのか——きっと何も考えることなんか出来なかった。そんな考えが、聞き覚えのある声が焰の向こうに聞こえた瞬間、空を覆いつくした九稲さんの焰が解けていく。脳裏を過ぎったのは不安。焰が解けた——九稲さんが負けた？ そんな直情思考に目を凝らしていると、見えた。

「稲浪っ！」

青い炎が。土竜のエンと闘った時と同じ巨大な蒼い狐の焰が落ちてきてた焰を受け止めた。それだけなのに喜びに胸が高鳴った。それでも俺の声に反応しない稲浪。聞こえてないのか？ そう思ってもう一度名前を呼ぼうとした――。

「稲……うわああっ！」

稲浪と九稲さんの上空にいた空狐が溶け合うことの無い青と橙の焰に向かって、空へと昇る隕石のような焰を放った。――衝突した。そう思った瞬間、視界が太陽を直視したみたいに白く染まって、覚えのある勢いに体の自由を奪われて、抵抗することなんか出来なかった。

「隼斗っ」

またどこかにぶつかるんだ。そんな記憶の中の出来事と照合して、目を硬く閉じた。

「稲……浪？」

でも、聞こえた声に、目が開いた。目の前には青い光。熱かったはずの体のどこにも熱は感じなくて、視界いっぱい金髪と白い素肌のぼやけたものが見えた。

「無事か、隼斗？」

焦点を合わせると、それが顔だと理解した。

「……稲浪っ」

その瞬間、俺は馬鹿みたいに稲浪の名前を呼んでいた。良かった。間に合ったんだと。嬉しさが募った。

「おりるぞ、我に掴まっておれ、隼斗」

稲浪に言われるがままに腕を伸ばす。よく見ると、全身を鬼火のような青い炎で包まれていた。稲浪の手が俺の腕を掴むと足元から焰が解けて、地面に降り立った。やっぱり飛ばされたんだと、今日一日で何度飛ばされればいいのか、自分自身が少しだけおかしく思えた。

「稲浪、戻ってきてくれたんだな」

手を離すと、稲浪が凜と居を正した。風に揺れる髪を払い、脚部のマントを振る。決めポーズはいつもの格好良さがあった。

「無論じゃ。隼斗が居る場こそ、我が在る場所じゃ」

そう言われると気恥ずかしいけど、今は嬉しさが勝る。でも、すぐに思い出す。

「つばさ君は？ 琴音さんも大丈夫なのか？」

戻ってきてから早く感じて、それまではとてつもなく長く時間が思えた。

「うむ。赫職紋は互いに消えてはおらんかった。NBSLのえーじえんとが介抱するそうじゃ。ただの、つばさは重症じゃ。当面は琴音共々、保護下に置かれるじやろう」

安心せいと、稲浪の顔を見て、事実だと知る。胸のうちが少しだけ晴れた。酷い火傷に見えたけど、そこはやっぱり神子と人の違いなのかもしれない。

「しかし、我が居ぬ間に景觀が変わり果てたようじゃの」

俺が覚えている建物も幾つも無くなった。倒壊したとかじゃなくて、熔解して、地面が厚みを増した。

「九稲さんは？」

「あそこじゃ。姉上も力を浪費しておった。今、私の焔でそれを癒しておる」

癒す？ そんな疑問に、稲浪が視線で示す先を辿る。そこには、俺が稲浪に助けられたみたいに、青い炎に包まれた細長い柱があった。いや、その焔の中に九稲さんがいるみたいだ。

「何、してるんだ、あれ？」

「私の焔は攻守だけではない。白狐が持つ青焔には、多少なれど治癒効能があるのじゃ。無論同属にしか効かぬことじゃ。我は司る者。負傷くらいは容易く治す」

へえ。また新しく稲浪のことを知った。――あれ？ ちょっと待て。自分の焔で九稲さんの傷を治す。そして、稲浪はその焔の使用者で、自分の傷も治せる。

「あのさ、稲浪。前にナイフで切った手のひらって……」

土竜のエンと闘った時、赫職の男のナイフを素手で受け止めて切った手のひら。そういえば、怪我を下あの日以来、稲浪は包帯をしてなかったような……。

「うぬ？ 先のエンとの傷のことか？ とうに治っておるぞ。我が言うたであろう。包帯など無用じゃと」

俺に手のひらを見せる。そこには何も無くて、すべすべしてそうな白い綺麗な手のひらがあった。――俺があの時、真面目にやったことって、無駄？

「そんな力があるなら言ってくれよ。余計なことしてばかりじゃないか、俺」

俺が寝てる時にでも自分で治してたのか。何か恥ずかしくなってきた。

「聞かれなかったから言うことはなかったのじゃ。それに……その、隼斗の優しさを……無下にするわけにもいかぬじゃろう……神子は赫職在ってのことなのじゃ……」

青い炎を使う稲浪が、うつすら紅くなった。顔を背けて、そんなこと言われると、こっちまで照れてくる。そんな風に思われてると、それ以上何も言えなかった。

「そ、そっか」

「う、うむ……」

沈黙。心臓が変に早く鼓動している。こんな状況下で不毛なことが頭を過ぎる。その邪念を振り払おうと、首を振った。すると、隣で稲浪も俺と同じように首を振っていた。もしかして、同じ事を考えてた？

「ええいつ、今はそのようなことに振り回されている場合ではないのじゃっ」

「え、ど、どうしたっ？」

いきなり稲浪が吼えた。

「気にするでない。それよりもじゃ」

鋭い目つきで稲浪が見上げる。俺も見る。そこには空狐が漂っていた。まるで自分の仕出かした惨状の出来を吟味するように。

「姉上っ」

稲浪が呼ぶと同時に、九稲さんを取り巻いていた焰が消え、負傷していたはずが、神子服まで綺麗に戻った九稲さんがゆっくりと目を開き、髪を流すように頭を振った。そして、そのままこっちに来る。

「隼斗さん、ご無事でしたね？」

「ええ。稲浪にまた助けられました」

結局俺、助けられてばっかだ。でも、それしか出来ないし。

「ババ様の力は甚大じゃの」

「ええ。私も少々侮っていました」

そう言う割には九稲さんの力も恐ろしいものがあつた気がするんだけど、言わない方が良さそうだ。

「役は揃うた。さて、始めようかの」

空狐が誘う。今までは体を慣らしていただけ。その口調にはそう思わないといけない何かがあつた。

「本来、赫職と婚くいだ神子であれば、必要な闘い以外に加担する必要性はありませんが、稲浪、隼斗さん。今しがたお二人のお力添えの程をよろしく願います」

九稲さんが初めて頭を下げた。

「あ、えっと、そんな……」

頭を下げられると守られてばっかの俺は恐縮してしまう。

「無論じゃ。ババ様と言えど、人間社会の破壊を我は見逃せはせぬ。良いな、隼斗」

訊いてない。訊いてないよな、稲浪？ 意思決定を俺に宣言しただけだって、それ。

「でも、俺、何も出来ませんよ？」

稲浪はともかく。

「いいえ。隼斗さんは稲浪と命約を交わしております。それだけで

稲浪には力が宿るものなのです」

「我と姉上でかかれば、問題などありはせぬのじゃ。ババ様よ」

稲浪が空狐に口を開く。空狐が俺たちを見下ろす。どこかその瞳は少女のように無垢だった。

「人世におけるこの所業。狐が物の怪として、これは恥ずべき行為じゃ。この罰、受けてもらうのじゃ」

空狐のことだ。きつとさっきみたいに笑い飛ばすだけだろう。そう思った。

「……恥ずべき、じゃと？ 罰、とな？ 我が過ちと？ ……稲浪よ。その言霊、覆させはせぬぞ？ 我らが孫ならば、言の葉を選ぶべきよの？」

でも、違った。雰囲気が変わった。笑ってない。首を傾げながら、不思議そうに言っているのに、何か——そう、空気が揺れているような、空狐から怒りがあふれ出したような、体の芯に響く重圧が一瞬で俺たちを包み込んだ。そんな嫌な感覚が足に震えを呼んだ。

「稲浪、来るわ」

「承知」

俺の目の前に赤と青の焰が燃える。空には笑顔をなくした空狐が怒りを覚え、手のひらに焰をたぎらせ、静か過ぎるくらいに見下していた。あんなに小さな子供に睨まれて、怖気が走るなんて思いもなかった。何かが違う。今までとは明らかに。全身に鳥肌が立った。

「罪とは、裁くる者なきは、真なり。哀れが孫よ。灰神と化せ」

両手から放たれた焰が、弾丸のような見えない速度で飛んできた。

「狐業っ」

「渦焰、五の舞」

稲浪が両手を炎に向かって掲げ、全身に纏った焰から狐形の蒼い焰が飛ぶ。その場で回転した九稲さんからは五本の焰の渦が九稲さんの腰辺りから尻尾のように立ち昇って、それを迎え撃つ。俺は何も出来なくて、ただ身を小さくしていた。

「――っ！」

小さな二つの焰と稲浪と九稻さんの焰の距離がなくなった時、烈風と耳を劈く爆発音が響いた。近くなのか、遠くなのか、ガラスが碎ける音も混じる。頭を低くして、ただ自分を守ることが精々な俺格好悪いと思いながらも、これが差だった。

「ちっ、どこも映してねえか、やっぱ」

「NBSLのおり、統制下に、ありますから」

テレビ画面に映る番組。関東キー局の番組の他、地方放送局の番組も放送されているが、ニュースなどはどこも放送されていない。

「つかさ、何なのさ？ 何が起きてるっての？」

三人が、すぐ近くでは空狐の出現と近畿を監視する神子との戦いが続いている最中、無関係を主張するように並んで食事を摂っている。それも何故か六席あるテーブルに、三人が横一列に並んでいる。対面にはテレビが設置されていて、そこには通常番組が放送されている。

「さあな。俺が知るかよ。どこぞの馬鹿が馬鹿やってんだろ」

白米を掻っ込むのは、昴。左には亀甲。右には、もう一人の女が食事を摘んでいる。

「それにしてもおり、よく揺れますねえ」

亀甲の持つ味噌汁が揺れている。

「こんだけ騒いでりゃ、公につくんじゃないのかい？」

着物姿の亀甲と浜逆に、パンクファッションのような派手な装束。茶の短髪と耳ピアスがある意味よく似合う。しかし、この場においては、その三人は少々奇怪だ。広いスペースに置かれた六人がけのテーブル。そこに三人が並んで食事を取る。時折窓ガラスが光を乱反射しつつ揺れ、三人の体も同じに揺れる、広い室内に三人はいささか不相応。

「どうせ、赫職持ちのバトルだろ。んなもんに興味ねえし、関係ね



えよ」

それよりも飯。昂は大して気にしていないのか、おかずを口に運んだ。ご飯も忘れずに。

「ちよつと、あんた、口の中で混ぜご飯すんじゃないわよ。食事くらいちゃんと食えないわけ？」

「そういう、ましてちゃんもお肉、残してますよお？」  
がつついて、意地汚さのある昂に指摘しつつも、亀甲の指摘に、皿を見るましらには、とんかつの付け合せの野菜しか食べていなかった。

「うっさい。あたしは肉が嫌いなものよ。つか、何であんたは食べる時も、んなゆっくりしてんのよ。冷めるでしょうが」

「はうう、私は、よく噛んで、よく味わってるだけですう。私がある、一番綺麗な食べているんですう」

ゆっくりとした口調で亀甲は毒を忘れずに吐く。それでもいつものことのようにましらは聞き流した。

「……ええ。ですから、仰りましたよね？ 私が出る幕ではないと。私は、貴方のようなやり方と、貴方がお嫌いです。私は私のままであるだけです」

その横、ドアを出たすぐそこにある電話機で、一人の女が誰かと電話をしていた。

「――え？ ええ、いらっしゃっていますが……まさか、また人の手を利用されるおつもりですか？」

お淑やかな黒と白のゆったりとした服装とは裏腹の口調。その視線が理文具として利用する室内で並んで食指を伸ばす三人の背中を見る。

「……それは、そうですが……ええ、分かりました。少々お待ちくださいませ」

女性が受話器を台に置く。

「湊川さん。お電話です」

「んお？ 俺？ はいはいっと」

昂が立ち上がり、入れ替わりに受話器をとる。

「ただいま電話に出ることが出来ません。御用の方は安心と信頼の引越センター……」

《初めまして、と言うべきだろうね、湊川昂君》

冗談を交えて応答しようとした昂の口が、アの字に固まった。視線がそのまま女性に向く。視線に気づいた女性はその相手が誰なのかを考えるのも嫌なのか目を閉じた。

「本物か？」

《少なくとも私は、影武者と言うものは持った覚えは無いのだがね》  
その声と口調に昂は気づいたのだろう。誰かと言うことに。

「あんた、知り合いなのか？」

《私の交友関係は幅広いのだよ。まあ彼女は例外なのだがね。恐らく、彼女の元にいるということは、君は既に存じているのだろうか？》  
質問に質問で返す。通話をきられない為の手法だった。

「俺に用ってのは、どういうことだ？」

わずかに昂が緊張を見せている。

「誰からなんだい？ 昂が珍しく緊張してるっぽいけど」

「どなたでしょうねえ。嫌な予感がするのですけどお」

そんな自分たちの赫職の様子を横目に見ていると、一言女性が片付いた食器を下げに来る。

「あなた方のお父上様、と言うべきでしょうか？ それともマスタ  
ーと呼んだほうが良いかしら？」

その言葉に、二人の動作が止まる。二人が顔を見合わせる。亀甲が振り向いた時には、すでにましらが見ていた。これがせめてもの二人の差だった。

《事実的に用件があるのは、君ではなく、君の神子である四霊亀の  
亀甲だ》

「亀甲にだと？」

昂の言葉に、静かにかつゆっくりと亀甲が立つ。

「一体何が目的だ？ 言っておくがな……あ、おい」

NBSLの会長である太郎からの電話だと理解すると、昂はあまり聞く耳を持つとうとはしなかった。だが、そこにそっと伸びた手が、受話器を奪う。

「昂様。ここは私に、お任せ下さいなのですよお」

そっと受話器を奪う仕草はあまりにも自然だった。昂は取り返す気もないのか、頭を掻きながら亀甲の肩を叩き、長い髪を撫でた。それに笑みを見せた亀甲が応答する。

「はい、お電話変わりましたあ」

ゆったりとした口調に、昂はテーブルに戻る。

「何だって？」

「さあな。亀甲に聞いてくれ。……って、俺の飯はっ!？」

片付けられたテーブル。既にましらは食事を終え、亀甲も食べ終えていた。

「あら？ ごめんなさい。てつきりご馳走様かと」

「ひ、ひでえ。俺まだ食ってたじゃねえかよ」

「あら、ただ飯食らいのくせに、欲を張るんですか？」

その一言は強力な一撃だったのだろう。何も言い返せない昂を他所に、亀甲は淡々と太郎と会話をしていた。

「ええ、はい。分かりましたですう。はい」

何かを承諾した後、受話器を置いて、亀甲が戻る。

「何だと？」

「はい。マスターよりの御依頼と申しましょうかあ、お願いをされましたあ」

「願い？ 何だって？」

昂とましが目を向ける。

「この揺れの原因からあ、町を守って欲しいそうですう。もつと酷くなるそうなのでえ」

同時にひととき大きな振動と風が窓を襲う。晴天の空から外には雪のように、灰が降っていた。

「風祭さんがあ、闘っているそうですよお」

亀甲の言葉に、昴が反応を見せた。

「誰だい、そいつは？」

「俺の後輩だ」

腰を下ろしたばかりの昴が、その言葉に腰を再び上げた。

「うっし。んじゃ、行っか。隼斗の神子ってのも拝みてえしな」

「はいいゝ。私は存じているんですけどねえ」

昴と亀甲は状況を把握したようだが、昴のもう一人の神子の猿帝ましらは、一人首を傾げて、二人についていく。

「行くのですね？」

「ああ。どうやら俺の後輩が騒いでるみてえだからな」

女性が昴たちを見る。

「そうですか。お氣をつけて下さい。相手に不足など、ありませんから」

その口ぶりに、昴は含み笑いで、亀甲とましらを抱き寄せた。

「ちよっ！ 触るなっ」

「うふふ」

ましらは何故か笑っていた。

「俺にはこいつらがいる 心配すんなら、その胸のうちでもあんたが晴らしゃ、良い。まあ、先に俺は行くぜ」

抱き寄せたまま昴は玄関へ向かう。亀甲とましらとは丁寧に女性に頭を下げていた。

「四霊がいるのであれば、必要は無いでしょう」

その背中を、冷静に見つめていた女性は、出て行く三人を静かに見送った。

「ふん。この程度で我は倒れはせぬぞ」

「稲浪、油断してはいけないわ」

降り注ぐ焰を二人が容易く跳ね除けた。

「良い良い。ならば、見せてもらうとするかの」

何か来る。空狐のその一言に警戒する二人。でも、違った。

「何じゃ？ ババ様？」

「あれは……」

空狐の背中から赤と青の二本の焰が蠢く様に沸き立った。九稲産の焰が尻尾なら、空狐の焰は翼。そう見えるくらいに小さな体に大きく焰が開く。

「そちらが見せぬと言うならば、是が非でもそうさせて進ぜよう」

素晴らしい残すと、空狐の翼のような焰が、空狐を飲み込むように折りたたまれた。そのまま姿が消えて、焰が紫から色を失って、白っぽくなっていく。薄い肌色に燃える炎。見たことが無かった。そのせいか思わず見とれた。

「いけない。稲浪、狐鬼こきよ」

「うむ？ どうしたのじゃ、姉上？」

狐鬼が何なのかは分からない。でも、九稲さんは焦りを見せていた。空狐は何もしてこない。俺も稲浪同様に、どうしてそんな危機感のようなものを九稲さんが抱くのか、分からない。

「空狐は力の解放を始めているわ。恐らく、私たちと同等の力を解放するはず。今のうちに押さえるのよ」

俺には丁寧に言うけど、稲浪はやっぱ妹だからか、お姉ちゃんに戻っている。俺にもそう言う感じで話してくれば良いのに、とか考えている場合じゃないな。

「相分かった。隼斗。力を借りるぞ」

「え？ 借りるって……え？ ——うわっ！」

稲浪がそう言った瞬間。稲浪を一気に青い炎が包み込んだ。そうしたら、今度は俺の腕が光り始めた。痣みたいに残っていた赫職紋が青白く。

「おお、これが赫職との命力と言うものか。うむ。力が満ちてくるのじゃ」

百年くらい昔にスーパーなったら人とか言う漫画を学校の資料館で見たことがあるけど、稲浪はまさしくそう見えた。

「蛇焰、一の舞。渦焰、五の舞」

九稲さんが腕をしなやかに振るうと、その動きに合わせて一本の蛇を象った焰が太く蠢き、腰部からは、またあの五本の焰が蛇焰に付き従うように揺れた。六本の尾が九稲さんを守っている。九尾っと言う意味がやっと理解できたかもしれない。

「躊躇してはダメよ、稲浪」

「うむ。元よりその気はないっ。隼斗、そこを動く出ないぞっ」

「あ、ああ……」

動くつもりなんて無い。どこにも逃げ場なんて無いんだ、焰と闘うことにおいては。

「姉上、往くぞっ」

稲浪が飛び上がった。それに続いて九稲さんも空に向かう。青と赤の焰が尾を引いて、思っちゃいけないんだろうけど、残された俺には、その光景がどうしても眩くて綺麗だった。

「あ、うう……っ」

そう思ったのも束の間。急に赫職紋が熱くなった。置く俺の腕に光る紋が火傷しそうに熱を帯びた。

「狐鬼っ」

見上げた時、そこには紅い蛇を操る九稲さんと、体に纏った青い炎が鬼のように巨大に燃え盛る鎧纏ったような稲浪が未だにパール色に燃える空狐に、同時に焰を襲い掛からせた。

「空狐よ、貴方には自粛の時を経て頂きます」

「ババ様、人と神子は共存すべき生命じゃ。一方的は破壊は軋轢を生む。その罰、孫として我が下すのじゃ」

稲浪は全身を使う拳。そこには鬼のように膨れ上がる青い炎が鋭く熱を帯びる。九稲さんは全身を駆使して焰を操ってる。行動的な稲浪と戦略的な九稲さんの対極の二人の攻撃が、俺の見上げる先で、空狐と交差した。

「うっ——」

その瞬間、光が振ってきた。照らし出すとかそう言うことじゃなくて、窓際で揺れるレースのカーテンみたいな、冷凍庫から溢れる

冷気みたいに静かになった。それでも一瞬で視界が色を失った。気づいた時には動きが遅くなる。腕で目を覆い隠す動作にさえ、重さを感じた。

「……………え？」

それでも、上を見上げた。そして後悔を伴った驚きが、光の中に舞い落ちる羽のように見えた。

「その程度かの。我の尾にすら届かぬとは、誠に哀れよの」

そこにいる、恐怖の具現のような神聖な姿に、二つの焰が落ちた。

「稲浪——っ！ 九稲さん——っ！」

空狐に挑んだはずの稲浪と、九稲さんの二人が、焰の尾を引きながら落ちていく。駆け出していた。

「何なんだよ、あれっ」

目の前の行き当たりのビルが、二つの爆発を起こした。二人が落ちた。それを見上げた時、違和感が俺の視界にあった。

「あ、え……？」

空狐の姿がなくなっていた。その代わり、今までそこにいなかった女性がいた。白金の足元まで伸びて、風に大きく靡く髪。子供だったはずの姿が、稲浪や九稲さんのようなユタから体つきで、表情からはあどけなさが無かった。涼やかで鋭さのある表情は、全くの別人だった。神々しく眩い光の焰が、その女性の盾となり矛にもなりそうな、焰には見えない焰がその体に纏わり燃えていた。

## 二神抄・激突・中編（後書き）

閲覧ありがとうございます。

誤字脱字などはあまり気にしないで下さい。指摘をして頂ければ、速やかに訂正します。

次に更新するのは、二十六日頃に、S a iを更新します。こちらはあとがきで記したとおりに、サブストーリーを展開させます。

（追記（9月23日））

s a iにしまして、更新を予定していましたが、締め切り前の作品の執筆ならびに推敲が微妙に間に合いそうに無く、更新を断念しますことを、ここにお詫び申し上げます。更新をお楽しみにして頂いた方には上がる頭がありませんが、生活の為でもありますので、どうぞご理解野ほどをよろしくお願い申し上げます。

今後の作品更新については、折を見てと言う形になりますが、更新順は予定したS a iを筆頭に更新していきます。



## 二神抄・激突・変化編（前書き）

現在アルファポリス青春大賞開催中につき、更新が遅れていますが、無事に更新です。少し展開に変化を付けた程度なので、前回の続編です。

## 二神抄・激突・変化編

「やれやれ。そちらが変わらぬから、我が変わうてしようたわ」

立ち上る砂煙と崩れる瓦礫に、穿き捨てるように首を振り、髪を揺らめかせる。

「な、え？ ……くう、こ……？」

気づかないうちに人形のように体が硬直していた。落ちた稲浪と九稲を案じて駆け寄るという思考すら空狐はその容姿に略奪する。

「さて、いつまでその愚体を晒すよのお」

言葉使いとは不似合いな容姿。単純に見惚れた。

「稲浪っ！ 九稲さんっ！」

それでも自我を取り戻して駆け寄る。立ち上る煙に大方の位置の特定は出来る。でも、瓦礫に邪魔をされ、見つけれない。

「稲浪っ！ 九稲さんっ！ 返事してくれっ」

目の前のビル、青い炎が落ちたビルの窓から焰が零れて路上に落ちた。すぐ近くのビルからも赤い焰が同じように落ちた。俺はどちらを優先するべきか一瞬悩んだ。それでもやっぱり選ぶのは一つ。俺と命約を交わしている稲浪に駆け寄る。

「稲浪っ、大丈夫かっ？」

「う、うむ……我は、問題ない。姉上は？」

問題ないという割には、白い肌に赤い血が染めている。持っていたハンカチで腕の出血を圧迫する。

「九稲さんは……無事みたいだ」

振り返った先、赤い髪から火の粉を揺らしながら、凜と激情を抑えるまなざしで空を見上げて立っている九稲さんがいた。

「そ、そうか。ならば良い。すまぬが隼斗、手を貸してくれ」

「あ、ああ。本当に大丈夫か？」

稲浪の手を引いて立ち上がらせる。見たところの外傷はそれほど多いわけじゃない。むしろ、さっきハンカチで押さえた所の血は止

まってる。

「狐鬼の所為じゃ」

狐鬼？ さっきのあの焰の塊のことか。でも、それがどうして九稲さんと稲浪の浪費に繋がるんだ？ 九稲さんも同じくらいの焰を出していたと思うんだけど。

「狐鬼は、我が狐焰を一時的に一点に集中するのじゃ」

立ち上がるとバランスを崩す稲浪。慌てて肩を抱き押さえる。一撃。たったそれだけだったはずなのに、どうしてここまで疲労するのか分からなかった。

「すまんの。赫職に支えられるとは、張り切りすぎたようじゃ」

「いや、それは別にいいんだけど、休んだほうが良くないか？」

九稲さんは多分、空狐なんだろうけど、空にいる空狐を見て、身動きしない。ただ、周囲は何もしていないのに近くをまう書類が燃えて、灰に消えている。稲浪に比べて、まだ九稲さんは平気らしい。さっき稲浪に回復してもらった影響があるかもしれないけど、その稲浪がこの状態って言うのは心配だ。

「次期に治る。狐鬼は一気に我が焰を発すだけじゃ。体内の焰が滾れば元に戻る。しかし、何という力じゃ……」

見た目は人間なのに、中身は全然違うのか。分かってはいるけど、ちょっと複雑だった。

「もう、この辺りは廃墟だぞ。一応、創世って極秘なんだろう？」

ビルは倒壊し、戦争でもあったみたいな惨状。NBSLが封鎖しているとは言え、もう人目についているはず。さっきヘリも飛んでいたし。

「そうやもしれん。じゃが、ババ様を野放しには出来んじやろうが」  
いや、まあ、それはそうだけど。でも、これだけ大騒ぎ……と言  
うか、大惨事になっていれば、別に俺たちじゃなくてもNBSLに  
いるとか言っていた神子が相手をしてくれるんじゃないのか？ で  
も、稲浪に言っても無駄なんだろうな。

「稲浪、無事？」

「うむ。姉上こそどうじゃ？」

「私は問題ないわ」

「ならば、此れより言うことじゃな？」

「ええ、そうね。空狐が擬態を解いた以上、これは大府の危機」

うん、無理だ。寄ってきた九稻さんと稲浪の会話を聞いていて今更帰ろうとか逃げようと言う俺の心情など、きつと足蹴にされる。そう思った。と言うか、分かった。

「話は済んだかの？」

空狐から言葉が降ってくる。二人が空を見上げ、俺もつられて見る。やっぱりさっきまでの女の子なんていなかった。

「あ、あれ、どういうこと、なんですか？」

九稻さんに聞いてみる。

「あれが、空狐の開放された姿です。恐らくは私たちを悠に超える焰の使い手のはずです」

「我也見えたことはないのじゃが、ババ様の焰から漂う力は、我が狐焰を怯えさせておる」

二人とも見るのは初めてらしい。稲浪にいたっては、さっきまで轟々と燃えていた青い炎が落ち着きなく揺れている。それでも、どうしてだろうな。稲浪の奴、怯えると言うより、武者震いしているみたいに見える。俺は正直、逃げられるなら今すぐ逃げ出したいくらいなんだけど、そうはさせてもらえそうな状況じゃない。

「稲浪、ここからは尾の解放をしなければ闘えないわ。隼斗さんの手前、あなたはそれでも良いの？」

何を言っているのか分からない。尾の解放というのは、さっき九稻さんの焰が尻尾みたいに生えたやつのことか？ それなら別に俺に意見を求める必要はないと思うんだけど、稲浪が俺を見る。

「稲浪？」

「隼斗よ。隼斗は我が赫職じゃ。神子が使命は赫職と共にあり、その命を守護するものじゃ。我に力を貸してはくれるじゃろ？」

「え？ あ、ああ。そりゃ……この状況もいい加減大変だろうから

な」

そうしないと、納得しないんだろ、稲浪は。もう生活に慣れた以上、それくらいは分かってしまう自分自身が誇らしく、半ば諦めすらあった。

「うむ。ならば誓えるの？」

「何を？」

いきなり何を誓えと？

「わ、我が姿を、その……嫌うのじゃ、ないのじゃ」

「は？ 稲浪の姿を？」

嫌う？ そんな今更だと思っただけど。むしろ稲浪の姿を見て好きになることはあっても、嫌いになることは、男としてはないだろう。

「はい。空狐をご覧下さい。あれが本来あるべき空狐の姿なのです」  
九稲さんが会話に混じる。そして見上げる。相変わらず西洋人形のような美しい姿と、蜃気楼のように空が歪んで見える数本の透明に近い白い炎が空狐を守るように燃えている。あれが、空狐の本当の姿。さっきの子供とは全くの別人。

「空狐は狐族の長を司ったものです。故に既に獣としての姿を亡くし、一種の神という領域にまで達しているのです。それに対抗するは、同等の力か、現在狐族を従える長、天狐だけでしょう」

それは、何か聞き覚えがあった。

「我らのこの姿では満足に力は出せぬ。あのババ様に対抗するには、我らも尾の解放をせねばならぬのじゃ」

その尾の解放とやらが分からないけど、きっと空狐みたいに違う焰を出したりするのもかも。それはそれで興味があったりする。

「故にじゃ。我は隼斗に元来の姿を晒す。だから、隼斗、それでも我を好いてくれるか？」

いきなりそんなことを言われても、告白にしか聞こえなくて、少したじろいだ。今だってどちらかと言うと好きだし、改めて聞かれると余計に恥ずかしい。

「隼斗さん。空狐は本来の姿と言えど、恐らくは完全ではありません。今なら私たちで押さえ込むことは可能でしょう。私からもお願いします。稲浪が認めた貴方ですから、私も稲浪のことを否定してはほしくありません」

まさか九稲産からもそう言われるなんて。俺の想像とは違うのか？  
「そ、それは、あの、えっと……」

恥ずかしい。彼女と彼女のお姉さんの目の前で、彼女のことを好きですと言うようなものじゃないか。しかもお姉さんからもよろしくされたら、断れないだろ・

「大丈夫。俺と稲浪は契約しているんだ。嫌いになんてならないし、信用してる」

俺の答えに、稲浪と九稲さんが顔を合わせた。肯きあって、二人が俺を見る。微かに稲浪の顔が赤い。

「やはり、貴方で良かった」

「え？ あなの？」

ふふっ、九稲さんがそう微笑んで、思わずドキッとした。

「うむ。さすがは我が赫職じゃ。我も隼斗のことは、信用しておるのじゃ」

「あ、ああ……ありがとう」

恥ずかしそうなんだけど、そうはつきり言われると、こっちが照れる。稲浪にとって照れるなんて大したことじゃないのか？

「ならば、始めましょう」

「うむ。隼斗よ、力を借りるぞ」

「あ、ああ」

何をすればいいのか分からず、そこに突っ立つしかない。

「九尾が妖狐、九稲。えん びしゃんほう焰尾灼放」

「七尾が白狐、稲浪。えん びせいほう焰尾蒼放じゃっ」

その瞬間、俺の目の前で赤い焰と青い焰が二人の腰辺りから沸き立つように生えた。

「おお……っ！ くっ……あ、つい……っ」

その姿に声を漏らした瞬間、赫職紋に熱と痛みが走って、二人を見てられなくなった。

「うっ、あぁっ……っ……な、何だ……っ」

腕に走る赫職紋が青く光っていて、火傷しそうなくらいに熱くなる。腕が千切られる。そう思うくらいに物凄い力に助けを呼ぶ声すらまともに出なかった。

「うああああああ——っ！」

空に救いを求めるように、勝手に空に腕を伸ばす。そうしたら、急に痛みも熱も引いてきた。

「はぁはぁ……はぁ……はぁ……はぁ」

「大丈夫か、隼斗？」

大きく何度も呼吸を繰り返しながら腕を見ると、前はうっすらと見えていたはずの赫職紋が、くつきりと俺の腕に刻まれて、湯気見たいな煙が腕から昇っていた。

「はぁ……な、なんとか……」

余裕なんてなかった。腕の力が抜けて、だらりと垂れる腕を上げられない。

「い、稲浪っ？」

落ち着いてきて、隣を見て、驚きの声が漏れた。さっきまで隣には九稻さんと稲浪がいたはずなのに、その光景を信じられなかった。

「これが私たち、狐族の本来の姿です」

目の前には青い焰が轟々と燃えている。

「い、稲浪……？」

そっと視線を辿っていく。空狐の焰みたいに青い炎が七本、尻尾として揺れている。そして、四本の太い焰の柱が大地から伸びて、焰の塊が目のある。もっと視線を辿ると……。

「うわっ!？ な、なに？」

焰の中に、猛獣のように鋭い牙と瞳がこっちを向いていて、後ずさって、足が絡まって尻餅をついた。

「驚くのは無理がないとは言え、それは傷つくのじゃ……」

「え？ い、稲浪、なのか？」

目の前には七本の焰の尾を持つ、巨大な狐みたいなものがいた。  
「驚かれることでしょう。ですが、これが私たちなのです、隼斗さん」

「く、九稲、さん？」

その向こうから、真っ赤な焰に身を包んでいる、同じ姿があった。ただ、尻尾は九本に揺れている。尾の解放が、この姿……なのか。驚いた。と言うよりも一種の恐怖みたいに立ち上がれなかった。

「詳しい話をするべきなのでしょうが、今は猶予ありません。稲浪、行くわよ」

「う、うむ。は、隼斗……約束じゃからな」

「うわっ」

熱風と共に俺の視界から二つの焰が空へ飛んでいった。その後姿は紛れもなく四速歩行動物のように、さっきまでの人の姿をした二人じゃなかった。

「……あれが、狐なんだ……」

呆然と見るしかなかった。稲浪が人じゃないことは出会った最初に小さな狐に化けたのを見たから理解していたつもりだったけど、まさかあれが本当の姿じゃなくて、七本の大きな焰の尾を揺らせて空狐に飛んでいく、あの姿が本当の姿だったのか……。じゃあ、俺は今まであんな神子と一緒に暮らしていた。そう考えると、背筋にぞっとしたものを感じてしまった。

「ギャップ……ありすぎだろ……」

へたれた腰に立ち上がれなくて、ただ空を眺めるしかなかった。

「ほっほっほ。ようやく見せたか」

地上から飛んでくる青と赤の焰を纏う巨大な狐に、空狐は嬉しそうに笑んだ。

「よもや、孫を、それも二人も相手になんと思わなんざ」

ようやく姿を現した二人の姿に、空狐は子供の姿の無邪気さとは



異なる、妖艶なる笑みを携え、両手を広げ、取り巻く焰を二人へ差し向ける。

「躊躇はなしよ、稲浪」

「分かっておるのじゃ」

向かってくる焰に対して、二人は口を開き、牙を差し向け、喉奥から溢れ出す焰をその焰へ吐き出す。

「邪焰じゃえん」

「鬼火っ」

「ほお……？」

先ほどは空狐のその焰に落ちた二人だったが、吐き出す邪炎と鬼火は空狐の焰を打ち破り、その始点浮かぶ空狐へと伸びた。

空狐はそれにも動じることなく、感心するように声を漏らすだけだった。

「空天拭焰くうてんしよつか」

その言葉と同時に空狐が指先で輪を作り、口元に当て、輪の中へ冷静な吐息を漏らすと、そこから白煙のような焰が噴出す。空で燃える三色の炎が衝突した。

「うわっ……」

絡み合う三色の焰は、やがて一つの塊となり、行き場を失い、炸裂した。吹き荒れる暴風に隼斗は地上で転げるように滑っていた。

「どうじゃ？ 効果はあったのか？」

漂う大気中の水蒸気が蒸発されて立ち上る、雲という白煙に互いが風に消えるときを待つ。

「この程度で収まるのでしたら、ありがたい限りです」

空狐の焰は二人には届かなかった。その効果に稲浪が期待するよう言うが、九稲は冷静に時を待ち、警戒するように焰をたぎらせる。

「払え。我が頂が焰よ」

雲の向こうから空間が陽炎のように揺らめいた。

「稲浪、退避っ」

「分かっておるっ」

その瞬間、雲が焰に吹き飛ばされ渦を巻き、その中心からさらに渦を巻く眩い焰が噴出した。九稻と稲浪は即座に空間を蹴るように飛び上がり、それを回避する。

「え？ うわああああっ」

しかし、焰は直線に進み、到達点にいない二人を追うことなく、新たな到達点を目がけて地上へ吹き降ろす。

「隼斗っ」

「焰帝、七の舞っ」

突き抜ける空狐の焰が町を襲う。破壊すら遅れをとる熔解に、町に在るものがその焰に触れた場所から溶岩と化し、町がさらに黒地へと解けていく。そのすぐ傍に隼斗を見つけた稲浪が叫ぶが、その隣から九稻が烈火を地上へ吹き降ろす。隼斗のいるすぐ隣に、その焰が隼斗を守るように空狐の焰との壁を作る。

「隼斗っ！ その場から去るのじゃっ」

稲浪の声が届いたのか、隼斗は一瞬呆然とその焰を見ていたが、すぐに被害を受けていない逆へ駆け出した。

「余所見をして、我に相對しても良いのかの？」

晴れた雲の向こう、更なる上空に空狐はいた。

「なっ！？」

「な、なんじゃ、あれは……？」

そして、それを視野に捉えた九稻と稲浪は、その光景に驚きの声を上げていた。

「言うたであろう。戦場ならば、一が技では廃人と化す、とな」

そこにいる空狐は、炎の中心。その体を取り巻く白く長い焰が二本、空狐を守り、さらに空狐の背中からは十本の焰の柱が打ち上げられたロケットの白煙のように空へ昇り、その先には町を破壊しつくした焰の玉が十、燃えていた。一つを抑えるだけで九稻も稲浪も力を相当使ったと言うのに、目の前にはそれが十の塊を作り、落ちる時を待っている。

「ババを侮るなかれよ、孫よ」

不敵に笑む空狐が両手を広げる。

「源焰」

そう告げると同時に、開かれた腕の先にさらに二つの黄色い焰の柱が龍のごとく、蠢き始める。

「同時に、三の技をじゃと……？」

「あれほど強大な力を有する焰を宿すなんて……」

そのあまりに差のある焰に、二人は守る術を考える以上に、その神々しさすら覚える光景に立ち尽くすように浮いていた。

「姉上、どうするのじゃ？」

「悩んでいても先を読まれるわ。上空の焰球が私が相殺するから、稲浪、あなたは源焰を滅して。焰が神通力の焰だけになったら、構わず空狐を攻撃よ」

「うむ。では、往くぞつ、ババ様よっ」

九稲が上空へ朱直に駆け上がると同時に、稲浪は空狐へ突進するように焰の尾を引く。上空で一度立ち止まる九稲の眼前には十の白く輝く焰の球が待ち構えていたと言わんばかりに燃え盛る。幅数キロを悠に占める焰の熱が、所々に上昇気流を生み、空を雲が覆う。空間全てを空狐の領域だと主張するように。九稲は溢れる焰をコロナのように噴出させ、動向を待つ。

「それでも、あなたは私たちを侮るのですね」

その口調、不満。空狐からの返答はない。しかし、空狐の表情は喜びに満ちている。殺戮と破壊を子猫相手の猫じゃらしでの戯れとしか認識していないようだ。

「ならば、示しましょう。九尾が何故に妖狐とし、人々に恐れ慄かれたのか。渦焰、五の舞」

うねる尾の中央部に天を指すように伸びる尾が激しく燃える。同時に先ほどは五本だった焰の渦が、あたり一面の空狐の焰を排除するようにそれを取り囲むように一面を赤く染め上げる。その数は四十五本。空狐の焰球は檻に入れられたように囲まれた。

「これ以上の狼藉、身を以って償って頂きます」

波打つように揺れていた尾が、ピンと燃え盛り、針のように伸び、九稲は焰球へ向かってその場から姿を消したようにしか見えない動きで、そこから姿を消した。

「ババ様、何が望みなのじゃ？」

その頃稲浪は、空狐の目と鼻の先ほどで立ち止まり、そう問いかける。二人の空間は互いの熱に、時空の歪みのように空間が激しく滾っていた。

「望み、とな？ 孫と交えることに理由が必要かえ？」

稲浪の青い焰は威圧的に燃えるが、空狐は表情一つ変えることなく、平然と応える。

「我らと交えることは良い。じゃが、人間が世界を破壊などあつてはならんことじゃ」

「現に起きておる。起きたものを我ら狐が直せると？」

挑発的な物言いに、稲浪の口から牙が鋭さを増すように立つ。

「して、稲浪よ」

「何じゃ？」

空狐が逆に問う。

「そちは狐。何故に愚かなる存在、人間に従う？ 我らは此国において、最強を示す狐よ。我にはそちらの意味が解しがたいかの？」

互いの口調は普通だが、見えない焰の衝突は気を抜けば飲み込まれる緊張にある。

「今こそ、人間がこの地を支配しよる。基は我らが地。我らがものを守り、治むるは我らが役というもののよ？ 何故に取り戻さぬ？」

「それは違うのじゃ、ババ様。我らが治めた地は廃れた。それは我らが未熟だからじゃ。しかし、人間はそれすら自らが脱し、維持しておるのじゃ。幾ら我じゃって、どちらが世が良いか分かるのじゃ」

相対する意見。

「狐に泥を塗った人間ごときに感化されおったか。……致し方ないの。その思考、如何な過ちであるか、このババが示そうぞ」

「ならば、我もババ様へ牙を剥くのじゃ。我ら神子と人間は共存出来るのじゃ」

対立する緊張が同時に破られる。

「七尾が目覚め集えよ。蒼焰そうえんっ」

稲浪が唱えると、稲浪を覆う焰が数倍に膨れ上がり、焰の狐の中に狐へと姿を化した稲浪がいた。

「ほっほっほ、盛りがついた孫を相手にするは、まことに愉快よの」  
稲浪が大きく口を開くと、纏う焰からも同じように焰が吐き出され、空狐へと伸びる。しかし、同時に空狐の神通力として防御壁の作用をする二つの透明に近い炎が空狐を守るように稲浪の焰に立ちふさぐように集まり、その向こうで空狐が空へ手を掲げていた。

## 二神抄・激突・変化編（後書き）

青春大賞用更新作ユースウォーカーズを18日に更新します。

また、22日にはココクラを更新します。

青春大賞はそこそのランクになっていますが、恐らく順位が変動することはないと思うので（投票下さった方、ありがとうございます）した（^^）、ユースウォーカーズを最終更新作として、今後は通常更新するかもしれません。

訂正追記。

18日と22日更新予定の上記作品を、仕事の都合により更新が3日づつ遅れます。

誠に申し訳ありませんが、ご理解とご協力をよろしくお願いします。

**二神抄 激突 転機編（前書き）**

仕事の都合で遅くなりました。

ここから二神抄は終盤に入ります。

## 二神抄・激突 転機編

「滅せよ、源焰よ」

焰が打ち消された間合いから、稲浪に向かって掲げた手を振り下ろす穹狐にあわせて、光陰を帯びた焰が矢のごとく向かう。

「我とて、白狐っ！ かような焰ごときに負けはせぬっ」

蒼焰が口を開き、焰を吐き出すように燃える。焰の中から色濃い蒼焰が噴出す。

「ふむ。そうこなくてはの」

源焰を打ち払い、蒼焰が空狐へと伸びる。だが、その威力は目の前を飛散する虫を払うように、白い焰の前に飲み込まれる。

「くっ。厄介は神通力じゃの」

稲浪が表情を澁らせる。源焰には対抗もそれ以上の効力を覚えても、空狐はもはや神。故に稲浪にも九稲にもない力、神に通じる力を持つ。それが稲浪が迂闊に近づかない原因でもあった。

「仕方あるまい。三尾が目覚め集えよ。狐業滅<sup>ここうめつ</sup>緋<sup>び</sup>」

蒼焰を纏っていた稲浪の体に変化が訪れる。全身を大きく纏っていた焰が分裂し、無数の鬼焰が稲浪の周囲に漂い燃える。稲浪を飲み込むように燃えていた炎が全て、魂のように空に浮かぶ。

「ババ様よ。神通力とて数成せば、回避は容易ではあるまい」

稲浪は対抗する技が少なければ衝突が確実。数を成すことで隙を見出そうとしているようだ。

「ほお。一が技にして、三にも四にもとな。これはよい。参ってみせよ、稲浪」

「うむ。行くのじゃ、ババ様っ！」

どこか嬉しげに空狐が見下ろす。まるで危機を覚える様子はない。そんな空狐と似ているようで、稲浪もまた、争いが被害を拡大にする中で、自信ありげに口端を吊り上げ、周りに漂わせる焰たちを一斉に空狐へと差し向けた。



「往けっ！ 狐業滅絆っ！」

無数の鬼火たちが流星のように尾を引きながら青い空に蒼い焰が走る。焰と同時に稲浪も空狐へと突き進む。一つ一つの鬼火が自我を持つように、空狐へと無数に放たれた矢のごとく燃え盛る。稲浪はその中で鬼火を滾らせ、隙を見ている。

「ほお……なかなか」

周囲の視界を覆いつくすように焰は燃え盛り、空狐へと襲い掛かるが、空狐は軽く身を動かし、纏う白い焰をムチのように操り、自身へ近い炎を打ち消していく。その表情に焦りは無く、感心しているように楽しげだ。

「ババ様よっ！ 余所見をしておると、痛い目を見るのじゃっ」

焰を上手くかわす空狐のすぐ背後、青い炎がひときわ大きく空狐へ揺らめき現れる。その焰はまるで航跡を残すことなく飛び去る飛行物体と同じように、突如出現し、稲浪の身体が浮かぶ。

その声に空狐が眼前の焰を打ち払いつつ、身体を反転させると、勢いをつけた拳と焰がその顔面へと襲い掛かった。

「はああああっ！」

焰の色に包まれた稲浪の気合の声と共に、繰り出した拳が空狐へと衝突し、空狐を貫通する焰が一閃のように吹き抜けた。その焰と共に、混ざり合う二つの焰が大きく渦巻くように周囲を未だに襲い掛かってくる鬼火を飲み込むように燃え広がった。

「まだじゃのお」

だが、その焰の塊の中から空狐が無傷で姿を現す。稲浪の拳が突き抜けた顔には、身を取り巻いていた焰が空狐の頬を撫で、空狐もまた、その焰を自身の尾を愛でるように手を添えていた。

「術は良い。だがの稲浪よ、言うたであろう。一、二の術程度、妾が見てぬと思うたか？」

焰の中へ空狐が忠告をする。

「故に、甘いじゃ、愛しき孫よ」

撫でていた焰を空狐がまだ燃え残っている焰の中へ手向ける。そ

れは実に優雅なムチ捌き。だが、躊躇はない。

「急ぎ時に生きし愛しきよ。悠久を経て妾が前に姿を見せよ」

それは別れの言葉のように、空狐の瞳にごくわずかに子を思う瞳色を見せ、その焰は無慈悲に焰の中へと突き抜けた。それは焰を一蹴するように燃え溜まっていた焰すら巻き込み、稲浪の蒼い炎と空狐の白と金の焰を一瞬のうちに白金の焰に変え、大空へと吹き上がっていた。

「い、稲浪——っ！」

逃げろと言われて、距離をとった。背中から感じる熱が離れるに連れて熱いというものから暖かい程度にまで変わったとき、轟音が轟いた。振り返った時、無数の稲浪の焰が放れても見える空狐の輝きの焰へと砲弾のように向かい、その空域が何かが発射したように白く輝いて、稲浪の焰が次第に青く染めていく。稲浪にはまだあれほどの力があったんだ。そう何も知らない俺には、非現実的すぎて対応が思いつかず、呆然と眺めた。もしかしたら稲浪は強い。自分で最強だと言っていたからには、やっぱりすごい。そう思った。鬼火があれば空に浮かんでいるなんて、美貌に見入ってしまった空狐以上に稲浪に見入ってしまった。

額から絶えず湧く汗。涼しさと潤いを求めても、そんなものはない。乾燥した暑さと共に鼻をつく臭いが常態のようにあって、口がからからだった。腕に広がる赫職紋はずっと青白く光り、火傷を超え熱さを感じできなくなったみたいになんか力が入らない。

それでも分かる。稲浪は無事だと。あれだけの焰を操り、空狐の焰の色を青に変えた。勝てるかもしれない。恐怖があったはずなのに、たったそれだけのことで、俺の中にあつた恐怖に光が差ししてきた。稲浪たちの上において、焰の柱を操る九稲さんだって、さつき町を破壊しようとしたあの焰の球が十も空にたぎっているのに、それを檻に封じ込めたように押さえている。もしあれが落ちたら、梅田は壊滅するんじゃないのか？ そんな不安も稲浪のお姉さんと言う

ことと、烈火の柱があるだけで大丈夫なような気がした。

そして、そんなことを思う俺は、何も出来なかった。ただ逃げるだけ、ただ見上げるだけ。

それだけだった。でも、あの場所にいらなかった。よく分かっている状況で信じられるのは、稲浪だけ。だから俺の行動は間違っている。ただ、これ以上は離れられない。無意識に男としてのプライドがまだ遠くに逃げるべきなのかもしれないのに、この熱さの中にいようとする。何かしたい。何かしなければいけない。でも、何も出来ない。

でも、平静にいる俺の目の前で、それは突然だった。

稲浪が鬼火と共に空狐へとさらに空を自在に飛びまわり、空狐の背後を取った。そして、空狐の顔面に稲浪が拳を叩きこんだ。一瞬、そこまでそままでするのか？　なんて空狐に同情的な思考もあった。でも、それはすぐに不要のものだとすぐに気づいた。顔面へと叩きつけた拳の先から鬼火が噴出した瞬間、空狐の焰が一気に稲浪の焰を包み込んだ。そして同時にその焰の中から、白金の輝く髪をなびかせながら空狐が出てきた。しかも、まるで攻撃を受けていない様子で。空狐を守る尾の焰がそれを防いだみたいだった。稲浪はっ？　姿が焰の中に消えた稲浪を探して目を凝らす。でも、空狐の傍にはいなかった。燃えている焰の中にいる。腕の赫職紋に異常はない。でも出てこない。どこにいるんだ？　稲浪の姿をそう思いながら探す、空狐が先に動いた。

白い焰が蛇のように空狐の周囲を守り、そして、空狐の指示なのか、焰自体の自我のようなものなのか、まだ稲浪がいると思う焰の中へその焰が貫くように空へと伸び、その焰の全てを吹き飛ばした。

あまりに一瞬のことで、空に飛行機雲のような一閃が残り、俺は思わず呼びかけた。稲浪の姿がなかった。光線のような焰が消えていく。出てきた様子のない稲浪に、最悪の事態を目の当たりにしてしまったと、身体がただそこを目指して動き出した。

「稲浪っ！」

そこしか見ていなかった。腕の赫職紋が光を増して熱さを増した。何かがあった。直感がそれだけを認識して、離れた空狐の姿が次第に大きくなってくる。流れる汗が目に沁みて、視界が一瞬ぼやけた。「うわっ！」

見えなくなっても動いた足。それでも見えなかった分、瓦礫が散乱する中で、足が何かに引っかかって派手にこけた。

十の焰球を取り囲む、四十五の焰渦。稲浪は焰の中で狐の焰を解き、人の姿となっていたが、九稲は業火を纏い、焰の狐と化し、焰球の成長を抑えるように九稲が焰を噴出し続ける。

「誠に恐ろしいお方ですね。これを町に落とせば、NBSL本社もただではないと言うのに」

九稲の声は焰の中から呆れを含み、漏れた。その下層では稲浪が鬼火を当たり一面に漂わせ、空狐が焰の尾を稲浪へ向け、稲浪は素早さを利用してそれをかわす。

「空狐が気づかぬ今こそが好機。稲浪、もう少し耐えて」

焰の狐の顔が下を見る。同時に稲浪の鬼火が空狐へと襲い掛かった。

「焰渦、滅焰っ」

九稲が焰の柱へ向かって炎を吐き出した。焰渦の柱に衝突する吐き出された焰は、柱に塗られる土壁のように空狐の焰球を世界から隔離する赤い焰が空を一面に覆い始める。やがて柱全てが九稲の吐き出す焰と溶け込み、上下左右の空間に、巨大な紅い焰の空間が周囲の空から水分を蒸発させていた。そして、九稲が吐き出す焰を止めると、そこへ向かって九稲が宙を蹴り、空を赤い狐が駆けた。

「天狐様、どうか私にお力を……っ」

空に遠吠えの声が響くと同時に、九稲がその焰の中へ突入した。太陽のコロナのように突入した場所からは焰が噴出し、九稲の世界から青空が消えた。

「これほどの力を発揮してもなお、あれほどの力を得ているなんて

……」

九稲が狐の姿を解いた。紅い火の粉を纏った髪がでん部から尾のように生えている九本の焰が長く一つの束のように赤くきらめいている。九稲の瞳も隼斗たちとの触れ合いとは異なり、険しさがあった。しかし、その中に、空狐が無尽蔵に焰を駆使することに、危惧もあるようで、早急にこの現状を治めたい様子だった。

「ただで終わるには、いささか困難がありそうね……」

焰の空間の中でも、空狐の焰球は白い輝きを持ってその主張を揺らめきとして九稲の目の前にある。端から端までの距離は目測では測りきれない空間に、九稲が静かに息を吐き、瞳を開く。手のひらに小さな焰が生まれ、九稲が静かに目の前に浮かぶ焰球へと歩み寄る。九稲は焰球の間に立ち、二つの焰球へ片手をそれぞれ手向ける。

「九の舞、滅焰灼放<sup>めつかしやくほう</sup>」

赤い瞳が強く光を増し、九稲が焰球へ両手に宿した赤い焰を押し付ける。同時に九稲の尾が全て噴出す焰のように激しく燃える。九稲の身体が熱風で衣服が大きく揺れ、両手に宿っていた焰が空狐の焰球の表面に、血脈のように燃え広がっていく。白い焰球が九稲の赤い焰にその歪さを増す。九稲はさらに自身にたぎる焰を強大なものにし、焰球に広がる九稲の焰がそれを飲み込んでいく。力を振る絞る九稲の声には、相応の力への代償のように若干の苦渋が浮かぶ。だが、使命を持つ九稲としての誇りが、巨大な焰球を被いつくす焰が圧縮して燃えていく。

「滅せよ、我が九尾が紅の焰よ」

振り絞る声にあわせるように、二つの焰球が九稲の腕の中へ吸い込まれるように圧縮され、霧散した。

「この二つだけでこれほどの妖力を使うのですね……」

稲浪に比べて、焰球への対処を心得ている九稲ではあるが、一度に二個の焰球を滅することは容易いわけではないようで、九稲の息は上がり、焰球と触れていた手はだらりと垂れ、その手のひらは火傷を起こしたように赤みを帯びていた。だが、まだ八つの焰球が九

稲の焰の世界に浮き燃えている。休む暇はないと、九稲は髪を赤く輝かせ、優美に次の焰球へ焰の中を進んでいく。

「九の舞、滅焰灼放っ」

そして、再び二つの間に立つ九稲が、同様に滅焰灼放によって焰球を滅する。だが、その度に九稲の身体からは焰と共にすぐに燃え尽きてしまう湯気のような白煙が身体から昇る。

「っ……っ、さすがに……この身体では……」

纏う焰が二つずつ焰球を滅するたびに盛りを失っていく。疲労の色と共に、九稲が焰を宿し、焰球を滅してきた腕が、重度の火傷のように赤く、血を滲ませている。

「……九の舞、滅焰灼放っ……っ……あう」

だが、それでも九稲は止めない。神坐天照もとい、山田太郎の命がある。創世を利用しての悪しきに懲罰を。それと同時に背負う人の世の安寧。それを侵す空狐を倒す。その為に固執するようにも見えるくらいに、九稲は残り四つの焰球へ進む。その足どりこそ耐えているが、焰球が滅するにつれ、九稲が展開した焰の空間が小さくなっている。空間を囲う焰は、空狐による焰球への干渉を遮り、万一の時の障壁をなすのだろう。しかし、九稲は一度町を破壊しようとした焰球一つを消し去る為に力を激しく消費した。今はそれに加えての六の焰球を滅した。幾ら力があるとは言え、その疲労は頂点を越えているようだ。

「はぁ……っ……」

それでも九稲は舞う。焰の粉を振りまき、焰球へ己の焰を映し出し、圧縮消失させる。

「……っ……九の舞……滅焰灼放」

七、八の焰球へ九稲が焰を送り込む。その焰を取り巻いていく力は弱かった。

「くっ……解放に、制限が……」

これまで完全に焰球を被いつくしていた焰が、この二つへは、全体を覆いつくせなかった。

「これだけ……でも……っ……はああああっ」

そして一層の力を込め、九稲の焰が赤から赤黒く変色し焰球を食らい尽くすように滅した。

「……っ」

だが、同時に九稲の焰の尾が消失した。手に力はなく、立っているのがやっと。それほどに疲弊し、焰と入れ違いに九稲の身体がそこで足を止めた。

「空天拭焰っ」

「っ!?! ……——っ」

しかし、そのわずかな時間すら、九稲には休息を与えはしなかった。

兆す気配に九稲は赤黒い焰を纏い、上空へ焰の空間を突破して非難した。九稲が脱した次の瞬間、白金の焰が九稲の焰を全て吹き消すように大空を煌めかせた。

「ほお……妾が焰を八つも打ち消しおったか。実に見事よ」

消えていく焰の向こう——九稲を見上げる空狐がその美貌を以って、九稲を視線で射止めていた。

「はあ……はあ……空、狐……」

疲弊だけではない、過剰な焰の使役に、九稲は苦痛を見せ、炎を纏おうとするが、その焰が上手く身体を包み込んではいない。

「どうした？ 焰がくすんでおるぞ。その体では無理を压したの？」

九稲を見て空狐が笑った。それは無邪気なものではなく、嘲笑のようでもある。

「い、稲浪は……どうされた、の、です……？」

そして、見下ろす九稲の視界に、稲浪の姿はなかった。

「稲浪か。稲浪は良いの。時を経れば、妾が良き腕になりうるじやろうの。あの威勢は良い。しかし、及ばなんざ」

そう言って空狐が自分の頬を撫でる。そこには若干殴られたように赤みを見せているが、空狐がそれを撫でると、元の白さを取り戻した。

「そう睨むでない。とどめは差してはおらぬ。運良くば、生きておるじゃろうの」

空狐が地上へ顔を下げる。九稲もつられるようにそれを見る。その先には、ビルが崩壊し、燃えている粉塵が立ち上っている区画があった。

「稲浪っ！」

それを見て、九稲は気づいたのだろう。稲浪が落ちたと。弱まっていた九稲の焰が激情と共に一気に燃えた。それは烈火の紅き焰ではなく、まるで妹を殺されたことへの憎悪を含んだ憎しみの赤黒の焰。

「して、九稲よ。どうするのじゃ？ まだ二つ、あるぞ？」

そこにはまだ二つの焰球があり、九稲がそれに視線を向けた瞬間、空狐が纏う白い焰を伸ばし、その二つを空狐は自分を結びつけ、九稲に悪戯な笑みを薄く見せた。九稲の表情が歪む。理解してしまつたように。

「……あなたは、人の世だけでなく、子孫までへも、心を鬼にされるといいますか？」

その破壊を見下ろす九稲は、妹がもがいたであろう傷を容易く消し去り、落ちた稲浪の事など既に眼中から消えている。ただ戦いを楽しむ為だけ、自己の欲求に忠実であることだけの空狐に、唇を噛んだ。

「鬼、とな？ ほっほっ、妾が鬼とな？」

九稲の稲浪すら容赦なく落とし、町を破壊する空狐への怒りの言葉に、空狐の動きが止まる。だが、空狐が笑う。屈託のない美貌を無垢に染めて。

「創世とは、我らが閉ざされし世界の融合です。あなたが犯しているこれは、消失そのものです。あなたにはお解かりにならないのですか？ 稲浪がこれほどあなたへ訴えたことを」

呼吸は未だに荒い九稲。それでもこの無情に力だけでは変えられないと思つたのだろう。



「笑止。貴様は落ちぶれおったのか？ 何を以ち融合とな？ 貴様のそれは、惑いに過ぎぬ」

空狐はそれを一蹴した。

「見てみよ。これが融合か？ 妾は人世を司った。じゃが、これが融合と申すか？ どこにおる？ どこに同胞がおる？ どこに自然がある？ そんなものはないっ」

空狐が差す地上。大府大阪の都会の町並みが広大に続く。所々に見える緑も、森にすら人は住み、開発し、自然と言う名の人工による自然を作り上げている。空狐は其中で生きるということへ嫌悪がある。だからこそ、取り巻く焰が怒りの矛先を探すように大きく九稲の周囲へ燃え盛る。空狐は天狐の上にいる。だからこそ、狐の長を越えた神という存在も同然。その歴史を知る人間はいない。遠い過去から見ているからこそ、この変わりようが気に入らないように、九稲にそれを怒りの表情で訴える。

「あなたが見てきた時代、我らが如何に生き抜き、ここにいないことか、その苦しみは私にとって理解は出来ず」

そして九稲がそれを認めた。空狐の表情に、納得と共に、自身の道の正しさを再確認したような表情が浮かぶ。

「ですが、変わらぬものはございません。我ら神子は物の怪とし、恐れられることが生存を担いました。しかし現代、神子の名におき、我らはこの命を脅かすことを忘れ、生きていくことが出来た。これは、望まれた世界のはじめ。だからこそ、あれほど人を憎んでいた稲浪は、守るべきものを見つけ、あなたに気づかせようとしているのです」

それを無碍にするつもりか？ 九稲が強い視線で見下ろす。その灼眼は、空狐へ思いを強く映し出す。

「ならば問おう。我らは何ぞ？ 我らは何故に生き、人間は何故に生く？ 全てが生におき、その長たるに相応しきは何ぞ？ 醜きは何ぞ？」

空狐が問う問いは、既に空狐は答えを知っている。九稲にもそれ

が分かるほどに、空狐の身体に焰が取り巻く。

全ての生の頂点に生きること。それに相応しいものは何か？

「答えは簡単よの？」

「ええ、そうですね……」

空狐の確認の眼差しは、いやらしさを含む。それを認めること――すなわち空狐を公定することになるのだと、九稲が地上の惨劇を空狐越しに見下ろした。

「破壊じゃの」

「……………」

笑む空狐に口をつぐむ九稲。

人が生物の頂点を司り、全てを支配すること。それは破壊と言う能力を持つからこそ。

「ですが、破壊とは再生を前提に行うものであり、あなたは消失させているのです」

それでも九稲は言葉を出す。空狐があくまで人間を擁護する九稲に、笑みを消す。

「稲浪と言い、九稲と言い、何を思いつく守ろうとするか、妾は解せぬ」

「難しいことはありません。あなたは神たる狐。全てを知るあなたでございましょう？」

「妾に説法をするな。もう良い。さほどに言うならば、示してみよ」容姿が大人になればこそ、空狐は子供のように駄々を捏ねる様子はなく、ただ大人びて愁いを帯びた瞳で、九稲を見上げる。

「元来、狐は獲物逃がすべからず足と力を持ち得ておる。して妾が孫はどうじゃろうのお？」

卑しい目つきで空狐が、表情を不気味に変えた。その様子に九稲は息を飲み、瞳を大きく開いた。

「っ!？」

その言葉は実にゆっくりであり、九稲は残る力を振り絞り、俊足で焰球と空狐を追い抜き、眼下に広がる梅田の町へ落ちていく。流

星のごとく焰を引く九稲に、空狐の邪念の笑みが不気味にそれを追うように、空狐が腕から伸ばした焰と、それに結び付けられた焰球を九稲が通り過ぎると同時に振りかぶった。

「見せてみよっ。妖狐っ！」

高らかで不気味な笑い声と共に、空狐が焰球二つを地上へ振るった。その二つは、九稲をあざ笑うように、別々の場所へ向かって勢いを増し、落ちていく。

「焰帝、五の舞……っ」

距離をとり、地上側から九稲が見上げるように振り返り、両手を広げ、消えかけた尾の焰を赤黒く燃やす。全身から地上を守る焰が広がっていくが、これまでよりもその規模は小さく、受け止めきれぬ焰球は一つしか規模がなかった。

「……っ！」

九稲は残された力を全て広げるように、苦痛の声を上げる。だが、添えりすらも打ち破るは、空狐の高らかな笑い声だった。

「そんなものでは妾が焰は受け止められぬぞっ！ その身を挺して貴様は何を守るといふのだ。人がごときについたことを後悔せよ、九稲っ」

空狐と焰球を結んでいた焰が切れ、焰球がさらに加速して、一つは九稲の焰帝の壁へ。そしてもう一つは、何もない、梅田の街へ焰帝を超え、高層ビルの上層部が赤く光を放ち始めた。

## 二神抄・激突 転機編（後書き）

閲覧ありがとうございました。

今回は「youth walkers!」を更新します。

更新予定日は、仕事が多忙ですので、30日を予定しています。

長らく更新が遅くなっていますが、どうぞご了承くださいませ。

## 二神抄・激突・決編（前書き）

長らくお待たせすることになりました、申しわけありませんでした。順を追って作品を更新しているので、どうしても時間がかかってしまいました、ようやくこの抄に区切りをつけることが出来ました。少々長くはありますが、お待たせした分だと思っていただけだと思います。

## 二神抄・激突・決編

「いってて……」

稲浪に駆け寄ろうとした。でも不意に足に何かが引っかかり、その勢いのまま瓦礫の散乱するアスファルトに転んでしまった。全身に感じる痛みをこらえながら、稲浪を見た瞬間、景色が赤く、そして空から降り注ぐ熱さに視線はそのまま稲浪ではなく、空へと向いた。  
「なっ……!!?」

そこには、黄金色の炎と赤い炎が降り注いでくる。肌に感じるひりひりした暑さよりも、その炎が空狐の炎と、それを防ごうとする九稲さんの赤い炎が燃えている。でも、俺の視界でも理解できた。稲浪も九稲さんも空狐相手に困憊状況だった。それなのに空狐は二人を相手にしながら疲れを見せない。その結果なんだろう。迫り来る炎は、黄金の炎の規模が大きい。九稲さんの炎はそのごく一部だけを守っている。

単純に理解した。

——逃げられない。

あまりにも空が一面燃えすぎている。俺の脚で逃げ切れるような狭さじゃない。見えるビルに切り取られた空の全てが焔に覆われている。

「稲浪——ッ!」

俺にはどうすることも出来ない。だから俺は逃げることを止めた。空狐に叩き落された稲浪の傍に行きたい。ただ、それだけだった。

「邪魔だよ、寝てなっ」

「あぐっ!」

それなのに、立ち上がろうとした瞬間、背中から押さえつけられる痛みと重みに、体がまた、地面に押し付けられた。

「亀甲っ、行くよっ」

「はぁーい」

倒された俺の頭上で、そんな声が聞こえた。一人の声は知らないけれど、もう一人、その声に反応するのんびりとした口調には、何か覚えがあった。

「らがんこうしやう羅岩硬招」

のんびりとした声に顔だけ持ち上げ、そちらへ振り返ると、思い出にある姿が目に入った。

「うっ」

でも、呼びかけようと開いた口からは、司会を覆いつくすように眩い光線みたいなものが視界を焼いた。

「亀甲、ついでに町も守れっ」

「はぁーい。きしやう亀壁」大展開」

光線が消えたと思った矢先、今度は光が風のように広がり、見上げた空の赤色が、あの時のエンとの闘いの時のように淡いピンクの光に包まれていく。

「おい、隼人、おめえ、よくこんなところに寝てられんなあ」

何が起きたのか、理解しようとした時、体を小突かれるように靴で踏まれた。

「み、湊川、先輩……？」

顔を上げた先、九稻さんの焰帝だけでは防ぎきれなかった場所今まで、淡い光が広がり、その下に、俺を先輩が咥えタバコで見下ろしていた。

「っーか、すげえことなってるな。会社のビルがねえじゃねえかよ」  
何でこんなところに先輩がいるのか、そしてじゃあ、あののんびりとした声は亀甲さん。

「どうして、先輩が……？」

ズキズキする痛みにこらえながら立ち上がる。

「それよりも、だ。こいつは何事だ」

湊川先輩が空を見上げる。そしてつられて見上げて思い出した。

「せ、先輩っ！ ここはまずいですっ。避難してください！」

空にはすでに九稻さんの焰に限界があった。焰帝が空狐の焰球に

飲み込まれていく。

「んなもんいらねえよ。まあ見とけて」

空には焰でほとんど見えないけれど、先ほどの亀甲さんの、あの時と同じような色をした空間が展開している。あの時は確かに凄いのと思った。でも、あの時とはわけが違う。稲浪ですら敵わない。ましてやそのお姉さんの九稲さんでも苦戦してる。そんな攻撃に敵うはずがない。

「お前はさっさと神子んとこ行ってやれ。何なら俺が介抱してやつても良いんだぜ？」

この状況下において、先輩は随分と余裕だ。俺だって最初はそうだった。でも、今気づいたんだ。これが本当に創世というやつなんだ、と。

「昂様〜？ あなたはむしろお、介抱される側になるかと思いますけど〜？」

その時、亀甲さんが先輩の隣に、俺が覚えているにこやかな笑顔で立った。あの時と同じように着物姿で、やはり場違いみたいに見える。

「あん？ どういう意味だぶっ！」

「せ、先輩っ!？」

何かが吹きぬけた。そう思った瞬間、先輩が目の前から吹っ飛んだ。

「あんたねっ、人様ん神子に手え出したら、あたしが殺すわよっ！」

そして俺のすぐ目の前に立った風。全然動きが見えなかった。早すぎる。稲浪や九稲さんよりも早いんじゃないのか？ そんなことを考えていると、それが振り返った。

「あんたがこいつの部下の風祭？」

「ましらちゃん〜、今はそれどころじゃないよお〜？」

目の前に二人の神子がいる。どちらも最初の稲浪と九稲さんと同じだ。

「それもそうね。風祭」



「は、はい？」

その神子だと思う人が俺を見る。

「ここで闘ってるのは誰？ NOは何？」

いや、この人は神子だ。人間にはない、全身に何か光をまとっているみたいにくっすら光ってる。

「えっと、NOは分かりません。ただ、俺の神子の稲浪と稲浪のお姉さんが、稲浪のお婆さんと闘ってるんです」

どこか鋭い視線で、威圧的な雰囲気を持つこの神子に、俺は素直に答えた。きつと先輩の神子だからかもしれない。

「稲浪……確かNO. 13白狐稲浪ね。で、姉ってのは何て名だい？」

「えっと、九稲さん、です」

「九稲っ?! NBSLの狗がいるわけっ!？」

「え？ ちよっ……」

唐突に驚きと共に、俺の胸倉が掴まれる。何なんだ？ いきなり。「おやおやあ。NO. 3妖狐九稲さんですねえ。これは凄いお方が出ていらしたんですねえ」

亀甲さんまでも驚いているようには見えないけれど驚いている。

「ちよっと待ちな。じゃあ、その婆さんってのは、誰だい？」

ずいっと顔を寄せられる。稲浪とは違う綺麗さというか、目力が強い。

「え、えっと、空狐です……」

逆らえやしない。そんな気迫に口だけが動いた。

「……ましらちゃん、元、天狐だよお？」

何かへんなことを言ったんだろうか？ 俺の答えに、ましらという神子らしい、この人がそっと手を離し、俺を解放する。

「NO. 8……どっちもフィフティーンズじゃないのよ」

「だからこんな事態になっちゃったんだよねえ。本当、面倒なことさせられたねえ」

ましらさんが頭を抱える。亀甲さんは相変わらず落ち着いた笑顔

だ。何なんだろう。良く意味が分からない。

「なるほど。稲浪っていや、凶暴で有名だったのに、あれでさえあんなざまなんだし、当然っちゃ、当然か」

「え？ 稲浪が、凶暴？」

不意に聞こえた言葉に疑問が浮かんた。

「お前ら、今は、んなことどうでも良いだろ。さっさと済ませにや、空狐だろうが、もっと怖え奴がいんだろうがよ」

先輩が頬を押さえながら戻ってきた。どうやらましらさんに頬を殴られたみたいで、少し腫れてた。

「そうですねえ。あのお方に逆らうと明日の食事に困ってしまますからねえ。どこかの誰かさんの無駄遣いのおかげでえ」

「まあ、今のあたしらにはそっちのが恐ろしいわね。ま、良いわ。これは亀甲、あんたが何とかしなさいよ」

「はあゝい。ましらちゃんも一応〱羅岩硬招かけてるけどお、効力時間には気をつけてねえ」

亀甲さんの忠告を軽く流して、ましらさんが俺を見る。

「ほんととは犬族の仲間の手助けするつもりなんざないんだけど、あたしらの生活もかかってるから、今回だけよ。あんたはさっさと自分の神子んどこ行って、怪我、治してやんな」

ましらさんがそれだけを言い残すと、髪を翻し、先輩のところへ行く。

「さっさと終わらせて来い」

「あんたの為にやるんじゃないわよっ」

そして、そのまま二人はキスをした。でも、それはただのキスじゃなかった。

「解妖……」

淡い光が二人を包んで、先輩の赫職紋が光った。そして、次の瞬間には、風がその吹き寄せるだけで、ましらさんの姿が消えていた。

「は、早い……」

「ましらちゃんはNo. 20の猿帝ましらちゃんなんですよお。」  
番号としてはあ、稲浪さんに劣りますけどお、強いんですよ」

呆然とする俺の傍で、亀甲さんが微笑んでいた。

「あの、えっと……」

聞きたいことが色々あったのに、何から聞いたら良いのか出てこなかった。

「まずはあー、稲浪さんに解妖をしてあげてくださいねえ。稲浪さんの赫職であるなら、ご自身の神子を第一に考えてあげてくださいねえ。昂様のようなろくでなしにはなりませんようにい」

「おいこら、てめえ」

亀甲さんが俺に微笑んで、早く稲浪のところに行って、と言うと先輩が亀甲さんの肩に手を置いて抱き寄せた。

「まあ冗談はこんくれえにして、さっさと行ってやれ。命約交わして時間経ってねえ神子は回復も遅え。ここは俺に任せてさっさと回復してやれ」

まるで俺を邪魔者みたいに手払いして稲浪を見る。でも、その言葉に亀甲さんが微笑んでいて、瞳だけは真剣に頷いているようで、俺は稲浪のところへ急いだ。

「やれやれ。空狐っちゃ、あれだろ？」

残された昂が空を見る。そこには炎が迫り来るだけで、空狐たちの姿は確認できない。

「元天狐様ですねえ」

「そんな奴が未調整って、大丈夫かあ？」

「私がいまし、大丈夫ですよお、きつとお」

「お前でもきつと、かよ」

「亀壁でなら、これは防げますが、他がどうかはあ、私にも分かりませんから」

「頼むぜ、俺の愛しい神子さんよお」

そんな不安を多少ばかりは感じていたようで、二人は空を見上げていた。

「稲浪っ！」

目の前には崩壊したビルの瓦礫。神子が落とされただけなのに、その破損は爆発でもあったんじゃない？　と思わせるほどに十階建てほどのビルが、三階から一階まで破壊されている。

「稲浪っ　稲浪っ！」

瓦礫をどかし、稲浪を探す。思い瓦礫やガラス、書類が散乱する中で、不思議と俺には稲浪がどこにいるのかが分かる気がした。

「稲浪っ」

自分の痛みなんて忘れた。無我夢中で目の前で邪魔をする瓦礫を持ち上げては投げ捨てる。何度繰り返したかも分からず、ただひたすら瓦礫が腹立たしく目の前にあって、腕を引きちぎらんとするほどの重いものに、全身の血管が浮き上がる。それでも俺の感じる苦しみより、この中にいるはずの稲浪の味わった痛みに比べれば平気だった。

「っ！　稲浪っ！」

繰り返していたら、瓦礫の中に不自然に垂れる人工物じゃないものが目に入った。固くなる身体が、ただそれを見つけるだけで力がまた湧いてきた。

「稲浪っ！　大丈夫かっ！」

瓦礫をどかし続けると、瓦礫の砂を被り、色あせている金髪と、所々燃えたように焦げ落ちた神子服。あれほど凜々しかった稲浪の表情は、苦渋ににじんでいて、見つけた喜び以上に、その姿に罪悪感とまるで自分のように心が痛くなった。

「う、うう……」

瓦礫を全て退かし、稲浪を抱きかかえるように移動させる。擦り傷や切り傷から赤い血が垂れている。それでも骨折している様子はなく、稲浪の意識もあった。

「稲浪っ、大丈夫かっ？」

疲弊もしているようで、息が上がっている。どうしたら良い？

と考えようにも何を考えるべきなのか、真っ白だった。

「は、隼人……すま、ぬ、な……」

決して軽くはない稲浪の体重が俺に寄りかかる。それでもその重さは、俺に稲浪が生きているという安心をくれている。でも、稲浪はそれどころじゃなかった。

「ババ様、は……強い……」

そんなことはどうでも良いんだ、俺には。ただ、どうしたら良い？  
それだけが稲浪を見る俺の心に痛みを味あわせてくる。

「油断、し……た……」

あんな戦いに油断も何もないだろ。空狐の強さは異常だ。九稲さんですらあんなに負傷してる。稲浪が尊敬する強さを持っているんだ。稲浪が勝てなくてもおかしくない。でも、だからってここまですることはないだろ。稲浪の今の状態、エンとの闘いで、エンが受けたものよりどう考えてもひどい。それなのに稲浪と俺の赫職紋は消えていない。それだけ稲浪が強いのは分かるけど、これ以上、稲浪が闘うのは無理だ。

「稲浪、すぐに安全な場所に連れて行くからな」

先輩が任せると言ってくれた。あの時も亀甲さんの圧倒的な強さを知った。だから、先輩がいる以上、稲浪が戦闘を続けなくてもいいはずだ。とにかく稲浪の傷を何とかしないとイケない。ただそれだけが俺に出来ることだった。

稲浪の腕を背中越しに掴み、背中に稲浪の身体を感じながら立ち上がる。じつとりと背中に感じる稲浪の体温とは別の、しみこむ感覚が、稲浪の怪我の手当てを一刻も早くしなければ、と俺を奮起させる。

「ど、どこへ、行く、隼人……？」

「ここは危ない。安全なところに行ってから治療する。もう少しだけ頑張ってくれっ」

「ならん……我を下ろすの、じゃ、隼人」

言うと思ったんだ。稲浪のことだ。九稲さんが闘っているのに自

分だけ戦線離脱なんて嫌なはずだ。九稻さんの焰はまだ消えてなかった。きっと大丈夫。だから俺は稲浪を優先したかった。しなければいけないかった。

この数日の生活だけでも、稲浪は負けず嫌いで、我が強い。我がままといえそうだけど、妥協することや聞くことも出来る。だから融通が利かないわけじゃない。ただ、信念が強い。でも、状況が状況だ。今の稲浪に出来ることはないくらいだ、きっと。

「駄目だ。今の稲浪じゃ空狐にまたひどいことをされるだけだ。そんなの、俺が見てられないんだよっ」

稲浪を大切にして欲しいって九稻さんに言われた。だからこそ、ただ見てるだけじゃ駄目だ。赫職はきっと神子を信じて闘わせるだけじゃない。神子の状況を見て、事の次第では止めないといけない。そうしないと稲浪ともう一緒にはいられない。それは嫌だと気持ちが決めている。

「駄目じゃ。……このままでは、姉上が……落とされる」

そんなことは俺だって分かるさ。空狐があればほどの稲浪と九稻さんの攻撃を受けていながら傷なんてほとんど負っていない。それだけ強いってことくらい。でも、だからって傷だらけの稲浪が今、何を出来るって言うんだ。俺は稲浪がこれ以上傷つくのを見ているだけなんて絶対に嫌だ。

「安心しろ、稲浪。亀甲さんが来てくれた。だから今は傷の手当が先だ」

「……亀甲、殿が……?」

強気の意見を崩さなかった稲浪が、初めて声色を落とした。

「ああ。四霊の神子なんだ。今は亀甲さんに任せよう。今の俺たちじゃ空狐には敵わない」

ん……、と稲浪の息を呑むような小さな吐息が耳をくすぐった。考えてくれているんだ、きっと。

「四霊は、止められる……じゃろうか……?」

倒せるか、ではない。俺としては稲浪をここまで苦しめる空狐を、

倒すべきなんだと思う。九稲さんも倒すと言っていたのに、稲浪だけは止める、か。お婆さんだからということなんだろうか。自分がこんな目に遭っていても、倒すことより、止められるかという、空狐を氣遣うような言い方には、俺は少しだけ同意は出来そうになかった。

「大丈夫だ、きつと」

「そうか……隼人が言うのじゃ。我は、信じる、ぞ……」

「ああ」

それきり、稲浪からの声は静かに消えていった。背中越しに伝わる稲浪の心音が落ち着いてきて、気を失ったか、眠ったか、稲浪の重みが一際体にかかるが、受け入れてくれたということで、稲浪も本当は自分が限界にあったことを認めてくれたようで、心ばかり安心した。

「あらあらあゝ、随分とやられちゃいましたねえ」

安全な場所なんてない。梅田から出ない限り、安心といえる場所はないだろう。でも、俺は稲浪を背負い、先輩たちの元へ戻った。

今の俺にとって、先輩のところだけが安心かもしれないという確信のない場所だった。亀甲さんの言うとおりで、自分の神子がそう言われると、まるで俺が攻められているような気がして、手厳しいな、と内心で苦笑する。でも、亀甲さんはもう動いているんだと、着物の色が白い色から淡いピンクに変わり、光を身につけているように煌いていて、それと同じ色が空を覆っていた。

「まあ、ここにいろ。お前の神子は当面闘えねえだろ。こっからは俺がやってやる」

「ありがとうございます、先輩」

感謝しろよ、と視線を向けられる。何だかんだで先輩は格好良いかもしれない。

「うふふゝ、私たちも明日の食事のためですからあ、別に気にしないで良いですよゝ。昂様の自業自得ですからあ」

「うい」

よく分からないけど、何かしら先輩は先輩で事情があるらしい。

亀甲さんの笑顔を見る限りは大したことなさそうなんだけど。

「にしても、なかなかお前でも打ち消せねえか」

「はい」。空狐の焰は灼度が高いようでえ、もう少し時間がかかり  
ますう」

空を見上げる二人につられて見上げると、空は焰と光で激しく対  
立するように、燃え盛っていた。

「す、すごい……」

九稻さんでも防ぐのが精一杯なほどに力を使っていた空狐の焰球  
を二つも上空で防いでいた。俺たちの目の前というか、上空にある  
焰は、九稻さんの焰を受けていない。少しはなれたところで燃えて  
いる焰は九稻さんの焰の影響もあり、消えかかっている。轟々とし  
た焰を受けても打ち破られることのない亀甲さんの能力。防御する  
しかないと言っていたことは伊達じゃないんだと、目の前の光景に  
驚くばかりだ。

「それよりも隼人。まだ解妖してやってねえのか？」

そんな俺に先輩が稲浪を見ながら声をかける。

「あ、いえ、解妖は稲浪たちが戦闘を始めるときしました」

先輩は稲浪が解妖をしていないと思っっているようだけど、俺と稲  
浪はしていた。だからこそ俺の腕は感じたことのない熱さを感じた  
し、稲浪は焰を狐の形に纏い、戦い、巨大な焰や無数の焰を出して  
闘った。それでも赫職のいない空狐に、解妖すらしていない空狐に  
撃ち落された。

「あー、なるほど」

「一契三戯いっけいさんぎの解妖ですからねえ」

先輩と亀甲さんがよく分からないことで、二人して頷く。一契三  
戯の解妖？ 何のことだから分からない。

首を傾げて二人を見る俺の視線が届いて、先輩が説明してくれる。

「お前は知らんようだが、神子と赫職の間には命約がある」

それは知っている。稲浪が強引に迫って交わしたから。



「そして命約を交わした神子と赫職には、神子本来の能力だけじゃなくてな、赫職の潜在能力を合わせて、より高度な能力を発現出来るようになるもんなんだよ」

より高度というと、それが解妖のことかもしれない。でも、解妖をしたところで、稲浪の力が増しただけで、俺は腕に熱さを感じただけで、結局俺の身には何も起きていない。先輩の言っていることと若干違う気がした。

「つつても、解妖も一種類だけじゃねえ。神子と赫職に共通はするが、解妖には種類がある」

「一つは、神子の能力を肥大化させるんですよ」

こんな風にですよ、と亀甲さんが今の私の力ですう、とのんびりした緊張感のない声で、空を指差す。相変わらず空狐の焰と亀甲さんの防御壁が激しく燃え戦っている。

「解妖にはな、一つの命約において、三種類パターンがある。一つは神子単体の攻撃の強化。二つ目は神子と赫職の能力強化共有。最後は赫職による神子への能力供給、だ」

だ、と決められてもそんな話は初めて聞いたから、ぴんと来るものがない。

「命約を交わした神子と赫職はあ、三種類の解妖を行うことが出来るんですよ。今の隼人さんとお、稲浪さんはあ、一種目の解妖をした、と言うことなんですう」

一種目？ 神子のみを強化すること？ 思い返す俺に、先輩が稲浪を見る。

「お前の神子は、狐だろ？ 狐は元来俺のましらより戦闘能力は高え。けどな、お前の解妖はまだ初期段階だ。神子単身の能力を強化したところで、ましらの方がまだ強えな」

見てみる、と促されて見上げる空。

「一気に打ち消しますよ」

それに合わせて亀甲さんがより力を入れるように、顔の横から光がふわっと突き抜けるように空へと立ち上り、上空を覆いつくして

いた炎が弾かれる様に空へと細く伸びて、やがて消えた。晴天だった空は空狐の焰の影響か、雲があちこちに出来、風が少し強くなり、気温が今まで感じていた熱さが少しずつその風に消えていく。そして、その先の空に、俺は意外な光景を見つけ、その光景に見入ってしまった。そこには、先ほど僕を踏み、空へと亀甲さんの力を纏ったみたいで、ましろと呼ばれていた女性が淡いピンクの光に包まれて、いまだ空に顕在する空狐へと飛んでいた。

「あんたが空狐かい？」

その身に纏うは光のみ。武器も焰も何も纏ってはいないましろが、源焰を漂わせ、天使のような悪魔の降臨のように空に浮かぶ空狐の前に立ちはだかった。

「何奴よな？」

ましろが現れたところで空狐は大した反応を示さない。依然として余裕の表情で鋭い瞳をましろに向ける。

「あたしはJ Pコード、No. 20。猿帝ましろ。特にわけはないけど、あんたを押さえさせてもらうわよ」

名乗ること自体は一種の礼儀。だからこそましろは躊躇いもなく空狐へ名乗る。

「ほお、猿、とな。して、理由もなしに我が前に立ち塞ぐとは、愉快よの」

空狐がほくそ笑む。それは楽しんでるように見せかけ、ましろを探っているのは明らかだった。

「こっちは不愉快よ。あんたのことくらい知ってるんだから、誰が好き好んであんたみたいな化け物の前に立たなくちゃならないのよって愚痴言ってやりたいわよ」

互いに牽制しあう。口調や纏う雰囲気には緩みが見えても、その中で互いに垣間見える緊張感は、ましろの方が大きい。

「化け物、か。ふっふ、我も言われたものよ」

やれやれ、と首を振る空狐。首を振るだけでその白金の髪から焰

の燐粉が煌びやかに彩る。

「まあ、どうでも良いわ、そんなこと」

ましろが空狐の視線を払うように視線に鋭さを増せ、空狐を見る。  
「そうよな。何を言おうが所詮は戯言にすぎぬ。弱き者の吼えにしかならん」

それに合わせるように、空狐を纏う焰がましろへ向けて燃え進んだ。四方八方から空狐の焰が襲い掛かる。九稲や稲浪ですら苦戦した焰がすべてましろへ向けて襲い掛かるのを回避するのは難しい。

「いきなりとは随分じゃないかい」

だが、ましろは何かの技を駆使するわけでもなく、対抗しうる力を發揮するわけでもなく、軽やかに、器用にわずかな焰の隙間を掻い潜り、かわしていく。その様子に空狐が興味を惹かれたように小さく笑み、さらに焰を操る。空間がその熱で歪みを見せているが、ましろは火傷一つはおろか、汗一粒さえ掻くことなくそれを受け流す。

「ほお……やりようだの、お主」

「まさかこの程度で終わったりしないわよね？ 寝ててもこれくらい相手できるわよ？」

空狐の挑発にましろも挑発で返す。

「……猿が。よく鳴くとは言ったものよ」

その挑発に自分から乗った空狐が焰を激しさを増したまま、ましろへと襲い掛からせ、白く美しい手を口元で輪を描き、不敵に笑む。  
「空天拭焰」

九稲たちへ襲い掛からせ、多大に被害をもたらした巨大で轟々しい焰が空狐の口元から溢れ、ましろへと光のような速さで襲い掛かる。太陽煌く青空の下に、太陽とは別の激しい明かりが辺りを飲み込む。空天拭焰でましろの姿は焰の中へ消え、何者にもその姿は熱と光により確認できないが、それでも空狐は手を休めることはなかった。

「源焰」

翼のように二本の焰柱が空狐から噴出し、空天拭焰の焰が未だに燃え盛んでいる空へ、源焰までもが襲い掛かる。たとえばしらが空天拭焰を防いでいようと、さらに強大な焰に襲われれば、九稻と稲浪のようにには済まない。

「冥土の土産よ。受け取れ、猿帝よ」

だが、空狐はやはり愉快に楽しみながら、攻撃の手を緩めることがなかった。

両手を広げ、その手のひらに白金の焰を凝縮していく。圧縮された形は九稻を苦しめた焰玉へと姿を変え、次第に空狐の体を包み込むように燃えていた焰すら取り込み、手のひらの上で燃えていた焰玉が梅田の街へ甚大なる功績を残した焰球へと変貌を遂げ、空狐の体はその焰との対比に小さく見えてしまう。街へ落とし、幸いにも亀甲と九稻により押さえられたとはいえ、それでもその熱気にいくつかの人工物は被害受けた。それは亀甲の亀壁をもってしても完全には防げない証。それが今、空狐の手のひらを超え、二つが太陽のごとく煌いていた。

空狐自身の納得した大きさになったと思われた時、空狐は静かにその手のひらを空天拭焰、源焰に包まれている空間へ放つ。九稻たちとの戦闘でもなかった、空狐の焰の炸裂。

「戒爆」

しかし、空狐はその業をもってしても、ましらへ安らぎを与えまいと、放った焰全てを爆発させる。大地を揺るがす轟音と振動、熱気に世界は一瞬真白に染め上げられ、その事態の把握すら困難にさせるほどに世界は灼熱の輝きの中へ消え去った。

「うおっ!？」

「うわっ!」

「羅岩硬招く極大展開」

その様子を目の当たりにしていた地上。瞳を焼く輝き、全身を焼く熱、心をも無常に焼き払う空狐の焰に、昂も隼人も対応を取れな

かったが、亀甲だけはその眩しさの中で平然とした様子ながら、珍しく素早く能力を発動させた。

「大丈夫ですかあゝ、隼人さゝん？　昂さまあゝ？」

そして聞こえる穏やかな声。

「お？　……おお……お？」

「っ！　……ん？　あ、あれ？」

その声が聞こえたのか、昂と隼人が一向に何の影響も感じないことに、身を庇い、焰の前では役に立たないと分かっているながらも、本能的に身を小さく構えていたが、ゆっくりと体制を元に戻す。違和感と警戒を抱きながら。

「ご無事そうですねえ」

そんな二人のたどたどしい様子に亀甲の少しだけおかしそうに笑っているような声がのんびりと漂った。

「何が、起きたんだ？」

「今の、亀甲さんが……？」

隼人はともかく、隼人よりは創生に関して経験と知識があったであろう昂でさえ、空狐の甚大な力の前では状況把握が困難らしいが、亀甲だけは何も変わらぬ様子で二人に微笑んでいた。

「亀壁では街全体を防ぐのはあ、難しいと予測しましたので、羅岩硬招を極大にい、展開してみました。初めてでしたけどお、うまく展開出来たみたいです」

全てが光という名の焰に包み込まれたと思っていた二人が、ニコニコと笑顔の亀甲を呆然と見ていた。

「すげえな、お前……」

「本当に……って、昂さんの神子なんじゃないですかっ？」

隼人が感心するのはもつともであろう。だが、昂が驚くのは少々違和感があった。

「いやよ、ここまでの規模の戦闘は俺も経験がねえしな。亀甲も今まで大して動かなかったからよ」

「私はあ、ましらちゃん一人で大丈夫な闘いばかりでしたからあ、

何もしなかっただけですよ。動けなかったわけではありませんのでえ、誤解しないで下さいねえ」

昂の言葉に少々ぶんぶん、と可愛げに頬を膨らませる亀甲。

「ましらはどうなったっ？」

「あ……そう言えば」

亀甲のおかげで梅田の街の被害は、高層ビルの頂付近が羅岩硬招が届く時間がなかったのか、焼け落ちた程度で、そうその被害は見られなかったが、その被害をまともに受けることになったましらがどうなったのか、昂と隼人が空を見上げる。

「もう少し、私を信用しても良いんですよ、昂様あ？」

そんな二人に、良く見る馬鹿、と言っているような亀甲ののんびりとした棘の言葉が聞こえたが、二人は空へと意識を持っていかれていて、気づいてはいないようだった。

空はしばらく光に包まれていたが、空狐が焰は爆発させたことにより、想像以上に早くその焰は無散していく。

「少々、力を使いすぎたかの……？」

それに合わせるように、空狐の様子に変化があった。九稻、稲浪との戦闘でも焰を激しく消化し、ましらとの戦闘でもてあます力を存分に振るった。その影響は空狐の力が無尽蔵ではないことを証明するように、空狐の纏っていた焰の全てが空狐の体から消えていた。姿だけは依然として凜と保たれているが、先ほどまで感じていたような絶対的な恐怖の具現には、少々見えなかった。

「やはり、半端に調整を受けたのが悪しと出たようだな」

そんなことに自身の中で反発することもなく受け入れるのは、らしくない気もするが、稲浪や九稻のように血気盛んな年頃ではない、という表れなのかもしれない。

「して、いつまで隠れておる？ 猿帝よ」

だが、空狐は決して勝利を確信していたわけではなく、焰が一時的とはいえ消えた今、空狐の視線はより鋭利となり、先を見つめて

いた。

「……っ、つう」

やがて焰が燃え尽き、青空の明かりが正常に戻ると、そこにはましろの姿が熱気の渦巻く空間の揺らめきの中から浮かび上がった。

「さすがはあの子の羅岩硬招。無茶苦茶な焰でも、ちよつと熱いだけで済んだみたいね」

街を守った亀甲の羅岩硬招。亀壁よりも強靱な防御。それを纏っていたましろが当然のことながら傷つくことはなかったようで、暑さ程度を感じただけで、その姿に変化はなかった。

「……」

ショートカットの髪を揺らし、全身に何も起きていないことを確認するましろに、さすがの空狐もああは言うが、これまでの空狐同様に傷一つどころか火傷一つを負っていないましろに、不可思議のような視線を向ける。

「貴様、何奴よな？」

あくまでも自身の采配により物事を動かしていた空狐が初めて、ましらへ問いかける。それは警戒ということではかないようで、空狐はすぐさま戒爆し無散した焰を呼び起こすように全身に力呼び戻す。だが、その消費は完全には回復していないせいか、焰は規模を縮小していた。

「別に大した理由じゃないわよ。そこいらにいる神子の一人よ」

そして、その言葉と同時にましらが動く。すぐに空狐もそれに合わせるように焰を操るように手を動かす。稲浪たちにはない光のようにすばやく動く焰が空間に鞭打つように燃え盛る。

「我に近づくこと、それは死を洗濯した愚者の所業よ」

ましろの動きは早かった。先ほどの攻撃をかわす能力といい、空狐から激しい焰を受けていても、亀甲の羅岩硬招の防御だけに頼らない動きは、圧倒的に早い。

「当たらないわね、空狐様？」

いやみを込めて放つ言葉に合わせるようにましろは空狐の焰を搔

い潜り、空狐の目の前に来た。

「ほお、しかしの、それでも遅い」

不適にましらが笑い、こぶしを空狐に放つ。だが、そのこぶしは空間を切るばかり。

「なっ!？」

ましらがとっさに振り返った時、そこには涼やかで冷ややかな流し目でましらを見る空狐がいた。風のようにましらの視界から消えると同時に、その視界は光という焰で染め上げられた。

「威勢や良し。だがの、神たる力には及ばなんざ」

空狐は神足通により、ましら以上の行動の早さを持っている。ましらが追いつけるはずがなかったのだろう。

「そう……それが神通力ってわけね」

「ん? ……っ」

その余裕の空狐の姿が唐突に空間を滑った。涼しげに焰を撒き散らした空狐。だが、その瞬間、空にはこぶしを軽やかに振るった後のましらが空狐を流し目で見つめ返していた。

「そんなに驚かないでよね。まだ序の口なんだから」

空狐は驚きに表情を固まらせ、とっさに受け止めた手のひらを見つめていた。そんな空狐にましらがさらに動く。空狐の焰が光のように残光を残し、瞬間的に相手まで燃やし尽くす光を残すなら、ましらの動きは光が後に続くほどに、ましらの動きは早かった。

ましらがいまだに理解し切れていないように自分の手のひらを見つめている空狐にさらに勢いを増して、攻撃の手を加える。だが、ましらはまるで稲浪や九稲、亀甲、空狐たちのような能力は繰り出すことがない。拳を空狐へ叩きつけ、空狐もそれを受け止めることは出来る。だが、その瞬間にはもう一つの拳が出ている。空狐もましらを同じ手を持つ以上、それを受け止めるということは可能だが、ましらは手が受け止められれば足を使う。だが、その威力は拳の比ではない。

「ふっ」



受け止めていた空狐の体が、ましろの一蹴で、揺らぐ。それでも空狐を守るように焰がすぐにましらへ襲い掛かる。

「そんなもん、とっくに見破ってるっての」

だが、ましらは容易くかわす。そのかわした焰は、急激に消滅することも出来ず、目の前にいた術者の空狐へと進む。

「ふんっ」

それでも空狐はすぐに意識を切り替え、神足通で自身の焰から逃れ、その焰を打ち消す。

「小ざかしい真似を」

その瞬間には空狐の背後を取り、ましらが再び拳と蹴りで襲い掛かる。その力は繰り出すごとに強さを増し、空狐の焰で浮かび上がった雲が、空狐が受け止めるたびに衝撃波となり、その雲を不自然に吹き飛ばし、雲がちぎられていく。これまで焦ることもなく余裕を見せていた空狐が、初めて腹立たしげにましらから距離をとる為に、焰を大きく全身から噴出させた。

「随分と弱ったみたいね？」

身を引きながら挑発する余裕のあるましら。

「齢とは取りたくないものよな。つくづく実感しおったわ」

そんなましらに、自分が力を使いすぎたのだと理解したように、空狐が息を漏らす。

「しかしの、まだまだ我は落ちぬぞ？」

空狐は全身から燃やす焰を腕に集約させて燃やす。それでも焰球になるほどの力hの請っておらず、それを見越したようにましらが動く。

「悪いけど、決めさせてもらうわ」

空狐の元へ空間を蹴り、拳を打ち込む。空狐が焰を纏う腕で受け止め、焰が弾かれるように煌く。受け止められた拳を支店にましらは身をよじり、体をその反動を利用し回転させ、蹴りを打ち込む。空狐の体はそれを跳ね返すだけの力を持たず、ましらと同じ視界にいたはずが、その力に空狐はましらを見上げるまで落ちていた。

「そのまま落ちるのも良いかもしれないわね。けど、あんたがさつきくれた冥土の土産を返さなくちゃいけないわよね」

ましらが空狐を見下ろす。依然として亀甲のおかげでぜんしんがうつすらと光に包まれ手いる影響で、空狐の焰が衰えている今では、神とはどちらかと言われれば、ましらと答えそうになる。

「よからう。来てみるが良い」

空狐はまだ余裕を見せるように腕の焰を燃やす。大人しくするのなら、とましらは一瞬空狐に期待するように視線を下ろしていたが、その答えにため息のようにと息を漏らすと、一度目を閉じ、息を吸い込み、空間を歪ませるほどの勢いで空狐へ突進した。

そして空狐は全身の力を腕に集めるように、そのしなやかな髪を風に流し、涼やかな瞳を閉じ、その時を待つように静寂にその身を包み込ませていた。

「乱撃壺章、乱摩らんげきつしょう らんまっ」

静かに浮かぶ空狐に、眼前に姿を現したましらが唱えると、今までの打撃、蹴撃とは異なる討撃が炸裂する。相手に隙を見せることのない、一言で言えば殴る蹴るの攻撃。だが、その動きは俊敏で、今までのように受け止めることは困難なほどにましらの攻撃速度は尋常ではなく、一撃の攻撃を打ち込むと、それが数度の拳を叩きつけているのだと、焰を宿す腕で受け止める空狐の焰が打ち込まれた数だけキラキラと弾き飛ばされる。

その衝撃もすさまじいようで、神子としての能力の影響もあつてか、空狐を打ち抜くように衝撃波が空狐を貫き、空をも刺していた。「これを受けても立っていられるかしら？」

「っ!？」

攻撃の手が止まり、空に静寂が訪れた瞬間、ましらが空狐と背中合わせに姿を見せ、振り返る間を与えることなく、空狐の流れる髪を掴み、そのまま背負うように一気に持ち上げ、勢いをつけながらましらは空狐を地上へ向けて叩き落す。対応に遅れをとった空狐は、成す術もないように腕に宿っていた焰が大きく尾を引くように地上

のビルへと激突し、激しい轟音と共に粉塵が視界を覆いつくした。

「……」

その光景は、何が起きたのか理解するのすら難しかった。九稻さんと稲浪を散々弄ぶように苦しめた空狐が、ましらさんによって地上へ叩き落された。ましらさんの攻撃は後半から何をしているのか良く分からないくらいに早くて、気づいた時には、空狐がビルを破壊しながら墜ちた。その航跡を残すように、ましらさんから地上には空狐の白金の焰がキラキラと燃えているだけで、その先の空狐の姿は粉塵で見えない。

「ひゅー、やんなあ、ましら」

「冷や冷やしましたけどおー、さすがはましらちゃんですうー」

呆然とする俺をよそに、先輩と亀甲さんは一安心、という感じで空を見上げていた。

何も言えなかった。稲浪たちの戦いと強さを見ていただけに、空狐をあれほど容易く地上へ落とす様子には、少しだけ口が震えた。先輩は一体何者なんだ？ 先輩の神子って何なんだ？ としか思えなかった。

「これにて一件落着ってどこか」

「明日の食事もー、これで大丈夫そうですよおー」

二人が笑う様子に、俺はついていけなかった。

「終わったな、隼人」

稲浪の頭を足に乗せていた俺に、先輩がやり遂げたように笑う。

「ほ、本当に、空狐を、倒したん、ですか？」

正直信じられなかった。稲浪たちが傷つけても空狐は稲浪よりも何倍も早く傷を癒して、さらに強くなっていた。だから、本当にこれで空狐が倒れたのか、信じられなかった。

「稲浪さんとお姉さんがあ、空狐の力を消費させてくれたおかげですよおー」

「そういうこった。万全の状態ならましらも勝てなかったろうな。」

けど、お前らが奴の力を激しく消耗させたおかげで倒せたってもん  
だ」

二人が俺を見て笑う様子に、次第にそうなのか、と納得した気持ちが追いついてきたのか、は、はは……と笑いが零れた。

「稲浪、やったぞ……空狐を俺たち……っ!？」

倒せたぞ、と眠りに落ちて力を回復している稲浪に伝えようとした。

「ましらっ!」

「ましらちゃ〜んっ」

でも、そのつかの間の安堵の時間を、激しい爆発と、俺たちに吹き荒れる熱風が、一瞬にしてかき消した。

空を見て声を上げる二人に空を見上げた。

そこには空狐が纏い、彗星の尾のように燃えていた焰が大々的に爆発したように、見たこともない火柱として燃えて、その爆炎の中から隕石のように焰に包まれたましらさんが地上へと落ちていくのがビルの隙間の空に一瞬だけ見えて、すぐに轟音と共にビルの向こう側へ消えた。

「先輩っ」

「すまん、隼人っ!」

俺は先輩に呼びかけた。それと同時に先輩も亀甲さんと共にそこへ向かって走り出した。自分の神子だ。駆けつけないといけないという気持ちに駆られるのは、俺にもわかっていたから、止められなかった。

「やっぱり、空狐は強すぎる……」

先輩たちが駆けていき、残された俺は稲浪を抱えるようにしながら空を見た。そこには疲弊しているようで、ゆらゆらとふらつくように空へと昇る空狐の姿があった。ただ違っていたのは、負傷していることではなく、その姿が俺たちが最初に見た女の子の姿に戻っていたということだけだった。

「ごさかしい、小猿めが」

ましろの攻撃に空狐は負傷を負っていた。その上、力の消費により解放した力を維持できなくなったのだろう。その姿が当初の子供に戻っている。だが、その目つきは完全に戯れではなく、戦闘する獣の意思に包まれている。

「冥土の土産とな？　笑わせよってからに。私の戒爆はいかな焰であれど、威力は絶というものよ」

あちこちでビルが火災を起こしているのか煙が立ち上っている。おそらく空狐ははじめからこうするために、残り少ない焰宿し、ましろの攻撃を受けつつ、その手には焰をたぎらせ、焰玉を練っていたのだろう。叩き落された後、ましろのところへその焰を残し、操る為に焰の尾を引いているように見せかけ、それは爆砕した。ましろでさえその警戒を持たなかったが故に回避する間もなく、巻き込まれ、墜ちた。

「もうよい。醜き世を滅してくれるわっ」

自分がここまでやられた言の腹いせと分かる怒号と共に、空狐が持てる力を振り絞るように空へ手を掲げ、そこへ焰を呼び起こす。それは九稲が結果的に大ダメージを受けた焰球の形成。亀甲がましらへ気をとられている隙に、防御の解除された地上を焦土と化す為に練り上げる。その様子に気づいているのは、遙か眼下にいる、戦闘状態にはいない隼人たちだけのようで、隼人はすでに動く力を持ち合わせておらず、愕然とした表情で空を見上げるしかなかった。

「九尾が妖狐、九稲。焰尾灼放」

絶望の焰に染め上げられた世界に、その声が轟いた。

「圧倒的で乱雑な力は暴力。しかし、統制された力はそれをも上回る鉄槌と成すのです」

空を烈火と共に紅の灼熱が吹きぬけた。

「ぬうつ……！？」

それに気づいた空狐。だが、焰球の構築に使う焰が精一杯だった。気がついた瞬間には、既にその白金の焰は、轟々たる紅き焰の中へ

飲み込まれていた。その焰は凶暴で人々に忌み嫌われた大妖狐、九尾の焰を持つ九稲だった。

「しばし地上にて眠られるが宜しい、大神狐よ」

一陣の風のように吹いた紅の焰が吹きぬけ、白金の焰が紅の焰の中に飲み込まれ滅せられた。空を支配した焰が消えた時、そこには稲浪同様、もしくは稲浪以上の被害を受けたはずの九稲が、そこで空を駆ける風に紅い焰を吹かせながら、鎮座していた。

「くう……っ、き……さ、ま……」

焰が突き抜けると、空狐の焰はもう、どこにもなかった。力なく空狐が九稲を睨んでいるが、その先の九稲の視線はひどく冷徹だった。

「墜ちなさい、未調整なる神子よ。そして、目覚めなさい。その瞳で世界を知りなさい」

空狐を見下ろす九稲が舞を舞う。それに呼び寄せられるように紅い焰が九稲の周囲に竜のように吹き荒れ、九稲は抵抗する力を失った空狐へ、それを手向けた。

「――っ」

空狐はただ、その迫りくる灼熱の焰を待つしかなかった。守る焰も対抗する焰も、九稲に奪われたように、ただそこに浮いていた。そして、目の前に来た時、空狐は諦めたように小さく笑みをみせていた。九稲には焰で見えないほどに小さな笑みを。

「よう……やりおるわ……」

抵抗できないことを認めたのだろう。身を任せるように脱力した小さな体を、塵塵に化すべく、焰が飲み込んだ。九稲が成し遂げようとした粛清の焰に、空狐は焼かれていく。紅い焰の中から、灰のようにキラキラとした光が空へと散っていき、やがて焰が収まると同時にその輝きも消え、浮くことすら出来なくなった人形のような小さな体だけが地上へと落ちていく。

最後の力まで奪われ、とどめの焰を浴びた空狐には、既にその意識はなく、眠れる子供のように静かに地上へ、隼人たちが見上げてい

た空を落ちていく。九稲は誰よりもその姿を熱く、冷ややかに見つめるように見下ろし、やがてそれを見届けることをやめるように焰を纏い、その空の頂を目指し飛び去った。

自分の妹である稲浪のことを気にするように一度隼人たちへ視線を向けていたが、稲浪のことは隼人に任せると言い残そうとしていたのか、輝く焰の粉を散らし、誰もたどり着けない高みへその姿を光に変えた。この勝敗は一体誰により采配をもたらされたのか、それを明確にする必要がないと言うように、残された者たちへの休息へと変化していった。

「九稲さん……」

どうなることかと思った。もう終わりだと稲浪を抱きしめた。でも、その最後を決めたのは九稲さんだった。あれほど傷ついていたはずなのに、最初に言った通り、空狐を討った。それは颯爽としていて、下りてきてくれると思っていたのに、そのまま空へと飛んでいってしまったことに、どうすれば良いのかと困惑を俺に感じさせたが、空狐が落ちてくる様子に、まずは力が抜けた。

「つて、え？　ちよっ、ちよっ！」

でもその安らぎは一瞬にして意外というものに変わる。九稲さんが空狐を回収していくものだと思っていた。未調整なら稲浪たちが来た嵩天原島へ戻されるはずだ。でも九稲さんはそのまま言ってしまった。お礼も挨拶も出来ないままに。そして当然のことながら空狐はそのまま落ちてくる。それは視界に入っていた。でも、その落ちるコースが問題だった。

「うそだろっ！　ちよっ、う、動けないってのっ！」

見上げる空。焰が消え、雲がかすかに浮かぶ闘いの後の蒼空。でも、その中に異物が混じる。金色に靡く髪がはためく空狐。それがどんどん大きくなる。俺の真上で。逃げようにも稲浪を動かしている暇がなく、稲浪の頭を乗せていた脚がしびれてる。焰の脅威がなくなったのに、俺の頭上から降ってくる空狐という物体の重力が恐

怖として、俺に映りこんだ。

「う、うわあああ——っ！」

避けられない以上、身を構えるしかない。でもどっちにしろそれじゃあ押しつぶされた俺は死ぬはず。そう思った瞬間、全身に響く衝撃が走り、俺は自己防衛として目を閉じた。

「んんん——っ!？」

だが、気づいた時、俺は無謀なことをしたのだと、頭のどこかで呆然と考えながら俺は腕を伸ばしてしまっていた。

逃げられないのなら、せめて受け止めようと。

無理なのは分かっていた。何しろ空を自由に富んだりしていたはずの空狐が、紙切れのように、羽のように落ちてきた。もう力がないのだとはっきり分かっていたけど、それでももしかしたらと思いい、そんなことをした。

そして視界の青空をしめる割合が減った時、空狐の体はゆらゆらと反転を繰り返して、俺と顔が合った。その瞬間、ドンッと思像していたよりかは不思議と軽い衝撃がきて、俺の視界には、空狐の静かで怖いというものではなく、可愛いと思えるような小顔が迫っていて、衝撃よりも口に感じる柔らかさに、俺は声を上げてしまった。

「ん……? ぬう……」

そして背中から地面に倒されて、背中から感じる衝撃に顔は歪む。けれど、それ以上に俺が空狐という神子と唇が合わさっているという状況を理解した瞬間、その驚きは、まるで稲浪と命約を結んだ時のことを彷彿として、今、俺の置かれている状況を考えられなくなった。その上、一瞬空狐が目を開けた。俺とぶつかったことに気づいたようだけど、俺を目があったと思った瞬間に、小さく笑みのようなものを見せると、空狐がまた目を閉じた。小さな体が俺の上半身に乗り、足には稲浪。その重さは決して重いわけじゃないのに、動けなかった。

「んっ? んんっ? んんん——っ!？」

だって、俺が空狐と弾みとはいえ、口付けした。その瞬間、空狐



が俺に気づいた。でも、何かをするでもなく、目が合い、そのまま小さく瞳を下げて、まぶたを下ろした。ただそれだけなら良かった。でも、俺と空狐は人間同士じゃない。

「おい、隼人、一旦下がる、ぞ……ってうおっ!？」

「ましらちゃん、羅岩硬招のおかげで良かったねえ……昂様あ？ ……あらあ」

「い、つつ……しくじったわあ。って、はあぁっ!？」

そこに先輩たちが戻ってきた。視界の端にましらさんの肩を抱いている先輩と亀甲さんがいて、ましらさんが想像以上に負傷している様子はなく、きつと亀甲さんの羅岩硬招の防御が作用していたんだと思う。でも、三人が俺を見て、一樣に俺と同じ反応をしていた。気づかなければ良かった。そうすればきつと、ただの事故、ただの偶然で済んだかもしれない。でも、俺は感触を自覚してしまった。全身に感じるぬくもり。だが、それは空狐自身の体温ではない。稲浪と命約した時のように、光が俺と空狐を飲み込んでいる。そして腕に感じる熱さ。覚えている、この感覚。稲浪のときと同じだった。何か熱いものが全身に流れ込んでくる感覚。そして腕に同じように何かが走った。ちくつとするような、ジュツと焼けるような感覚。心の中では、ひたすらにその現実を受け止めたくないという思いがあったか、嘘だろ、としか思えなかった。

「あんた何やってんのよっ!」

ゴンツ、とましらさんが空狐を引き剥がそうと俺の体まで揺らし、鈍い衝撃と脳内に響く揺らぎが、ゆれる反動で頭を打ったのだと理解した時、視界が揺らめいて、意識が遠のいた。

「あらあ。ましらちゃん、揺さぶりすぎい」

「おいおい、もう遅えよ。つか、のびちまったじゃねえか」

「だからって、この神子なんてさあ……」

意識が飛ぶ瞬間、そんな先輩たちの声が聞こえた気がするんだけど、最後の方はもう、意識が飛んで聞こえなくなった。どうなるのかは分からないけど、この闘いが一応終息を迎えたんだという記憶

だけが、俺の最後として残っていた。

「随分と派手にやられたようで」

破壊尽くされた梅田の街。大府として日本の首都としての昨日は壊滅的状况とも取れないことはない。しかし幸いなのか、中央官省庁のビルは何一つ影響を受けず、NBSLの本社ビルもまた、日本一の高さを悠然と保っていた。

「あくまでも、粛清をしたまです」

その日本一のビルの頂付近で、二つの風が静かに足を休めていた。「これほどの状況へ陥ってもなお、力の解放をせずに闘うとは、マスターもさぞ落胆されたやもしれませんな」

一つは紅い神子装束の九稲。空狐との戦闘で負った傷はなく、神子装束の破損もいつの間にか消えていた。

「あの方の為ではありません。私は私として赴いたまです」

九稲がビルの内部へと続く扉へと歩き、もう一人と交差する。

「ああいう演技で勘違いさせるなんて、貴女も罪な女子ですな」  
すれ違う九稲をどこか鼻で笑うもう一人。

「どう取られようと関係ありません。少なくとも、あなたには」

九稲はどこか挑発的に笑うもう一人に相手するのも面倒だと声色さえも冷たく、通り過ぎる。

「そうですね。私の役目はこの為にある。誰かさんが壊したものを、直す為だけの神子が、あつしですからな」

少々高笑いで話すのは男。九稲とはそりが合わないようで、九稲の放つ不機嫌なオーラをまるで感じようとはしない。むしろ、九稲たちが結果的に破壊した街を見て、睡眠を邪魔されたと言わんばかりに笑いながら九稲を責めるように言う。九稲はその背中に背中では答えることなく、ビルの方へと歩く。

「今回はマスターの命令である以上、従いましょう。ですがね、九稲さんや。あのやり方であれのを消せると考えての命約は、感心しませんなあ」

歩いていた空狐の足が止まる。この位置から見える景色に、一人を確認するのはほぼ無理。しかし九稲はそう言われ、思い当たる節を感じたのか、横目だけで振り返る。

「いくら親族とはいえ、破壊者は破壊者。その粛清をこの結果で済ませたところで、あれを使える者はおりませんでしょうな」

少々不機嫌から怒りの瞳を見せていたが、その男の言葉に九稲は、逆に男を笑うように言い放ち、扉の奥へと姿を消した。

「それは私の関することではありませんので」

挑発にも乗らない九稲の姿が消えると、男はどこかつまらなそうに息と漏らした。

「……やれやれ。つれないお嬢さんは高いねえ。それだけ期待するなら、見せてもらいましうかね、その赫職とやらを」

何も判別できない高みから、山田とは違う笑みを小さく浮かべた男がビルの縁に立つ。強風に全身が靡かれるが、全く動じることなく、双手を外へ突き出す。

「こんなことがこれから続くようですと、身が持たないんですがねえ」

改めて街の様子を見て、面倒そうに呟くと、男の瞳は色を変化させた。

「夢見よ、祈り子。その果ての憧夢を」

その言葉で男の姿は爆発のように手のひらから膨れ上がった光の中へ消えた。夢が覚める瞬間の強く、眩い光のように男の放ったそれは一瞬にして梅田の街を覆いつくし、あちこちで散乱する瓦礫のビルや立ち上る火災の全てをも飲み込み、光の糧とするように全てがただ一色の光に包み込まれた。

## 二神抄・激突・決編（後書き）

閲覧ありがとうございました。

久しぶりの更新で、前の展開を覚えていらっしやらない方もいらしたんではないかと思えます（^^；

今回で二神抄はとりあえず終わりとして、次は少しエピソード的な部分を書いて、日常を描き、他の神子のお話へと進むので、稲浪と隼人の活躍は少しだけお休みさせていただくかもしれません。

他のあの神子たちのことも書かないと、投げっぱなしになっちゃいそうで（^^；

さて、次回更新予定作品は、「Youth Walkers!」です。

更新予定日は、7月28日頃を考えております。

更新まで、今しばらくお待ち下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2233e/>

---

Full Cast Even

2010年10月10日19時22分発行